

福井県埋蔵文化財調査報告 第156集

小野遺跡 小野平等遺跡

— 日野川総合開発事業吉野瀬川ダムに伴う調査 —

2015

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告 第156集

小野遺跡 小野平等遺跡

— 日野川総合開発事業吉野瀬川ダムに伴う調査 —

2015

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

このたび、日野川総合開発事業吉野瀬川ダム建設に伴って、越前市小野町地係において平成22・23年度に発掘調査を実施しました小野遺跡、小野平等遺跡の調査成果がまとまり、報告書を刊行することとなりました。

両遺跡が位置する小野町は、ダム建設に伴い移転をした二つの集落の内の一つです。ダム建設にあたり、事前に分布調査を実施し、遺物を採集したことにより調査を実施することとなりました。その結果、小野遺跡は旧集落跡地であったため、遺構・遺物の残存状況は良好ではありませんでしたが、古代に国府が置かれ、越前の政治、経済の中心であった府中(旧武生市)と、府中の港である河野浦を結ぶ中間に位置しており、中継地点の側面を持っていたと考えられます。小野平等遺跡は、五輪塔・宝篋印塔などの石塔が出土し、墓域であったことが判明しました。

今後、この調査の成果が広く公開、活用され、埋蔵文化財に対する理解をより一層深めていただくきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご配慮を頂きましたことを、深く感謝申し上げます。

平成27年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 畠 中 清 隆

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが日野川総合開発事業吉野瀬川ダムに伴い、平成22年度から23年度にかけて実施した小野遺跡と、平成23年度に実施した小野平等遺跡(ともに福井県越前市小野町所在)の発掘調査報告書である。
- 2 小野遺跡、小野平等遺跡の発掘調査は、吉野瀬川ダム建設事務所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、野路昌嗣、杉山大晋が担当した。
- 3 発掘調査は、平成22年度は5月6日から同年12月24日まで実施した。平成23年度は、小野遺跡を平成23年4月1日から9月30日まで、小野平等遺跡を同年10月3日から11月24日まで実施した。小野遺跡、小野平等遺跡の遺物整理作業は、平成23年4月1日から平成27年3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は野路があたり、中島啓太、野路が分担して執筆した。なお、執筆の分担は以下の通りである。中島担当の原稿については、野路が加筆を行って編集しており、その文責は野路に帰する。
野路 第1章～第5章 中島 第3章第3節3、7、9
- 5 遺構、遺物の図化と図版作成は杉田曜、木村茉莉、杉山、中島、野路が行った。遺構、遺物の写真撮影と図版作成は野路が行なった。
- 6 小野遺跡、小野平等遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 7 本書に掲載した遺構図は、株式会社帝国コンサルタント、株式会社キミコンに委託し作成したものを一部改変して使用した。上空からの写真は、航空測量時に上記各社が撮影したものである。
- 8 本書における水平レベルの表示は海拔高(m)を示し、方位は座標北を用いた。また、X・Y座標値は世界測地系第Ⅵ系に基づく。
- 9 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 10 本書で用いた遺構の略記号は、次のとおりである。
建物：SB、土坑：SK、溝：SD、井戸：SE、柱穴・小穴：SP、不明遺構：SX
- 11 本書で扱う近世とは、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011 『福井城跡(泉橋地点)』に準拠し、慶長6年(1601)の結城秀康の越前国入国と福井城築城を以て近世の始まりとする。
- 12 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、次の方々および機関のご協力やご助言を頂いた(順不同、敬称略)。
網谷克彦、岩田隆、河村健史、長栄山本行寺、越前市広瀬町町内会、越前市広瀬町新小野地区町内会、吉野瀬川ダム建設事務所
- 13 発掘調査には、地元の方々の参加、ご協力を得た。遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 小野遺跡の調査	13
第1節 遺跡の概要	13
第2節 遺構	25
第3節 遺物	50
第4章 小野平等遺跡の調査	91
第1節 遺跡の概要	91
第2節 遺構	92
第3節 遺物	95
第5章 まとめ	101
第1節 小野遺跡について	101
第2節 小野平等遺跡について	104

写真図版目次

- 図版第1 小野遺跡 遺跡 (6) SE03
(1) 遺跡全景 (7) SE03断面
(2) 平成22年度調査区中央部
(3) 平成22年度調査区中央部
(4) 平成22年度調査区東側
(5) 平成22年度調査区西側
- 図版第2 小野遺跡 遺跡・遺構
(1) 平成23年度調査区東側
(2) 平成23年度調査区西側
(3) K・L 9・10区遺構
(4) E・F 13・14区遺構
(5) SB18
(6) SB09・10
(7) SB23
- 図版第3 小野遺跡 遺構
(1) SK02
(2) SK03
(3) SK05
(4) SK05遺物出土状況
(5) SK21
(6) SK23
(7) SK25
(8) SK40・42
- 図版第4 小野遺跡 遺構
(1) SK52
(2) SK60
(3) SK78
(4) SK80・87
(5) SK81
(6) SK82・83・84
(7) SK107・SP582
(8) SK105
- 図版第5 小野遺跡 遺構
(1) SD03
(2) SD03遺物出土状況
(3) SD45
(4) SD42遺物出土状況
(5) SE01
- 図版第6 小野遺跡 遺構
(1) SE04
(2) SE04断面
(3) SE04底面
(4) SE05
(5) SE05断面
(6) SP332
(7) SP343
(8) SP565
- 図版第7 小野遺跡 遺物 陶磁器
図版第8 小野遺跡 遺物 陶磁器・瓦質土器
図版第9 小野遺跡 遺物 越前焼
図版第10 小野遺跡 遺物 越前焼・常滑焼
・土師質皿
図版第11 小野遺跡 遺物 石製品
図版第12 小野遺跡 遺物
(1) 砥石
(2) 硯
(3) 漆器・木製品
- 図版第13 小野遺跡 遺物
(1) 金属製品・貨幣
(2) 須恵器・縄文土器
- 図版第14 小野平等遺跡 遺跡・遺構
(1) 調査前全景
(2) 平坦面調査前
(3) SX1・2調査前
(4) SX1調査前近景
(5) SX2調査前近景
(6) SX1畔断面
(7) SX2畔断面
(8) SX1掘削後
- 図版第15 小野平等遺跡 遺構
(1) SX2掘削後
(2) 石塔露出状況
(3) SX4
(4) 石塔出土状況

- (5) SX4火輪出土状況
- (6) 空風輪出土状況
- (7) SX3

- (8) 平坦面掘削後
- 図版第16 小野平等遺跡 遺物
石塔・須恵器・陶磁器

挿 図 目 次

第1図 事業の概略図…………… 1	第32図 土師質皿分類図……………52
第2図 遺跡位置図…………… 3	第33図 遺構出土土器・陶磁器実測図1 ……54
第3図 小野遺跡・小野平等遺跡グリッド 配置図…………… 4	第34図 遺構出土土器・陶磁器実測図2 ……55
第4図 遺跡周辺の地形図…………… 7	第35図 遺構出土土器・陶磁器実測図3 ……56
第5図 周辺の遺跡分布図……………10	第36図 遺構出土土器・陶磁器実測図4 ……57
第6図 現在の題目岩……………12	第37図 遺構出土土器・陶磁器実測図5 ……58
第7図 土層模式図……………14	第38図 遺構出土土器・陶磁器実測図6 ……59
第8図 遺構全体図…………… 15・16	第39図 遺構出土土器・陶磁器実測図7 ……60
第9図 遺構図1 ……17	第40図 遺構出土土器・陶磁器実測図8 ……61
第10図 遺構図2 ……18	第41図 遺構外出土土器・陶磁器実測図1 ……62
第11図 遺構図3 ……19	第42図 遺構外出土土器・陶磁器実測図2 ……63
第12図 遺構図4 ……20	第43図 遺構外出土土器・陶磁器実測図3 ……64
第13図 遺構図5 ……21	第44図 行火実測図……………68
第14図 遺構図6 ……22	第45図 石臼実測図1 ……69
第15図 遺構図7 ……23	第46図 石臼実測図2・その他の石製品実測図 ……70
第16図 遺構図8 ……24	第47図 砥石・硯実測図 ……71
第17図 建物(SB01～06)実測図 ……35	第48図 漆器・木製品実測図 ……72
第18図 建物(SB07～11)実測図 ……36	第49図 金属製品実測図……………73
第19図 建物(SB12～16)実測図 ……37	第50図 銭貨・貨幣拓影 ……73
第20図 建物(SB17～20)実測図 ……38	第51図 須恵器・土師器実測図 ……74
第21図 建物(SB21～23)実測図 ……39	第52図 縄文土器実測図……………74
第22図 建物(SB23～24)実測図 ……40	第53図 小野平等遺跡全体図……………92
第23図 土坑実測図1 ……41	第54図 SX1・2平面図……………93
第24図 土坑実測図2 ……42	第55図 SX1・2土層図……………94
第25図 土坑実測図3 ……43	第56図 北側斜面土層図……………95
第26図 土坑実測図4 ……44	第57図 SX3平面図・土層図 ……96
第27図 土坑実測図5 ……45	第58図 SX4石塔出土状況図……………96
第28図 土坑実測図6 ……46	第59図 小野平等遺跡掘削後平面図……………97
第29図 土坑実測図7 ……47	第60図 石塔実測図……………98
第30図 溝断面実測図……………48	第61図 水輪拓影……………98
第31図 井戸実測図……………49	第62図 土器・陶磁器実測図、銭貨拓影 ……99
	第63図 府中と日本海を結ぶ主な街道…………… 104

表 目 次

第1表	周辺の遺跡分布図一覧表……………11	第9表	金属製品観察表……………87
第2表	土器・陶磁器観察表……………75	第10表	銭貨・貨幣観察表……………87
第3表	行火観察表……………85	第11表	古代の遺物観察表……………89
第4表	石臼観察表……………85	第12表	縄文土器観察表……………90
第5表	砥石・硯観察表……………86	第13表	石塔観察表……………100
第6表	その他の石製品観察表……………86	第14表	土器・陶磁器観察表……………100
第7表	漆器観察表……………86	第15表	銭貨観察表……………100
第8表	木製品観察表……………87		

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

越前市南西部の矢良巢岳(標高472m)を源流とする吉野瀬川は丹生山地・南条山地間を西流し、越前市広瀬町内で北東に流れを変え、鯖江市熊田町と鳥井町の境付近で、北流する日野川と合流する流域面積59.0km²、流路延長18.3kmの一級河川である。吉野瀬川の流域は、以前から大雨のたびに中・下流域の町が浸水するなど、洪水被害の多い地域であった。そのため、平成3年(1991)に福井県丹南土木事務所および福井県土木部河川課は、概ね30年に1度の確率で発生する降雨による洪水を安全に流下させ、流域の家屋の浸水を防止するために、また、10年に1度の確立で発生する渇水に対し必要な流量を確保するため、蛇行する吉野瀬川下流部を放水路として直線の流路に変更すると共に、上流部に堤高59.5m、総貯水量830万m³の重力式コンクリートダムを建設する『日野川総合開発事業』を採択した。この事業は、南条郡南越前町に所在する平成17年(2005)に完成した榎谷ダムと合わせ、越前市および鯖江市の地下水障害の未然防止と、将来の工業用水需要に対する安定した供給の確保を図り、同地域の発展に寄与することを目的とするもので、農業用水・上水・工業用水などの水源開発および治水安全度の向上を目的とした日野川流域水資源総合開発事業の一環である。

事業は、昭和59年(1984)に河川改修計画が当時の建設省の認可を受けた。平成9年(1997)にダムと放水路を含めた全体計画が認可を受けた後、平成12年度から用地着手にかかり、用地内に位置する小野町・勝蓮花町の二集落が移転することになった。これに伴い吉野瀬川ダム建設事務所(以下、ダム事務所と略)は、吉野瀬川ダム建設工事区域内の埋蔵文化財分布調査を福井県教育庁埋蔵文化財調査センター(以下、県埋文と略)に依頼した。県埋文は、平成19年(2007)4月16日～4月20日にかけて、越前市広瀬町・旧小野町・旧勝蓮花町地係において埋蔵文化財分布調査を行い、ダム建設により水没する範囲、およびダム工事用道路の建設により削平される範囲を踏査した(第1図)。分布調査の結果、旧小野町の集落跡地では古代の須恵器片を、広瀬町の水田部分でも古代の須恵器や中世の土器を採集した。また、後日



第1図 事業の概略図(縮尺1/50,000)

の補足により、吉野瀬川を挟んだ旧小野町集落跡の対岸の字「^{だいら}平等」にて、拳大～人頭大の礫を積み上げた石積みをも2基、五輪塔の水輪4点の集積と、空風輪1点、火輪1点と塔片を確認したことから、中世墓の存在を想定した。そのため、県埋文は水没する旧小野町の集落跡地と、対岸の平等については試掘調査の必要がある旨をダム事務所へ回答した。上記の結果を受け、ダム事務所は埋蔵文化財の試掘調査を県埋文に依頼し、県埋文は同年5月28・29日に旧小野町集落跡において試掘調査を実施した。また、平等については試掘調査の結果を受けて判断することになった。試掘調査の結果、主に中世・近世の遺物の他、土坑状遺構、小穴などを確認し、本格調査が必要である旨を回答した。この結果を基に福井県教育委員会は、越前市教育委員会と未周知遺跡について協議を行い、遺構・遺物を確認した小野遺跡を集落遺跡として、石塔片を確認した小野平等遺跡をその他の墓として、須恵器を採集した広瀬戸谷口野遺跡を散布地として遺跡地図に登録を行った。その後、ダム事務所と県埋文は試掘結果をもとに協議を行い、小野遺跡、小野平等遺跡の発掘調査を平成22年度以降、2～3年に亘る予定で発掘調査を行うことで合意し、初年度は旧県道武生米ノ線より北側の発掘調査を行い、北側の範囲の表土剥ぎ時に合わせて、旧県道部分の試掘調査を行うこと、小野平等遺跡については、平成22年度中に試掘調査を行い、本格調査の要否と調査となった場合の範囲確認を行うことになった。しかし、吉野瀬川ダム建設工事が採択された時点では、周辺地域の経済活動は活発であり、想定された工業用水の需要が見込めたものの、次第に周辺企業の環境に対する取り組みに関し、積極的に工業用水を再利用することが行われるようになった。このような社会・経済情勢の変化から、新たな工業用水の需要が見込めないことが次第に明らかとなった。そのため福井県は工業用水事業を中止し、治水上の安全のための治水ダムに特化して事業を継続することが妥当であると判断するに至り、地元の越前市および吉野瀬川下流の鯖江市からも、治水ダムとしての事業継続の強い要請があり、公共事業等評価委員会からも、治水ダムに変更し継続することが妥当という評価を得て、平成20年(2008)に治水専用ダムとして事業は継続された。

紆余曲折のあった計画であったものの、平成22年度4月から行う小野遺跡の発掘調査面積は9,200㎡で合意したが、平成22年2月の時点でも予算等の措置が不透明のため1ヶ月延期となり、最終的に調査開始は平成22年5月から同年12月までの8ヶ月間となった。調査面積についても、試掘調査の結果から埋蔵文化財に影響がない北東部に工事用仮設道路を設ける部分の面積を省くなど、調査面積を7,300㎡に変更して行うことになった。旧県道部分については、道路敷設時の掘削などにより、遺構・遺物は確認されず、発掘調査の必要はないこと、また、小野平等遺跡の調査面積は平成22年12月3日から同月17日までに行った試掘調査により、新たに石塔の露出を確認し、750㎡の範囲の本格調査が必要であると判明した。そして、平成23年(2012)度の調査は旧県道より南側と小野平等遺跡を連続して行うこと、期間は平成23年4月から11月までと決定し、調査面積は小野遺跡が5,300㎡、小野平等遺跡が750㎡で行うことになった(第2図)。

第2節 調査の経過

両遺跡の調査は2ヵ年に亘る。平成22年度の小野遺跡の調査区は旧県道武生米ノ線から北側の範囲である。調査期間中に小野平等遺跡調査区の竹の伐採と撤去、および試掘調査を行い、年度末には小野遺跡の次年度調査区の表土剥ぎの一部を先行して行った。平成23年度の小野遺跡の調査は旧県道から南側の範囲である。小野平等遺跡は前年度の試掘調査の結果から、小野遺跡終了後に調査を行うことになったが、夏場などは下草が繁茂し過ぎないように、刈り取りなどの諸作業を随時行った。

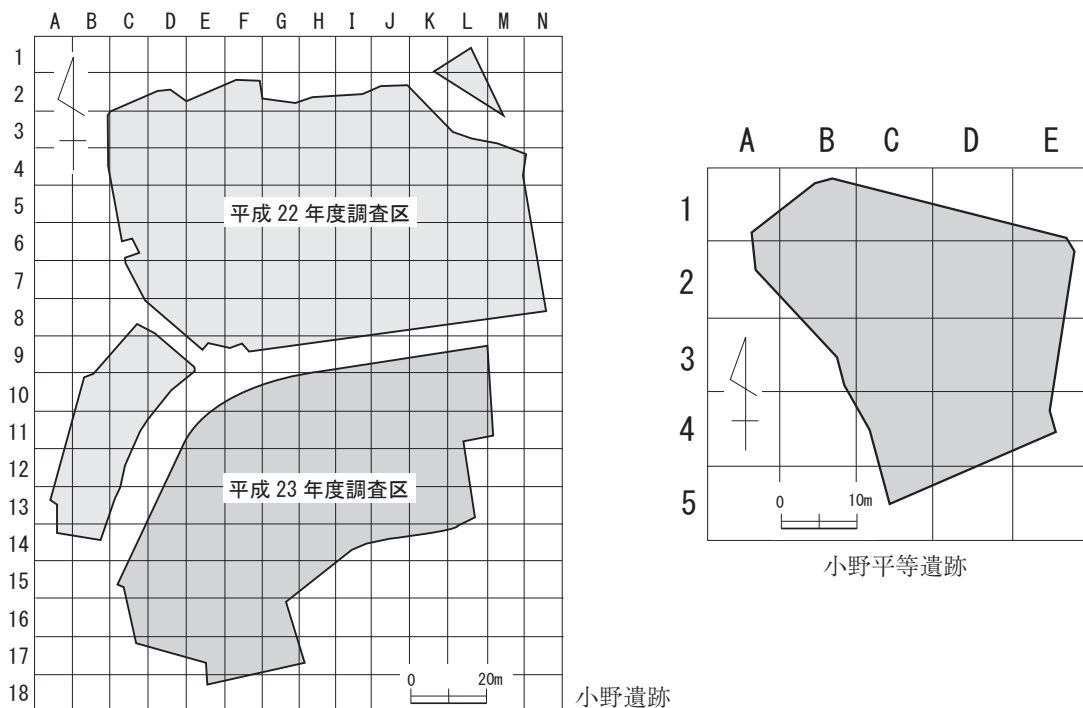


第2図 遺跡位置図 (縮尺1/4,000)

また、両遺跡の調査区には、実測作業や遺物を取り上げる目安として、10m四方のグリッドを設定し、東西にアルファベットを、南北に算用数字を付した(第3図)。以下に発掘調査日志を抄録する。

－平成22年度－

- 4月14～28日 表土剥ぎを行う。表土剥ぎ最終日の28日には旧県道武生米ノ線部分の試掘調査を行い、その結果、道路造成の際の削平により、遺構や遺物は確認できなかった。
- 5月6日 調査開始にあたり、器材等の準備を行う。
- 5月19日 作業員集合し、作業を開始する。ベルトコンベアーを設置し、トレンチを掘削する。
- 5月20・21日 C～G 2～5区内においてトレンチ掘削と包含層の掘削を行う。
- 5月25日 D 3～5区遺構面検出を行う。
- 5月27日 D・E 2～5区の遺構確認面検出作業を行う。
- 5月31日 G 3・4区において包含層を掘削する。
- 6月1日 F・G 2～4区の包含層掘削と遺構検出作業を行う。
- 6月3日 G 5区の掘削を行う。須恵器が出土する。F 2区を中心に遺構掘削を行う。
- 6月4～7日 F・G 4・5区の包含層掘削作業を行う。
- 6月9～10日 F 2・3区遺構掘削作業を行う。
- 6月11～17日 F・G 3～5区の遺構面検出作業と遺構掘削を行う。
- 6月21日 D・E 3・4区の遺構掘削を行う。
- 6月24日 SK03・04掘削、およびE 5・6区遺構検出作業を行う。
- 7月1日 G 6～8列、F・G 7列にトレンチ掘削を行う。
- 7月5～9日 E・F 5・6区、G 6～8区の掘削と遺構面の検出作業を行う。
- 7月21日 SK02・05の遺構写真を撮影する。
- 7月22日 SK03遺構写真を撮影する。



第3図 小野遺跡・小野平等遺跡グリッド配置図(縮尺1/2,000・1/1,000)

第2節 調査の経過

- 8月2～6日 セクションベルトの掘削や遺構の完掘を行う。
- 8月9日 調査区中央部の全景写真撮影を行う。
- 8月10日 1回目の空中測量を行う。
- 8月11日 調査区西側の作業に移る。H・I 3・4区にトレンチを掘削する。
- 8月17日 I・J列6・7列にトレンチを掘削する。
- 8月20～25日 H・I 6～8区の遺構面検出と掘削作業を行う。東西方向の溝状遺構が並行している。
- 8月26日 I～K 6区の遺構確認面検出作業を行う。
- 9月9～14日 L・M 4～6区を中心に遺構面検出作業を行う。
- 9月21～24日 K 7・8区を中心に遺構面検出作業を行う。
- 9月27～28日 N 5～8区の遺構面検出と遺構掘削を行う。
- 9月30日～10月8日 段丘面下段H・I 3～5区の掘削を行う。
- 10月12～14日 小野平等遺跡の竹の伐採が始まる。J・K 3・4区を集中して掘削する。須恵器が少量出土する。
- 10月18～21日 I・J 2・3区、L・M 4区の包含層を掘削する。
- 10月26日 西側調査区A～D・8～13区にて、グリッド杭に沿ってトレンチを掘削する。
- 10月29日 仮設道路北東の調査区(K～M 1～3区)の掘削を行う。
- 11月8日 西側調査区にて作業を行う。削平により遺構の残存は悪い。
- 11月10日 西側調査区内の遺構面検出作業を行う。
- 11月16日 東側調査区の空中測量を行う。
- 11月17日 東側調査区の全景写真撮影を行う。
- 11月18～25日 西側調査区の遺構確認面検出作業と遺構掘削作業を行う。
- 11月24～11月30日 小野平等遺跡の伐採した竹を撤去する。同時に小野遺跡は遺構掘削を行う。
- 12月2日 小野平等遺跡の現況写真撮影を行う。
- 12月3日 小野平等遺跡の試掘調査を開始する。以後、日によっては小野遺跡と並行して作業を行う。
- 12月8日 小野遺跡の西側調査区全景写真撮影。午後より、西側調査区の空中測量を行う。
- 12月10日 小野平等遺跡の試掘調査。北側山際の狭い平坦面に火輪1点が露出しているのを確認する。
- 12月13日 小野平等遺跡の試掘調査において、北側山際の平坦面に十字にトレンチを掘削する。火輪の下の水輪を確認するが、地輪は未確認である。
- 12月14日 小野平等遺跡の試掘調査において、北側山際の平坦面のトレンチ内の礫を外す。
- 12月17日 小野平等遺跡試掘調査は、山際平坦面のトレンチ東側を地山まで掘削して終了する。
- 12月20～24日 冬季に向け、小野平等遺跡の養生を行う。両遺跡の後片付けなど近辺の清掃と諸設備の撤去を行い終了する。
- 平成23年3月14～25日 平成23年度の小野遺跡調査区の表土剥ぎ、杭打ちを先行して行い、8割程度終了する。

－平成23年度－

- 4月1日 作業開始。
- 4月11日 E～G 10～11区にトレンチを掘削する。
- 4月12～14日 K 9・10区を中心に遺構面精査および遺構掘削を行う。

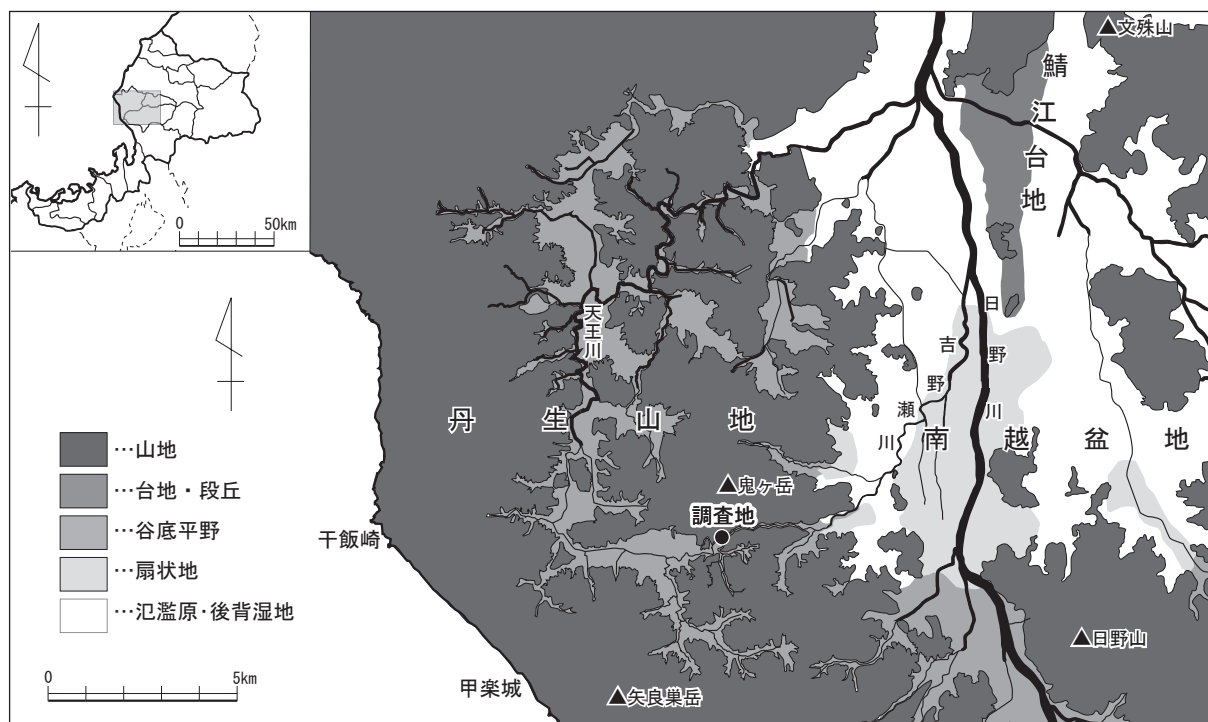
- 4月15～19日 G～K区にかけてトレンチを入れる。削平された部分を確認した。
- 4月20～27日 H・I区にトレンチを掘削し、遺構検出作業を行う。
- 5月2～9日 H12～14区の遺構確認面の検出作業と遺構掘削を行う。
- 5月16～18日 K・L13区の掘削を行う。H10・11区掘り下げとG・H列10・11区南北トレンチの掘削を行う。
- 5月17～20日 G・H列南北トレンチ掘削続きを行う。F・G10・11区、遺構確認面を検出していく。F・G11・12区、E・F10～12区の掘削やH・I13・14区の掘削を行う。
- 5月23～26日 I区10・11区にトレンチを入れる。G10・11区の掘削と、遺構面検出作業を行う。
- 5月27日 小野平等遺跡の竹、下草の伐採と小野遺跡F11区の遺構面検出作業を行う。
- 6月6日 G10・11区の遺構面精査。SD40の掘削を行う。上層から銭貨が出土する。
- 6月7日 C～E15～17区の掘削を行う。F・G10・11区にて遺構の検出作業と遺構掘削を行う。
- 6月8～15日 F・G10・11区を中心に精査、半掘を行う。SD40の掘削を行う。
- 6月24日 D～F12区の掘削作業と遺構確認面の検出作業を行う。
- 7月12日 調査区東側(H～N区)の測量を行う。
- 7月13日 調査区東側(H～N区)の全景写真撮影を行う。
- 7月22日 小野平等遺跡現況測量を行う。
- 7月26日～8月1日 D～G12区の遺構掘削と攪乱部分の除去を行う。
- 7月22日 E～G区14・15区の遺構面検出作業を行う。
- 8月5～11日 E・F13区の遺構掘削を行う。
- 8月22～25日 E～G14～17区の掘削作業を行う。
- 8月31日 SK103から一分金出土する。
- 9月1日 SE03・05を完掘する。
- 9月6日 G11区を中心に再精査する。溝(SD45)を掘削する。G12区Ⅱ層から、縄文土器片が出土する。
- 10月3日 SE04の写真撮影を行う。
- 10月4日 調査区西側(C～G区)の全景写真撮影を行う。小野平等遺跡の草刈り、清掃を行う。
- 10月6日 調査区西側(C～G区)の空撮を行う。小野平等遺跡は表土面の検出を行う。
- 10月12日 小野平等遺跡にて 山際の掘削の続きを行う。空風輪、火輪が出土する。
- 10月14日 小野平等遺跡、A～C1・2区の掘削続き。SX1・2の小礫の除去を行う。
- 10月17日 小野平等遺跡はD・E1・2区の表土掘削。E2区からは須恵器が出土した。
- 10月24日 SX2の掘削を行う。C2区、C3区南半の掘削を行う。
- 11月7日 SX1・2の清掃と写真撮影を行う。C・D3・4区の包含層掘削を行う。
- 11月17日 小野平等遺跡の空撮を行う。
- 11月24日 器材の補修、プレハブ内の清掃などを行い、現場作業を終了する。

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境(第4図)

福井県は、行政的には敦賀市北東の木ノ芽山嶺を境に北部を嶺北地方、南部を嶺南地方と呼び分けるが、旧国名では敦賀以北を越前国、以南を若狭国と称していた。越前市は、越前国のほぼ中央に位置し、平成17年(2005)10月に旧武生市^{たけふ}と旧今立町^{いまだてちょう}が合併して誕生した市である。山地と盆地からなる地形を呈し、市域の東に越前中央山地、南に南条山地、西に丹生山地^{にゅう}の3つの山地に囲まれ、北は丹生山地と、越前中央山地から西に延びる文殊山、および、丹生山地、越前中央山地間にある城山、経ヶ岳などの独立丘陵により狭められる。これより北を狭義の福井平野とし、南北方向にのびている鯖江台地を含む以南を南越盆地(または丹南平野など)と呼ぶ。

丹生山地は、南越盆地南部から日本海側の干飯崎^{かれいざき}に東西方向にのびる吉野瀬川断層以北を指す。丹生山地の西側は急斜面となり日本海に臨むが、東側は西側と比較すると緩やかに傾斜し、南越盆地へと続く。南越盆地と接する山麓部は山地間を侵食し南越盆地内へ流れ込む吉野瀬川、大虫川などの河川による扇状地が形成され複雑な屈曲部を多く有する。このような丹生山地内には織田盆地、宮崎盆地、白山盆地などの農山村集落が立地する大小の規模の盆地が散在している。また、市域南側の南条山地は、吉野瀬川を境に丹生山地と接している。南条山地の西側は、丹生山地と同様に急斜面をもって若狭湾に臨み、日野河谷を境に東側には越前五山の一つである日野山(795m)が聳え、岐阜県境より続く越美山地に連なる。市域東側の越前中央山地西側は、丹生山地と同様に文室川^{ふむろ}や鞍谷川^{くらたに}などの河川による扇状地が形成され、屈曲した緩斜面を有している。これら山地に囲まれた南越盆地は典型的な沈降盆地であり、丹生山地や越前中央山地からの諸河川と、盆地内を南北に貫流する日野川の沖積作用によって形成されたものである。日野川の形成した扇状地、氾濫原は盆地北端部の文殊山付近にまでおよび、盆地内には丹生山地、越前中央山地と同様の地質で、もとは一連の山地であった愛宕山(103m)、茶白山(135m)、村国



第4図 遺跡周辺の地形図(縮尺1/40万・1/20万)

山(239m)、三里山(334m)、妙法寺山(235m)などの独立丘陵が存在している。

今回の調査地が位置するのは、南越盆地西端から約4km西方の、丹生山地と南条山地の間に挟まれた吉野瀬川が形成した谷底平野である。遺跡の標高は約94m～97mを測る。吉野瀬川は南条山地の矢良巢岳を源とし、北流の後、旧勝蓮花町付近で西方からの丸岡川と合流し、丹生・南条山地間を東流する。山地間を蛇行、侵食して流れる吉野瀬川が形成した河岸段丘や、金華山(391m)、鬼ヶ岳(533m)、若須岳(564m)などの尾根筋や谷筋が形成する盆地が入り組み、丹生・南条山地間には集落や水田が立地可能な平野や平坦面を見ることができる。しかし、旧小野町集落より西方の吉野瀬川上流側には旧勝蓮華町、沓掛などの集落が立地する盆地が展開しているが、下流側の吉野瀬川両岸は総じて幅狭く、比較的急斜面が続く箇所が多くなり、吉野瀬川が山地を抜けた後、東方に形成する扇状地上に位置する広瀬町まで集落は立地していない。このことから、調査地の立地は盆地の東端部に該当するといえる。

なお、丹生山地・南越盆地の周辺では、古来より窯業が盛んである。丹生山地の西側および散在する盆地には、花崗岩、石英粗面岩が風化、分解した粘土が産出し、これらを利用した陶器、瓦製造業が盛んである。当地の近辺では、吉野瀬川右岸の広瀬町・池ノ上町において現在も瓦が生産されており、また、北約6～7kmの織田盆地・宮崎盆地は、中世以降現代まで越前焼の生産地として知られている。

第2節 歴史的環境(第5図)

小野遺跡と小野平等遺跡の位置する丹生山地および南条山地間は、その地形的条件のためであろうが周知の遺跡は限られる。しかし、旧武生市が位置する南越盆地は古代には越前国府や国分寺が置かれ、越前国の政治と経済の中心地であり、多くの遺跡が存在する。よって、ここでは南越盆地西部を中心に主な遺跡について述べる。

縄文時代の遺跡では、愛宕山古墳群(57)の里山1・2号墳が位置する尾根の西方において、住居跡1基の他、ピット群を確認し、早期後葉～中期中葉に属す土器と石器が出土している。日野川と吉野瀬川に挟まれた沖積地に位置する北府遺跡(75)では中期から晩期の遺構、遺物が確認された。遺構には土器棺墓3基、竪穴住居1棟などがある。丹生郷遺跡(72)では、縄文土器が出土している。

弥生時代の遺跡では、北府遺跡(75)内の北府A遺跡の調査において弥生時代後期の周溝を巡らす平地住居や掘立柱建物が確認されている。遺物には、弥生時代後期の溝から木製の盾が出土している他、口縁部が受け口状を呈する近江地方の影響を受けた土器が多いことが注目される。また、第5図の範囲外であるが、鯖江市との境に近い日野川右岸の自然堤防上に位置する瓜生助道遺跡では、弥生時代中期から後期の方形周溝墓群とその集落が確認され、竪穴住居からは小銅鐸が出土している。

古墳時代では、南越盆地内に所在する独立丘陵上に古墳群が築かれるものの、発掘調査が行われたものは少ない。前期、中期については特に少なく、後期には愛宕山古墳群(57)、茶臼山古墳群(96)などがある。愛宕山古墳群は総数72基を数え、その内の里山支群の2基の方墳が発掘され、2号墳からは鉄刀、鉄鏃が出土した。6世紀初頭から中葉に位置づけられる。県指定史跡である茶臼山古墳群は、昭和25年(1950)に慶応大学によって円墳1基と14の小石室が、平成6・7年度には武生市教育委員会(現越前市教育委員会)により茶臼山古墳群馬塚支群の馬塚1～5号墳の調査が行われた。古墳と時期的、位置的に近接して須恵器窯2基、横穴墓2基の他、祭祀遺構、埋葬遺構が構築されている。なお、茶臼山1・2号窯は武生南部古窯跡群の内、調査が行われた中で最も操業が早い7世紀第1四半期に位置づけられている。その他、岡本山古墳群(95)は前期に、船山古墳群(69)、北山古墳群(64)は後期に位置づけられる。

古墳時代の集落では、愛宕山の南の水田地帯に位置する安丸官人遺跡(50)は平成21年度の発掘調査において、旧河川の流域に展開した古墳時代、古代、中世の集落の縁辺であることが確認された。古墳時代の遺構には、周囲に溝を巡らす掘立柱建物がある。

古代になると、前述したように越前国府が丹生郡の武生の地に置かれ、この地が越前の政治・経済の中心となる。古代の遺跡には、官衙・寺院・集落・窯跡がある。官衙に関する調査では、国府推定地とされる旧武生市街地中心部において、国府関連に伴う推定地域の試掘・範囲確認などが精力的に行われている。中世・近世の開発に伴う遺構が多く、国府跡を特定するまでの遺構や遺物は確認されていないが、地点を変えての数度に及ぶ調査の成果として国府遺跡(101)では石帯が、府中城跡(103)では多くの墨書土器が出土し、官人の存在が窺えるまでになった。近年では、平成19年度から越前国府関連調査が五カ年計画で行われ、墨書土器や緑釉陶器など国府につながる資料が蓄積されている。高森遺跡(79)は、大虫川が形成した扇状地上に立地し、南東方に越前国分寺と推定される大虫廃寺跡(83)が位置する。3次に渡る発掘調査から、多数の掘立柱建物群とそれらを囲む区画溝が確認され、丹生郡衙跡と推定されている。寺院遺跡では、いずれも白鳳期に建立された大虫廃寺、深草廃寺跡(99)の他、第5図の範囲外だが野々宮廢寺跡がある。大虫廢寺跡は、大虫扇状地の扇端に位置し、過去の土砂採取の際に礎石が1点出土した。これまで4次にわたる調査が行われた結果、塔跡と推定される基壇、瓦溜4カ所、掘立柱建物2棟が確認された。寺域や伽藍配置は不明であるが、奈良時代後半まで存続することから大虫廢寺転用国分寺説が有力視されている。深草廢寺跡は国府推定地の西端に位置し、昭和37年(1962)以来4次にわたる調査が行われた。7世紀第3四半期前後と越前で最も早く建立されたと推定され、大虫廢寺跡と同様に伽藍配置は不明だが、出土した瓦の供給地が王子保窯跡群(135)であることが確認された。野々宮廢寺跡は国府推定地の東約6kmの味真野扇状地の扇端に位置し、基壇の一部が確認されたものの比較的早い段階で廃れており、国分寺であった可能性は低い。その他、仏教的な要素が窺われる遺跡として、大塩向山遺跡(136)では焼土坑や掘立柱建物が確認され、「寺」と墨書された須恵器が出土し、祭祀場を含む寺と考えられている。隣接する山腰遺跡(137)は性格不明ながら、「国府」と墨書された須恵器が出土している。市域からは大きく南西に外れるが、矢良巢岳中腹の平坦面に位置する南越前町マンガラ寺跡(143)は8～10世紀の須恵器の中に、浄瓶や鉄鉢形など仏具的なものを有し、2棟の掘立柱建物の配置からも山中の寺院であると考えられている。また、今回の調査地である小野遺跡の北方に聳える鬼ヶ岳山頂では須恵器片が採集されている。古代の集落遺跡には芝原遺跡(60)、平出遺跡(74)、新町遺跡(94)、高瀬二丁目遺跡(104)、徳神遺跡(116)などがある。平出遺跡は平安時代の集落で、緑釉陶器、灰釉陶器、石帯が出土している。新町遺跡では掘立柱建物、井戸、土坑などの奈良～平安時代の集落跡が確認されている。高瀬二丁目遺跡は越前国府推定地の南西に近接する平安時代の集落であり、倉庫群であったと考えられる。徳神遺跡は、日野川左岸の沖積地に位置する古代～中世の集落である。窯跡には王子保窯跡群(135)、広瀬窯跡群(108)、池ノ上窯跡群(111)などがある。これら窯跡は南越盆地の南、南条山地の北麓に位置し、その分布範囲から武生南部窯跡群と呼称される。王子保窯跡群は、これまで7次にわたり発掘調査が行われ、7世紀中葉から8世紀前葉にかけての須恵器生産が確認された。7世紀中葉に位置づけられる6・7号窯では須恵器の他、瓦や鴟尾も生産されている。広瀬窯跡群と池ノ上窯跡群は隣接し、7世紀中葉を中心に操業される。しかし武生南部窯跡群における須恵器生産は8世紀後半には廃れた後、北方の丹生窯跡群に移り、丹生窯跡群は中世以降になると越前焼の産地として現代まで窯業が受け継がれる。その他、光明山経塚(8)は平安時代末の経塚であり、大正時代に神社背後の



第5図 周辺の遺跡分布図 (縮尺1/60,000)

光明山山頂から出土した遺物は市文化財となっている。

中世以降では、前述した市街地内の国府関連遺跡発掘調査に関連し、国府遺跡、元町遺跡(105)、府中城跡などの調査が行われ、限られた調査範囲だが集落や武家屋敷に関わる遺構や遺物が確認されており、国府が置かれて以降、中世から近現代に至るまで、一地方都市の中心地であることが明らかとなった。市街地周辺では家久遺跡(62)、徳神遺跡がある。家久遺跡は8世紀から16世紀にわたる集落であるが、平安末から鎌倉時代初頭と考えられる隅丸方形の礫郭墓1基が確認され、白磁四耳壺、鉄製太刀、烏帽子、硯箱、化粧箱等が副葬されていた。徳神遺跡では、骨片や炭化材などを伴う12~13世紀と考えられる火葬遺構が

第2節 歴史的環境

第1表 周辺の遺跡分布一覧表 (No.は第5図に対応する)

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	峠坂2号窯跡	37	市布遺跡	73	下太田遺跡	109	広瀬瀬谷遺跡
2	上長佐窯跡群	38	東野遺跡	74	平出遺跡	110	広瀬南田遺跡
3	正徳遺跡	39	西ノ谷遺跡	75	北府遺跡	111	池ノ上窯跡群
4	五郎田窯跡	40	岡ヶ遺跡	76	大虫経塚	112	池ノ上柳町遺跡
5	日涉園窯跡	41	北谷削遺跡	77	大虫城	113	向山遺跡
6	暮掛1号窯跡	42	若宮遺跡	78	上四目遺跡	114	千福城
7	奥蛇谷窯跡	43	八田水上遺跡	79	高森遺跡	115	千福遺跡
8	光明山経塚	44	宇呂遺跡	80	上太田遺跡	116	徳神遺跡
9	向門遺跡	45	漆原古墳群	81	竹安深丸遺跡	117	末ノ山窯跡群
10	菅原遺跡	46	上氏家道ノ弘遺跡	82	川井中村遺跡	118	妙法寺城
11	樫津7～8号窯跡	47	下本保遺跡	83	大虫廃寺跡	119	小泉館
12	榎田遺跡	48	余田古墳群	84	下大虫角庄遺跡	120	妙法寺遺跡
13	樫津穴谷遺跡	49	余田遺跡	85	片山遺跡	121	妙法寺台遺跡
14	樫津9号窯跡	50	安丸百人遺跡	86	広瀬片山窯跡	122	白崎窯跡群
15	奥ノ谷遺跡	51	河野館	87	竜神山城	123	笹々生遺跡
16	西広田遺跡	52	家久蟻ノ腰遺跡	88	雷神社遺跡	124	白崎城跡
17	新保穴谷遺跡	53	氷坂古墳群	89	小野遺跡	125	塚原四段田遺跡
18	藻谷遺跡	54	氷坂堂田遺跡	90	小野平等遺跡	126	塚原白崎遺跡
19	八田新保1号窯跡	55	片屋古墳群	91	広瀬戸谷口野遺跡	127	上南畷遺跡
20	堤ヶ谷遺跡	56	氷坂高田遺跡	92	宗義館	128	四郎九上天狗堂遺跡
21	舟場窯跡	57	愛宕山古墳群	93	広瀬岡之下遺跡	129	四郎九石田遺跡
22	脇ノ谷遺跡	58	三日延城	94	新町遺跡	130	今宿遺跡
23	狐谷ノ窪遺跡	59	狭間石田遺跡	95	岡本山古墳群	131	野中窯跡群
24	舟場遺跡	60	芝原遺跡	96	茶白山古墳群	132	寺ノ山遺跡
25	後呂遺跡	61	芝原古墳群	97	東千福遺跡	133	八幡遺跡
26	後谷遺跡	62	家久遺跡	98	金剛院城	134	城屋遺跡
27	寺遺跡	63	烏帽子形遺跡	99	深草庵寺跡	135	王子保窯跡群
28	上養老遺跡	64	北山古墳群	100	京町三丁目遺跡	136	大塩向山遺跡
29	小深田遺跡	65	片屋神田遺跡	101	国府遺跡	137	山腰遺跡
30	中ノ坪遺跡	66	幸田榎木町遺跡	102	新善光寺城	138	亀ノ谷遺跡
31	道斉遺跡	67	経ヶ岳遺跡	103	府中城	139	縄手遺跡
32	北長遺跡	68	新縄遺跡	104	高瀬二丁目遺跡	140	国兼遺跡
33	奥出遺跡	69	船山古墳群	105	元町遺跡	141	度々遺跡
34	坪ノ内遺跡	70	北山馬正免遺跡	106	竜門寺城	142	矢谷山城
35	堂野遺跡	71	上平丸遺跡	107	当ヶ峰遺跡	143	マンガラ寺跡
36	前頼遺跡	72	丹生郷遺跡	108	広瀬窯跡群	144	深山遺跡

9基確認されている。また、丹生山地間の盆地に位置する遺跡には、発掘調査ではなく工事など不時発見の遺構や遺物があり、小野遺跡から西方に約4kmの菖蒲谷町では、昭和49年(1974)の神社境内の山道工事中に鎌倉時代の五輪塔や蔵骨器を伴う中世墓が発見され、西方3kmの丸岡町では大正時代に、室町時代と考えられる五輪塔片が出土した。これら石塔類の例をはじめ、古代以降中世にかけての丹生山地や南条山地では、山岳信仰や布教活動、寺院跡の伝承などが散見される。

鎌倉末頃から旧武生市街地は府中と呼ばれ、現在の越前市役所付近がその跡地とされる府中城は、城域や規模などの詳細は不明だが、朝倉氏が設置した奉行所が前身である。外堀、内堀の他、館や天守台をもつ平城であったらしく、府中館ともいべきものであった。織田信長が一揆を討伐した後の天正年間には、府中三人衆の一人である前田利家が府中に入り、城域を拡大する。関ヶ原の戦い後、慶長六年(1601)には本多富正が府中城主となり、水路や街区など城下の整備や産業を奨励し、その後の城下町の基盤作りを行い、中でも鎌や庖丁などの鍛冶生産は現在でも越前打刃物として続く伝統産業となっている。以後、明治維新に至るまで本多家九代が福井藩付家老として府中を治めることとなる。

北陸道を擁し、古代には国府が置かれた府中は、商工業の発展に伴い、中世以降も物資の流通におい



第6図 現在の題目岩

て越前の要であった。府中を通り畿内へ向かう道には、険しい南条山地を越える北陸道の他、府中から西に向かい、広瀬、湯谷、中山を通り、日本海側の甲楽城浦や今泉浦から船運で敦賀へと向かう道があり、後者は「西街道(馬借街道)」と呼ばれ、中世には朝倉氏が領国支配のために整備した街道の一つで、近世においても重要な流通路であった。

なお、調査地である旧小野町に残る「小野」という地名の由来については、遣隋使小野妹子の一族の小野姫が当地に移り住み、永住したので「小野」となったということである。また、小野平等遺跡の位置する吉野瀬川左岸の地は、通称「大竹藪」と呼ばれ、小野姫等の墓所であると言い伝えられる。他に、『足羽社記』には、「関媛所生、小野稚郎女の御名代なるか」(越前国名蹟考)と記述がある。その他、集落から約300m下流の旧県道沿いの岩肌には、日蓮上人の孫弟子の日像上人が刻書したとされる法華経が刻まれた「題目岩」(第6図)があり、当時の布教活動の一端が窺える。

註

題目岩は、ダム建設事業に伴い平成22年(2010)7月2日に岩肌から切り出され、現在は越前市武生柳町所在の長栄山本行寺に移設されている。『武生市史 概説篇』には文亀三年(1503)の紀年名がある、と記載されるが、風化のため肉眼では判読し難い。

尚、本行寺住職の石本恵隆氏には題目岩に関し、数々のご教示を頂いた。記して感謝したい。

参考文献

- 武生市史編纂委員会 1976 『武生市史 概説篇』
- 白山村誌編纂委員会 1978 『白山村誌』
- 福井県企画開発部地域振興課 1982 『土地分類基本調査 鯖江・梅浦』
- 福井県武生市教育委員会 1984 『高森遺跡発掘調査概報Ⅰ』 武生市埋蔵文化財調査報告Ⅰ
- 福井県武生市教育委員会 1986 『愛宕山遺跡群Ⅰ』 武生市埋蔵文化財調査報告Ⅲ
- 福井県武生市教育委員会 1986 『王子保窯跡群』 武生市埋蔵文化財調査報告Ⅳ
- 福井県武生市教育委員会 1989 『大虫廃寺・野々宮廃寺』 武生市埋蔵文化財調査報告Ⅸ
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1994 『年報8』
- 福井県武生市教育委員会 1996 『深草廃寺』 武生市埋蔵文化財調査報告19
- 福井県武生市教育委員会 2000 『国府A遺跡 国府B遺跡 元町遺跡 府中城跡D・E地点』 武生市埋蔵文化財調査報告20
- 福井県武生市教育委員会 2001 『茶白山古墳群』 武生市埋蔵文化財調査報告21
- 福井県武生市教育委員会 2004 『徳神遺跡』 武生市埋蔵文化財調査報告23
- 福井県武生市教育委員会 2005 『北府A遺跡』 武生市埋蔵文化財調査報告24
- 福井県越前市教育委員会 2006 『高瀬二丁目遺跡』 越前市埋蔵文化財調査報告01
- 福井県教育委員会 2006 『馬借街道・海の道』 歴史の道調査報告書 第6集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 『大塩向山遺跡・山腰遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第96集

第3章 小野遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

1 調査区の地形と層序(第7・8図)

小野遺跡は周囲を山地に囲まれており、調査区の標高は約93～97mを測る。調査区内で最も標高が高い地点は調査区西部の、南方から吉野瀬川沿いに張り出す尾根筋の辺りである。吉野瀬川は北側の山際に沿って屈曲して流れるが、その流れを南東方向に変えた調査区北東方辺りが最も標高が低くなる。

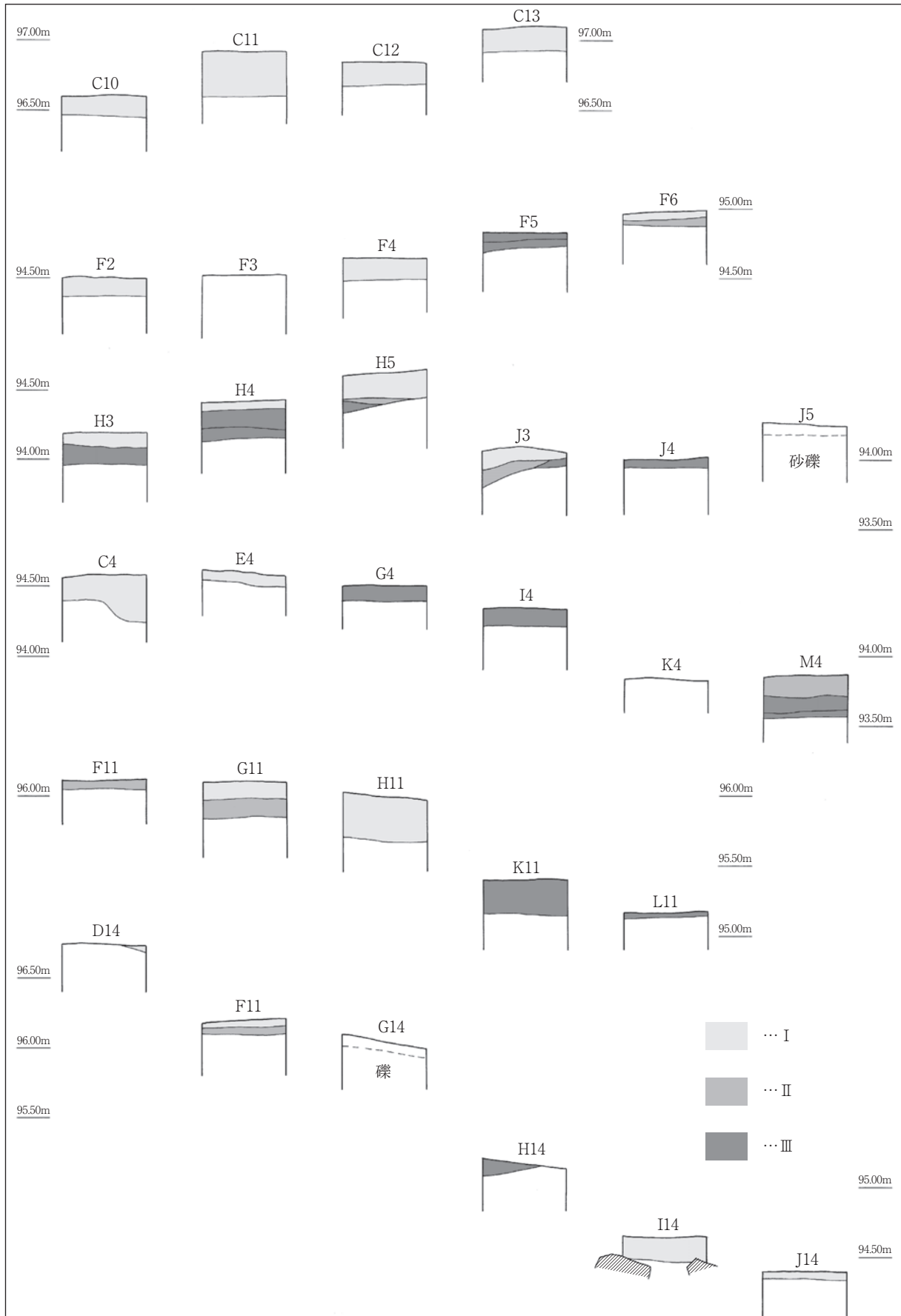
吉野瀬川が形成した河岸段丘は、旧県道から北側の調査区では4～6区にかけて段状の地形が遺存し、集落移転前は宅地に利用されていた。その北側にあたるJ～M4区以北の遺構が確認できない部分では、東方に谷状に落ち込んでゆく地形を確認した。旧県道から南側では後世の削平が著しく、当時の地形は想定する他ないのだが、南方の谷筋を山際に沿って流れる小野川にかけて低くなっていたようである。小野遺跡の地形は、大きく見れば旧県道を境に南北に緩やかに傾斜する馬の背状の地形であり、小野平等遺跡の位置する段丘も含め、比較的急峻な斜面に囲まれた小盆地にあたる。

第1章で述べたように、調査区は小野町集落の跡地であり、調査前は更地となっていた。近現代以降の土地開発、家屋の基礎跡などや移転に伴う建物の撤去などの造成により、大きく削平と攪乱が広がる部分が所々に分布し、良好に包含層が残存する箇所は限られた。遺構についても、掘削したところ近代以降の構築と判断できるものもあり、包含層および遺構や遺物の残存は良好とは言えない。調査区の土層は大きく4層に分けられる。第I層は表土剥ぎ時に取り切れなかった近現代の造成土、攪乱土層に該当するが多様な時期の遺物が多く含まれるため、遺構外出土遺物として抽出し、掲載している。第II層は中近世の包含層である。この層は近世における造成土も含まれるが、造成土は第I層との判別がつきにくい層もあった。第III層は律令時代の包含層である。黒褐色粘質土であり、特にK～M3・4区にかけての段丘下段の落ち込んだ箇所には良好に残存しているが、遺物の出土は少ない。第IV層は遺構確認面である。黄褐色砂質土または粘質土である。削平のため、さらに下層の砂礫層が現れる箇所もある。

2 遺構と遺物の分布

調査において検出した遺構は、掘立柱建物・溝・土坑・井戸・柱穴・小穴の他、不明遺構がある。主にD・E5～7区、F・G2・3区と10～13区では土坑、柱穴を中心とした遺構が集中しており、建物の構成を窺うことができる。F・G10・11区は調査区内においても比較的高所にあたり、本来ならば、この周囲にはさらに遺構が広く分布していたと考えられる。時期別では、ほとんどの遺構が中世と近世に属し、中世の遺構の分布は近世とほぼ重なっていると考えられるが、個々に判別し特定するのは困難である。古代の遺構は限られ、III層が覆土となる遺構も小穴程度であった。やはり後世の削平の影響が大きいと考える。

遺物には近世の土器、陶磁器を主体に、木製品、石製品、金属製品、土製品、銭貨などがあり、他の時期の遺物には中世の土器、陶磁器、古代の須恵器の他、僅かに縄文土器の小片がある。土坑、溝からは量の多少はあるものの遺物が出土するが、柱穴、小穴からの出土遺物は極めて限定的である。遺構出土以外の遺物出土状況は遺構の分布状況と同様の傾向を呈す。また古代の土器は、段丘下のE～M4～6区にかけてと、間に攪乱を挟みF・G10～12区とK9・10区に分布域が分かれるが、後世の遺構に混入したことが多い。



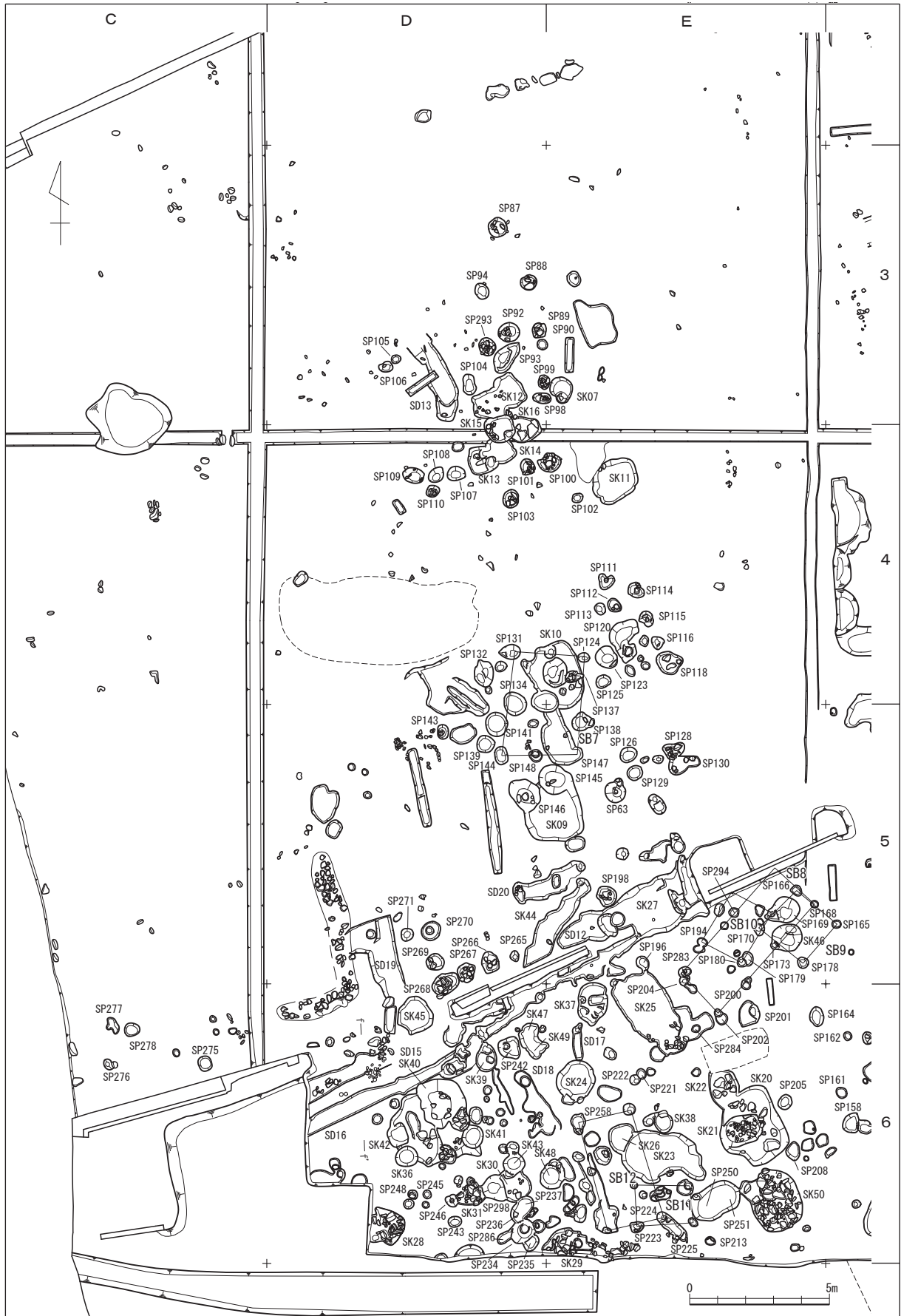
第7図 土層模式図



第8図 遺構全体図 (縮尺1/600)

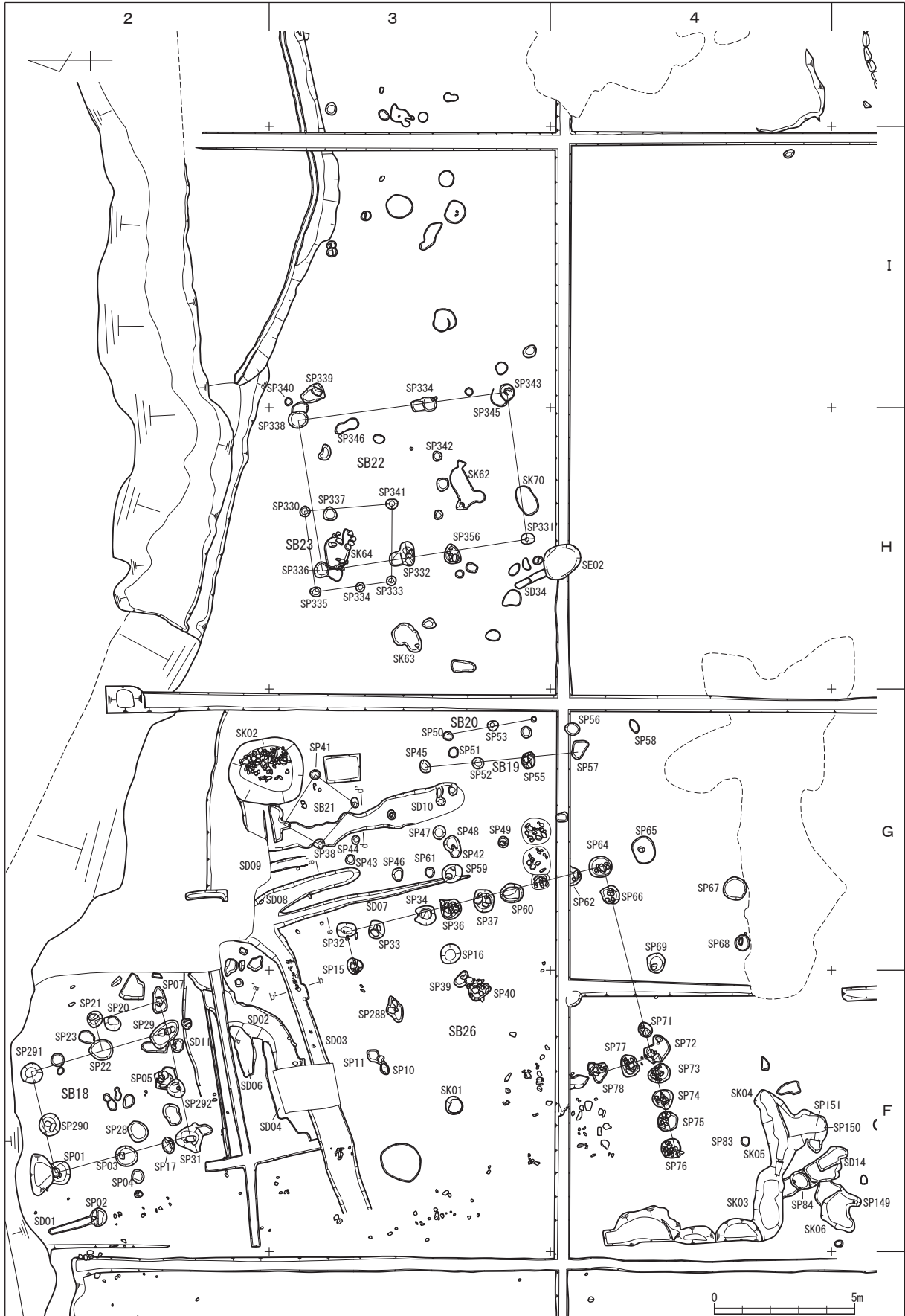


第9図 遺構図1 (縮尺1/200)

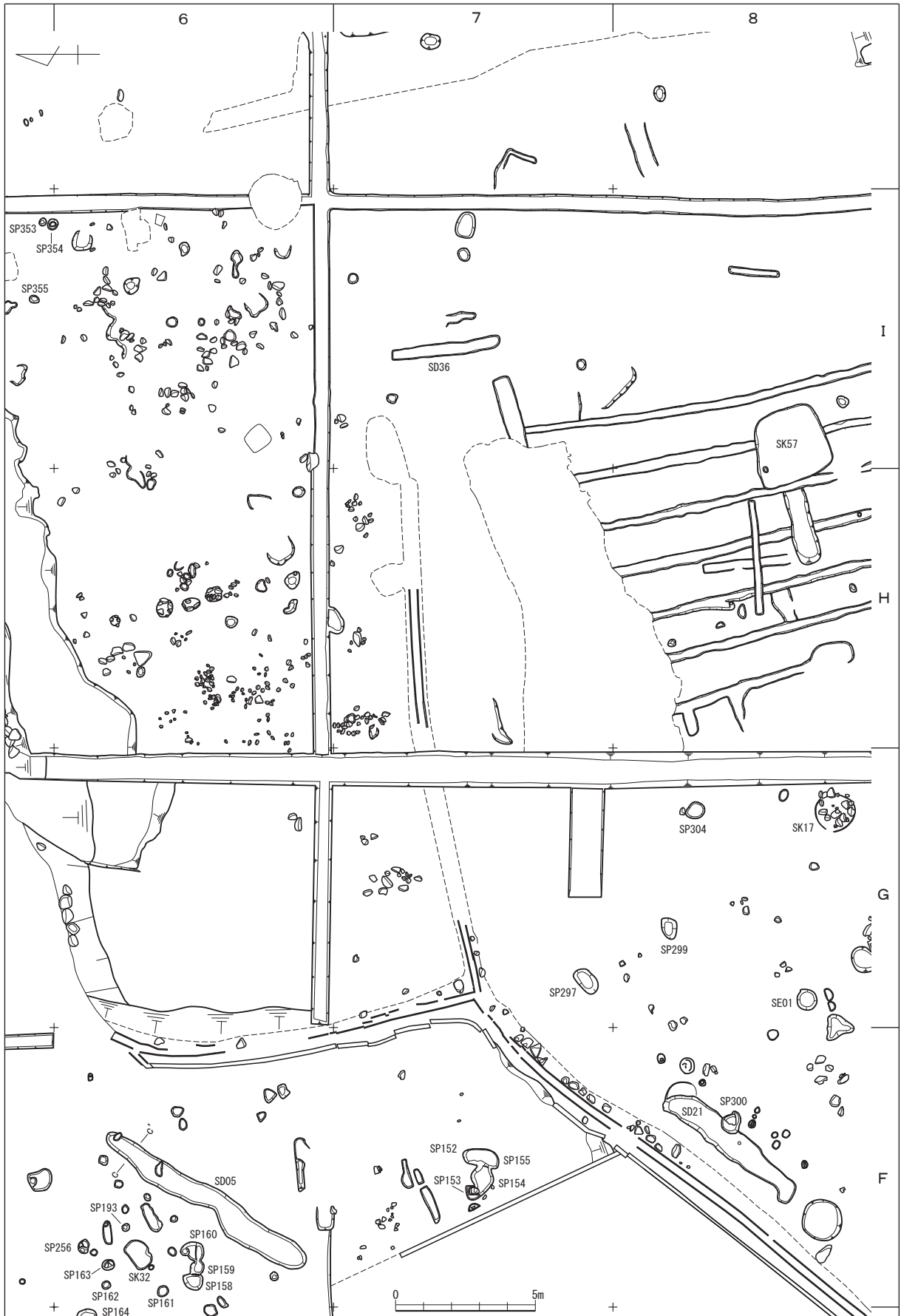


第10図 遺構図2 (縮尺1/200)

第1節 遺跡の概要



第11図 遺構図3 (縮尺1/200)



第12図 遺構図4 (縮尺1/200)

第1節 遺跡の概要



第13図 遺構図 5 (縮尺1/200)



第15図 遺構図7 (縮尺1/200)



第16図 遺構図8 (縮尺1/200)

第2節 遺構

建物、土坑、溝、不明遺構を取り上げる。建物を構成する柱穴以外の柱穴、小穴については図示したものもあるが特に言及はしない。

1 建物

柱穴が規則的に並ぶものを建物と判断したが、調査の段階では個々の建物としての認識には至らず、整理作業段階において図面上で確認したものがほとんどで、番号も整理に合わせて改めて付した。今回、復元し得たものには、礎石建物と掘立柱建物がある。礎石建物としたものは、削平のため礎石は無いものの、柱穴内に根石が残存している柱穴で構成される。しかし、礎石建物については調査段階で時期判断に迷い、積極的に近世遺構として認識していなかった。そのため、覆土や遺物から近代以降であることが確かなものは除外し、他の遺構と関連付けられるものみに番号を付している。掘立柱建物には、良好に柱根が残存しているものもある。また、多くの柱穴を確認したものの、復元し得なかった建物も多数存在すると考える。

なお、各建物の長軸方向を桁行、短軸方向を梁行とし、測量図上で各柱穴列の両端の柱穴の中心を結んだ距離を桁行・梁行の寸法とした。桁行方向は、座標北から東西に振れる角度を計測した。

SB01(第17図) A・B13・14区に位置する1間×1間の掘立柱建物である。桁行324cm、梁行200cm、方位はN77°Wを測る。柱穴の平面形は不整楕円形を呈し、西側が径65~70cm、深さ8~14cm、東側が径40~45cm、深さ20cm前後を測る。柱穴から遺物は出土していない。

SB02(第17図) A・B13・14区に位置する1間×1間の掘立柱建物である。攪乱のため、東側の柱穴は検出に至っていないが、桁行350cm、梁行254cm、方位はN55°Wを測る。柱穴の平面形は円形を呈し、径45~57cm、深さ12~40cmを測る。柱穴から遺物は出土していない。

SB03(第17図) B12・13区に位置する1間×1間の掘立柱建物である。攪乱のため、北側の柱穴は検出に至っていない。桁行278cm、梁行261cm、方位はN64°Eを測る。柱穴の平面形は不整円形を呈し、径40~70cm、深さ15~24cmを測る。柱穴SP394から越前焼小片が出土している。

SB04(第17図) B13区に位置する2間×1間の掘立柱建物である。攪乱と土坑で切られ、検出に至っていない柱穴がある。桁行291cm、梁行266cm、方位はN46°Wを測る。桁行の柱間寸法は145cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈し、径32~50cm、深さ18~35cmを測る。遺物は出土していない。

SB05(第17図) A・B13区に位置する掘立柱建物である。2間の柱穴列のみを確認し、対応する柱穴列は検出に至っていないが、北側に展開すると考える。柱穴列を桁側とすると、桁行382cm、方位はN19°Wを測る。柱間寸法は180cmと200cmを測る。柱穴の平面形は不整円形を呈し、径56~91cm、深さ26~51cmを測る。東端の柱穴には礎石と考える径20cmの石がある。遺物は出土していない。

SB06(第17図) C12・13区に位置する掘立柱建物である。2間の柱穴列のみを確認し、対応する柱穴列は検出に至っていないが、東側に展開すると考える。柱穴列を桁側とすると、桁行288cm、方位はN5°Wを測る。柱間寸法は142cmと147cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈し、径40~47cm、深さ21~27cmである。南端の柱穴SP360から近世に属す瀬戸・美濃焼や唐津焼、越前焼片が出土しているが、図示は出来なかった。

SB07(第18図) D・E4・5区に位置する1間×2間の掘立柱建物である。桁行373cm、梁行256cm、方位はN7°Eを測る。梁行の柱間寸法は124~150cmを測る。柱穴の平面形は円形および隅丸方形を呈し、径42~77cm、深さ11~54cmを測る。柱穴SP148から近世と考える越前焼の播鉢片が出土しているが、

図示は出来なかった。

SB08(第18図) E5区に位置する3間×1間の掘立柱建物である。北側の柱穴は検出に至っていないが、桁行520cm、梁行190cm、方位はN40°Eを測る。桁行の柱間寸法は108~207cmを測り、柱穴間でばらつきがある。柱穴の平面形は円形および隅丸方形を呈し、径28~44cm、深さ10~37cmを測る。柱穴SP168から土師質皿片が、SP173・200から越前焼片が出土し、いずれも中世に属すと考えるが、図示はできなかった。

SB09(第18図) E5区に位置する1間×1間の掘立柱建物である。桁行205cm、梁行195cm、方位はN51°Wを測る。柱穴の平面形は不整円形を呈し、径34~45cm、深さ8~34cmを測る。遺物は出土していない。

SB10(第18図) E5区に位置する1間×1間の掘立柱建物である。北側の柱穴は検出に至っていないが、桁行210cm、梁行160cm、方位はN31°Eを測る。柱穴の平面形は円形および楕円形を呈し、径28~38cm、深さ14~34cmを測る。遺物は出土していない。SB08・09・10は柱穴規模や位置関係から時期的に近いと考える。

SB11(第18図) E6区に位置する掘立柱建物である。1間×1間分を確認しているが、南側へ続くと可能性がある。桁方向を南北と想定すると、桁行150cm以上、梁行160cm、方位はN4°Wを測る。柱穴の平面形は円形および不整円形を呈し、径29~49cm、深さ15~29cmを測る。柱穴SP216から型成形の土師質皿が出土している。

SB12(第19図) E6区に位置する2間×1間の掘立柱建物である。東辺の中間の柱穴はSK23に切られたと判断する。桁行405cm、梁行205cm、方位はN15°Wを測る。桁行の柱間寸法は182cmと220cmを測り、北側と南側で一定しない。柱穴の平面形は不整円形を呈し、径32~73cmと幅があり、深さ13~35cmを測る。柱穴SP224から近世と考える越前焼の播鉢片が出土しているが、図示はできなかった。

SB13(第19図) F11区に位置する2間の柱穴列である。対応する柱穴は東に展開する可能性がある。長さは355cm、方位はN26°Wを測る。柱間寸法は145cmと200cmを測る。柱穴の平面形は不整円形を呈し、径67~94cm、深さ34~45cmを測る。柱穴底には礎石を有すものがある。SP522からは近世、SP579からは中世と考えられる越前焼片が出土しているが、図示はできなかった。

SB14(第19図) F11区に位置する2間の柱穴列である。対応する柱穴は西に展開する可能性がある。長さは304cm、方位はN10°Wを測る。柱間寸法は144cmと160cmを測る。柱穴の平面形は円形および不整円形を呈し、径58~65cm、深さ22~42cmを測る。SP489には柱根が残存し、型成形の土師質皿片が出土している。

SB15(第19図) F12区に位置する2間×1間の掘立柱建物である。東辺の中間の柱穴を欠く。桁行296cm、梁行294cm、方位はN43°Eを測る。桁行の柱間寸法は128cmと170cmを測る。柱穴の平面形は不整円形を呈し、径45~80cm、深さ25~56cmと幅がある。柱根が残存する柱穴がある。SP494から中世の越前焼(307)の他、伊万里焼、瀬戸・美濃焼などが出土しており、近世に位置づけられる。

SB16(第19図) G11区に位置する掘立柱建物である。東側は攪乱のため検出に至らず、2間×1間分を確認した。南北方向を桁行とすると、桁行400cm、梁行300cm、方位はN18°Wを測る。桁行の柱間寸法は200cmを測る。柱穴の平面形は不整楕円形を呈し、径55~90cm、深さ14~46cmを測る。SP462には柱根が残存している。遺物は出土していない。

SB17(第20図) F13区に位置する2間×1間の掘立柱建物である。北端の柱穴は検出に至っていない

いが、桁行405cm、梁行394cm、方位はN21°Wを測る。柱間寸法は、190～200cmを測る。柱穴の平面形は円形および不整形円形を呈し、径50～130cmと幅があり、深さ30～59cmを測る。南辺の梁行の間には支柱の可能性のある小穴がある。SP545には壁に接して根固めの石が据えられており、型成形の土師質皿片が出土している。

SB18(第20図) F 2区に位置する2間×2間の掘立柱建物である。東側に庇を有す。桁行514cm、梁行390cm、方位はN17°Wを測る。柱間寸法は、桁行230～260cm、梁行175～200cmを測る。庇は東に111cm張り出し、1間分を確認した。柱穴の平面形は円形および不整形円形を呈し、径80～115cm、深さ45～67cmを測る。柱穴には礎石および根固めの石を有すものがある。柱穴SP03から肥前陶器、庇部分のSP7から型成形の土師質片、SP21から越前焼片が出土している。

SB19(第20図) G 3区に位置する3間の柱穴列である。対応する柱穴列は検出に至らなかった。柱穴列を桁側とすると、桁行550cm、方位はN4°Wを測る。柱間寸法は174～193cmを測る。柱穴の平面形は円形および不整形円形を呈し、径42～69cm、深さ5～43cmと幅がある。SP55のみ深く、埋土に礫を有す。SP52から手づくねの土師質皿片が出土している。SD07・10や、礎石建物と並行する位置関係にあり、堀となる可能性もある。

SB20(第20図) G 3区に位置する2間の柱穴列である。対応する柱穴列は検出に至らなかった。柱穴列を桁側とすると、桁行315cm、方位はN11°Wを測る。柱間寸法は150cmと163cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈し、径21～40cm、深さ13～33cmを測る。遺物は出土していない。

SB21(第21図) G 3区に位置する1間×1間の掘立柱建物である。北側の柱穴は検出に至っていない。桁行189cm、梁行177cm、方位はN49°Wを測る。柱穴の平面形は円形を呈し、径37～42cm、深さ22～35cmを測る。遺物は出土していない。

SB22(第21図) H 3区に位置する3間×1間の掘立柱建物である。東辺の桁側は2間となる。桁行752cm、梁行542cm、方位はN8°Wを測る。桁行の柱間寸法は、西辺では160～310cmを測り、中間が狭く、東辺では280cmと470cmを測る。柱穴の平面形は不整形円形および楕円形のものが多く、径49～86cm、深さ16～90cmと幅がある。柱穴SP332・343には柱根が残存する。SP343の柱根は原位置を保っているが、SP332の柱根は倒れた状態であった。柱穴356から中世に属す越前焼の播鉢片が出土している。井戸SE02が南西に近接し、建物に付属すると考える。

SB23(第21図) H 3区に位置する1間×1間の掘立柱建物である。桁行314cm、梁行290cm、方位はN5°Wを測る。柱穴の平面形は円形を呈し、径35～43cm、深さ28～38cmを測る。遺物は出土していない。

SB24(第22図) G 11区に位置する3間×1間の掘立柱建物である。桁行678cm、梁行234cm、方位はN88°Wを測る。桁行の柱間寸法は、北辺が200～244cm、南辺が170～277cmを測り、一定しない。柱穴の平面形は円形および不整形円形を呈し、径46～78cmを測るが、SP514の長軸は140cmとなる。深さは28～58cmを測る。SP461・514から中世の越前焼、土師質皿が、SP444から近世の唐津焼、越前焼(312)が出土している。

SB25(第22図) K 9・10区に位置する2間×1間の掘立柱建物である。南西隅の柱穴は攪乱により欠いている。桁行660cm、梁行409cm、方位はN8°Wを測る。桁行の柱間寸法は、377cmと283cmを測り、一定しない。柱穴の平面形は不整形円形および楕円形を呈し、径60～81cm、深さ32～79cmを測る。土層観察からは柱抜き取り痕を確認でき、一部横倒しで残存するものもある。柱穴SP397から律令期の土師質甕小片が、SP485から中世の青磁片が出土しており、この建物の時期は中世の可能性はある。

SB26(第11図) F・G 3・4区に位置する礎石建物である。全ての柱穴が残存していないため、推定であるが、桁行940cm、梁行700cm、方位はN15°Wを測る。西南角から西方に柱穴列が張り出し、別棟が付属すると考えられる。SD02・03・07・08と平行関係にあり、関連性が窺われる。時期は18世紀後半から19世紀前半と考える。

SB27(第11図) L・M 5・6区に位置する礎石建物である。全ての柱穴が残存していないため、推定であるが、桁行1270cm、梁行980cm、方位はN78°Eを測る。北西部に400cm×360cmの別棟が付属すると考えられる。SD23・SK54を切るが、SD22・32・33と平行関係にあり、関連性が窺われる。時期は18世紀前半から19世紀前半と考える。

2 土坑

SK02(第23図) G 2・3区に位置する。長径278cm、短径270cm、確認面からの深さは40cmを測る。平面形は不整円形を呈す。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる皿状を呈す。底面の東側を中心に、10～30cm大の礫が多く出土しており、投棄された様相を呈す。遺物には中世の可能性のある越前焼の甕底部(1)と体部小片が出土したのみであった。

SK03(第23図) F 4区に位置する。SK05と接する。長軸260cm、短軸105cm、確認面からの深さは70cmを測る。平面形は楕円形を呈す。平坦な底面から直立気味に立ち上がる。遺物には伊万里焼、唐津焼、瀬戸・美濃焼、越前焼、石製品があり、18世紀後葉～19世紀中葉に位置づけられる(4～16・第46図17)。

SK05(第23図) F 4区に位置する。当初はSK04と切り合うとしたが、一体の土坑の可能性はある。推定長軸230cm以上、短軸150cm、確認面からの深さは55cmを測る。平面形は南側が膨らむ不整楕円形を呈す。断面形は、下部は箱状で上部は浅皿状を呈す。底面近くから伊万里焼の筒碗(2)が出土した。他に、瀬戸・美濃焼、越前焼、土鈴など、17世紀後葉～18世紀後葉のものが出土している。

SK06(第23図) F 4・5区に位置する。SD14・SP149と切り合う。長軸207cm以上、短軸105cm、確認面からの深さは25cmを測る。平面形は不整楕円形を呈す。断面形は、逆台形状を呈す。遺物には越前焼、土師質皿などがあり、18～19世紀中葉に位置づけられるが、図示できるものはない。

SK09(第24図) D・E 5区に位置する。SP145・146に切られる。長軸240cm以上、短軸208cm、確認面からの深さは25cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形は浅皿状を呈す。覆土には炭化物ブロックを全体に少量含み、遺物は出土していない。

SK10(第24図) E 4区に位置する。SP136・137と切り合う。長軸243cm、短軸180cm、確認面からの深さは30cmを測る。平面形は不整円形を、断面形は浅皿状を呈す。中央部と南西部にも柱穴と切り合っていることを確認した。遺物には越前焼片があり、中世に位置づけられるが、図示は出来なかった。

SK11(第23図) E 4区に位置する。長軸171cm、短軸142cm、確認面からの深さは28cmを測る。北西部は攪乱で削られる。平面形は不整円形を呈す。覆土の観察から、2つの遺構の切り合いの可能性はある。遺物には中世から近世の越前焼が混在する。

SK12(第23図) D 3区に位置する。長軸201cm、短軸95cm、確認面からの深さは23cmを測る。平面形は不整方形を、断面形は浅皿状を呈す。遺物は中世の越前焼の搦鉢や甕の体部片などが出土しているが、図示できるものは無かった。

SK15(第24図) D 3・4区に位置する。SK12と切り合い、SK16を切る。長軸105cm、短軸94cm以上、確認面からの深さは28cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形は浅皿状を呈す。西側に10～25cm大の石が集中する。遺物には瀬戸・美濃焼の碗、皿の他、越前焼があり(23～27)、16世紀中葉から17世紀初頭

に位置づけられる。他に銭貨がある。

SK16(第24図) D 3・4区に位置する。SK15に切られる。推定長軸135cm、短軸90cm、確認面からの深さは21cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は浅皿状を呈す。礎石の可能性のある上面が平坦な石が出土する。遺物は出土していない。

SK20(第24図) E 6区に位置する。SK22を切り、SK21に切られる。長軸265cm、推定短軸180cm、確認面からの深さは28cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形は浅皿状を呈す。覆土中に15～60cm大の石を含む。遺物は出土していない。

SK21(第24図) E 6区に位置する。SK20を切っている。長軸153cm、短軸105cm、確認面からの深さは75cmを測る。平面形は楕円形を、断面形は下層が箱型を、上層は浅皿状を呈す。上層は一度掘り返した可能性が考えられる。底面には集石があり、近世の土師質皿が出土した。他に、伊万里焼や瀬戸・美濃焼、越前焼など中世～近世の遺物が混在し(28～30)、須恵器も混入していた。

SK23(第25図) E 6区に位置する。SK26を切る。長軸300cm、短軸167cm、確認面からの深さは39cmを測る。平面形は不整楕円形を、断面形は浅皿状を呈す。遺物には越前焼、土師質皿(第33図31～33)があり、17世紀代を中心とする。

SK24(第25図) E 6区に位置する。SP281を切る。長軸143cm、短軸125cm、確認面からの深さは34cmを測る。平面形は円形を、断面形はU字状を呈する。遺物には越前焼の播鉢、土師質皿があり、中世から近世に位置づけられるが、図示は出来なかった。

SK25(第25図) E 6区に位置する。大小のピットと切り合う。長軸330cm、短軸170cm、確認面からの深さは20cmを測る。平面形は方形を、断面形は浅皿状を呈す。南側には20～30cm大の礫が集中する。遺物には伊万里焼、唐津焼、越前焼や土師質皿(34)など中世から近世のものが混在している。

SK26(第25図) E 6区に位置する。SK23に切られる。推定長軸100cm、確認面からの深さは18cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形は浅皿状を呈す。覆土は焼土ブロック、炭化物を含んだ土を埋め戻した様相を呈す。遺物は出土していない。

SK27(第25図) E 5区に位置する。SD12・16を切る。長軸は200cm程度、短軸は100cm程度、確認面からの深さは33cmを測る。平面形は楕円形を、断面形は逆台形状を呈す。上面から上層にかけて、炭化物、焼土を含み、土師質皿が多く出土した。他に、伊万里焼、唐津焼、瀬戸・美濃焼、越前焼、砥石など16世紀後半～19世紀初頭にかけての遺物が混在して出土している(35～55・第47図8)。

SK36(第26図) D 6区に位置する。SK42を切る。長径78cm、短径70cm、確認面からの深さ50cmを測る。平面形は円形で、断面形はU字状を呈す。遺物は出土していない。

SK40(第26図) D 6区に位置する。SK42を切り、SP305と切り合う。長軸177cm、短軸162cm、確認面からの深さは55cmを測る。平面形は不整形方形を、断面形は逆台形を呈す。底面近くには礫が含まれた。遺物には瀬戸・美濃焼の碗、および土師質皿(60・61)があり、16世紀代に位置づけられる。

SK41(第26図) D 6区に位置する。SK42を切る。長径81cm、短径74cm、確認面からの深さは57cmを測る。平面形は円形で、断面形はU字状を呈す。遺物には中世の土師質皿(62・63)がある。

SK42(第26図) D 6区に位置する。SK36・40・41・SP263に切られる。一辺260cm、確認面からの深さは36cmを測る。平面形は方形を、底面は段を有し、西側が低くなる。遺物には越前焼の播鉢(64)、および土師質皿があり、16世紀後葉から17世紀初頭に位置づけられる。

SK52(第26図) M 7区に位置する。長軸64cm、短軸54cm、確認面からの深さは13cmを測る。平面形

は不整円形を、断面形は逆台形状を呈す。曲物の底板と考えられる板材(第48図19)とタガの一部が残存していた。上部は取り去られたと考えられる。近世の曲物埋設遺構と考えられ、上水設備の可能性がある。他に遺物は出土していない。

SK54(第26図) L6区に位置する。SK59・SP322を切る。長軸205cm、短軸186cm、確認面からの深さは14cmを測る。平面形は方形を、断面形は浅皿状を呈す。遺物には赤瓦片があるが、図示は出来なかった。近世の遺構と判断できる。

SK57(第26図) H・I8区に位置する。長軸274cm、短軸263cm、確認面からの深さは14cmを測る。平面形は方形を、断面形は浅皿状を呈す。壁の立ち上り近くの覆土には、他所より炭化物を多く含んでいる。遺物は出土していない。

SK59(第26図) L6区に位置する。SK54・SP313に切られる。長軸235cm、短軸180cm以上、確認面からの深さは12cmを測る。平面形は不整形方形を、断面形は浅皿状を呈す。遺物は出土していない。

SK60(第26図) L7区に位置する。径90cm、確認面からの深さは36cmを測る。平面形は円形を、断面形は箱状を呈す。遺物には近世と考えられる越前焼、土師質皿があるが、図示は出来なかった。

SK65(第26図) B13区に位置する。SK66と接し、SP383を切る。長軸188cm、短軸120cm、確認面からの深さは13cmを測る。平面形は南東部が突出する方形を、断面形は浅皿状を呈す。遺物には中世の越前焼、土師質皿があるが、図示は出来なかった。

SK66(第26図) B13区に位置する。長軸192cm、短軸160cm以上、確認面からの深さは15cmを測る。平面形は不整形方形を、断面形は浅皿状を呈す。覆土には礫を多く含む。遺物は出土していない。

SK67(第27図) B13区に位置する。西側を攪乱で切られている。長軸158cm、短軸150cm以上、確認面からの深さは20cmを測る。平面形は不整形方形を、断面形は浅皿状を呈す。覆土には礫を多く含む。遺物は出土していない。

SK78(第27図) H13区に位置する。SX01を切る。長軸154cm、短軸120cm、確認面からの深さは65cmを測る。平面形は楕円形を、断面形は逆台形を呈す。壁際の覆土には木質を含む粘質土が堆積し、その内側はレンズ状に堆積することから、本来は何らかの構造物を設置しており、廃棄に際し抜き去ったと考えられる。主として下層には粗い砂質土が堆積し、上層には粘質土が堆積する。遺物には17世紀後葉～18世紀中葉の瀬戸・美濃焼の碗(73)、中世の越前焼(74)、土師質皿(72)の他、漆椀、箸、板材などがある(第48図1・8～13・20)。

SK79(第28図) G11区に位置する。SK86に切られる。長軸174cm、短軸122cm、確認面からの深さは48cmを測る。平面形は楕円形を、断面形は上層が浅皿状を、下層が箱状を呈す。覆土の間には木質を多く含む薄い層があり、上層は小礫を多く含み、埋め戻しと考えられる。遺物には瀬戸・美濃焼、伊万里焼、唐津焼、越前焼(75・76)、土師質皿の他、漆椀とその蓋(第48図5・7)があり、18世紀から19世紀中葉を中心とするが、図示出来るものは少なかった。76は15世紀代の甕で、混入である。

SK80(第27図) F10区に位置する。SK87を切り、SP568と接する。長軸118cm、短軸110cm以上、確認面からの深さは64cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形は逆台形を呈す。掘削の結果、径19cmの柱根が残存する柱穴であることが判明した。遺物には越前焼(78)、瀬戸・美濃焼(77)などがあり、17世紀前葉から中葉に位置づけられる。

SK81(第27図) F10区に位置する。SK87を切り、西側の一部を攪乱で切られる。長軸250cm以上、短軸200cm、確認面からの深さは90cm以上を測る。平面形は楕円形を、断面形は箱型を呈し、上部は浅

皿状となる。板材、棒材などの廃材や石を多く含み、掘削当初の用途から、最終的に廃棄土坑となったと考えられる。遺物も多く、伊万里焼、唐津焼、越前焼、瀬戸・美濃焼、京・信楽焼、土師質皿など(79～86)の他に鎌、和鋏(第49図2・3)があり、16世紀後半から19世紀半ばのものが混在している。

SK82(第28図) F11区に位置する。SK83・84を切り、北西部は攪乱で切られる。長軸260cm以上、短軸250cm以上、確認面からの深さは92cmを測る。平面は推定隅丸方形を、断面は逆台形を呈す。覆土はブロック土が主体となり、埋め戻された様相を呈す。遺物には17世紀前半から18世紀中葉にかけての唐津焼、瀬戸・美濃焼、越前焼(90～98)の他、板材(第48図15・16)がある。中世の染付(94)が混入する。

SK83(第28図) F11区に位置する。SK82に切られ、北東部を攪乱で切られる。径240cm、深さ105cmを測る。平面形は推定円形を、断面形は逆台形状を呈す。覆土はブロック土が主体となり、埋め戻された様相を呈す。遺物には17世紀前半から19世紀中葉の越前焼、土師質皿(87)の他、廃材、砥石(第47図3)があるが、図示出来るものは少ない。

SK84(第28図) F11区に位置する。SK82に切られる。西側で柱根が残存していた。長軸は176cm、短軸150cm以上、確認面からの深さは59cmを測る。平面形は円形を、断面形は逆台形状を呈す。遺物には17世紀初頭の越前焼(89)、土師質皿(88)、行火、支脚状製品がある(第44図7・第46図19)。

SK85(第27図) F11区に位置する。SK107と切り合う。長軸120cm程度、短軸92cm、確認面からの深さは35cmを測る。平面は推定楕円形を、断面形はU字状を呈す。上層は炭化物・焼土を多く含み、ブロック土を主体とするため、埋め戻されたと考える。遺物には被熱した磁器片があるが、図示は出来なかった。

SK87(第27図) F10区に位置する。SK80・81に切られる。おそらくSP567・568を切る。長軸350cm以上、短軸285cm、確認面からの深さは33cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形は浅皿状を呈す。底面近くから、石臼、礫、棒材が列状に廃棄されており、それらを覆うように黄褐色土で埋め戻され、上層には焼土、炭化物を含む層が堆積していた。遺物には土師質皿、中世の染付(99)の他、石臼(第45図2・10)、搗き臼と考えられる石製品(第46図15)がある。時期は不明である。

SK88(第27図) L9区に位置する。長軸121cm、短軸98cm、確認面からの深さは90cmを測る。平面形は楕円形を、断面形は箱状を呈す。覆土はブロック土を主体とし、人為的に埋め戻された様相を呈す。遺物には、中世と考えられる越前焼があるが、図示は出来なかった。

SK92(第28図) E11区に位置する。長軸183cm、短軸150cm、確認面からの深さは25cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形は浅皿状を呈す。遺物には唐津焼(101)、瀬戸・美濃焼、越前焼、土師質皿があり、17世紀前半を中心とする。

SK93(第28図) E11区に位置する。長軸178cm、短軸165cm、確認面からの深さは30cmを測る。平面形は円形を、断面形は浅皿状を呈す。遺物には伊万里焼、唐津焼、瀬戸・美濃焼、越前焼、土師質皿があり、18世紀から19世紀前半を中心とするが、図示は出来なかった。

SK95(第29図) G11区に位置する。SP476と切り合う。長軸200cm、短軸163cm、確認面からの深さは58cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形の上層は浅皿状を、下層は逆台形状を呈す。遺物には伊万里焼、唐津焼、瀬戸・美濃焼、越前焼、土師質皿など、18世紀後半から19世紀前半を中心とするものがあるが、図示は出来なかった。

SK96(第29図) F13区に位置する。長軸250cm、短軸169cm、確認面からの深さは26cmを測る。平面形は不整楕円形を、断面形は浅皿状を呈す。20cm大の石を含む。遺物には伊万里焼、京・信楽焼、越前焼、土師質皿などがあり、18世紀代から19世紀半ばまでのものを中心とする(103～107)。

SK104(第29図) F12区に位置する。SP493・495と切り合う。長軸177cm、短軸105cm、確認面からの深さは40cmを測る。平面形は不整三角形を、断面形は半円形を呈す。覆土には20cm大の石や、越前焼の甕・鉢が含まれ、廃棄土坑の可能性はある。遺物には幕末前後と考えられる越前焼がある(111~116)。

SK105(第29図) G16区に位置する。SE05と接する。長軸278cm、短軸258cm、確認面からの深さは40cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形は箱状を呈す。底面には10~25cm大の石が投棄されている。遺物には伊万里焼、唐津焼、越前焼、土師質皿など、17世紀前半から18世紀中葉のものがある。

SK106(第29図) G10区に位置する。長軸115cm、短軸104cm、確認面からの深さは60cmを測る。平面形は不整方形を、断面形はU字状を呈す。覆土下層には植物遺体、木質を含む。遺物には、瀬戸・美濃焼(120)、越前焼(117~119)、土師質皿(121)、行火(第44図13)、曲物(第48図17)など、15世紀代から18世紀中葉のものが混在するが、15世紀代の遺物が主体をなす。

SK107(第27図) F11区に位置する。SK85に切られ、SP582とは不明である。長軸200cm、短軸190cm以上、確認面からの深さは73cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形はU字状を呈す。上層には炭化物・焼土を含む層があり、埋め戻されている。遺物には越前焼の播鉢(122・123)、瀬戸・美濃焼の皿(124)など16世紀末葉から17世紀前半のものと、18世紀代の伊万里焼が混在し、他に下駄(第48図24)がある。

3 溝

SD02(第30図) F2・3区に位置する。東西は攪乱で切られるが、西側はSD03と接すると考える。SD06に切られ、SD04との前後関係は不明である。幅83~103cm、深さは16~23cmを測り、断面形は不整なU字状を呈す。覆土上層には炭化物、焼土を含み、火災等の後、埋め戻された可能性がある。遺物には土師質皿、肥前陶磁器、越前焼など、18世紀中葉から19世紀中葉のものがある(125~139)。

SD03(第30図) F3~G2・3区にかけて位置する。SD07・08との前後関係は不明である。幅53~91cm、深さは10~18cmを測り、断面形はU字状を呈す。区画溝の可能性はある。土師質皿が多く出土している。その他の遺物には、肥前陶磁器、越前焼、京焼、瀬戸・美濃焼など18世紀中葉から19世紀中葉のものがある(140~150)。また、壁土と考えられるものもある(151)。

SD05(第30図) F6区に位置する。幅70~116cm、深さ9~15cmを測り、断面形は浅皿状を呈す。幅は一定しないが直線的に延びる。遺物には、土師質皿片の他、中世の瀬戸・美濃焼の碗(154)がある。

SD07(第30図) G3区に位置する。幅は北側で43cmを測り、深さは8~16cmを測り、断面形は逆台形状を呈す。直線的に延びて、南にいくにつれて細くなる。建物と並行し、一連のものとする。遺物は出土していない。

SD08(第30図) G3区に位置する。幅83cm、深さは8~12cmを測り、断面形は浅皿状を呈す。直線的に延び、覆土上層には炭化物、焼土を含む。遺物には土師質皿、伊万里焼、越前焼など18世紀後半から19世紀半ばのものがある(157~159)。他に土製品(160)、石製品(第44図2・10・第46図18)がある。

SD10(第30図) G3区に位置する。南側は削平される。幅59~118cm、深さは4~12cmを測り、断面形は浅皿状を呈す。幅は一定しないが直線的に延びる。遺物には土師質皿(162)、伊万里焼、越前焼の他、産地不明のもの(161)など、18世紀後半から19世紀中葉のものがある。

SD15(第30図) D6区に位置する。整地層から掘り込まれたと考えられる。最終的に地山面までの掘り下げを行った。北側は、近現代の掘削により削られている。溝構築時の幅は79cm、深さ33cmを測り、断面形は逆台形状を呈す。遺物は覆土上層から多く出土し、土師質皿、伊万里焼、唐津焼、瀬戸・美濃焼、越前焼など17世紀代から19世紀半ばに亘るものがある(163~187)。

SD16(第30図) D6～E5区に位置する。整地層から掘り込まれたと考えられる。最終的に地山面までの掘り下げを行った。溝構築時の幅は93cm、深さ34cmを測り、断面形は逆台形状を呈す。残存幅は一定せず、北東～南西方向に延びる。この溝を境に南北に遺構が展開することから、区画溝の可能性がある。遺物には瀬戸・美濃焼、越前焼、土師質皿など、17世紀代から18世紀後葉に亘るものがある(221～227)。

SD22(第30図) M5・6区に位置する。幅41～66cm、深さは9～14cmを測り、断面は逆台形状を呈す。直線的に延び、SD23と並行し、北側で接する。SD22・23は西側の建物に関連し、SD32・33に対応すると考えられる。遺物は出土していない。

SD23(第30図) M5・6区に位置する。幅25～72cm、深さは6～17cmを測り、断面はU字状を呈す。幅は一定しないが直線的に延びる。柱穴に切られており、時期差を伴うものの西側の建物と関連すると考えられる。遺物には伊万里焼、越前焼、土師質皿(229)など18世紀～19世紀初頭のものがあるが図示出来るものは少ない。

SD38(第30図) H12・13区に位置する。SD39と一部並行して東西に延びるが、東側で一条の溝となる。東西は次第に立ち上がり不明瞭となる。幅185cm、深さ15cmを測り、断面は逆台形状を呈す。覆土に大小の石を多く含む。遺物には伊万里焼、唐津焼、越前焼、土師質皿(233～235)の他、金属製品(第49図6)など18世紀後半から19世紀のものがある。

SD39(第30図) H12・13区に位置する。SD39は幅95cm、深さ20cmを測り、断面形は浅皿状を呈す。遺物には伊万里焼、唐津焼、越前焼、土師質皿などがあるが、中世に属す越前焼の破片が多く、近世の遺物と混在している。図示出来るものはなかった。

SD40(第30図) H13～I14区にかけて位置する。北東～南西方向に延びる自然流路と考えられ、東西は攪乱で切られている。幅254～338cm、深さ30～38cmを測る。覆土は細砂や粗砂を主体とし、北東方向に流れていたと考える。北側には径3～9cmの丸太材が散在しており、何らかの施設であった可能性がある。遺物には伊万里焼、唐津焼、瀬戸・美濃焼、越前焼、土師質皿など(188～218)や、渡来銭(第50図)、煙管の吸口(第49図5)があり、15世紀から18世紀後半に亘る遺物が混在している。

SD42(第30図) F13区に位置する。北北東～南南西に延びる。幅40～70cm、深さ9～17cmを測る。断面形は浅皿状を呈す。この溝の東側は西側より遺構が多く、区画溝の可能性がある。遺物には18世紀後半から19世紀前半の土師質皿(242～261)が集中して出土した他に、伊万里焼、越前焼がある。

SD43(第30図) F13区に位置する。近接して東西方向に走り、西側はSD42と直行するように位置し、東側は削平されたと考える。幅51～65cm、深さは18cmを測り、断面は逆台形状を呈す。SD46を切る。遺物には伊万里焼、越前焼、土師質皿(236～241)など18世紀代のものがある。

SD44(第30図) F13区に位置する。SD44は幅59～90cm、深さは18cmを測り、断面形はU字状を呈す。遺物には伊万里焼(264)、越前焼、土師質皿(262・263)など近世のものがある。

SD45(第30図) F10～F・G11区にかけて位置する。ほぼ南北方向に延び、北側で東に折れるが、攪乱と調査区端のため不明である。幅72～98cm、深さは27～30cmを測り、やや北側が低くなる。断面形は逆台形状を呈す。この溝より西側は東側より遺構が多く、区画溝の可能性がある。遺物には伊万里焼、越前焼(271)、土師質皿(265～270)などがあり、中世と近世の遺物が混在している。

SD46(第30図) F13区に位置する。SD46は幅130cm程度、深さは22cmを測り、断面形は浅皿状を呈す。遺物には土師質皿があるが、図示は出来なかった。

4 井戸

当遺跡は近年まで集落が営まれていたため、井戸の中には井戸側上部に近代以降と考える素材が使用されているものもあった。このような井戸の構築時期は不明であるが、近代以降まで使用されたと判断し、除外している。

SE01(第31図) G8区に位置する。平面形は直径74cmを測る円形を呈する。確認面からの深さは96cmを測る。筒状の掘方から、素掘りの井戸と判断した。覆土は大きく砂質土と粘質土に分けられ、人為的に埋め戻した様子は窺えない。遺物には加工板材(第48図21~23)がある。時期は不明である。

SE02(第31図) H3・4区に位置する。長径145cm、短径113cmの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは130cmを測る。土層観察から、本来は内部に井戸側として何らかの構築物が存在したと考える。砂質土層を掘り抜いているためか、調査期間中に崩壊したため、平面図は推定を含む。遺物には越前焼甕、土師質皿(272)など16世紀後半を中心とするものがあるが、図示出来るものは少ない。

SE03(第31図) G11区に位置する石積み井戸である。井戸上面東側の石は失われているが、石積みの内径が55cmを測る円形を呈す。確認面からの深さは70cmを測り、底面には3~5cmの小礫が敷かれており、湧水がみられた。石積みは、10~25cm大の石を使用して5~6段に積上げており、下部には長辺が25cm程度の長方形の石を長軸方向に立てて設置している箇所がある。掘方は径115cmを測る不整円形を呈す。掘方の埋土には小円礫を多く含む。遺物には石積み内から磁器片、越前焼など17世紀から18世紀のものがあるが、図示出来るものはない。

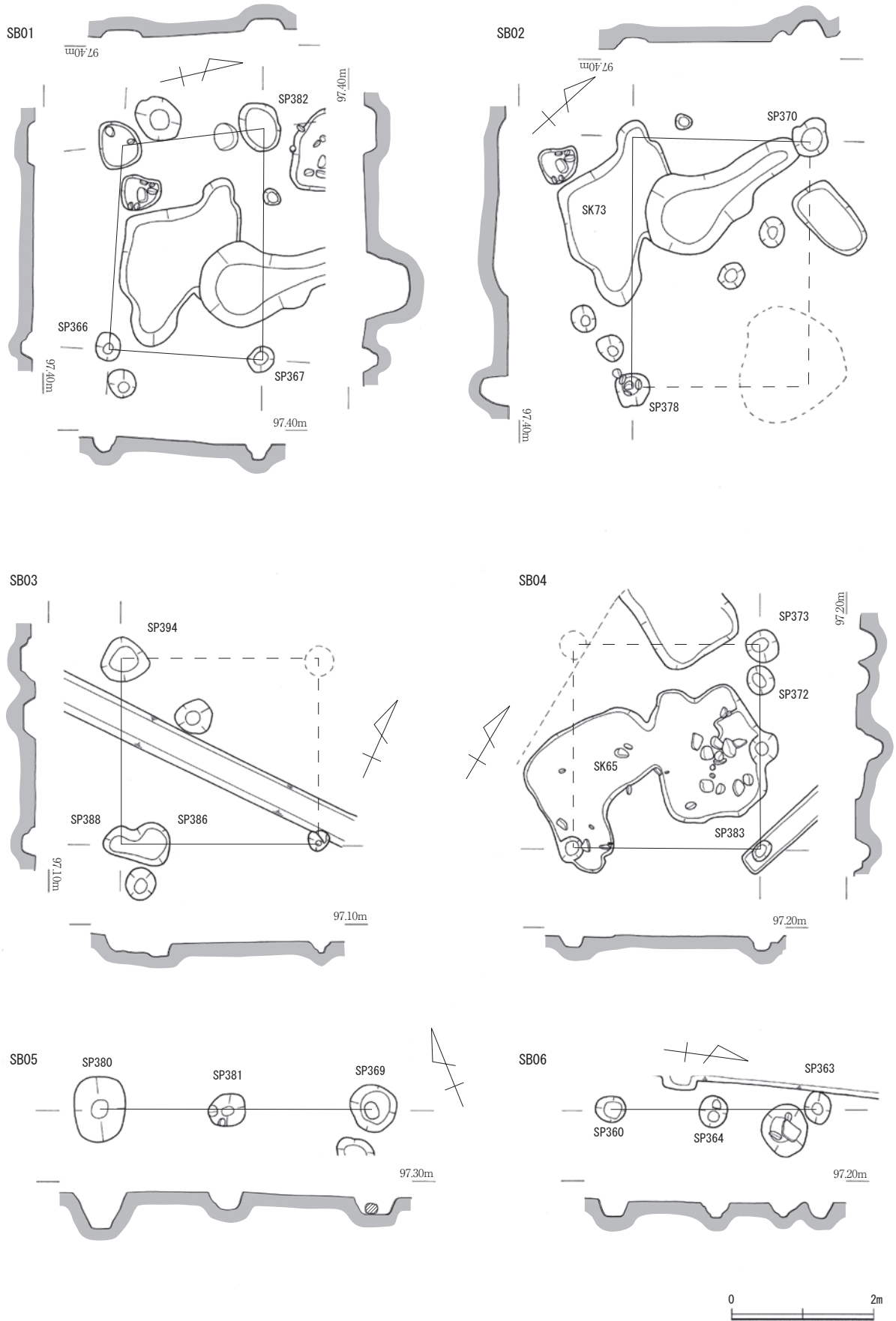
SE04(第31図) F12区に位置する石積み井戸である。石積みの内径が長径80cm、短径70cmを測る楕円形を呈す。確認面からの深さは165cmを測り、底面は粘質土層に達し、湧水がみられた。石積みは25~35cm大の石を使用して13~14段に積上げており、やや雑な印象を受ける。石積みの下には基礎構造として、径12cmの丸太材が井桁状に組まれる。掘方は平面形が長径280cm、短径190cmの不整楕円形を呈す。石積み内の遺物には越前焼(277・282・283)、土師質皿(279・280)、石臼(第46図7)、庖丁(第49図1)があり、掘方の遺物には瀬戸・美濃焼の碗(273)、越前焼(274~276・281)、土師質皿(278)がある。出土遺物から、SE04は17世紀前半以降に構築され、19世紀中葉まで使用されたと考える。

SE05(第31図) G16区に位置する石積みと桶を組み合わせた井戸である。井戸上面南側の石は失われているが、石積みの内径は50cmを測る円形を呈す。確認面から下部の桶底面までの深さは118cmを測る。上部の石積み部分は25cm大の石を使用し4~5段に積上げる。下部の桶部分は幅10cm、長さ55cm程度の板材を径45cmの円形に組んだもので、竹製のタガで結われている。底板は5cm程度上げ底となる。石積み部分と桶部分の間に、幅8cmの樋が設けられており、東側から導水していたと考えられ、SE05は桶部に水を溜める汲上井戸と言える。石積み内の遺物には伊万里焼(286)、京・信楽焼(287)があり、掘方の遺物には瀬戸・美濃焼(284)と越前焼(285)がある。出土遺物から、SE05は18世紀初頭以降に構築され、19世紀前半まで使用されたと考える。

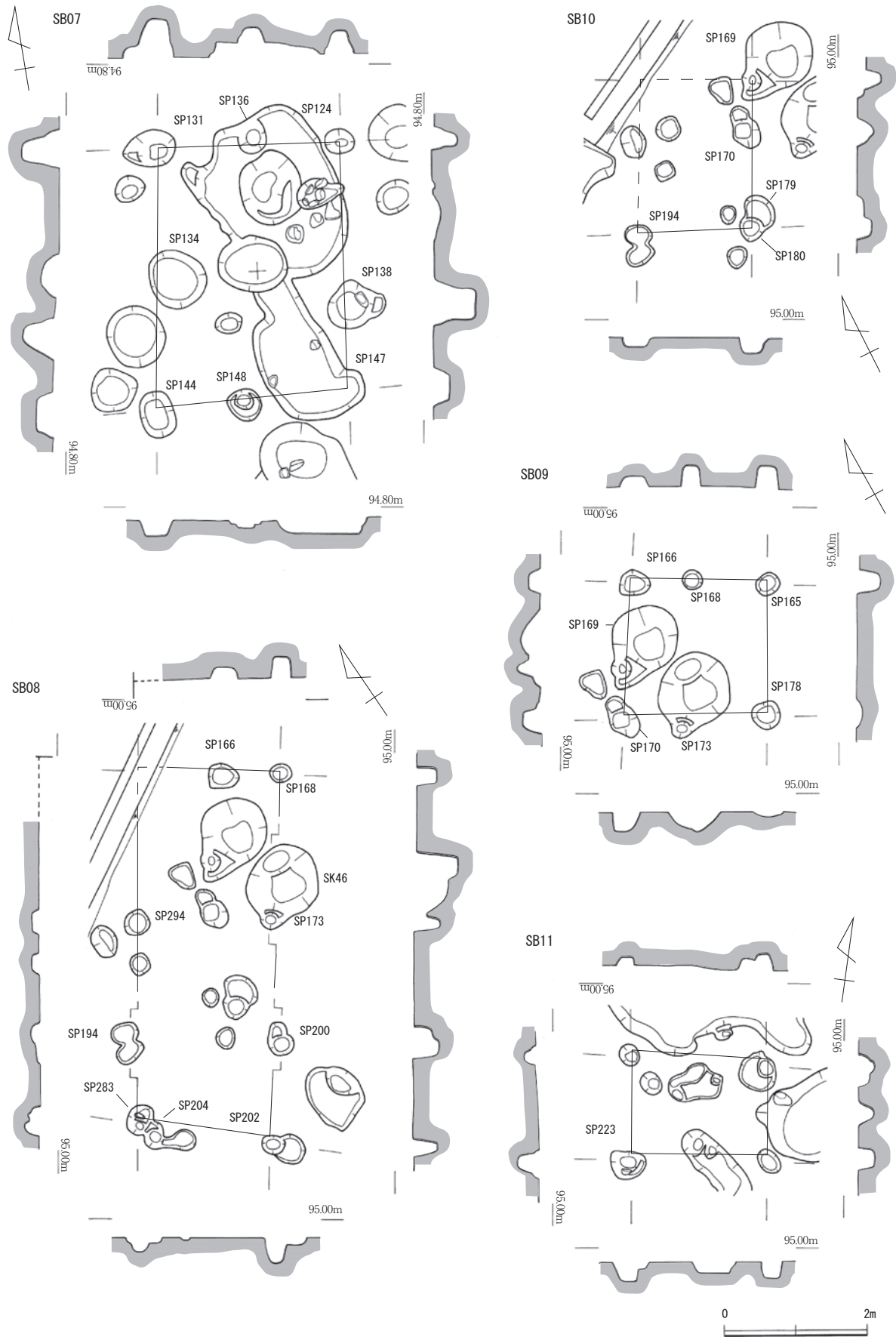
5 不明遺構

SX01(第14図) H13区に位置する。SK78・SD40に切られる。不整形を呈する段状の落ち込みである。遺物には越前焼(292~294)、手づくねの土師質皿(288~291)など13世紀代のものがある。

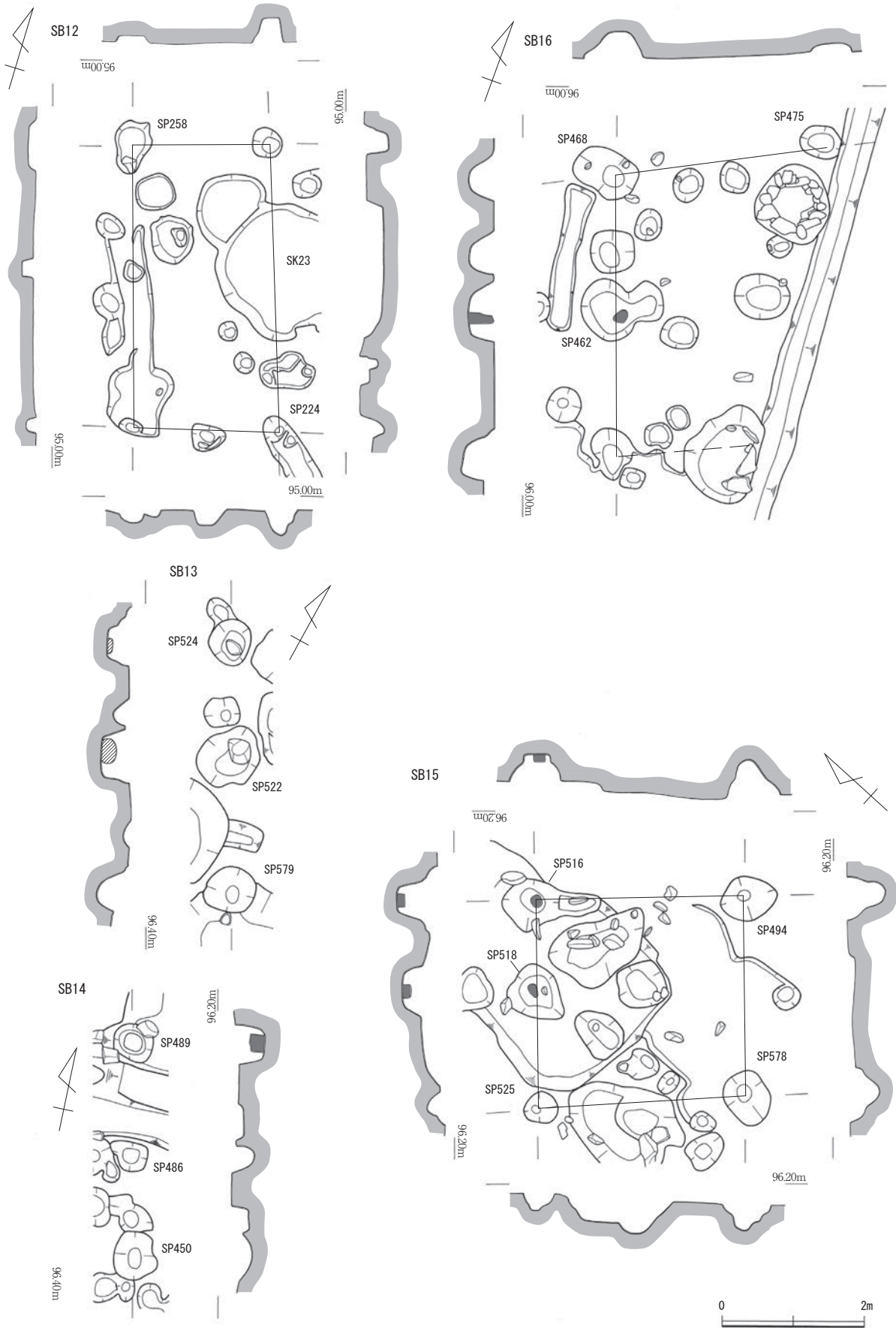
第2節 遺構



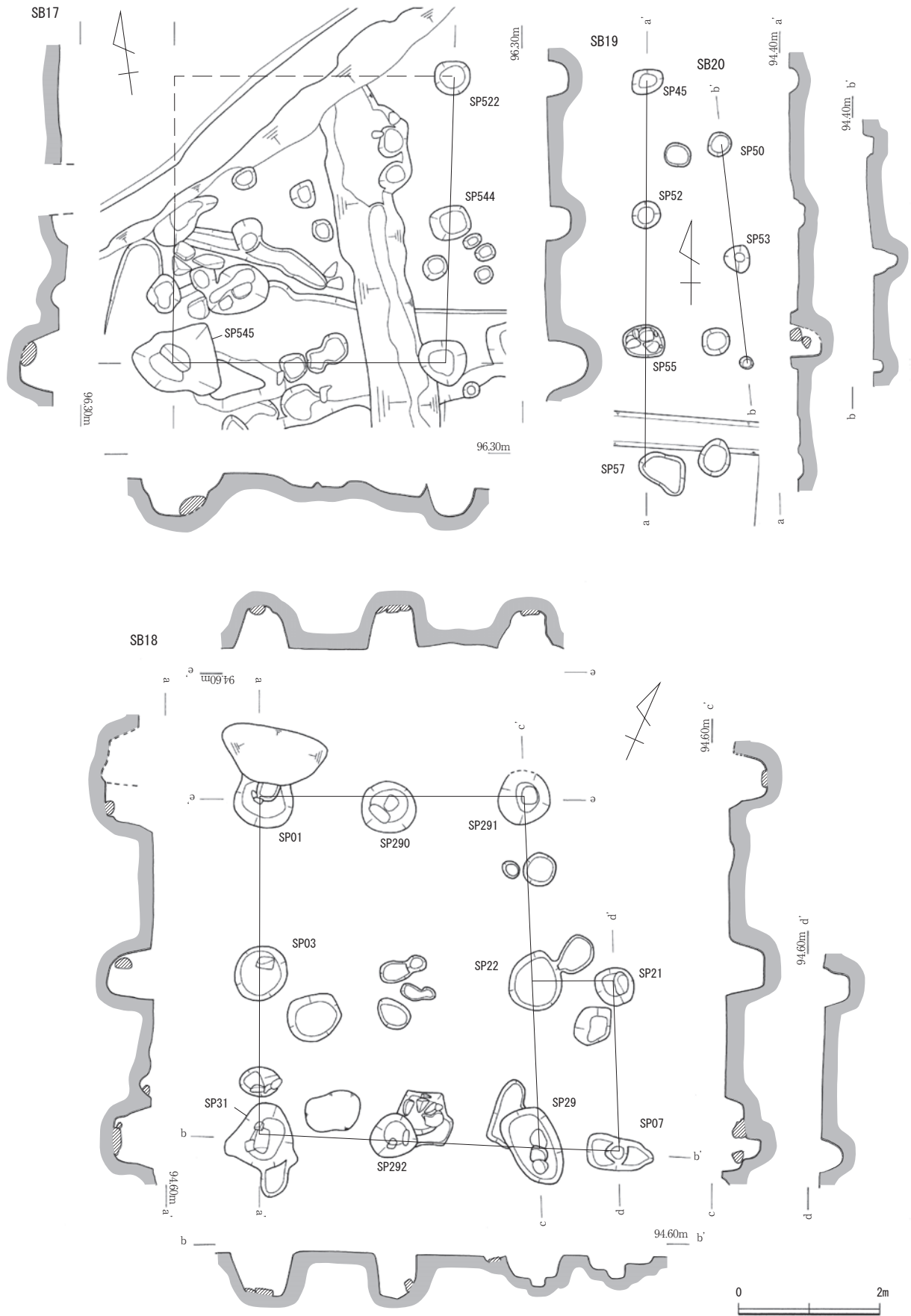
第17図 建物 (SB01~06) 実測図 (縮尺1/80)



第18図 建物 (SB07~11) 実測図 (縮尺1/80)

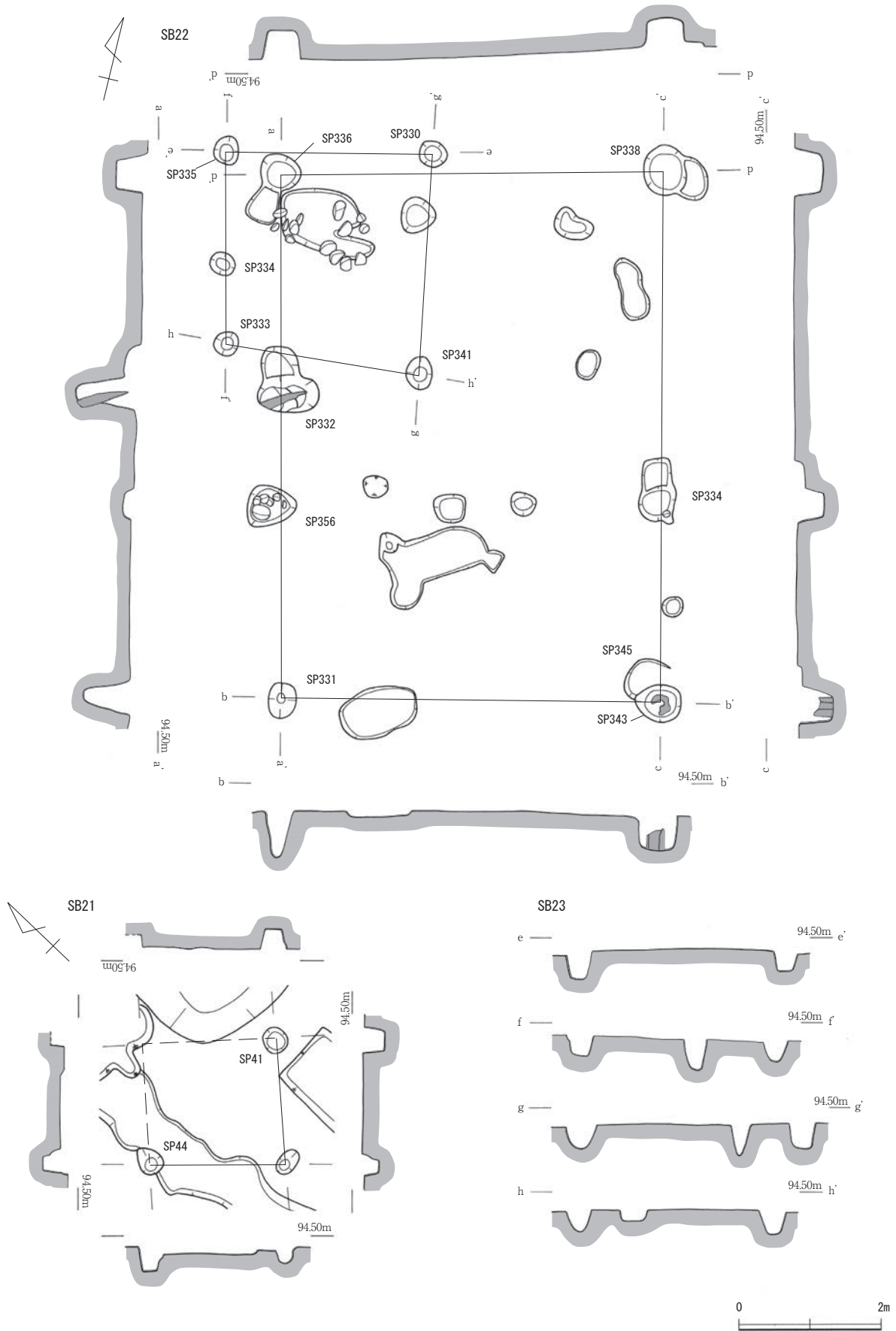


第19図 建物 (SB12~16) 実測図 (縮尺1/80)



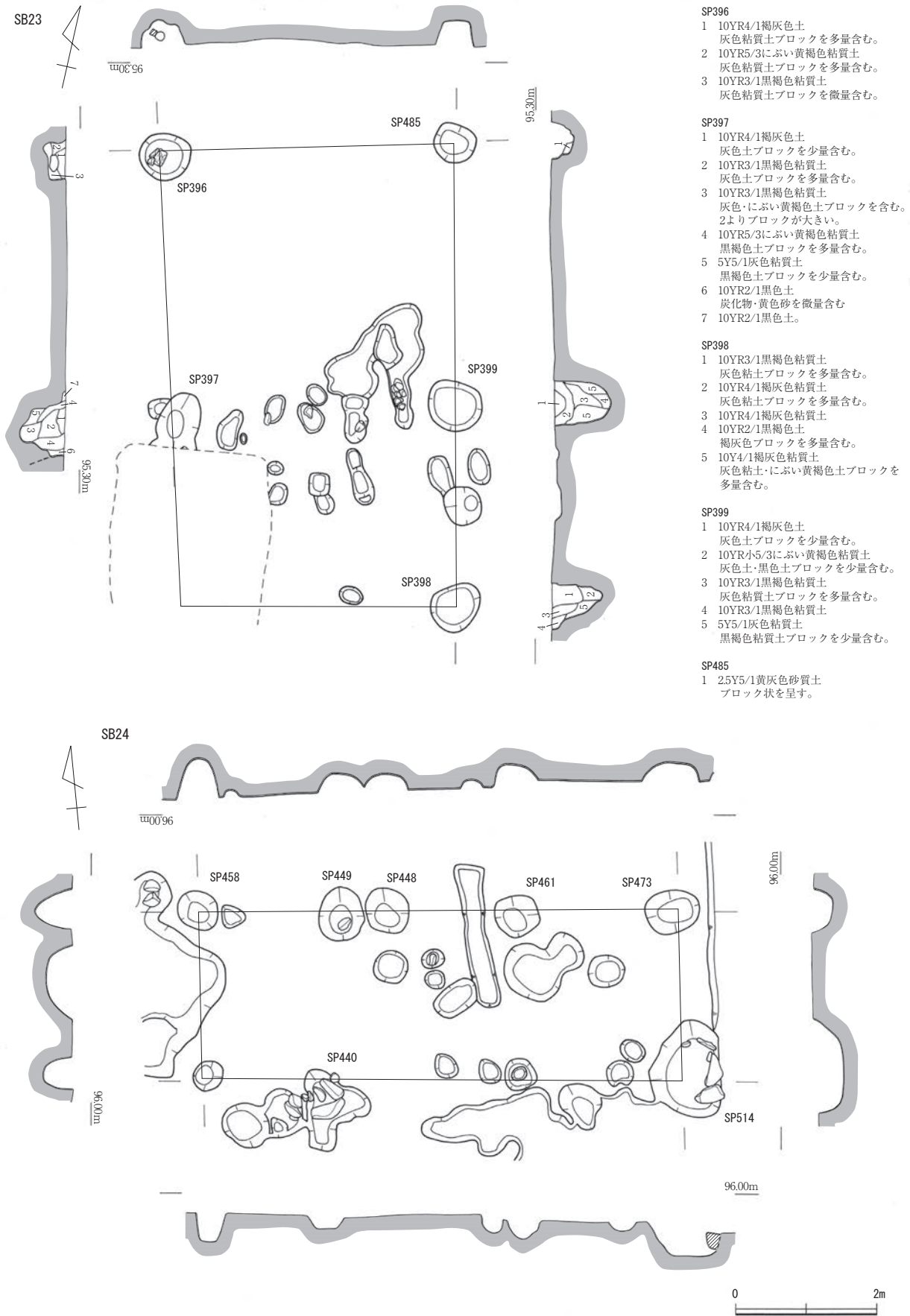
第20図 建物 (SB17~20) 実測図 (縮尺1/80)

第2節 遺構



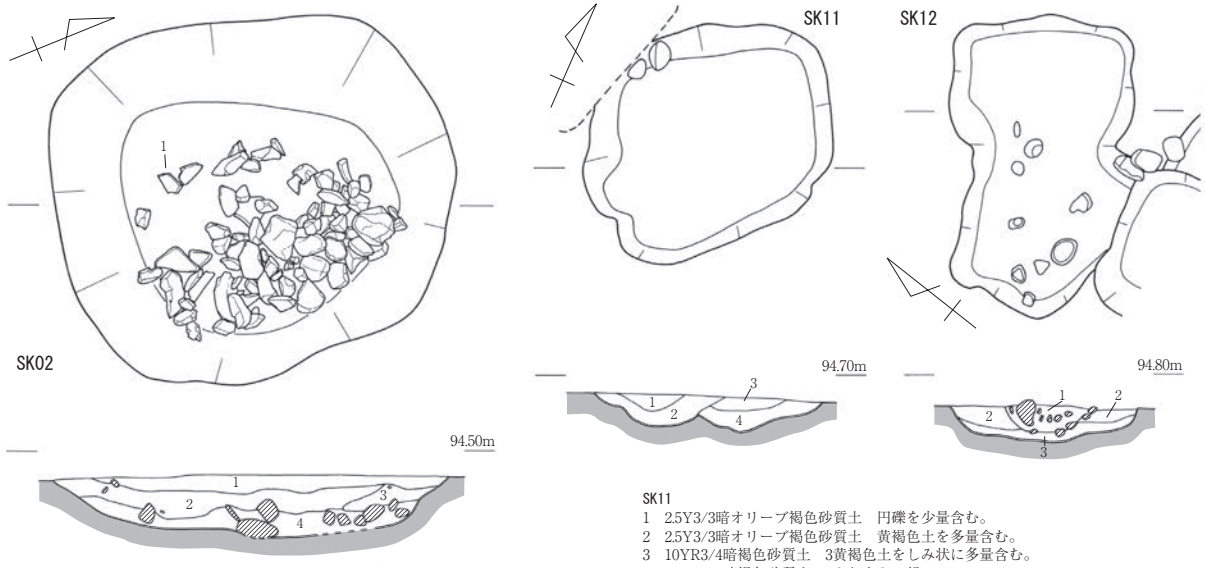
第21図 建物 (SB21~23) 実測図 (縮尺1/80)

第3章 小野遺跡の調査



第22図 建物（SB23・24）実測図（縮尺1/80）

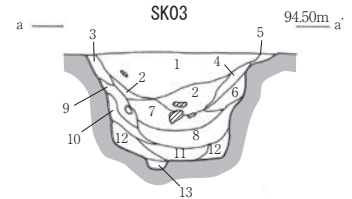
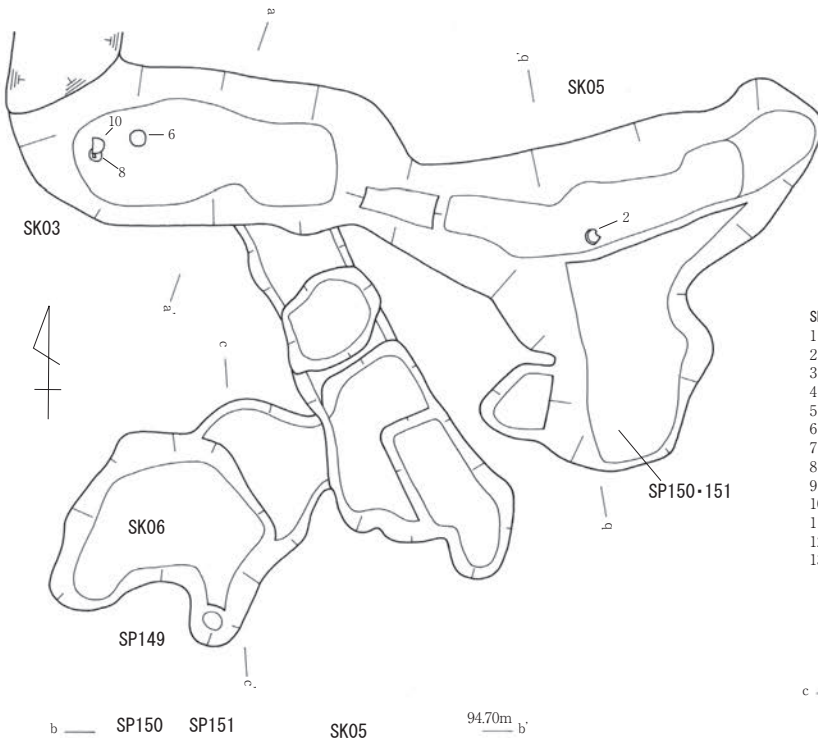
第2節 遺構



- SK02**
- 1 2.5Y4/2暗灰黄色土 しまり強 黄色砂少量含む。
 - 2 2.5Y4/2暗灰黄色土 黄褐色砂をブロック状に多量含む。
 - 3 2.5Y4/3オリブ褐 砂粒は細かい。黄褐色砂を少量含む。
 - 4 2.5Y4/2暗灰黄色土 色調明るい。黄褐色砂を少量、礫を多く含む。

- SK11**
- 1 2.5Y3/3暗オリブ褐色砂質土 円礫を少量含む。
 - 2 2.5Y3/3暗オリブ褐色砂質土 黄褐色土を多量含む。
 - 3 10YR3/4暗褐色砂質土 3黄褐色土をしみ状に多量含む。
 - 4 10YR3/4暗褐色砂質土 3よりもキメ粗い。

- SK12**
- 1 2.5Y3/2黒褐色砂質土 砂粒は細かい。礫を多く含む。
 - 2 10YR3/4暗褐色砂質土 黄褐色砂を多く含む。
 - 3 10YR3/4暗褐色砂質土 砂粒は細かい。黄褐色砂を層状に少量含む。



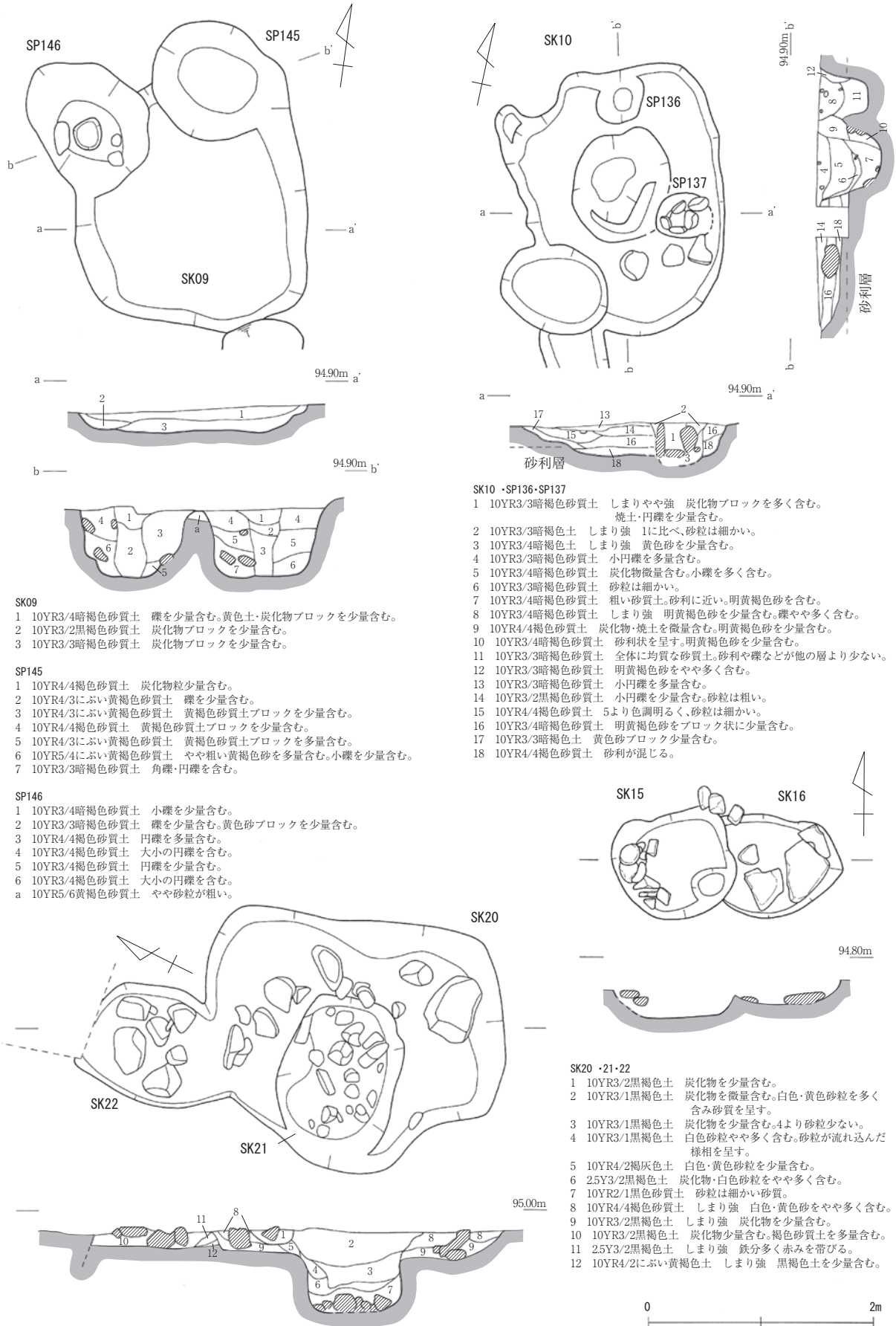
- SK03**
- 1 10YR3/2黒褐色土 炭化物、焼土を多く含む。
 - 2 10YR3/2黒褐色土 炭化物、焼土を少量含む。
 - 3 10YR3/2黒褐色砂質土 黄褐色土ブロックを多く含む。
 - 4 10YR3/2黒褐色砂質土 炭化物を少量含む。
 - 5 10YR4/2灰黄褐色土 黄褐色砂ブロックを多く含む。
 - 6 10YR4/2灰黄褐色土 炭化物少量含む。
 - 7 10YR3/2黒褐色土 炭化物ブロックを多く含む。
 - 8 10YR3/2黒褐色土 粗い黄色砂を多く含む。
 - 9 10YR3/3暗褐色砂質土 炭化物微量含む。
 - 10 10YR3/3暗褐色砂質土 黄色砂を多く含む。
 - 11 2.5Y3/2黒褐色砂質土 炭化物微量含む。
 - 12 10YR3/4暗褐色砂質土 黄色砂、炭化物を少量含む。
 - 13 10YR3/4暗褐色砂質土 砂粒は粗い。

- SP150-151**
- 1 10YR3/2黒褐色土 炭化物、焼土粒を微量含む。
 - 2 10YR3/2黒褐色土 1より炭化物多く、粘性強い。
 - 3 10YR3/2黒褐色土 炭化物、焼土を微量含む。
 - 4 10YR3/2黒褐色土 3より粘性強い。
 - 5 7.5Y3/1オリブ黒色粘質土 炭化物を含む。
 - 6 2.5Y5/3黄褐色砂質土 黒褐色土を少量含む。
 - 7 10YR4/1褐灰色砂質粘土 黄褐色砂を多量含む。
 - 8 10YR3/2黒褐色土 やや砂質を呈す。
 - 9 10YR3/2黒褐色土 粘性強い。
- SK05**
- 1 2.5Y3/1黒褐色土 色調明るい。
 - 2 10YR3/2黒褐色砂質土 黄褐色砂を含む。

- SK06-SP149**
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 炭化物少量含む。
 - 2 10YR3/2黒褐色砂質土 黄褐色砂、炭化物粒少量含む。
 - 3 10YR3/2黒褐色砂質土 黄褐色砂を多量含む。
 - 4 10YR3/2黒褐色砂質土 黄褐色土を多量含む。
 - 5 10YR3/2黒褐色土 黄褐色土ブロックを少量含む。
 - 6 2.5Y3/2黒褐色土 黄褐色土ブロックを少量含む。
 - 7 2.5Y3/2黒褐色土 6より黄褐色砂質土が少ない。
 - 8 2.5Y3/2黒褐色土 黄褐色土ブロックを含む。

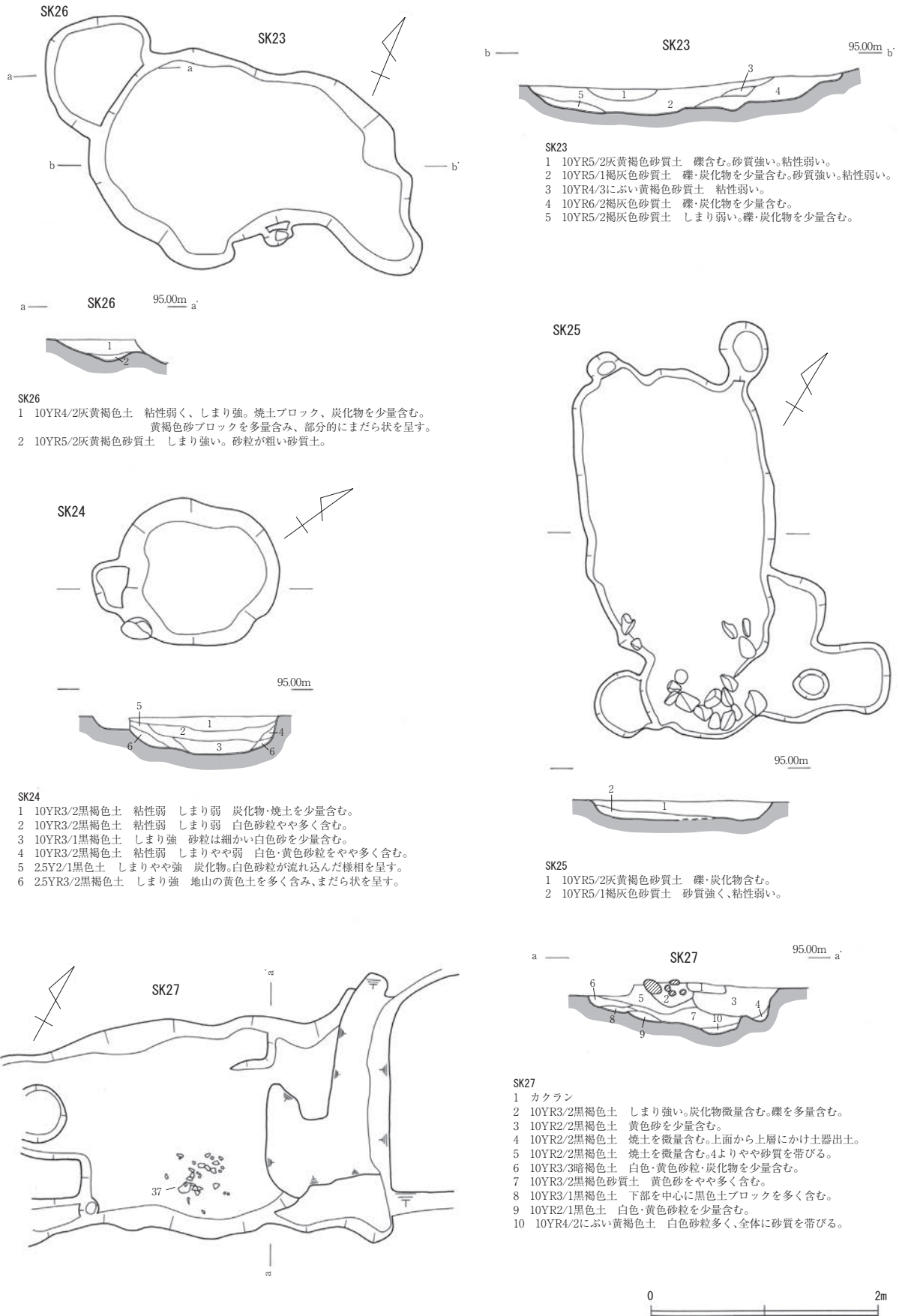


第23図 土坑実測図1 (縮尺1/50)



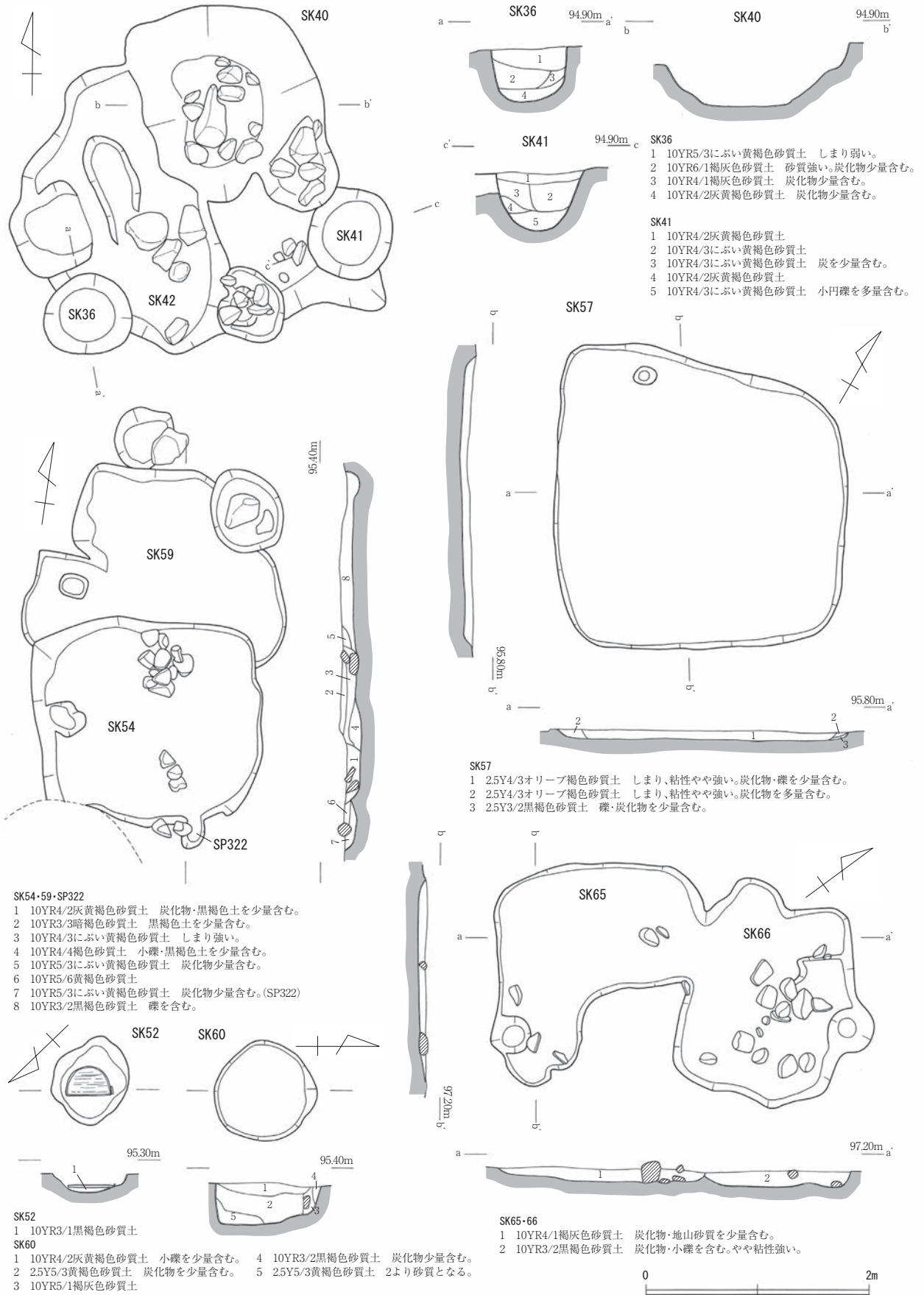
第24図 土坑実測図2 (縮尺1/50)

第2節 遺構



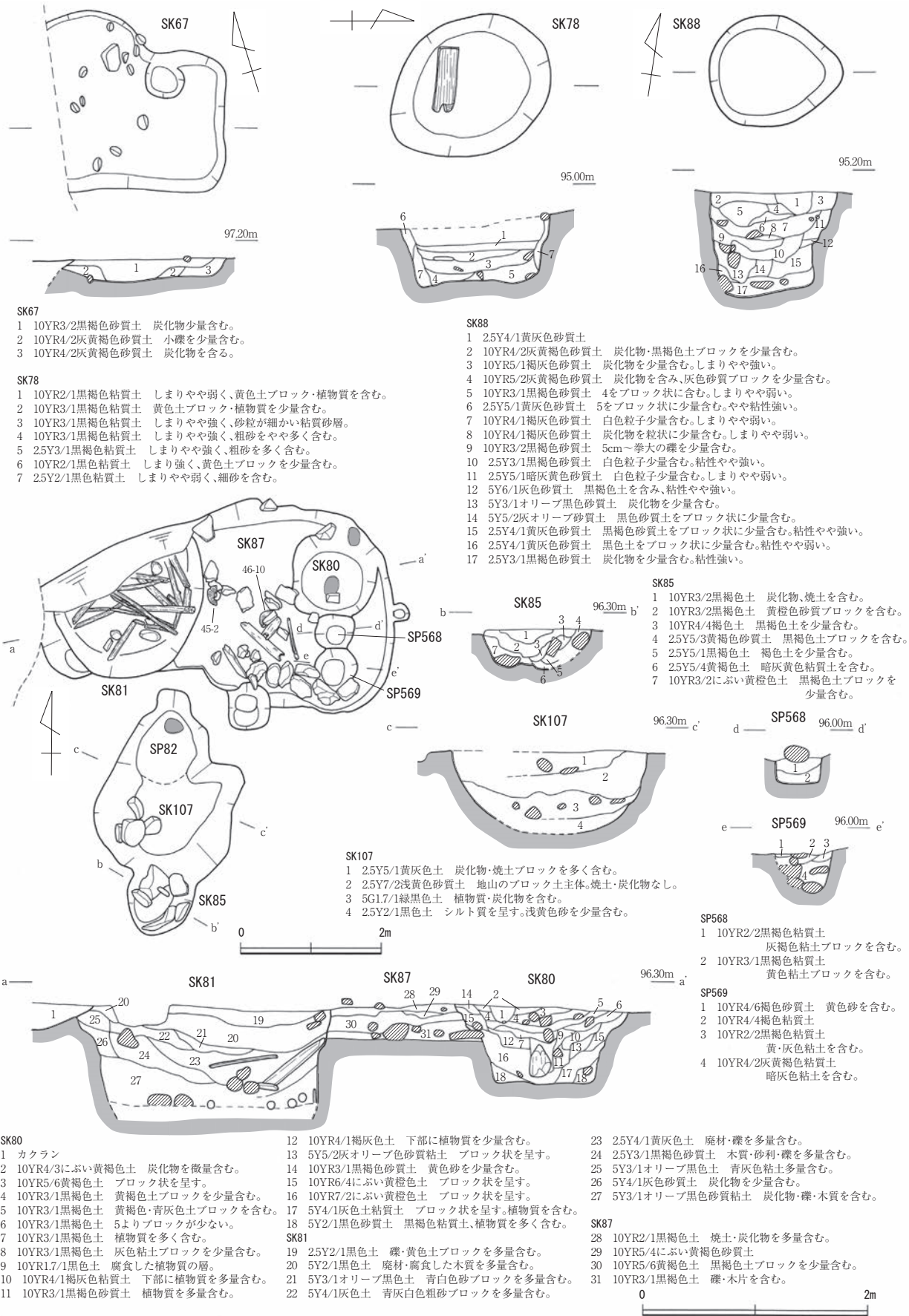
第25図 土坑実測図3 (縮尺1/50)

第3章 小野遺跡の調査



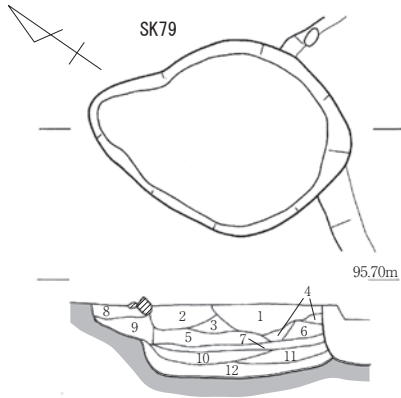
第26図 土坑実測図4 (縮尺1/50)

第2節 遺構



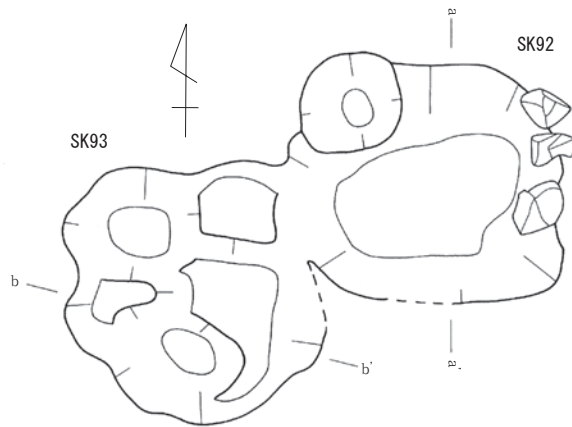
第27図 土坑実測図5 (縮尺1/50・1/80)

第3章 小野遺跡の調査



SK79

- 1 10YR4/1褐灰色砂質土 小礫を少量含む。
- 2 10YR3/1黒褐色砂質土 小礫を少量含む。
- 3 2.5Y4/1黄灰色砂質土
- 4 5Y4/1灰色砂質土 小礫を含む。
- 5 5Y3/1オリーブ黒色砂質土 黄灰色砂質土を少量含む。
- 6 2.5Y5/1黄灰色砂質土 小礫を含む。
- 7 2.5Y5/3黄褐色砂質土 小礫を含む。
- 8 2.5Y3/1黒褐色砂質土 灰色砂質土をブロック状に少量含む。
- 9 10YR2/1黒色砂質土 木質を多量に含む。
- 10 2.5Y3/2黒褐色砂質土
- 11 2.5Y3/1黒褐色砂質土 炭化物を微量含む。
- 12 10YR2/1黒色砂質土 植物質を含む。

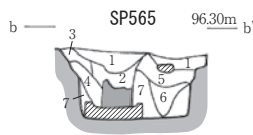
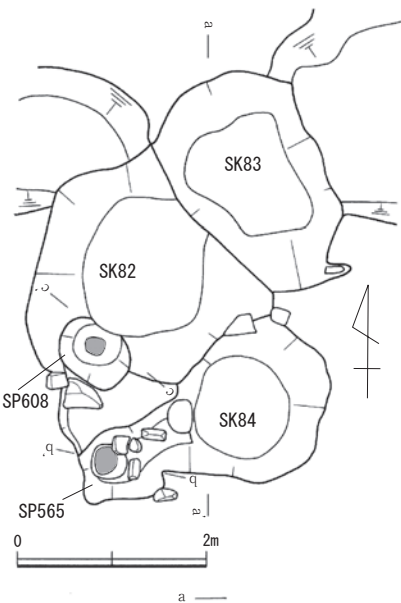


SK93

- 1 10YR4/2灰黄褐色砂質土 小礫を少量含む。
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土 粘性やや強い。
- 3 2.5Y3/2黒褐色砂質土 小礫を少量含む。
- 4 2.5Y5/1黄灰色砂質土 小礫を多量含む。しまり強い。
- 5 2.5Y6/1黄灰色砂質土 しまりやや弱い。
- 6 10YR6/6明黄褐色砂質土 白色粒子を少量含む。
- 7 10YR6/1褐灰色砂質土
- 8 10YR6/1褐灰色砂質土 粗砂を含む。
- 9 10YR4/2灰黄褐色砂質土 小礫を少量含む。
- 10 2.5Y6/2灰黄色砂質土 しまり弱い。地山の流れ込み。
- 11 2.5Y5/2暗灰黄色砂粘質土 炭化物ブロックを少量含む。

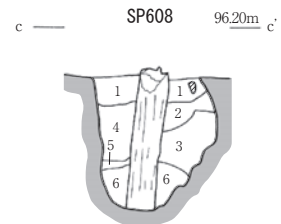
SK92

- 1 カクラン
- 2 10YR4/1褐灰色砂質土 小礫を含む。
- 3 2.5Y3/1黒褐色砂質土 2層の砂質土・炭化物を少量含む。
- 4 10YR4/2灰黄褐色砂質土
- 5 2.5Y3/1黒褐色砂質土 粗砂を含む。
- 6 2.5Y4/1黄灰色砂質土 炭化物を微量含む。
- 7 10YR5/1褐灰色砂質土 小礫を少量含む。
- 8 2.5Y5/1黄灰色砂質土



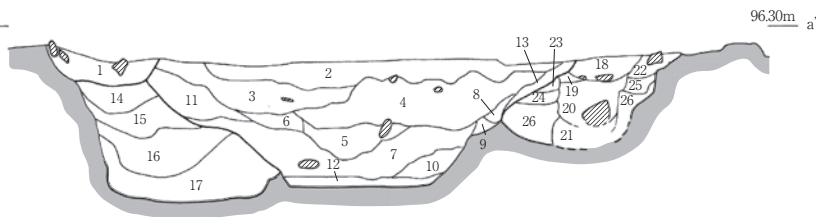
SP565

- 1 7.5YR7/8黄橙色砂質土 黄色土ブロックを含む。
- 2 10YR6/1褐灰色砂質土 黄色土ブロックを少量含む。
- 3 10YR7/2にぶい黄橙色砂質土 黄色土ブロックを多量含む。
- 4 10YR7/3にぶい黄橙色砂質土 炭化物を多量含む。
- 5 7.5YR7/2明黄褐色砂質土 黄色土ブロックを多量含む。炭化物・小礫を少量含む。
- 6 10YR7/3にぶい黄橙色砂質土 炭化物を多量含む。
- 7 10YR8/3浅黄褐色砂質土 しまり強い。炭化物を多量含む。



SP608

- 1 2.5Y5/1黄灰色砂質土 炭化物を少量含む。
- 2 5Y4/1灰色砂質土 炭化物を含む。
- 3 5Y4/1灰色砂質土 粘性やや強い。
- 4 2.5Y4/1黄灰色砂質土 粘性強い。1をブロック状に含む。
- 5 5Y5/2灰オリーブ砂質土
- 6 5Y4/1灰色砂質土 5をブロック状に含む。



SK82-83-84

1 カクラン

SK82

- 2 7.5Y5/1灰色土 ブロック状を呈す。埋め戻しの層。
- 3 7.5Y5/2灰オリーブ色土 炭化材・木質を多く含む。
- 4 7.5Y5/2灰オリーブ色土 青灰色砂質土・炭化物を多量含む。
- 5 7.5Y5/2灰オリーブ色砂質土 4に似るが、炭化物少ない。
- 6 7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土 灰色砂質ブロックを多く含む。
- 7 7.5Y5/2灰オリーブ色土 青灰色砂・粘土ブロックを多く含む。
- 8 7.5Y5/1灰色土 オリーブ色土・黒色土・炭化物などの大小ブロックを多量含む。
- 9 7.5Y3/1オリーブ黒色土 炭化した木質を多く含む。

- 10 10YR5/1灰色砂質土 砂粒は細かい。壁の崩落土。
- 11 5Y4/1灰色砂質土 砂粒は細かい。流れ込んだ様相。
- 12 5Y5/1灰色土 ブロック状を呈す。
- 13 7.5Y5/1灰色砂質土 砂粒はやや粗い。灰色粘質土ブロックを含む。

SK83

- 14 7.5Y5/1灰オリーブ色土 砂質ブロックを多く含む。
- 15 5Y4/2灰オリーブ色砂質土 ブロック状を呈す。
- 16 5Y2/1黒色粘質土 黒色砂質土ブロックを多量含む。
- 17 5Y4/1灰色土 黒色土ブロックを多量含む。木片・廃材を少量含む。

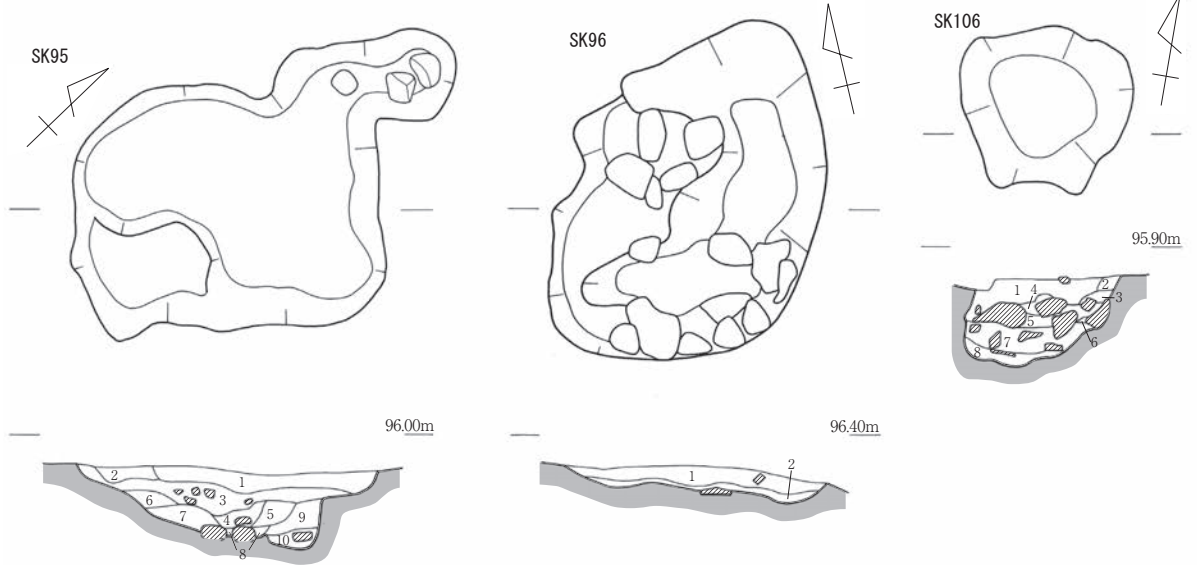
SK84

- 18 5Y4/1灰色土 小ブロック状を呈す。
- 19 5Y4/1灰色土 1よりもブロックが大きい。
- 20 5Y3/1オリーブ黒色土 灰・黄色砂質土ブロックを多量含む。
- 21 5Y3/2オリーブ黒色粘質土
- 22 5Y3/1オリーブ黒色土 黄色土ブロックを多量含む。
- 23 7.5Y5/1灰色粘質土
- 24 5Y5/1灰色土 青灰・黒褐色土ブロックを多量含む。
- 25 5Y5/1灰色粘質土 黄色土小ブロックを少量含む。
- 26 5Y2/1黒色土 黒・暗青灰色土ブロックを含む。



第28図 土坑実測図6 (縮尺1/50・1/80)

第2節 遺構



SK95

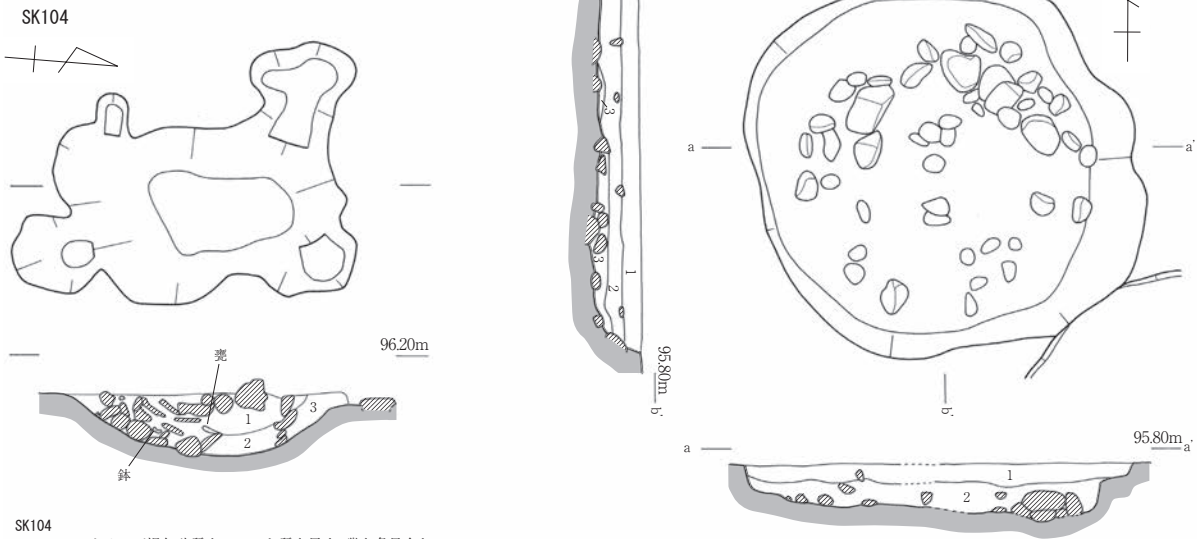
- 1 10YR6/2灰黄褐色砂質土 黄灰色砂質土を少量含む。
- 2 2.5Y4/1黄灰色砂質土 白色粒子を少量含む。
- 3 10YR4/2灰黄褐色砂質土 中の礫を少量、白色粒子を少量含む。
- 4 7.5YR4/2灰褐色砂質土 小礫を少量含む。
- 5 10YR6/4にぶい黄褐色砂質土 赤褐色粘土ブロックを含む。
- 6 10YR5/4にぶい黄褐色砂質土 5層の砂質土・炭化物を少量含む。
- 7 10YR5/2灰黄褐色砂質土 黒褐色砂質土・炭化物を少量含む。
- 8 2.5Y3/1黒褐色砂質土 炭化物を含む。
- 9 2.5Y4/1黄灰色砂質土 小円礫を含む。
- 10 2.5Y4/1黄灰色砂質土 小～中の礫を少量含む。

SK96

- 1 7.5YR6/2灰褐色砂質土 小礫を多く含む。粘性・しまり弱い。
- 2 7.5YR6/1褐灰色砂質土 黄色土をブロック状に少量含む。小～大の礫を含む。

SK106

- 1 2.5Y3/1黒褐色砂質土 炭化物・小礫を含む。
- 2 10YR4/1褐灰色砂質土 粘質土ブロック・炭化物を少量含む。
- 3 2.5Y4/1黄灰色砂質土 褐灰色砂質土をブロック状に少量含む。
- 4 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土 酸化鉄・白色粒子・礫を少量含む。
- 5 10YR4/1褐灰色砂質土 植物質・礫を含む。
- 6 2.5Y5/1黄灰色砂質土
- 7 10YR2/1黒色砂質土 礫の他、植物質・炭化物を少量含む。
- 8 10YR2/1黒色粘質土 植物質を多量含む。



SK104

- 1 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土 シルト質を呈す。礫を多量含む。
- 2 2.5Y3/3オリーブ褐色粘質土 鉄分沈着。しまり強い。
- 3 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土 1より砂質を呈す。礫を含む。

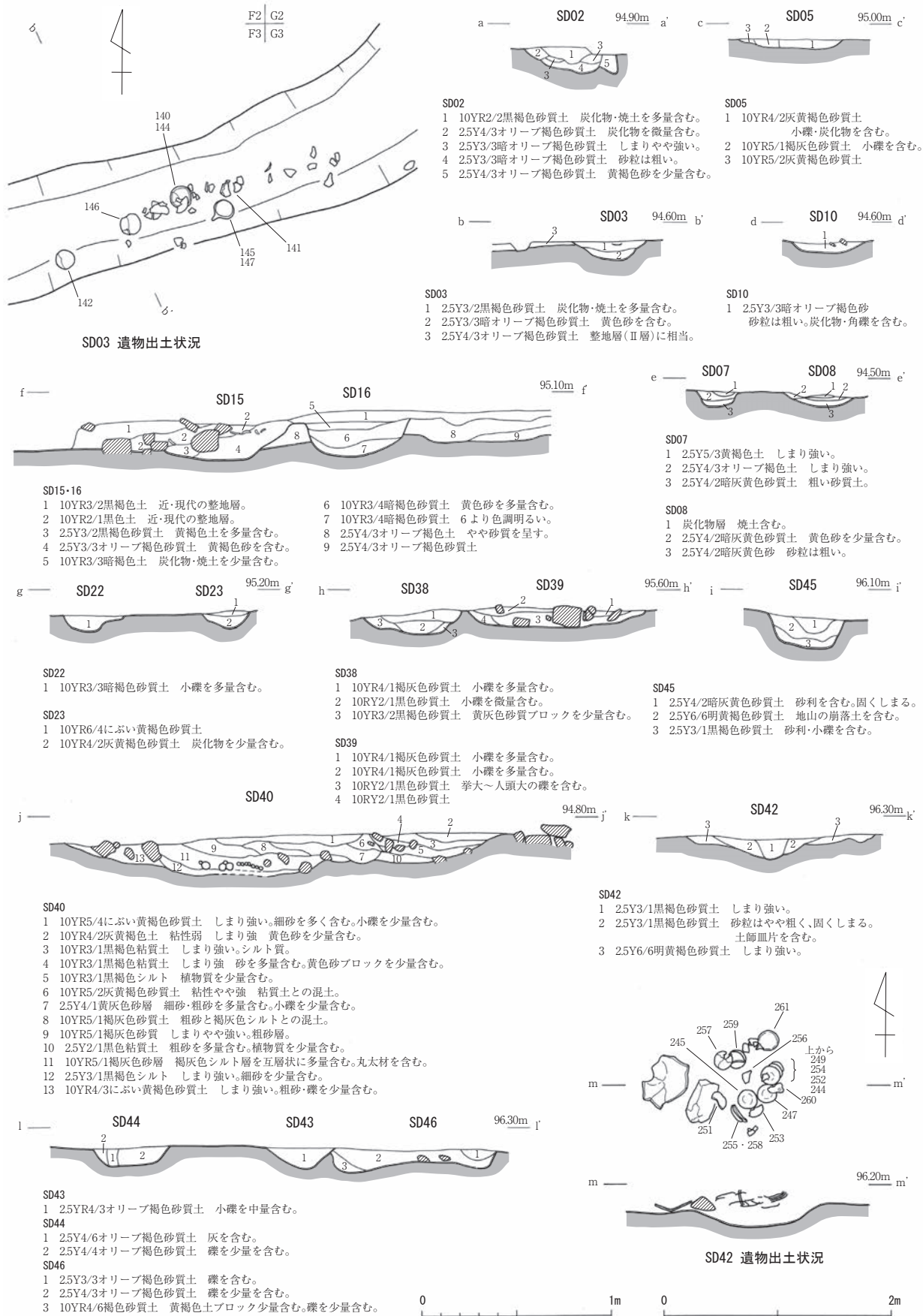
SK105

- 1 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 小～中の礫、白色粒子を含む。しまり強い。
- 2 2.5Y4/1黄灰色粘質土 小～中の礫を多量、白色粒子を含む。しまり強い。
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 しまり弱い。



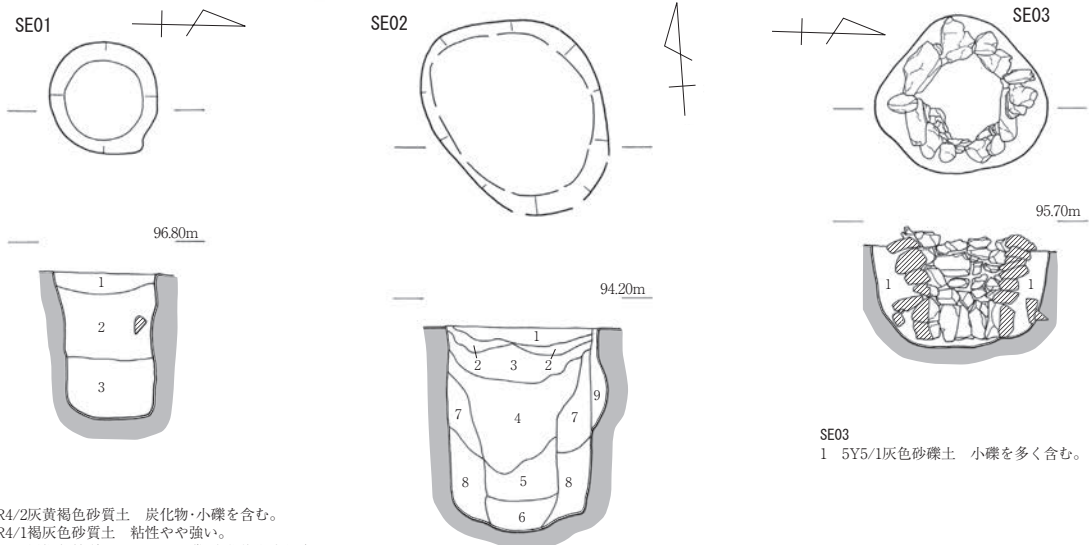
第29図 土坑実測図7 (縮尺1/50)

第3章 小野遺跡の調査



第30図 溝実測図 (縮尺1/30・1/50)

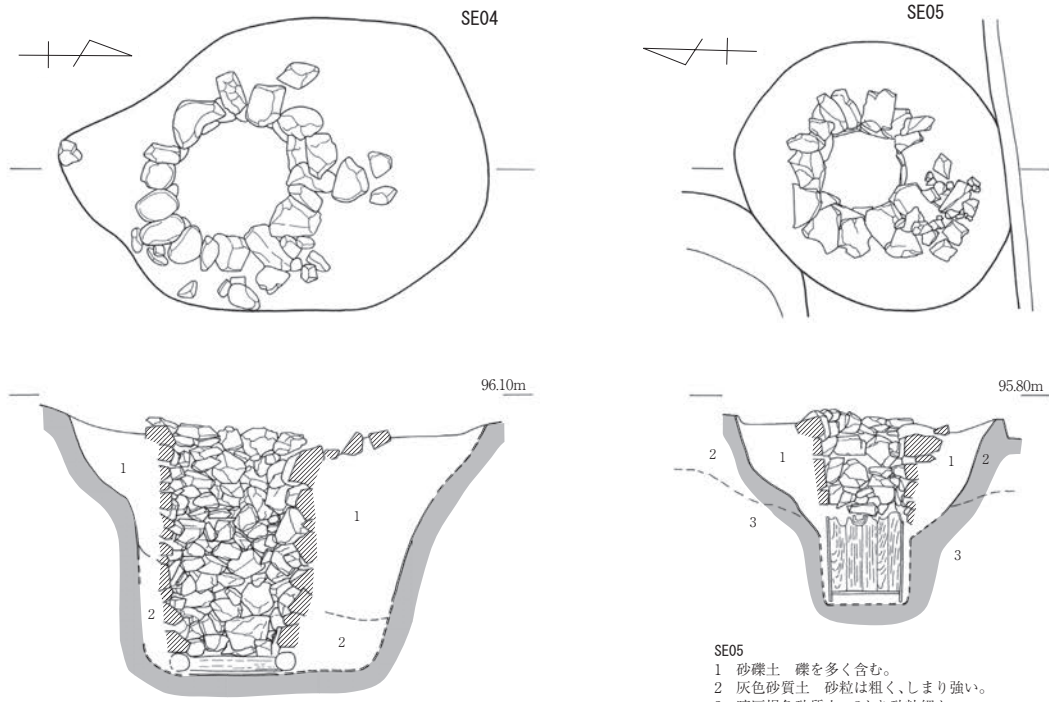
第2節 遺構



- SE01
- 1 10YR4/2灰黄褐色砂質土 炭化物・小礫を含む。
 - 2 10YR4/1褐灰色砂質土 粘性やや強い。
 - 3 10YR3/2黒褐色粘質土 2~3cmの礫、炭化物を少量含む。

- SE02
- 1 10YR4/2灰黄褐色土 やや砂質を帯びる。炭化物・白色砂粒を少量含む。しまり強い。
 - 2 10YR4/2灰黄褐色土 1より粘性強い。炭化物・白色砂粒が1より少ない。
 - 3 10YR4/2灰黄褐色粘質土 10の地山土。炭化物をブロック状に多量含む。下部には部分的に砂礫を含む。
 - 4 2.5Y3/1黒褐色粘質土 砂質を帯びる。1cm大の小礫・植物質を少量含む。
 - 5 2.5Y4/1黄灰色粘質土 砂質土と粘質土がブロック状に混在。砂利・植物質を少量含む。
 - 6 2.5Y4/2暗黄灰色砂質土 粗砂と4cm大の小礫を含む。
 - 7 2.5Y4/1黒褐色粘質土 やや砂質を帯びる。炭化物を微量含む。
 - 8 10YR4/1褐灰色粘質土 青灰色砂をブロック状に少量含む。
 - 9 10YR4/2灰黄褐色粘質土 炭化物ブロックを少量含む。別の遺構の可能性も。

- SE03
- 1 5Y5/1灰色砂礫土 小礫を多く含む。



- SE04
- 1 砂礫土 固くしまる。
 - 2 灰色粘質土

- SE05
- 1 砂礫土 礫を多く含む。
 - 2 灰色砂質土 砂粒は粗く、しまり強い。
 - 3 暗灰褐色砂質土 2より砂粒細かい。



第31図 井戸実測図 (縮尺1/50)

第3節 遺物

出土遺物には、陶磁器、土師質皿、石製品、漆器、木製品、銭貨、金属製品、須恵器、縄文土器がある。遺物の主体となる時期は中世以降である。以下、遺物については種別や産地ごとに記述を行うが、遺物図版では陶磁器、土師質土器は遺構出土遺物と遺構外出土遺物に分けて掲載している。それ以外の石製品から縄文土器については種別ごとに掲載している。

1 中近世の陶磁器・土師質皿(第32～43図、図版第7～10、表2)

1) 伊万里焼(肥前磁器)⁽¹⁾

伊万里焼は、日常雑器として生産された碗、皿類が中心である。碗では、11・12・133は外面に青磁釉、内面に透明釉が施される筒型を呈し、湯飲み碗として使用されたものである。134は外面に菊花を施す同型のものである。2・335は陶器の胎土であるが、磁器に特有の染付を施した陶胎染付である。皿は、口径が12～13cm前後の中皿が中心となる。これら碗や皿類にはコンニャク印判を用いた五弁花文など、18世紀を特徴づけるものが存在する。その他、瓶類(132・159・358～360)、紅皿(79・354)、水注(363)、灰吹き(355)などがある。これらは概ね大橋Ⅲ期からⅤ期に相当し、17世紀後半から19世紀中葉に位置づけられるが、主体となるのは18世紀半ばから19世紀中葉のものである。

2) 唐津焼(肥前陶器)⁽²⁾

唐津焼は碗、皿類の他、小杯などがある。碗には91・212がある。91は呉器手となり、212は器表面に刷毛目文を施す。51は京焼を模した浅丸碗である。皿の54・342には胎土目痕が、101・207・350には砂目痕が残る。これら皿に関しては大橋Ⅰ～Ⅱ期に位置づけられる。86の鉢は、白泥で象眼を施す三島手となる。唐津焼は概ね大橋Ⅱ～Ⅳ期が中心となり、17世紀代から18世紀後半に位置づけられる。

3) 瀬戸・美濃焼⁽³⁾

瀬戸・美濃焼には、中世(古瀬戸製品・大窯製品)から近世(登窯製品)のものがあり、以下、製品ごとに述べる。

大窯製品には、碗、皿がある。天目茶碗はいずれも鉄釉が施されており、高台周辺に化粧掛けは認められない。22・303は内反り高台である。22・302は高台脇の削り込みが広く、器高はやや低い。211は高台脇の削り込みが浅い。体部は丸みを帯びており、口唇部は垂直ぎみとなる。器壁は薄い。61・154は灰釉碗である。付高台で底部外面に輪トチ痕が残る。340は灰釉平碗で、削り出し高台である。皿は灰釉を施すものばかりである。343は灰釉丸皿で、付高台である。298・344・347は内禿皿で、見込みに凸部を有する。298・344の凸部は露胎であり、347は凸部にも施釉が認められる。いずれも底部外面に輪トチ痕が、347のみ底部内面にも輪トチ痕が残る。298のみ付高台であり、344・347は削り込み高台である。345は灰釉皿で付高台である。底部内面中央に印花文が認められる。24・299は灰釉折縁皿で、299は削り出し高台となる。65は灰釉ソギ皿である。削り出し高台で底部内外面に輪トチ痕が残る。大窯期(15世紀末～17世紀初頭)の製品には、大窯第1・2段階の遺物は少なく、大窯第3・4段階の16世紀後半～17世紀初頭に位置づけられる製品が主体となる。また、古瀬戸製品には346の卸皿がある。

登窯製品には、碗(73・90など)、皿(163など)、茶入れ(80)、鬚盥(361)、仏花瓶(362)、香炉(357)などがある。碗には鉄釉を施すものと、灰釉を施すものがあり、高台を無釉とするものが多いが、13・164は高台畳付のみを無釉とする。皿は長石釉・灰釉を施す。81・93は腰部の削り痕が明瞭な折縁皿である。これら近世の瀬戸・美濃焼は連房式登窯期に相当するが、登窯第1～2段階が中心となり概ね17世紀終末から18世紀終末に位置づけられる。

4) 京・信楽焼

信楽焼には、半筒碗(50)、灯明皿(352)、灯明受皿(353)、土鍋(364)があるが総量は少ない。京焼とも信楽焼とも判別し難い碗や鉢は、京・信楽焼系(150・287)とした。これらは18世紀後半から19世紀中葉に位置づけられる。

5) 輸入陶磁器

輸入陶磁器類には、青磁、白磁、染付などの中国製磁器がある。青磁では碗と皿がある。碗の328は連弁をヘラで大きく描き、329は連弁を細い線で描く。228の雷文はやや崩れている。325は口縁端部が外反し、玉縁状となる。皿には稜花皿となる332がある。330・331・334などの底部片は、高台内の釉を拭取るものばかりである。208・339は白磁の皿である。これらの青磁と白磁は概ね15世紀中葉から16世紀前葉に位置づけられる。また、染付には皿と鉢がある。皿は小型品が主体で、口縁部が残存するものは少ないが、端反皿となるものが多いと考える。99の見込みにはおそらく玉取獅子文が、296には十字花文が描かれる。口縁が内湾する341は、口縁下の波頭文がかなり簡略化されて描かれており、文様の類例から底部は碁笥底を呈すると考える。99・296・341は、一乗谷朝倉氏遺跡や福井城跡など中世の遺跡や遺構から普遍的に出土するものであり、これら中国からの輸入磁器は15世紀後半から16世紀半ばに位置づけられるが、209の輪花口縁になると考える鉢は17世紀の初めに位置づけられる。

6) 越前焼⁽⁴⁾

中世から近世のものがあり、時期ごとに述べる。

中世に位置づけられる甕の27・377・378は口縁帯を形成し、明瞭な受け部を有する。307・308・379～381は口縁部が厚く、受け部が退化したものである。382～384は口縁が外傾し、386・387は口縁断面が方形状を呈する。387にはヘラ記号の「七」が刻まれ、74・277・397～399は押印文を有する。398・399などの押印文は、格子目が縦に細長く斜格子が組合う。277の格子目は正方形に近いものである。397は類例から「本」と判読でき、凹字で施される。壺では、76と119は肩部に突帯を有する。310の肩部片には銘文が認められ、文字は「や(?)まか□」であろうか。396は肩部に沈線を巡らせて、ヘラ記号が認められるが、壺は近世に属するものと判別が付きにくいものもある。播鉢は全形を窺えるものは少なく、293・408は内面に播目が無く、底部には断面三角形の高台が貼り付けられる。これと同様の底部を持つと考えるのは、片口状となる294の他、400・401があり口縁端部に沈線を有する。また、409には脚が付き格子状の播目を有す。壺の76・119と共に永平寺町諏訪間興行寺遺跡で出土例があり、15世紀中頃に位置づけられている。同様の格子状の播目は402にもあり、403・404と同様の口縁となるが、411の様な脚を有するかは不明である。内面に間隔の空いた播目を有するものでは、271・313・405は口縁端部に沈線を施し、117・314・407は端部を丸く収める。83・315は口縁端部が丸みを帯びて先細りし、25・30・89・123などは内傾する平坦面を有し、播目の間隔がやや詰まる。甕、壺、播鉢の主要器種以外には292の陶錘がある。中世の越前焼は13世紀後半に相当するⅡ-2期以降に出現し、以後、Ⅴ期まで継続して出現する。

近世の越前焼には、器表面に鉄泥を施すものや、Ⅷ-2期以降には体部にロクロ目を残すものが出現する。ロクロ目のない甕では、総じて口縁端部が幅広となり、96・97・218など断面が方形を呈するものや、75・107・108・390など逆三角形を呈するものがある。中でも75は新相を呈すと考える。ロクロ目を呈する甕では、55・114・157の口縁端部は幅が広くなりやや外傾し、394は玉縁状に丸みを帯びる。114・394には粘土紐を振った耳が付く。壺は138・391にヘラ記号が認められる。78・393はお歯黒壺と考える。播鉢の110・217・282などは、口縁部上面は平坦で端部がとがる。283は口縁部上面が丸味を帯び、口縁外面

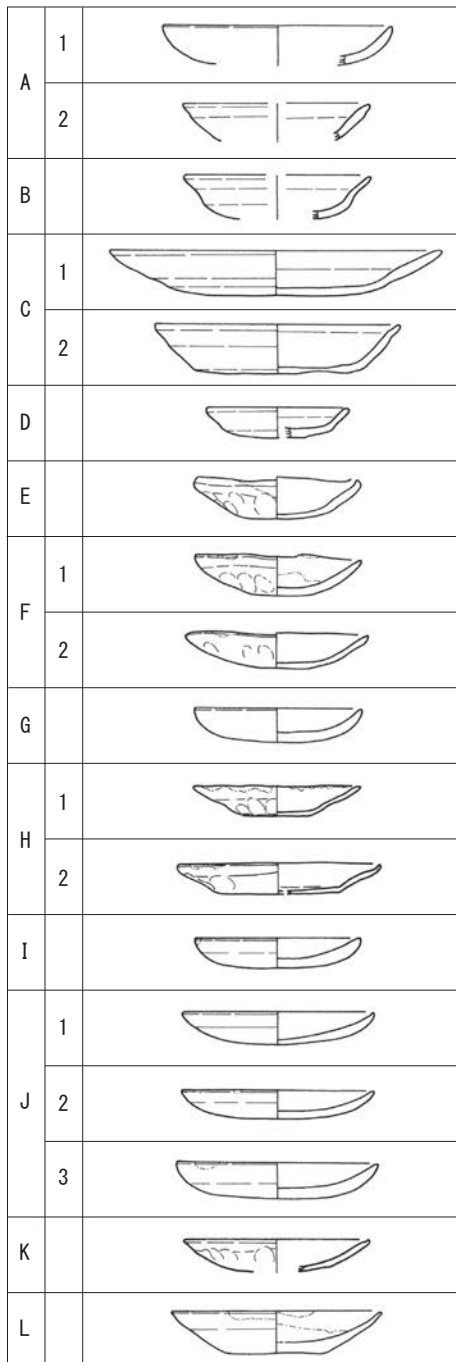
は面取りされる。411はこれらより新しい様相を呈する。外面にロクロ目が残る播鉢には、底部に横に張出す高台が付くようになり、158のような断面三角形を呈するものと、412のような断面方形を呈する両者があり、前者が古相を呈す。また、小型の播鉢139には高台は付かず、口縁は片口となる。播目は密で158・412と施文の様相が共通する。近世には播鉢の他に体部にロクロ目を残す鉢が多く、体部が大きく外傾するものと、内湾気味に立ち上がるものがある。前者では、84は口縁端部が幅広となり、56・85は折り返し、406は丸く収める。後者では、153は口縁端部が幅広となり、100・112・219などは折り返し、395は丸く収め、410は面取りする。414は片口鉢となる。鉢の器形と口縁部の形態は多様となる。近世の越前焼はⅦ期にやや減少するようであるが、Ⅸ期まで一定量が存在するといえる。

7) 常滑焼

419は広口壺である。口縁部を欠き、頸部は直立ぎみに立ちあがる。内面には指押さえ痕や指ナデ痕が明瞭に残る。12世紀後半に位置づけられる。

8) 土師質皿

土師質皿は多量に出土した。成形には手づくねによるものと、型によるもの、ロクロを使用したものがあり、平面形や底面の圧痕の有無から判断した。成形と調整方法から、以下の12類に分類する(第32図)。



第32図 土師質皿分類図

A類 体部から緩やかに立ち上がり、見込み付近から口縁外面を挟んでまわしナデを行う。

A 1類 口縁内外を大きく挟み、見込みはやや深くなる。

A 2類 口縁を強くなでること口縁外面下に段が生じる。

B類 内面の立ち上がりを押さえ腰部を立てる。口縁を外反気味に広げてまわしナデを行う。外面にはくびれが生じる。

C類 口径が13cm以上の大型のものをまとめる。口縁は大きく外傾する。

C 1類 丸みを帯びて立ち上がり、腰部に弱いくびれを有す。

C 2類 平底で直線的に体部が立ち上がり、口縁端部が弱く摘み上がる。

D類 平底の底部から口縁が直線的に外傾する。

E類 底面から屈曲気味に体部が立ち上がる。見込み付近から口縁外面下約1cmまでを挟み、まわしナデを施す。口縁端部が摘み上がるものもある。口径が6.0cm前後の小型のものと8.0~9.0cm前後のものがある。

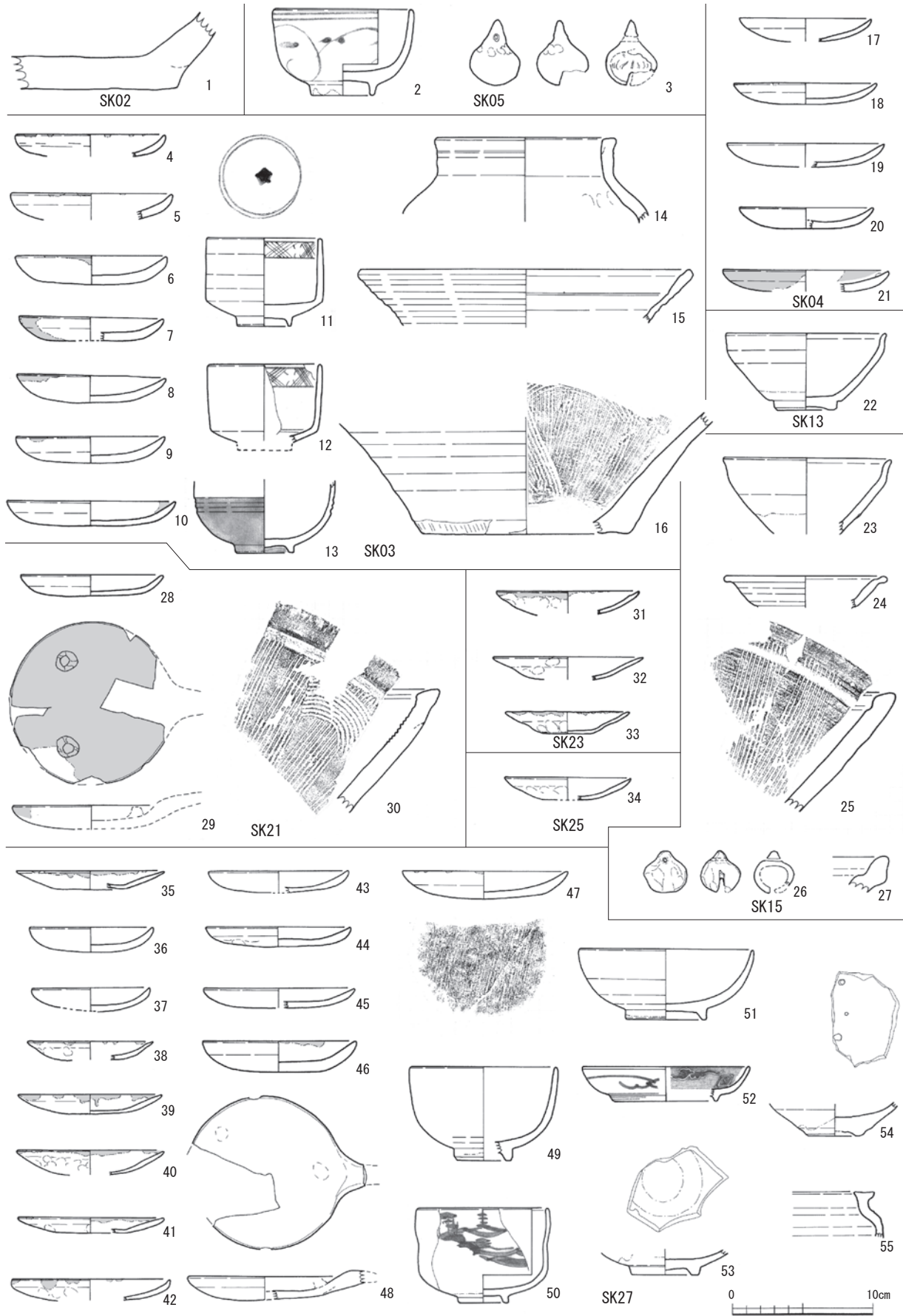
F類 内面は立ち上がり付近から口縁外面下約1cmまでを挟み、まわしナデを行いナデ抜く。

F 1類 底面の厚さに比べ口縁が厚く、ぼってりとした重量感のある印象を受ける。平面形は不整形を呈す。

- F 2類 全体に薄く、緩やかに立ち上がり、浅めとなる。
- G類 丸底で口縁が緩やかに立ち上がる浅めのもの。比較的丁寧な作りで平面は正円に近い。
- H類 型成形後、内面立ち上がり付近から口縁外面を挟み、まわしナデを行う。整形痕が残る。平面は正円に近いが、口縁の傾きは一定しないものもあり、形態は多様である。口径は10cm前後となる。
- H 1類 口縁端部が先細りのものが主体だが、口縁端部の摘み上げが意図的とはならない。把手の有無により、a：無し、b：有りとするが、破片のため確認できないものはaとしている。
- H 2類 屈曲して立ち上がり、口縁端部には意図的にナデにより摘み上げる。薄手である。
- I類 型成形。口縁内外を挟み、まわしナデの前後に見込みを一方向になでる。口径が8.5cm前後の小型のもの。底部から均一な厚さを保ち緩やかに立ち上がる。厚手である。
- J類 型成形。口縁内外を挟み、まわしナデの前後に見込みを一方向になでる。口径は10.0cm前後のものが中心となるが、11.0cmを超えるものも少量存在する。口縁端部は丸くおさめるものと弱く摘み上がるものがある。
- J 1類 口縁に比べ、薄い底部を有すもの。
- J 2類 厚さがほぼ均一となるもの。把手の有無により、a：無し、b：有りとするが、破片のため確認できないものはaとしている。
- J 3類 全体に厚手で、見込みの浅いもの。把手の有無により、a：無し、b：有りとするが、破片のため確認できないものはaとした。また、受皿となるものには、見込みに灯明皿を受ける粘土塊の支点があるものと無いものがある。
- K類 型成形を真似て手づくねで成形したと考えられるもの。調整はまわしナデをナデ抜く。
- L類 ロクロ成形のもの。底面に糸切り痕を有す。
- 以上の土師質皿を概観すると、成形技法としてはA～G・K類の手づくねとH～J類の型成形に大きく二分される。A～D類の出土例は少量だが、これらは概ね13世紀～16世紀後半の中世に位置づけられる。主体となるのは15世紀後半代だが、D類は13世紀後半代に、C 2類としたものは16世紀半ばから後半と考える。E・F・G・H類としたものは、17世紀代に位置づけられる。E・F類は煤や油痕が付着するものが多く、灯明皿として使用されている。また、型成形のものには底面に板状の圧痕が観察できるものがある。H・J類は灯明皿として使用されたものが多く、受皿として把手を貼り付けたものがある。SD03出土の145と147は皿と受皿が重なった状態で出土した。J 1類は底部の薄さのためか把手が付くものは見だされず、受皿としては利用されない可能性がある。J類は18世紀～19世紀半ばに位置づけられ、型成形により定型化した製品を供給する段階であり、時期が下るにつれ底部の厚みを増すようである。184は見込みに小穴を穿つもので、用途は不明だが少なからず出土例がある。灯明受皿には、粘土塊の支点のあるものとないものがある。K類は1点(238)を図示したのみであるが、整った見込みの成形から型成形を模したと判断した。372・373のL類は19世紀半ば以降に出現すると考えたい。

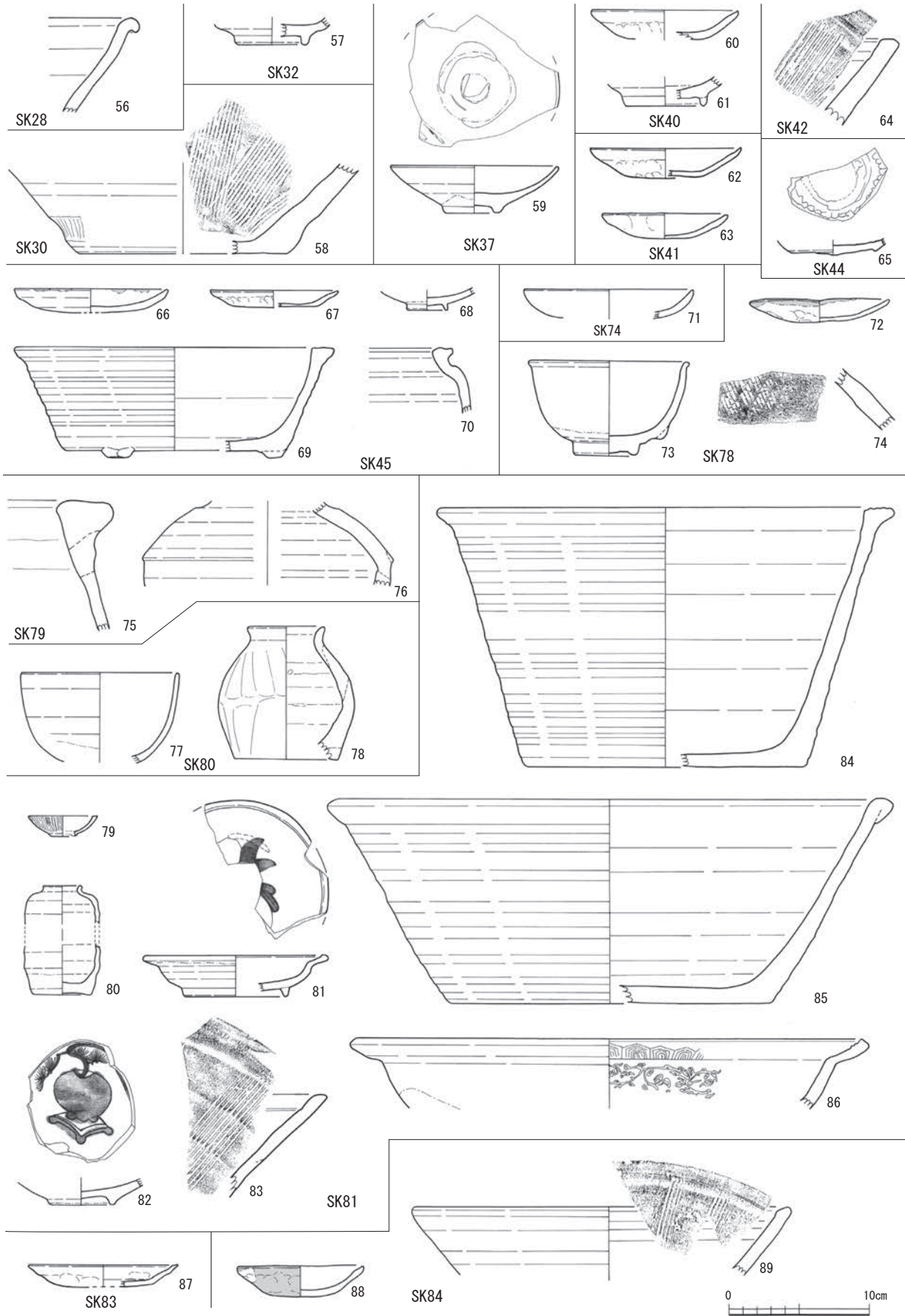
9) 瓦質土器・土製品・その他

319は13世紀代に位置づけられる瓦質土器の土鍋である。土製品には3・26・160などの土鈴や、375・376などの土人形がある。その他、151は壁土片の可能性もある。瓦は図示できなかったが、18世紀代の赤瓦片が少量出土している。また、415・416は匣鉢、417・418は円錐ピンと考えられ、窯道具と推測する。415・416は体部下方向がややすばまり、口縁部にかけてほぼ垂直に開き、重ねて焼くことが可能である。417・418は上面以外に釉や粘土等が付着している。焼成地、焼成品は不明である。

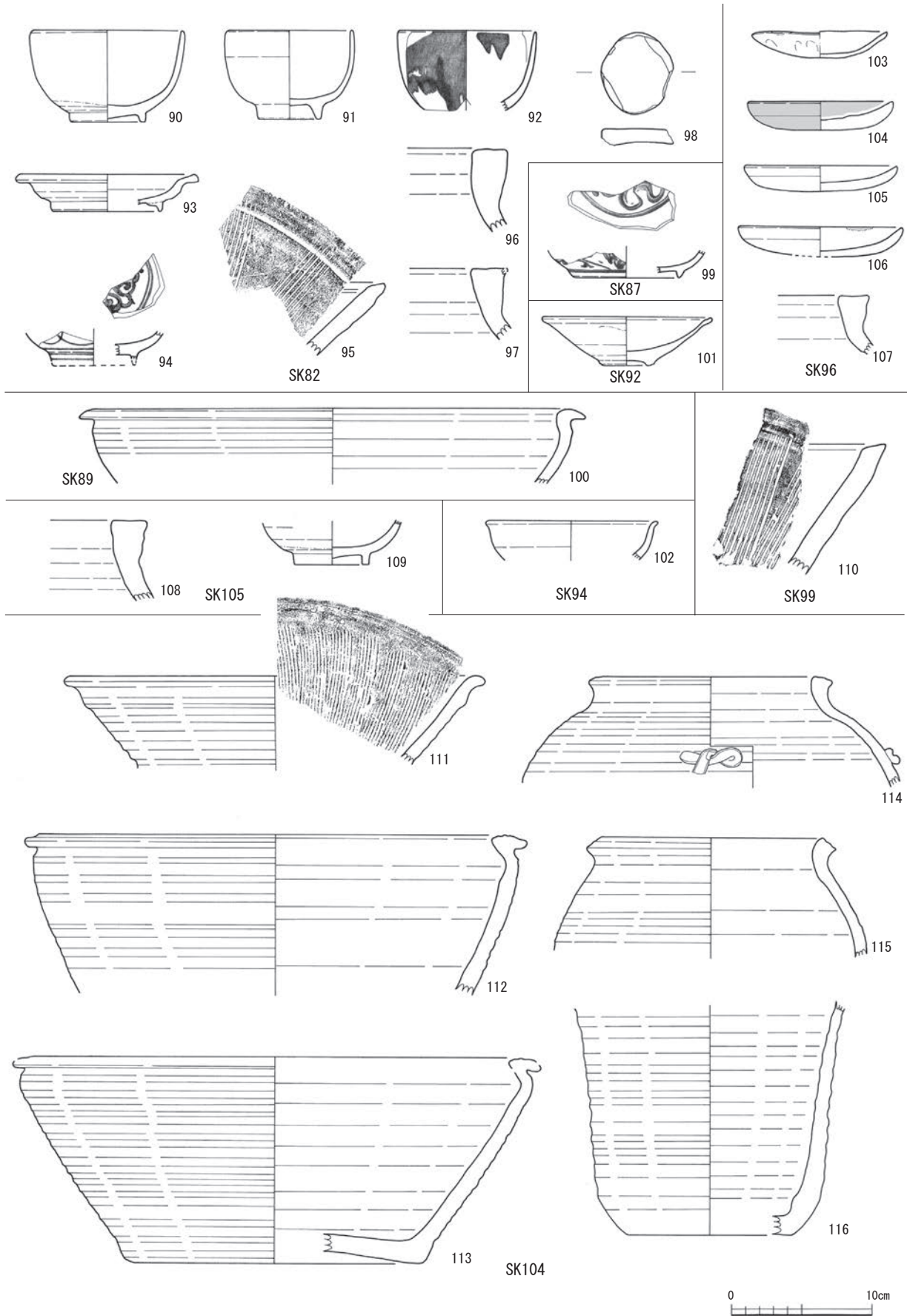


第33図 遺構出土土器・陶磁器実測図1 (縮尺1/4)

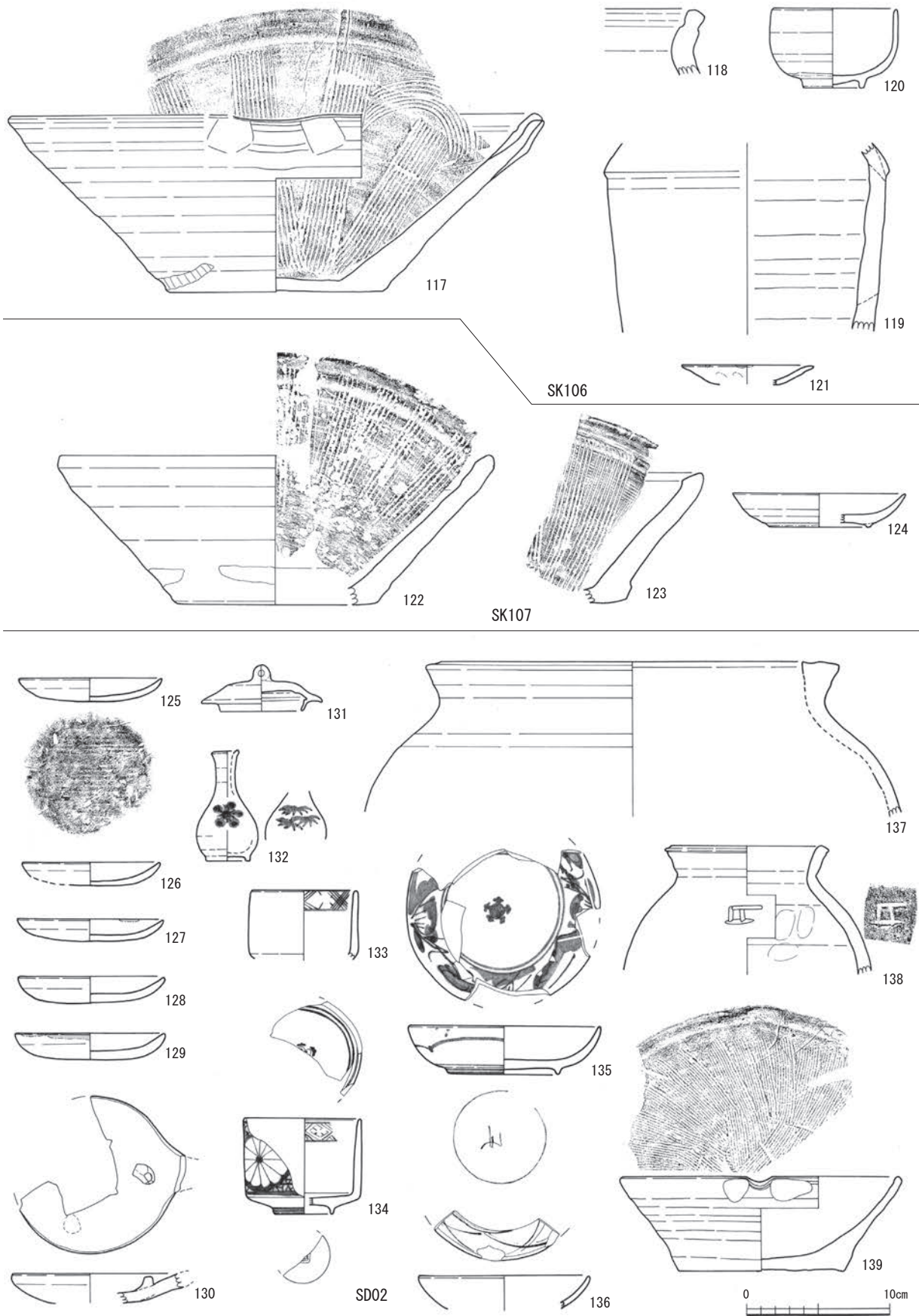
第3節 遺物



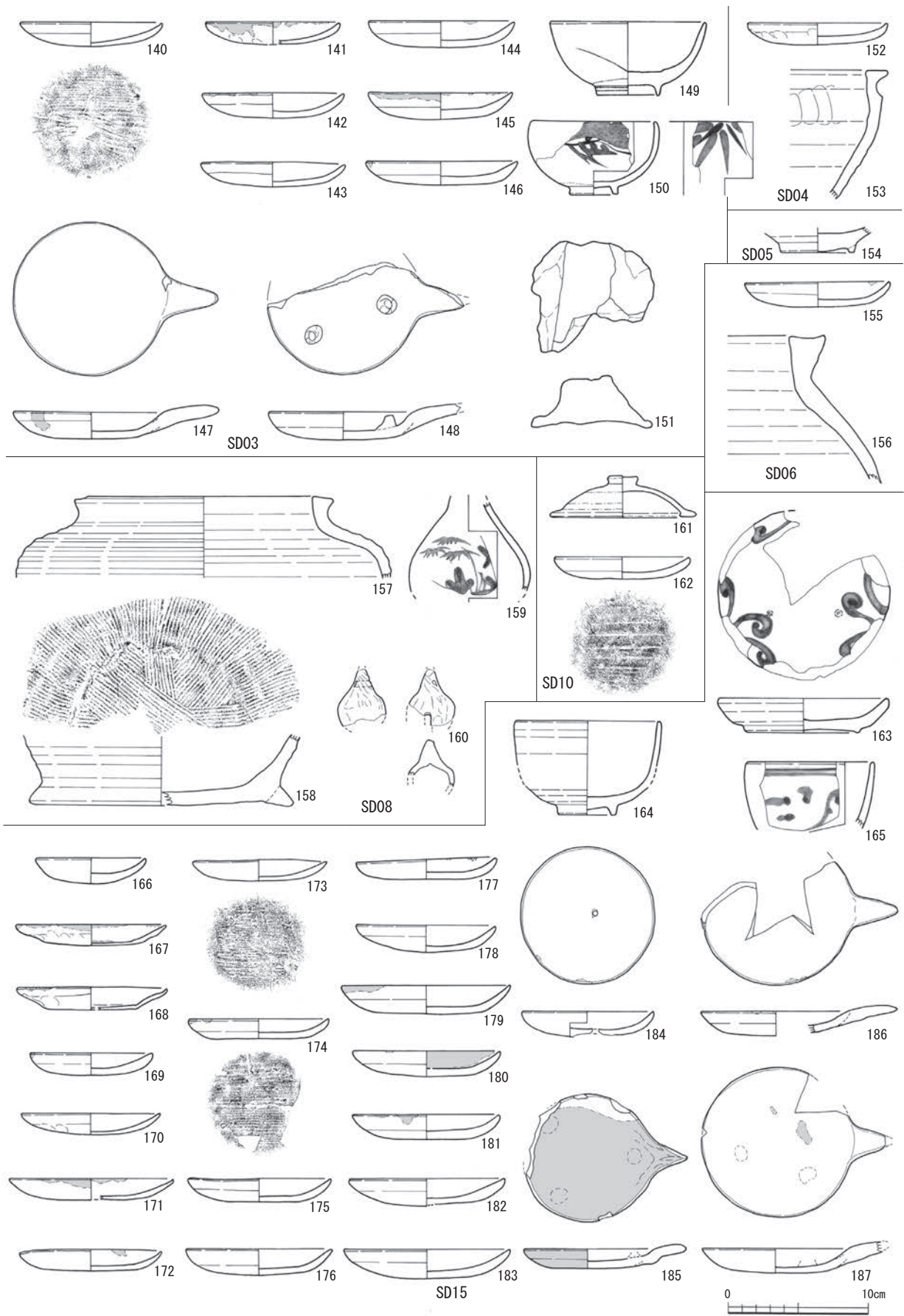
第34図 遺構出土土器・陶磁器実測図2 (縮尺1/4)



第35図 遺構出土土器・陶磁器実測図3 (縮尺1/4)

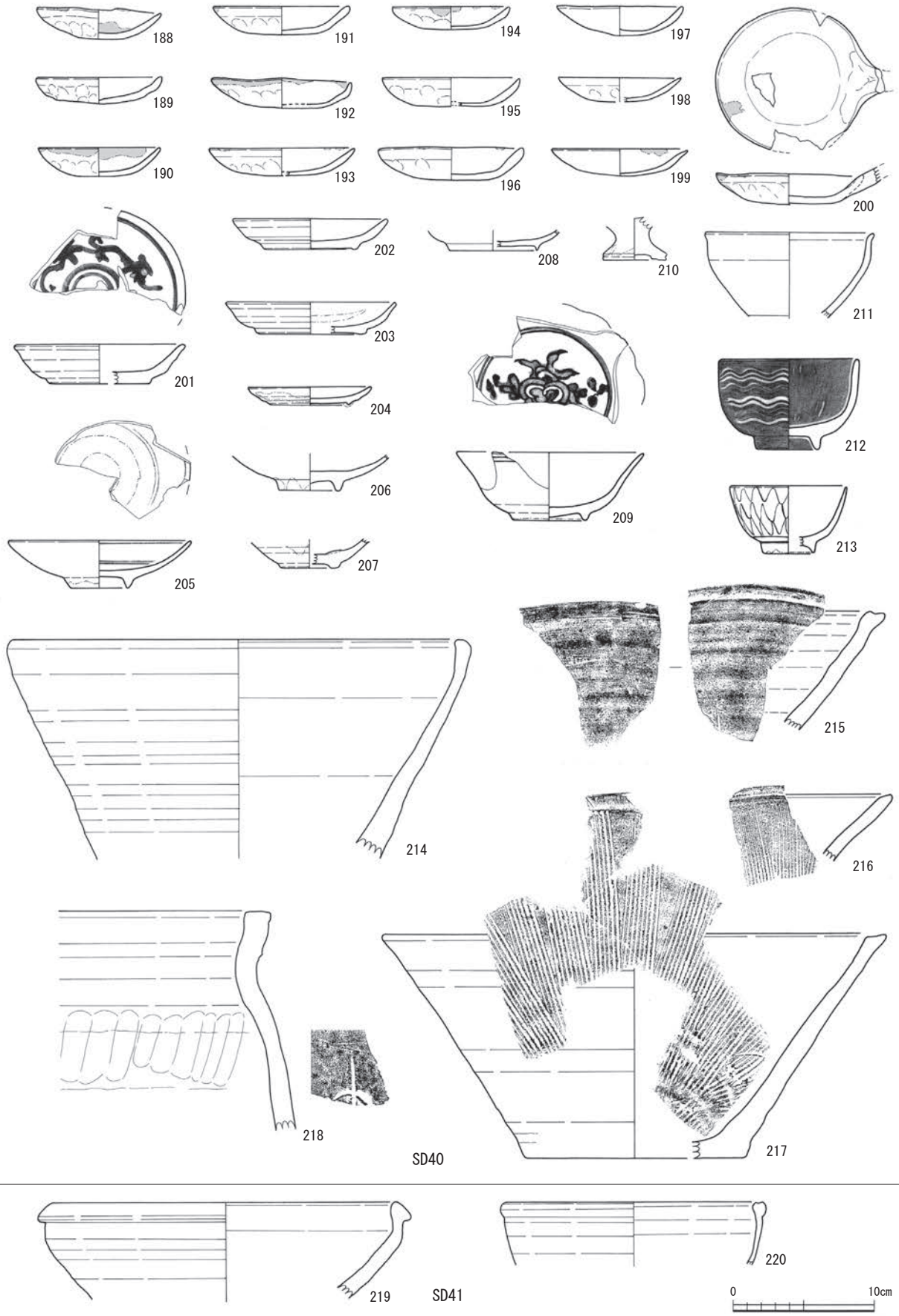


第36図 遺構出土土器・陶磁器実測図4 (縮尺1/4)

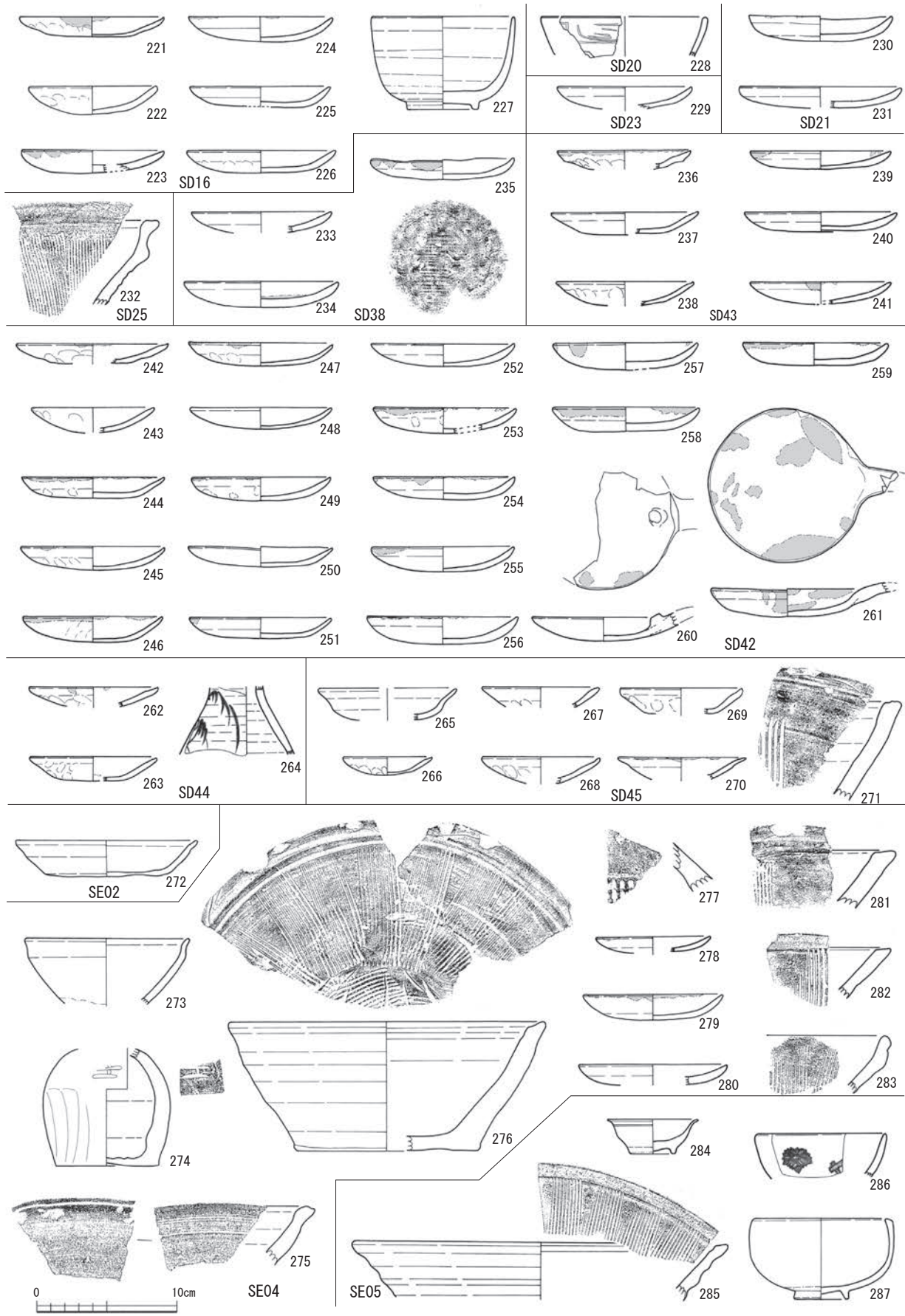


第37図 遺構出土土器・陶磁器実測図5 (縮尺1/4)

第3節 遺物

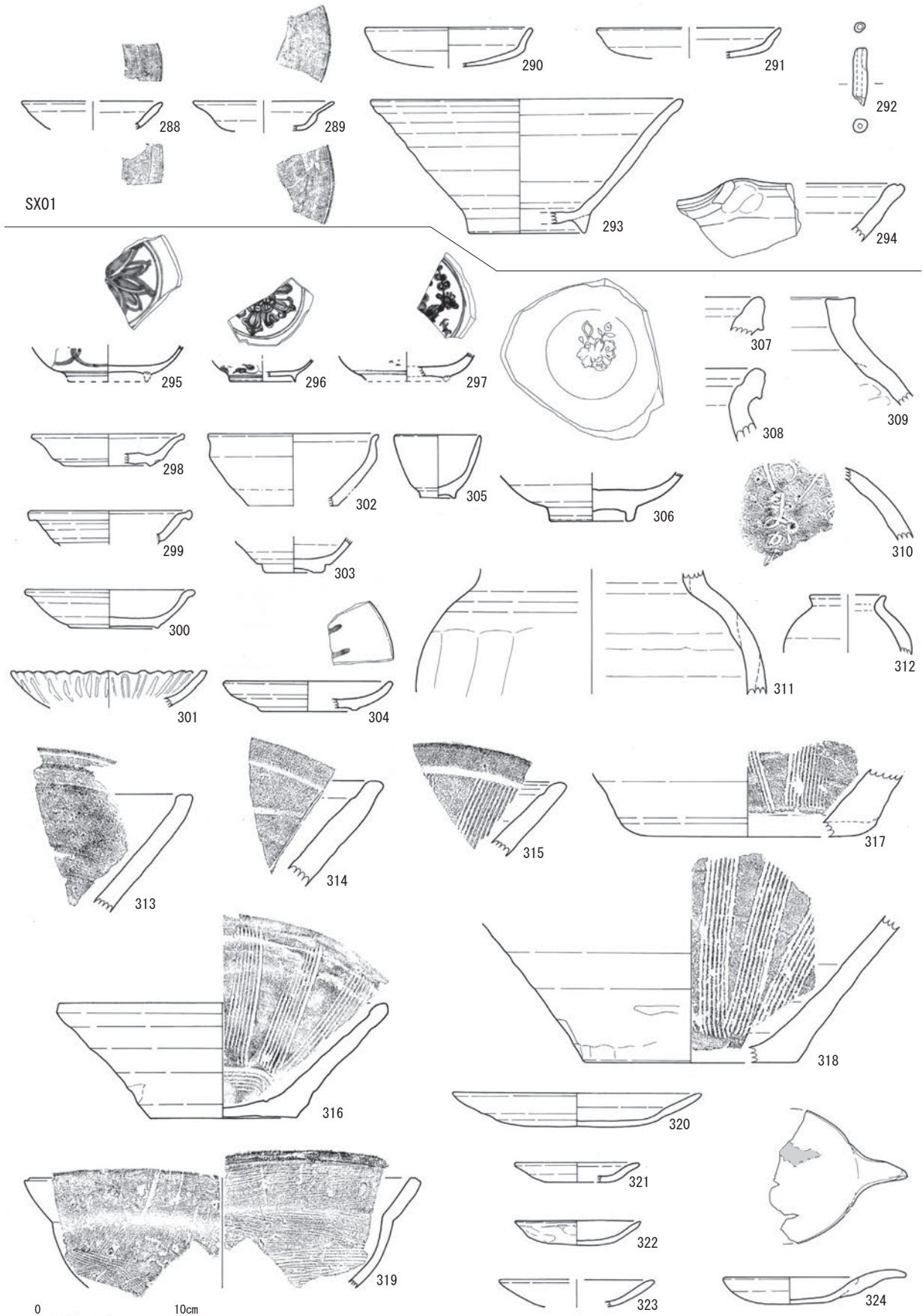


第38図 遺構出土土器・陶磁器実測図6 (縮尺1/4)

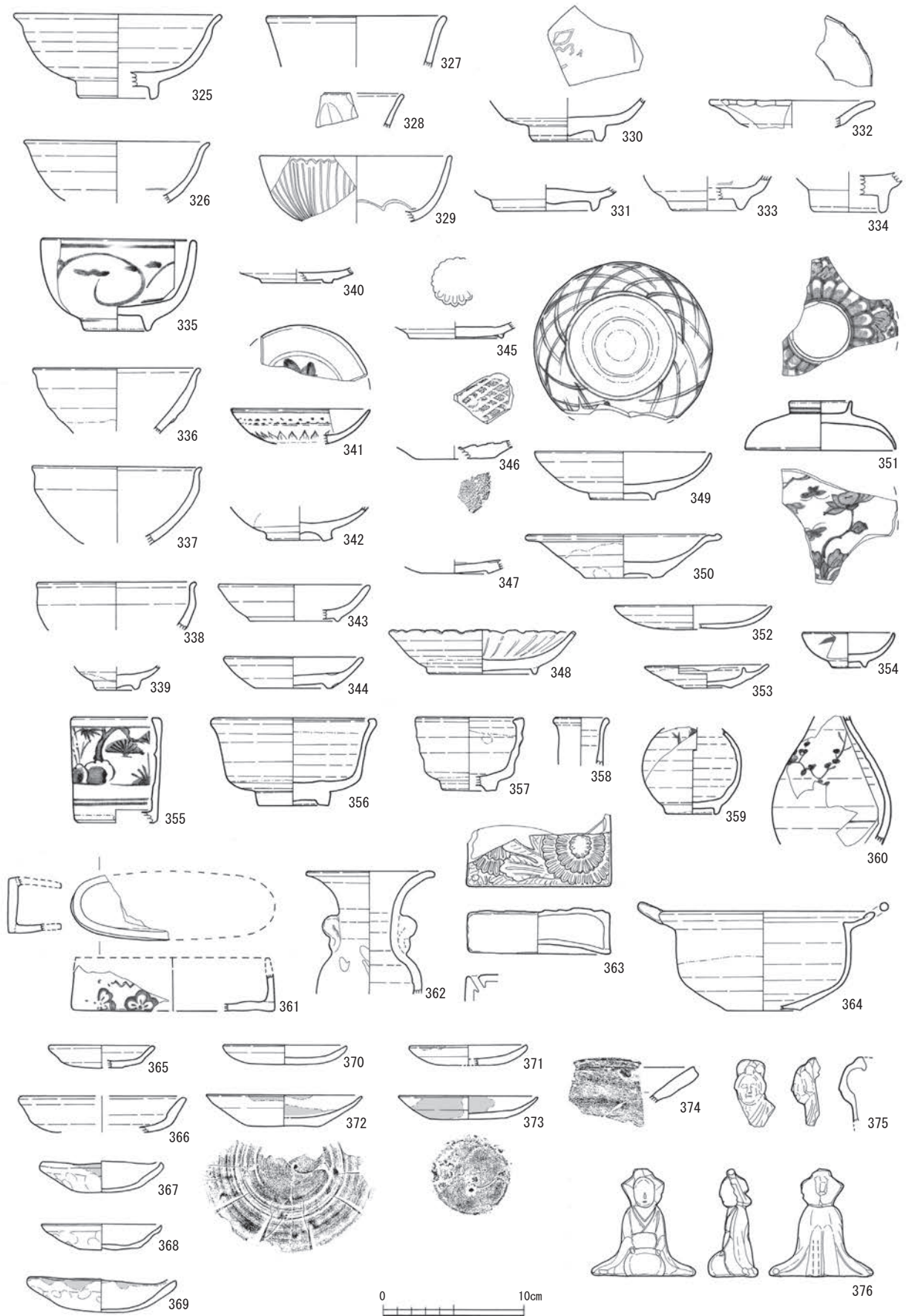


第39図 遺構出土土器・陶磁器実測図7 (縮尺1/4)

第3節 遺物

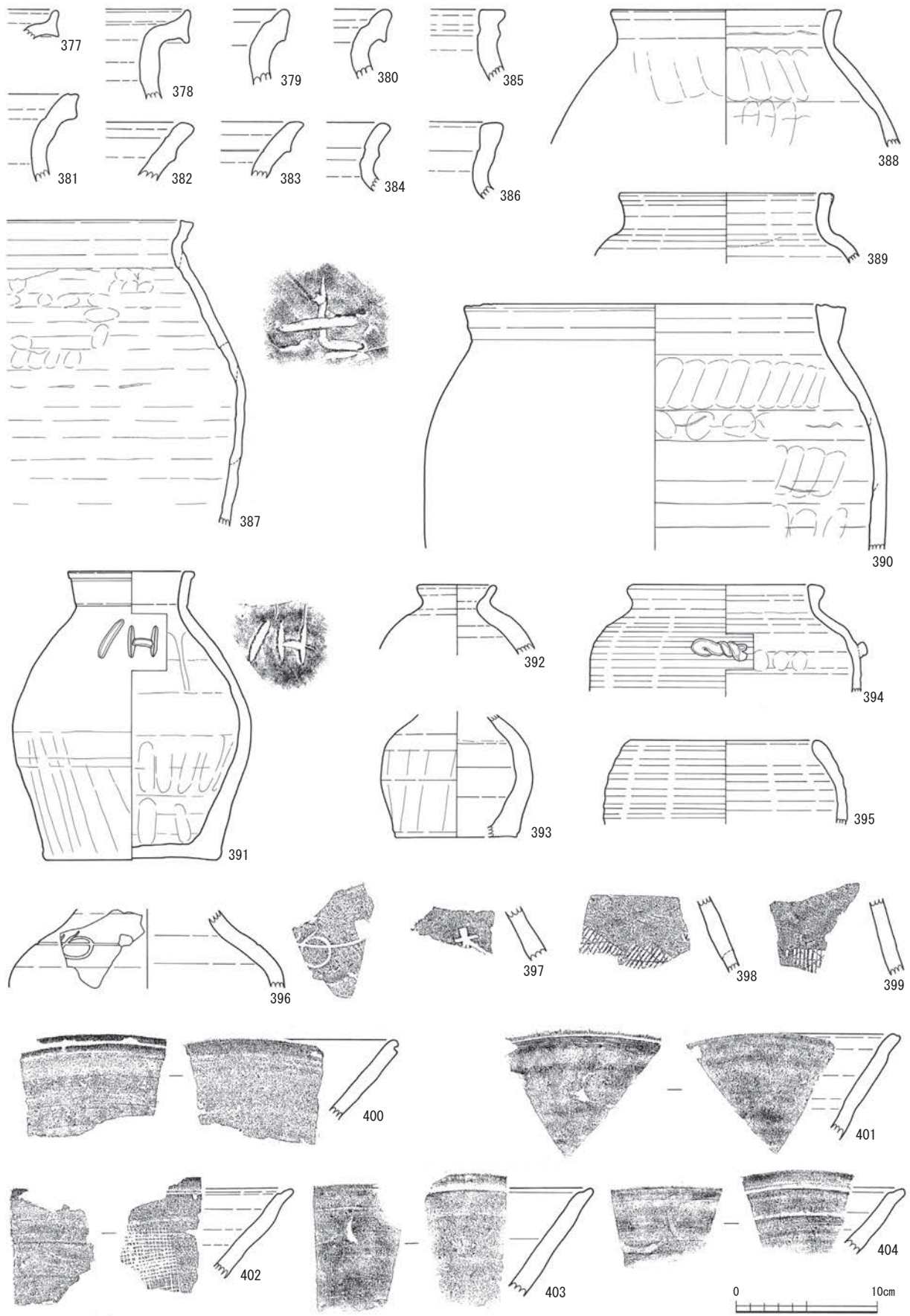


第40図 遺構出土土器・陶磁器実測図8 (縮尺1/4)

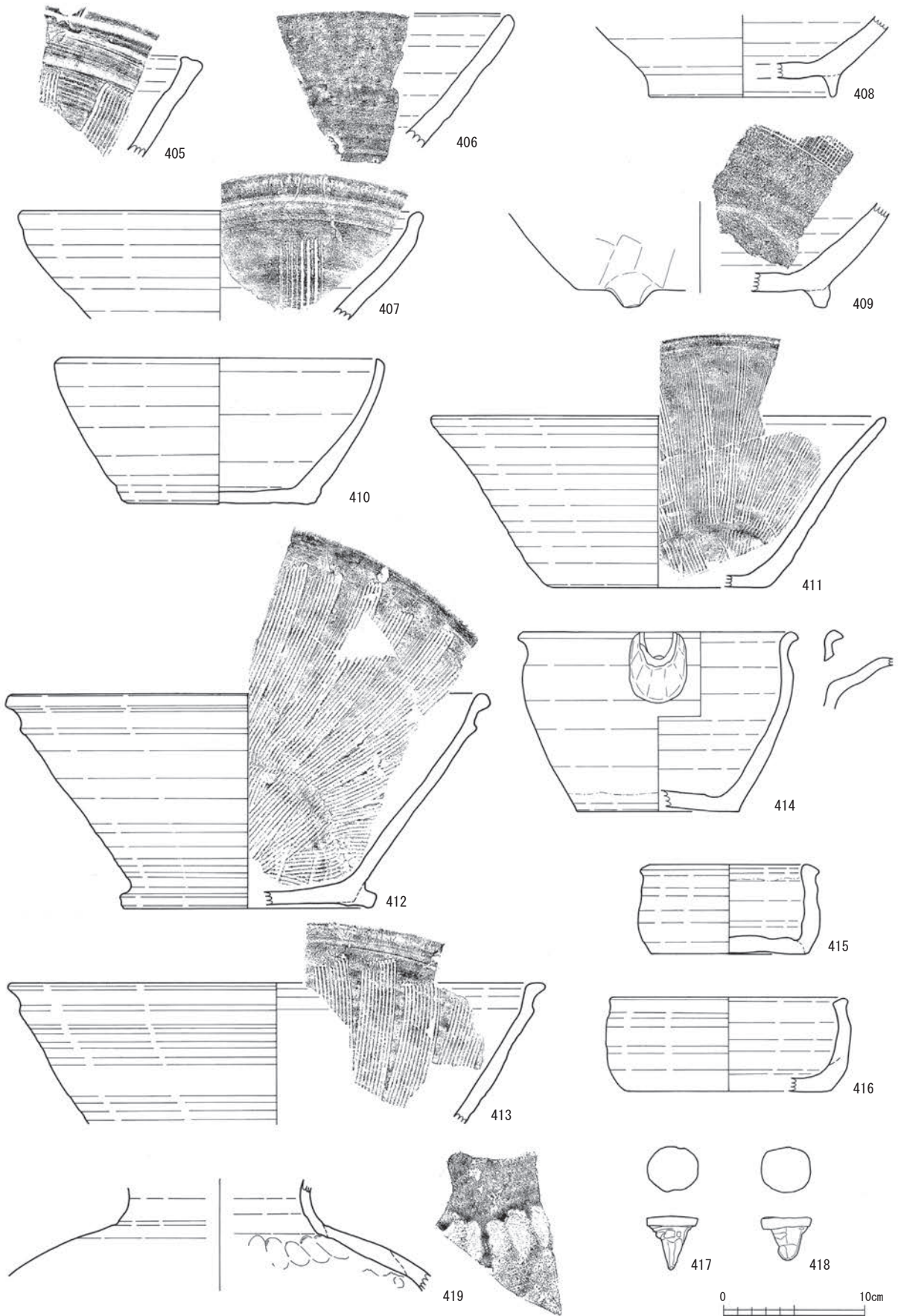


第41図 遺構外出土器・陶磁器実測図1 (縮尺1/4)

第3節 遺物



第42図 遺構外出土土器・陶磁器実測図2 (縮尺1/4)



第43図 遺構外出土土器・陶磁器実測図3 (縮尺1/4)

2 石製品(第44～47図、図版第11・12、表3～6)

1) 行火(第44図)

1～7は蓋である。1～4は平面形が楕円形を呈するが、1・2と比べ、3・4はやや隅丸長方形を呈する。また、1・3・4の内面は高く大きな曲面のため広い空間を有すが、2の内面は低平で緩やかな曲面を有す。5は平面形がD字形を呈する。内面の身受け部は、前面部分が広く加工される。6・7は破片のため平面形の判断が付かないものだが、両者の内面は緩やかで低平な器形である。8～13は身部および底部片である。8～10は平面形が楕円形を呈する。8は長方形の窓の部分、9・10は底部である。10と2はSD08出土で、一对の可能性がある。11・12は平面形がD字形を呈する。共に前面に長方形の窓を持ち、上方が火入れ部として開口する。13は前面が火入れ部として開口する手焙り形を呈する。内底面は入り口部分が突出し、奥に向かってやや傾斜する。11～13の底部には、側面側に脚を有す。総じて平面形が楕円形を呈するものが、D字形、手焙り形を呈するものより大型となる。全て凝灰岩製である。

2) 石臼(第45・46図7～10)

石臼は、上臼8点、下臼3点の計11点が出土し、10点を図化し得た。茶臼に該当するものは無い。1～7は上臼である。1の上縁部は、くぼみから丸みをもって立ち上がる。幅広の平坦面を有し、断面は扁平な形状となる。もの入れ孔は擂鉢状に大きく開き、平面形は楕円形を呈す。側面には挽き木をタガで固定するための挽き手溝が2カ所あるが、対の位置には並ばない。挽き手孔は、石臼の大きさに比べて不自然に彫り込みが浅く、機能したかは疑問である。この石臼は、何らかの製粉・粉碎作業に特化したものであろうか。擂面は剥落のため、副溝が8条確認できる箇所があるのみで、分画数は不明である。石臼の機能を終えた後、柱の礎石に転用されている。2と4の上縁の断面は方形を呈し、比較的高く作り出されている。擂面の径より上縁部の径がややすぼまる。2は挽き手孔の下端は擦り切れて欠損していることや、厚みが一定しないことから、かなり使い込まれたことが分かるが、擂目は丁寧に目立てされた状態である。4は上縁部とくぼみとの境が明瞭である。使い込まれたため薄くなっており、擂目は残っておらず、弧状の擦痕がある。3は上縁部がくぼみからやや曲線的に傾斜して立ち上がる。断面形は台形状を呈し、やや幅広の平坦部を有す。5と6は上縁部の断面形は蒲鉾状を呈す。7はSE04の石組内から出土した。小破片であり器表面は摩耗が激しい。くぼみから傾斜して上縁部となり、幅狭の平坦面を有す。もの入れ孔は平面形が円形を呈し、上縁部に近接する。擂目は不明である。側面にはややくびれを生じさせるような加工を施す。8～10は下臼である。欠損のために分画数は不明瞭だが、8は8分画と考えられ、副溝は7条確認できる箇所があり、使用による同心円状の擦痕が明瞭である。

3) 容器状製品(第46図11～15)

破片のため全形は窺えないものが多い。11～13は盤である。11は大型となり、内面底部と体部内面上半に被熱痕がある。12は内面に仕切りを有し、内面から口縁にかけて被熱する。断面形が逆台形状の脚を有す。13は内面から口縁にかけて被熱痕があり、低平な脚を有す。小型の12・13は香炉としての使用も推察される。14は何らかの意匠を表現した容器の端部である。他の製品と比較すると、非常に粒子の細かい凝灰岩を用いている。逆台形状の脚が1ヶ所残存する。上面の縁部に並行する沈線を有す。鉢状を呈する15は、搗き臼の口縁部と考える。内外面とも口縁端部を面取りし、口唇部は平滑に整形する。体部外面は口縁部と異なり、意匠的に粗い鑿痕を残し、内面は鑿で平滑に整形している。

4) 砥石(第47図1～14)

砥石は、他の石製品を転用したものも含め19点出土し、14点を図示した。図示した中で、幅や長さ、

および断面形状から大きく3つに分類を行った。

I類 幅が6.0～8.0cmを測り、断面形が長方形を呈すもの(1・2)。

II類 幅が3.5～4.0cmを測るもの(3～9)。これらは、さらにa:長さが14.0cm前後のもの(3・4)、b:9.0～10.0cm前後のもの(5・6)、c:6.0cm以下のもの(7～9)に細分した。cについては、欠損の可能性も考慮しなければならないが、9において端部を平滑に加工していることから設定した。

III類 幅が2.5～3.0cmを測るもの(10～12)。これらはさらにa:長さが11.0cm前後で断面形が正方形状のもの(10)、b:長さが7.5cm前後で断面形が長方形のもの(11・12)に細分した。

以上から、砥石には流通における規格があり、研ぐ対象物は何か、砥石をどのように使用するかの違いを多様に反映していると考ええる。なお、13・14はII類ともIII類とも判断がつかないものである。

5) 硯(第47図15～18)

硯は4点を図示し得た。15は断定出来ないが、16～18の平面形は長方形を呈す。また、全て側面は垂直に立ち上がる。底面は、15・16は浅い抉りを有し、17は平坦面となる。18の底面には幅1.3cmの低平な脚を有する。16の陸部は使用により大きく窪む。形態から判断し、全て16世紀以降に属すと考える。

6) その他の石製品(第46図16～19)

16・17は、円形に研磨し穿孔を施した不明石製品だが、重石などの可能性が考えられる。両者の厚さは近似し、17には擦り切り痕がある。18・19は鉤状に加工を施した支脚状製品で、どちらも細かなノミ痕を残す。19は尖り気味の基部に煤が付着する。18は全面に煤が付着し、基部が平坦に整えられる。

3 漆器(第48図1～7、図版第12、表7)

1～4は胴部が高台脇から緩やかに立ち上がる椀で、総じて口径に比べ器高が低いものである。1・2の高台高は低く、高台内の削りも浅い。また、1の底面は2～4よりも薄く削られ、4は器壁が厚い。全て内面は赤漆を、外面は黒漆を塗布する。4以外の外面には赤漆による施文が残存し、丸の中に漆絵を施すものだが、残存状況が不良のため意匠は不明である。5・6は胴部下半に稜を有し、直立気味の高台外面に、厚い底部を有する。胴部は内湾気味に立ち上がる。どちらも内外面に黒漆を塗布し、高台裏に赤漆で模様あるいは記号を施文する。7はSK79出土の蓋である。同じくSK79から出土した5の椀に伴う蓋と考える。口縁は短く屈曲し、高台裏には5と同様に赤漆で模様を施文する。

4 木製品(第48図8～24、図版第12、表8)

8～13は箸で、全てSK78から出土した。断面形は多角形状を呈し、端部に向かって細くなる。14～16は加工痕を有す板材である。17は曲物である。内面は漆状のものが塗布される。残存状態は悪く、被熱により部分的に炭化していた。18・19は底板である。18は木釘で接合されている。19は径が32.5cmを測り、側面は外傾するように面取りされる。20は弧状の棒材で、表面は滑らかに加工される。両端部は多方向から面取りし、貫通孔がある。21～23はSE01から出土した板材で、木釘穴を有す。23が底板に、21・22は側板に相当し、平面形が方形、側面形は逆台形状の容器に復元できる。出土遺構から推定し釣瓶と考える。24は下駄である。前緒を通す穴が1ヶ所のみ、いわゆる雪下駄である。

5 金属製品(第49図、図版第13、表9)

金属製品は、調理用具、農耕具、装身に関するもの等、日常生活に関わるものが出土している。

1はSE04の底面から出土した庖丁である。刃部は外湾し、切っ先は摩耗し丸みを帯びる。刃こぼれが顕著である。柄は断面形が不整楕円形で、柄長は約10cmと大人の握り拳程度の長さである。2は刃鎌である。刃先形状は方形状、尻形状は角形となる。3は和鋏である。切っ先は鋭角となる。4・5は煙

管の吸口である。6は毛抜きである。基部より刃部の幅がやや広がる。7は簪で、頭部は耳搔き状となり二本の足が付く。肩部には表裏で位置がずれる切込み状の意匠がある。

6 銭貨・貨幣(第50図、表10)

銭貨及び貨幣は16種69枚が出土し、46枚の拓影を掲載した。渡来銭が23枚で33%、本邦銭が42枚で61%、不明が4枚で6%を占める。SD40から渡来銭が15枚出土した他は多くが包含層出土で、分布状況は散漫である。渡来銭の内、北宋銭が占める割合は17枚で74%を占める。また、寛永通宝の内、寛永十三年(1636)から明暦二年(1656)に発行されたものは古寛永に、寛文八年(1668)以降に発行されたものは新寛永に二分されるが、判別可能なものでは古寛永が8枚で22%、新寛永が28枚で78%を占める。46は一分判金である。四文銭以外の寛永通宝は1文銭であり、一分判金は1,000文(一貫文)に相当する。一分判金はSK103から出土したが、額面から地鎮など人為的に埋設したとは考えにくい。

7 古代の遺物(第51図、図版第13、表11)

古代の遺物は先にも述べたが、後世の包含層、遺構に混入したものが多く、小破片が多い。須恵器の破片数は336点を、土師質土器の破片数は122点を数え、出土範囲はほぼ共通する。その範囲は大きく南北に分かれ、北側はE～G 5・6区を中心にやや東西方向に広がる。南側はF～H10～13区とK 9・10区の2つの分布域があるが、攪乱を挟んでいるためである。以下、図化し得たものを記述する。

1～8は坏蓋である。天井部が平坦な1～3と丸みを帯びる4～8がある。口縁端部を折り返すものが主体である。9～15は無台坏である。9の口縁端部はやや外反する。底面を回転ヘラ切り後、丁寧にヘラ削りする11と、粗いナデ調整を行う9・15がある。16は坏の口縁部である。17～25は有台坏である。高台がハの字状に広がるまたは端部が突出する17・18と21～23がある。26～34は無台皿である。坏に比べ丁寧な削りを施す。体部が直線的に外傾する26～28・32、丸みを帯びる29、弱く屈曲する30・31がある。35・36は埴である。器形は窺えないが、35の高台端部は外方に突出し、36は平坦面となる。37は短頸壺の蓋と考える。摘みは付かない。38～41は瓶類の口縁部で、42～44は底部である。低い高台の42・43と高い高台の44があり、いずれも端部が外方に突出する。45・46は鉢である。45の器壁は薄く、内外とも丁寧に調整である。46の底部は回転ヘラ切りの後、粗いナデを施す。47・49～51は甕の頸部および胴部である。48は壺の肩部である。52～57は土師質土器である。調整は不明なものが多い。52～55は甕で、口縁端部に面を持つ52～54、丸く収める55がある。56・57は鍋で、端部が外方へ突出する56と内傾する57がある。

8 縄文土器(第52図、図版第13、表12)

僅かではあるが、G～K 3区を中心に縄文土器が出土した。摩耗が激しい小破片ばかりで、残存状況は不良であるが、器体の厚さや胎土、観察可能な器表面の調整から縄文土器と判断した。

1は半裁竹管で文様を施したもので、中期に属すと考えられる。2は沈線を施す有文のもの、3・4は条痕調整のみの無文のものである。2～4は後期に属すと考えられる。

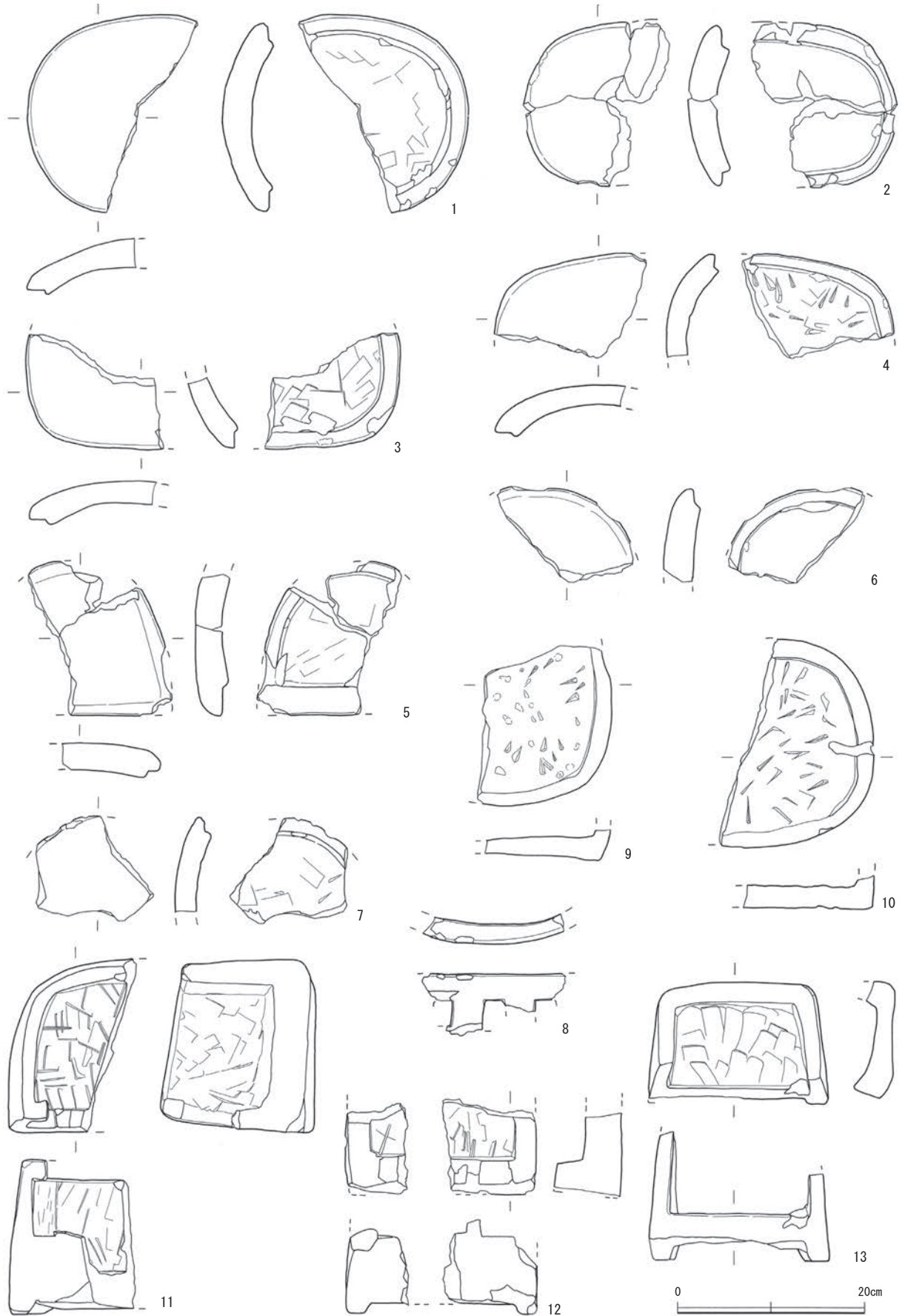
註

(1) 大橋康二 1988 『肥前陶磁』 考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社

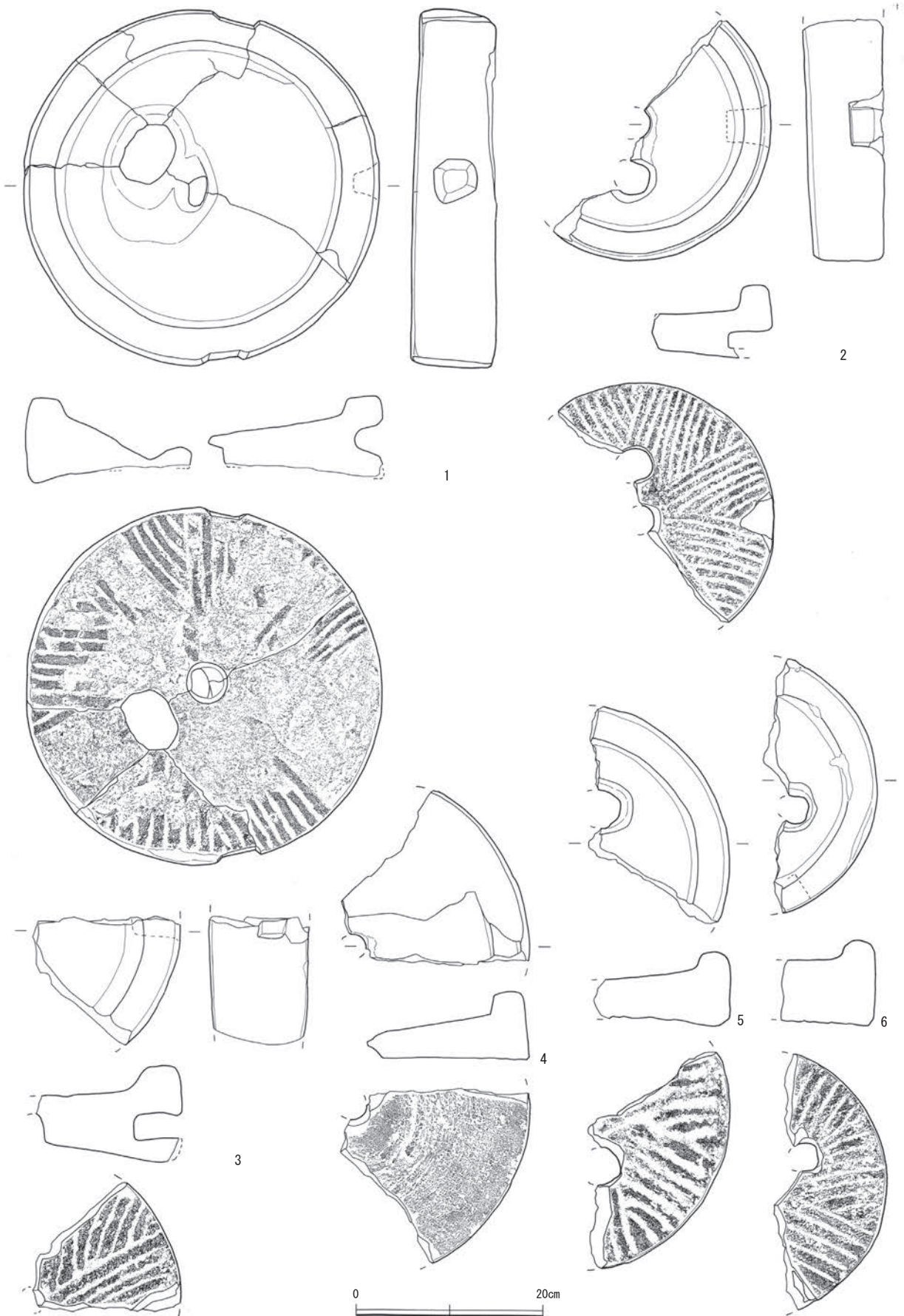
(2) 前掲註(1)

(3) 愛知県史編纂委員会 2008 『愛知県史』別冊窯業2

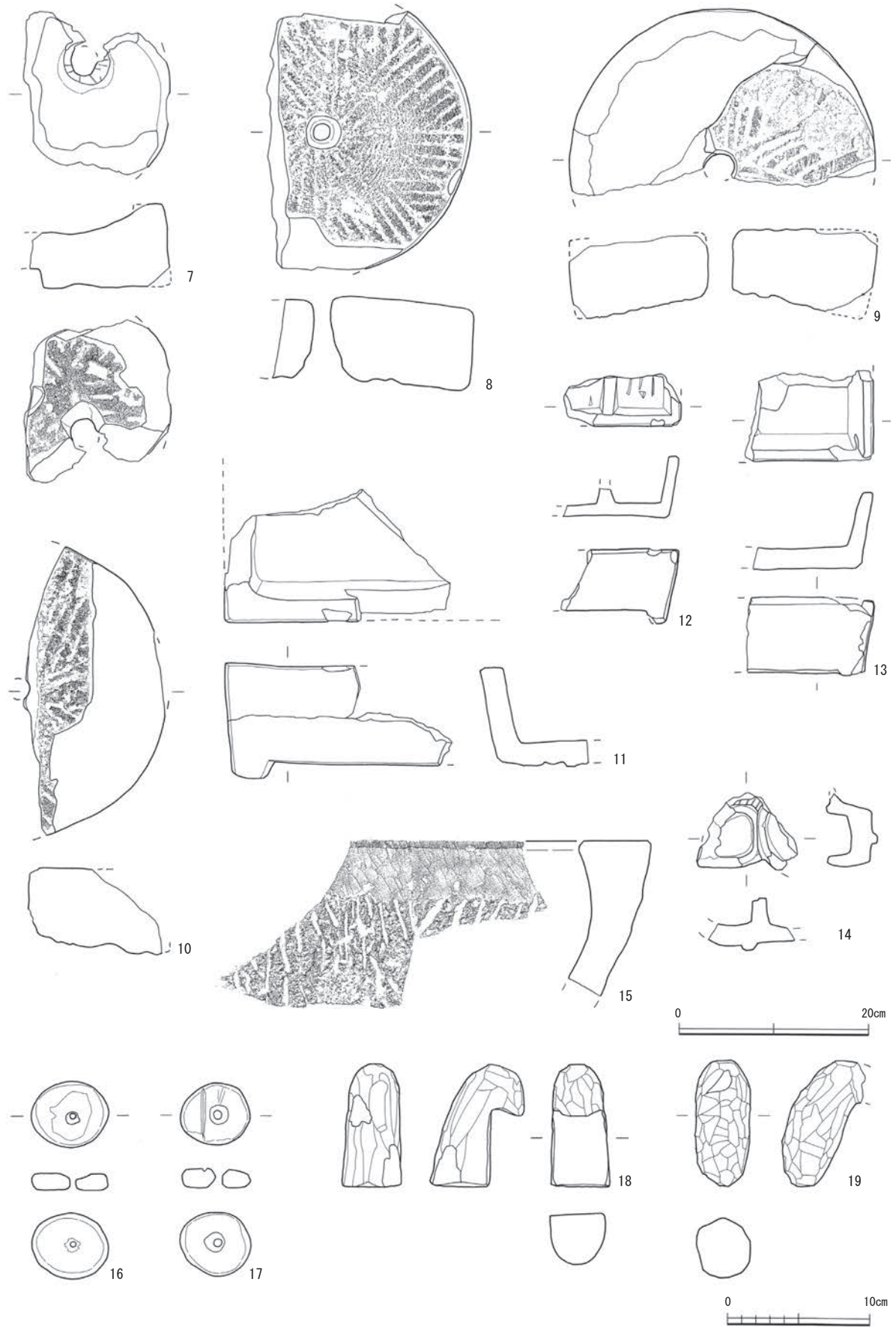
(4) 木村孝一郎 2011 「越前焼の編年的研究と生産地の動向」『越前焼・常滑焼』第10回 山陰中世土器検討会



第44図 行火実測図 (縮尺1/6)



第45図 石臼実測図1 (縮尺1/6)

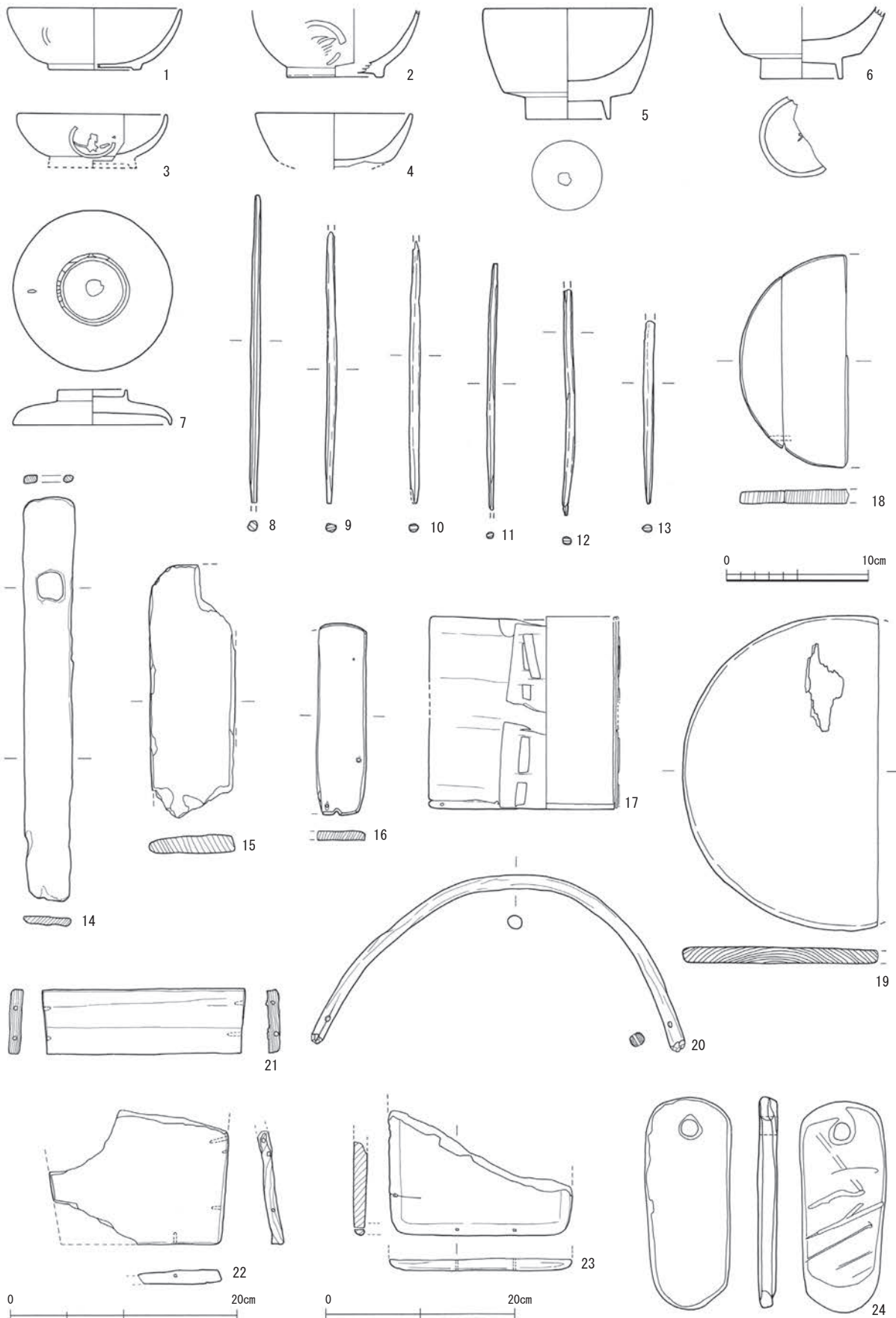


第46図 石臼実測図2・その他の石製品実測図（縮尺7～15：1/6、16～19：1/4）

第3節 遺物

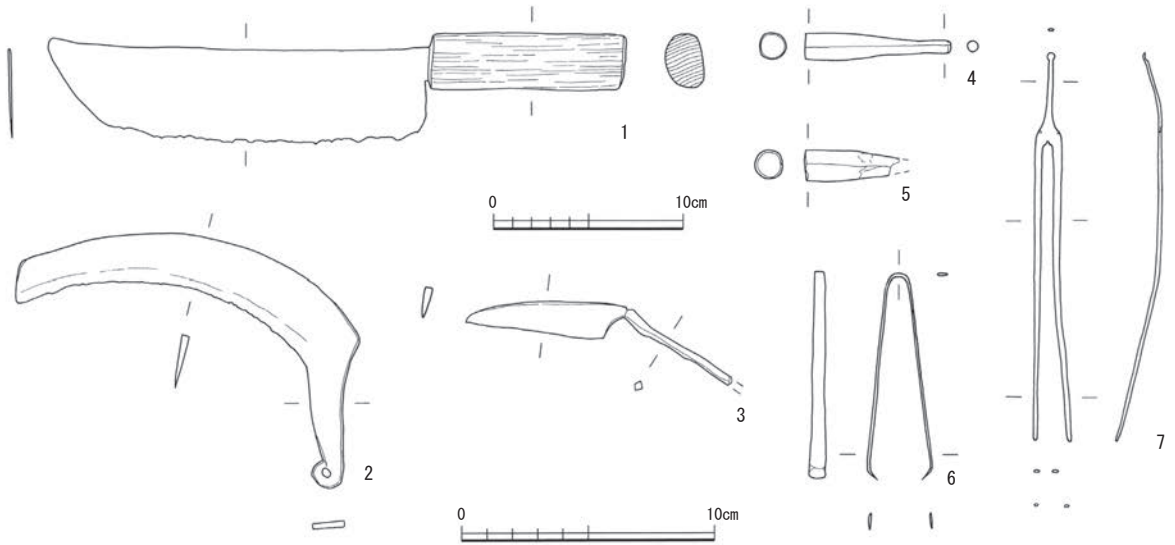


第47図 砥石・硯実測図 (縮尺1/4)

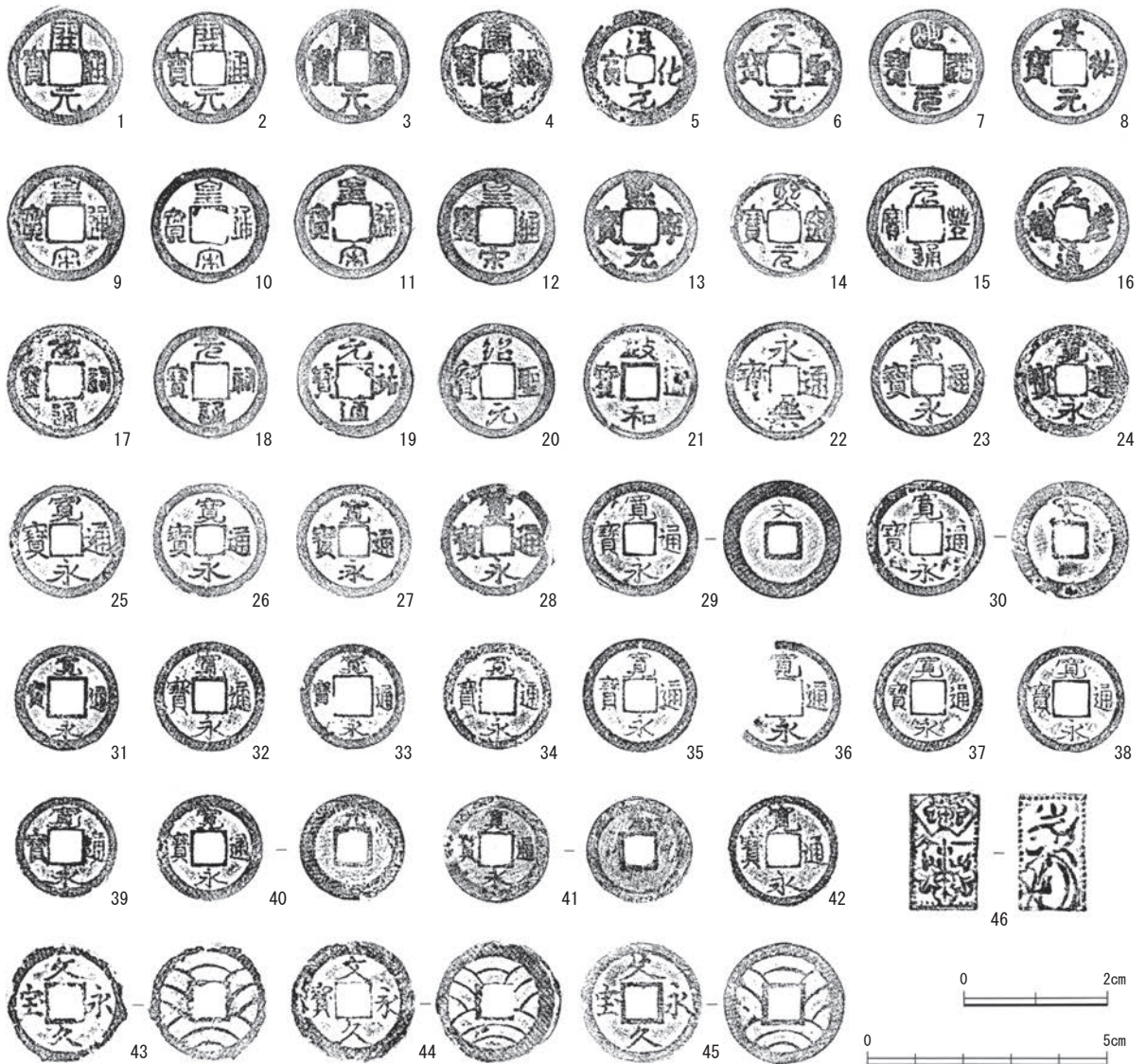


第48図 漆器・木製品実測図 (縮尺1~13・18 : 1/4、14~17・20~23 : 1/5、19・24 : 1/6)

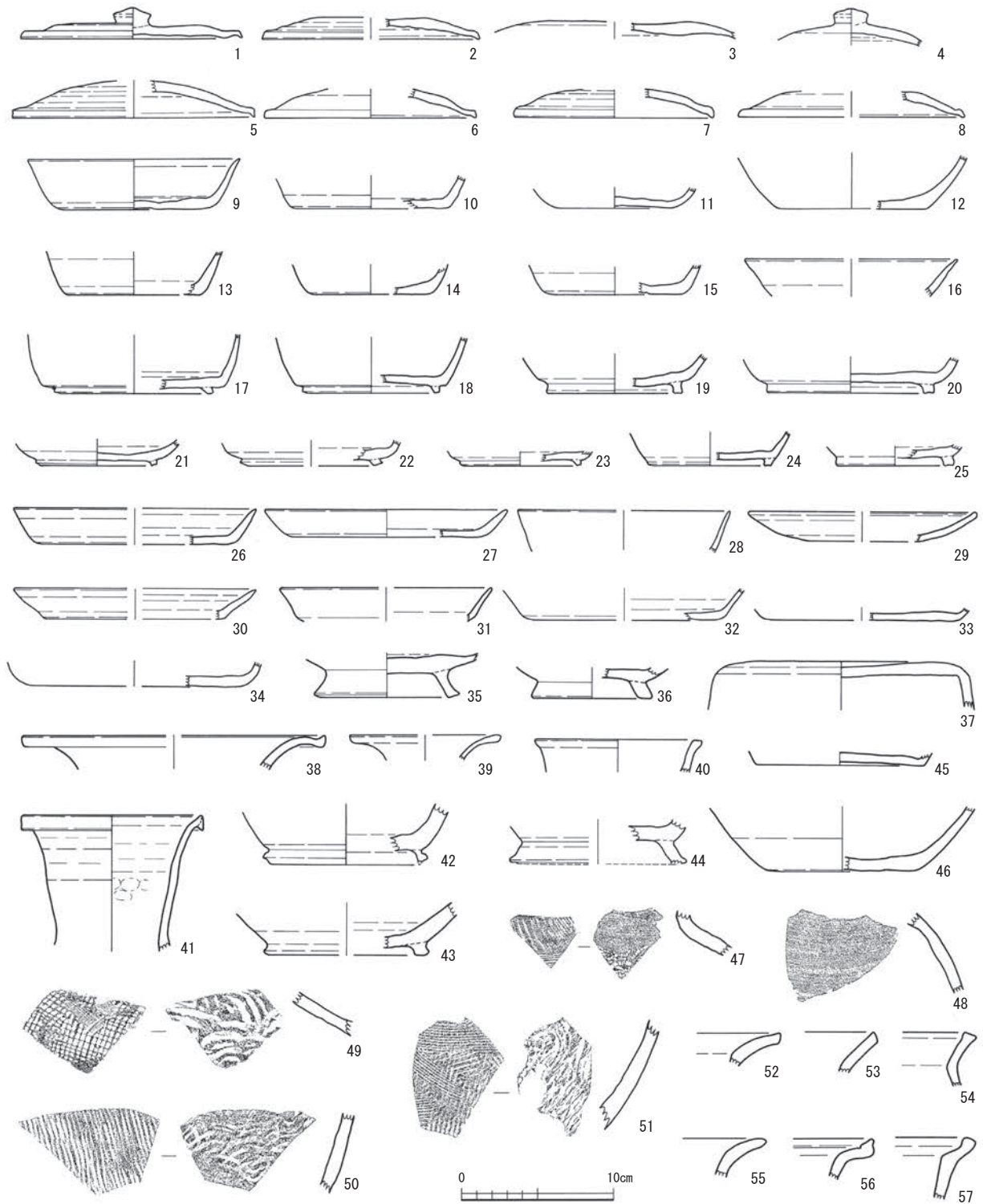
第3節 遺物



第49圖 金屬製品実測図 (縮尺1・2 : 1/4、3~7 : 1/3)



第50圖 錢貨・貨幣拓影 (縮尺1~45 : 2/3、46 : 1/1)



第51図 須恵器・土師器実測図（縮尺1/4）



第52図 縄文土器実測図（縮尺1/3）

第3節 遺物

第2表 土器・陶磁器観察表（第32～43図）

（ ）は残存値

No.	種別		出土地点		法量 (cm)			成形・調整・その他	陶磁器：産地 土師質：灯芯油痕	陶磁器：釉薬・装飾 土師質：色調	備考
			区	包含層 遺構	口径	底径	器高				
1	陶器	甕	G2-3	SK02	-	-	(5.6)	粘土継ぎみ上げ 横ナデ 底)未調整	越前	内面自然釉	
2	陶器	碗	F4	SK05	9.8	4.6	6.3	ロクロ成形 削出高台 畳付無軸 染付 外)草花文	伊万里	透明釉	陶胎染付 大橋Ⅳ期
3	土製品	土鈴	F4	SK05	高4.6	幅3.7	厚3.7	手づくね 底部切込み	-	5YR7/6橙	
4	土師質 土器	皿	F4	SK03	(10.5)	-	-	型成形 口) 回しナデ 外) ナデ	口) 煤痕	10YR8/2灰白	J2a類
5	土師質 土器	皿	F4	SK03	(11.4)	-	-	型成形 口) 回しナデ 外) ナデ	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	J2a類
6	土師質 土器	皿	F4	SK03 No1	10.8	-	2.1	型成形 口) ナデ	口) 煤痕	10YR8/2灰白	J3a類
7	土師質 土器	皿	F4	SK03	10.1	-	1.8	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口・底) 煤・油痕	2.5YR8/2灰白	J3a類
8	土師質 土器	皿	F4	SK03 No4	10.5	-	2.0	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/4浅黄橙	J3a類
9	土師質 土器	皿	F4	SK03	10.5	-	1.9	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕ナデ消し	口) 煤痕	10YR8/4浅黄橙	J3a類
10	土師質 土器	皿	F4	SK03 No2	11.9	-	1.8	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	2.5YR8/3淡黄	J3a類
11	磁器	筒碗	F4	SK03	8.0	3.8	6.4	ロクロ成形 削出高台 畳付無軸 染付 内) 四方襷 見込) 二重圏線・五弁花文 (コンニャク印判)	伊万里	外: 青磁釉 内: 透明釉	大橋Ⅴ期
12	磁器	筒碗	F4	SK03	(8.0)	-	(5.7)	ロクロ成形 染付 内) 四方襷 見込) 二重圏線	伊万里	外: 青磁釉 内: 透明釉	大橋Ⅴ期
13	陶器	碗	F4	SK03	-	4.2	(5.3)	ロクロ成形 削出高台 畳付無軸 胴部沈線 上下軸掛け分け	瀬戸・美濃	灰釉・鉄釉	腰箱碗 登窯第3段階
14	陶器	壺	F4	SK03	(12.8)	-	(6.2)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ 指頭痕	越前	鉄泥	
15	陶器	鉢	F4	SK03	(24.0)	-	(4.0)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	鉄泥	Ⅷ-2期
16	陶器	播鉢	E5	SK03	-	(14.8)	(8.7)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 紐起こし痕 内) 回転ナデ	越前	無軸	播目: 2.8cm幅10条
17	土師質 土器	皿	F4	SK04	(9.3)	-	-	型成形 口) 回しナデ 外) ナデ 底) 板目痕	-	10YR8/2灰白	J1類
18	土師質 土器	皿	F4	SK04	10.1	-	1.5	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 外) ナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	J2a類
19	土師質 土器	皿	F4	SK04	(11.1)	-	1.7	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 外) ナデ 底) 不明	-	10YR8/2灰白	J2a類
20	土師質 土器	皿	F4	SK04	(9.4)	-	1.5	型成形 口) 不明 外) ナデ 底) 板目痕	-	7.5YR7/4にぶい橙	J3a類
21	土師質 土器	皿	F4	SK04	(11.7)	-	-	型成形 口) 回しナデ 外) ナデ 底) 板目痕	口・見込・外) 煤・油痕	10YR8/4浅黄橙	J3a類
22	陶器	天目碗	D4	SK13	(11.5)	4.0	5.5	ロクロ成形 削出高台 露胎部錆軸	瀬戸・美濃	鉄釉	大窯第3段階後半～ 第4段階
23	陶器	天目碗	D3・4	SK15	(12.0)	-	(5.5)	ロクロ成形 露胎部錆軸	瀬戸・美濃	鉄釉	大窯第3段階後半～ 第4段階
24	陶器	折縁皿	D4	SK15	(11.4)	-	(2.2)	ロクロ成形	瀬戸・美濃	灰釉	大窯第3段階期 被熱により釉がはげる
25	陶器	播鉢	D3・4 F5	SK15 II	-	-	(8.6)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無軸	播目: 3.1cm幅10条 Ⅴ-3期
26	土製品	土鈴	D4	SK15	高3.0	幅3.1	厚2.8	手づくね 底部切込み	-	10YR8/3浅黄橙	
27	陶器	甕	D3・4	SK15	-	-	(2.7)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	無軸	Ⅳ-1期
28	土師質 土器	皿	E6	SK21底面	10.0	-	1.5	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) ナデで板目痕を消す	-	2.5YR8/2灰白	J2a類
29	土師質 土器	受皿	E6	SK21	(11.2)	-	-	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕	口・見込) 煤・油痕	10YR8/2灰白	J3b類 把手部欠損 支点あり
30	陶器	播鉢	E6	SK21	-	-	(8.8)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無軸	播目: 2.7cm幅9条 Ⅵ-1期
31	土師質 土器	皿	E6	SK23	(10.1)	-	-	手づくね 口) 回しナデ 外) 指頭痕とナデ	口) 煤痕	7.5YR8/3浅黄橙	E類
32	土師質 土器	皿	E6	SK23	(10.6)	-	-	手づくね 口) 回しナデ 外) 指頭痕とナデ	-	7.5YR7/4にぶい橙	E類
33	土師質 土器	皿	E6	SK23	(8.8)	-	1.6	型成形 口) 回しナデをナデ抜く? 外) 指頭痕	口) 煤痕	7.5YR7/4にぶい橙	H1a類
34	土師質 土器	皿	E6	SK25	(8.9)	-	1.6	手づくね 口・見込) 回しナデ 外) 指頭痕と工具によるナデ	-	7.5YR8/6浅黄橙	E類
35	土師質 土器	皿	E5	SK27	(10.4)	-	1.3	手づくね 口・見込・外) 回しナデ 底) やや粗いナデ	口) 煤痕	7.5YR8/4浅黄橙	E類
36	土師質 土器	皿	E5	SK27	8.7	-	1.8	手づくね 口) 回しナデ 見込) ナデ 外・底) ナデ	口) かすかに煤痕	7.5YR8/6浅黄橙	G類
37	土師質 土器	皿	E5	SK27	8.3	-	1.7	手づくね 口) 回しナデ 見込) 不明 外・底) 不明	口) 煤痕	7.5YR8/6浅黄橙	G類
38	土師質 土器	皿	E5	SK27	(9.0)	-	-	型成形 口) 回しナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕?	口) 煤痕	7.5YR7/4にぶい橙	H1a類
39	土師質 土器	皿	E5	SK27	(10.2)	-	1.4	型成形 口) 回しナデ 見込) 不明 外) 不明 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	H1a類
40	土師質 土器	皿	E5	SK27	(10.4)	-	-	型成形 口) 回しナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕	口) 煤痕	5YR7/6橙	破片のため分類不明

第3章 小野遺跡の調査

No	種別	出土地点		法量 (cm)			成形・調整・その他	陶磁器：産地 土師質：灯芯油痕	陶磁器：釉薬・装飾 土師質：色調	備考	
		区	包含層 遺構	口径	底径	器高					
41	土師質土器	皿	E5	SK27	(10.4)	-	1.1	型成形 口) 回しナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	H1a類
42	土師質土器	皿	E5	SK27	(11.2)	-	-	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ? 外) 指頭痕 底) 板目痕	口) 煤痕	7.5YR7/4にぶい橙	H1a類
43	土師質土器	皿	F5	SK27	(9.9)	-	1.6	型成形 口・見込) 回しナデ 底) 不明	-	7.5YR8/3浅黄橙	J2a類
44	土師質土器	皿	E5	SK27	10.2	-	1.5	型成形 口) 回しナデ 見込) 楕円のナデ 外) 指頭痕 底) ナデ	口) かすかに煤痕	7.5YR8/6浅黄橙	J2a類
45	土師質土器	皿	E5	SK27	(10.6)	-	1.4	型成形 口) 不明 底) 板目痕	-	10YR8/2灰白	J2a類
46	土師質土器	皿	E5	SK27	10.8	-	2.2	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) ナデで板目痕を消す	口) 煤痕	10YR8/2灰白	J3a類 底) 丁寧なナデ
47	土師質土器	皿	E5	SK27	11.7	-	2.0	型成形 口) 回しナデをナデ抜く 見込) 一方向のナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕	口) 煤痕	7.5YR8/6浅黄橙	J3a類
48	土師質土器	受皿	E5	SK27	(10.9)		(2.1)	型成形? 口) 回しナデ 見込) 不明 底) 不明	見込) 油痕	5YR7/6橙	J3b類 把手部貼付け 支点剥落
49	陶器	碗	E5	SK27	(10.4)	(4.2)	6.8	ロクロ成形 削出高台 畳付・高台内無軸	瀬戸・美濃	不明	登窯第2段階 被熱により釉剥落
50	磁器	半筒碗	E5	SK27	(9.2)	(3.6)	6.8	ロクロ成形 削出高台 高台無軸 鉄絵 外) 樹木	信楽	灰釉	
51	陶器	碗	E5	SK27	(12.4)	5.8	5.1	ロクロ成形 削出高台 畳付・高台内無軸 染付?	唐津	被熱により、釉・染 付はげれる	京焼風浅丸碗 大橋IV期
52	磁器	皿	E5	SK27	(12.0)	(7.1)	2.5	ロクロ成形 削出高台 口サビ 染付 外) 唐草 内) 雲・雷文を墨弾きで描く	伊万里	透明釉	大橋IV期
53	陶器	皿	E5	SK27	-	(4.8)	(1.8)	ロクロ成形 削出高台 高台無軸 見込) 蛇ノ目釉剥ぎ	唐津	外: 灰釉 内: 緑釉	大橋III~IV期
54	陶器	皿	E5	SK27	-	(3.5)	(2.5)	ロクロ成形 内) 胎土目痕 底) 碁笥底	唐津	灰釉	大橋I~II期
55	陶器	甕	E5	SK27	-	-	(3.3)	ロクロ成形 内) 回転ナデ 外) 回転ナデ	越前	鉄泥	Ⅷ-2期
56	陶器	鉢	D6	SK28	-	-	(6.8)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	鉄泥	IX期
57	磁器	碗	F6	SK32	-	(5.0)	(2.0)	ロクロ成形 削出高台 高台内軸拭取り 見込) 文様不明	中国	青磁釉	
58	陶器	描鉢	D6	SK30	-	-	(6.5)	粘土継積み上げ 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ 紐起こし 底) 未調整	越前	無軸	描目: 3.3cm幅12条
59	磁器	皿	E6	SK37	(12.0)	3.7	3.4	ロクロ成形 削出高台 見込) 蛇ノ目釉剥ぎ 染付 内) 草花?	伊万里	透明釉	大橋IV期
60	土師質土器	皿	D6	SK40	(10.4)	-	-	手づくね 口) 回しナデをナデ抜く 外) 指頭痕と工具によるナデ	-	10YR8/3浅黄橙	F1類
61	陶器	丸碗	D6	SK40	-	(5.4)	(2.1)	ロクロ成形 貼付高台 底) 輪トチ痕	瀬戸・美濃	灰釉	大窯期
62	土師質土器	皿	D6	SK41	(10.6)	-	2.2	手づくね 口) 回しナデ 外) 指頭痕	-	7.5YR8/3浅黄橙	F1類
63	土師質土器	皿	D6	SK41	(8.8)	-	1.8	手づくね 口) 回しナデをナデ抜く? 外・底) 指頭痕	-	7.5YR7/5にぶい橙	F2類
64	陶器	描鉢	D6	SK42	-	-	(6.2)	粘土継積み上げ 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無軸	描目: 8条以上 Ⅷ-1期
65	陶器	丸皿	D・E5	SK44	-	(6.0)	(0.9)	ロクロ成形 削出高台 見込) 輪トチ痕 底) 輪トチ痕	瀬戸・美濃	灰釉	ソギ皿 大窯第4段階
66	土師質土器	皿	D6	SK45	(10.8)	-	1.7	型成形 口) 回しナデをナデ抜く 外) ナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	7.5YR8/6浅黄橙	H1a類
67	土師質土器	皿	D6	SK45	(9.0)	-	1.2	型成形 口・見込) 回しナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕	-	7.5YR8/3浅黄橙	H1a類
68	陶器	碗	D6	SK45	-	3.0	(1.7)	ロクロ成形 削出高台 高台無軸	信楽	灰釉	
69	陶器	鉢	D6	SK45 SD15	(22.6)	(15.0)	7.9	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ 底) 未調整 脚部) 粘土塊貼付け	越前	底面以外鉄泥 自然釉	脚部1か所残存 Ⅷ-2期
70	陶器	甕	D6	SK45	-	-	(4.7)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	鉄泥	Ⅷ-2期
71	土師質土器	皿	L10	SK74	(12.0)	-	-	手づくね 不明	-	7.5YR7/6橙	A1類
72	土師質土器	皿	H13	SK78	9.8	-	1.6	型成形 口) 回しナデをナデ抜く 外) 指頭痕	口・体) 煤・油痕	10YR7/2 にぶい黄橙	F2類
73	陶器	丸碗	H13	SK78	11.2	4.8	6.8	ロクロ成形 削出高台 高台無軸	瀬戸・美濃	鉄釉	登窯第2段階 被熱により煤付着
74	陶器	甕	H13	SK78	-	-	-	ナデ	越前	自然釉	押印
75	陶器	甕	G11	SK79	-	-	-	粘土継積み上げ 外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	鉄泥	Ⅷ-2期
76	陶器	壺	G11	SK79	-	-	(6.1)	粘土継積み上げ 外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	無軸	肩部突帯
77	陶器	碗	F10	SK80	(11.0)	-	(6.5)	ロクロ成形	瀬戸・美濃	鉄釉・錆釉	登窯第1段階
78	陶器	壺	F10-13	SK80	(5.4)	(7.4)	9.5	粘土継積み上げ 外) 回転ナデ ヘラ掻き 内) 横ナデ・指頭痕	越前	無軸	ヘラ記号一部残存
79	磁器	紅皿	F10	SK81	(5.0)	(1.6)	1.5	型成形 菊花形	伊万里	白磁釉	大橋V期
80	陶器	茶入	F10	SK81	(2.6)	4.2	(8.8)	ロクロ成形 底) 回転糸切り 体下部~底部無軸	瀬戸・美濃	鉄釉	登窯期 底面砂融着

第3節 遺物

No	種別		出土地点		法量 (cm)			成形・調整・その他	陶磁器：産地 土師質：灯芯油痕	陶磁器：釉薬・装飾 土師質：色調	備考
			区	包含層 遺構	口径	底径	器高				
81	陶器	折縁皿	F10 E11	SK81 I	(13.0)	(7.4)	3.0	ロクロ成形 高台無軸 外) 回転ナデ・ケズリ 内) 回転ナデ 見込) 蘭竹文? 底) 回転ヘラ切り 貼付高台	瀬戸・美濃	灰釉・鉄絵	登窯第1段階 被熱により煤付着
82	磁器	皿	F11	SK81	-	4.5	(1.9)	ロクロ成形 削出高台 畳付無軸 染付 見込) 松・壺	伊万里	透明釉	大橋Ⅲ～Ⅳ期
83	陶器	描鉢	F10	SK81	-	-	(7.4)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	描目：2.9cm幅9条 V-1期
84	陶器	鉢	F10	SK81	(32.6)	(20.0)	18.4	ロクロ成形 外) 回転ナデ・ケズリ 内) 回転ナデ 底) 未調整	越前	外底面以外鉄泥	Ⅶ-2期
85	陶器	鉢	F10	SK81	(40.4)	(14.7)	23.0	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ 底) 未調整	越前	外底面以外鉄泥	被熱痕あり Ⅶ-2期
86	陶器	大鉢	F10	SK81	(36.0)	-	(5.0)	ロクロ成形 外) 回転ナデ・ケズリ 内) 象嵌 (雷文・草花)	唐津	白化粧土・透明釉	三島手 大橋Ⅲ期
87	土師質 土器	皿	F11	SK83	(10.5)	-	(1.6)	手づくね 口) 回しナデ 見込) 指頭痕 外) 指頭痕と工具によるナデ	-	10YR8/3浅黄橙	E類
88	土師質 土器	皿	F11	SK84	(8.9)	-	2.2	手づくね 口) 回しナデをナデ抜く? 外・底) 指頭痕	口・外) 煤痕	10YR7/4 にぶい黄橙	F1類
89	陶器	描鉢	F11	SK84	(26.0)	-	(5.0)	粘土継積み上げ 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	描目：1.6cm幅6条 V-3期
90	陶器	丸碗	F11 F10	SK82 SK81	(10.8)	5.3	6.6	ロクロ成形 削出高台 高台無軸	瀬戸・美濃	灰釉	登窯第2段階 被熱により煤付着
91	磁器	碗	F11	SK82	(8.8)	4.6	6.4	ロクロ成形 削出高台 畳付無軸	伊万里	透明釉	大橋Ⅲ期
92	陶器	碗	F11	SK82	(9.8)	-	(5.7)	ロクロ成形	唐津	灰釉・緑釉流し	大橋Ⅲ期
93	陶器	折縁皿	F11	SK82	(12.4)	(8.0)	2.7	ロクロ成形 貼付高台 高台無軸 外) 回転ナデ・ケズリ	瀬戸・美濃	灰釉	登窯第1段階
94	磁器	皿	F11	SK82	-	-	(2.2)	ロクロ成形 削出高台 高台内施釉 染付 見込) 二重圏線 外) 圏線・唐草文	中国	透明釉	
95	陶器	描鉢	F11	SK82 SK84	-	-	(5.3)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	描目：2.9cm幅9条 V-3期
96	陶器	甕	F11	SK82	-	-	(6.0)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	鉄泥・自然釉	Ⅵ-3期
97	陶器	甕	F11	SK82	-	-	(5.1)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	鉄泥・自然釉	Ⅵ-3期
98	陶器	陶片	F11	SK82	長径 5.9	短径 5.2	厚 1.2	側面を研磨し、円盤状とする	越前	鉄泥	越前焼の甕を転用 重量38.1g
99	磁器	皿	F10	SK87	-	(7.6)	(2.3)	ロクロ成形 削出高台 高台畳付無軸 染付 見込) 圏線・玉取獅子文 外) 草花文	中国	透明釉	端反皿 景德鎮
100	陶器	鉢	F12 E12	SK89 I	(36.0)	-	(5.3)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	鉄泥	Ⅸ期以降
101	陶器	溝縁皿	E11	SK92	(11.8)	(3.0)	(3.5)	ロクロ成形 削出高台 高台無軸 砂目痕あり	唐津	灰釉	大橋Ⅱ期 被熱により釉がはげる
102	陶器	天目碗	E11	SK94	(12.0)	-	(2.9)	ロクロ成形	瀬戸・美濃	鉄釉	登窯第2段階
103	土師質 土器	皿	F13	SK96	9.5	-	1.9	型成形 口・見込) 回しナデをナデ抜く 外) 指頭痕	口) 煤痕	10YR8/2灰白	F2類
104	土師質 土器	皿	F13	SK96	10.3	-	2.1	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方方向のナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕	内外) 煤・油痕	不明	J3a類
105	土師質 土器	皿	F13	SK96	10.8	-	1.9	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方方向のナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕ナデ消し	口) 煤痕	10YR8/2灰白	J3a類
106	土師質 土器	皿	F13	SK96	11.6	-	2.1	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方方向のナデ 底) 板目痕	口・見込) 煤・油痕	10YR8/2灰白	J3a類
107	陶器	甕	F13	SK96	-	-	(4.2)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	鉄泥・自然釉	Ⅶ-1期
108	陶器	甕	G16	SK105	-	-	(5.8)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	鉄泥	Ⅶ-1期
109	陶器	碗	G16	SK105	-	4.4	(2.3)	ロクロ成形 削出高台 高台無軸	瀬戸・美濃	鉄釉	腰箱碗 登窯第3段階
110	陶器	描鉢	D12	SK99	-	-	(9.0)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	描目8条以上 Ⅵ-2期
111	陶器	描鉢	F12	SK104	(30.0)	-	(6.5)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	自然釉	描目：2.0cm幅9条 被熱する Ⅸ期
112	陶器	鉢	F12	SK104	(35.8)	-	(11.5)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	内外：鉄泥	Ⅸ期
113	陶器	鉢	F12	SK104	-	(21.2)	14.3	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ 底) 未調整	越前	無釉	Ⅸ期
114	陶器	甕	F12	SK104	(17.2)	-	(7.9)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	鉄泥	紐耳1箇所残存 Ⅶ-2期新～Ⅸ期
115	陶器	甕	F12	SK104	(16.0)	-	(8.5)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	鉄泥	Ⅶ-2期新～Ⅸ期
116	陶器	壺	F12	SK104	-	(11.8)	(16.8)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	鉄泥	
117	陶器	描鉢	G10	SK106	37.4	15.0	12.5	ロクロ成形 口) 片口 外) 回転ナデ 紐起こし痕 内) 回転ナデ	越前	無釉	描目：3.1cm幅10条 被熱する Ⅳ-3期新
118	陶器	甕	G10	SK106	-	-	(4.7)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	無釉	Ⅳ-3期
119	陶器	壺	G10 G10	SK106 II	-	-	(13.3)	粘土継積み上げ 外) 横ナデ 内) 横ナデ・指頭痕	越前	無釉	肩部突帯

第3章 小野遺跡の調査

No	種別		出土地点		法量 (cm)			成形・調整・その他	陶磁器：産地 土師質：灯芯油痕	陶磁器：釉薬・装飾 土師質：色調	備考
			区	包含層 遺構	口径	底径	器高				
120	陶器	碗	G10	SK106	(8.6)	4.2	5.6	ロクロ成形 削出高台 高台無軸	瀬戸・美濃	灰釉	登窯第2段階
121	土師質 土器	皿	G10	SK106	(9.2)	-	(1.4)	手づくね 口) 回しナデ 外) 指頭痕・ナデ	口) 煤痕	2.5Y7/3浅黄	E類
122	陶器	播鉢	F11	SK107 I	(30.0)	(14.4)	10.5	ロクロ成形 外) 回転ナデ 紐起こし痕 内) 回転ナデ	越前	無釉	播目：2.5cm幅8条 VI-1期
123	陶器	播鉢	F11	SK107	-	-	9.2	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	播目：2.5cm幅9条 被熱する VI-2期
124	陶器	皿	E11 F11	SK92 SK107	(12.2)	(7.0)	2.4	ロクロ成形 削出高台 高台内面・畳付無軸	瀬戸・美濃	長石釉	登窯第1段階前半 被熱により釉がはぜる
125	土師質 土器	皿	F2	SD02 1	10.0	-	1.7	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	-	7.5YR8/4浅黄橙	J2a類
126	土師質 土器	皿	F3	SD02 1	9.4	-	1.7	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 外) ナデ 底) 板目痕	-	10YR8/2灰白	J2a類
127	土師質 土器	皿	F2	SD02	10.2	-	1.6	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 工具で板目痕をナデ消す	口) 煤痕	7.5YR8/4浅黄橙	J2a類
128	土師質 土器	皿	F・G2	SD02 SD07	10.1	-	1.9	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 外) ナデ 底) 板目痕	口) かすかに煤痕	2.5YR8/2灰白	J3a類
129	土師質 土器	皿	F3	SD02 2	10.3	-	1.9	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 外) ナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/2灰白	J3a類
130	土師質 土器	受皿	F2	SD02	(10.8)	-	-	型成形 口) 回しナデ 見込) ナデ	見込・底) 油痕	5YR7/6橙	J3b類 把手部貼付け
131	磁器	蓋	F3	SD02 上	5.8	-	3.3	ロクロ成形 内) ナデ 外面のみ施釉	伊万里	青磁釉	柄み部は環形 大橋Ⅲ～Ⅳ期
132	磁器	瓶	F3	SD02	1.3	3.0	7.9	ロクロ成形 全面施釉 削出高台 染付 外) 梅鉢・笹	伊万里	透明釉	御神酒徳利 大橋Ⅴ期
133	磁器	筒碗	F3	SD02	(7.4)	-	(4.9)	ロクロ成形 染付 内) 四方襷	伊万里	外：青磁釉 内：透明釉	大橋Ⅴ期
134	磁器	筒碗	F3	SD02	(8.3)	(4.2)	6.7	ロクロ成形 削出高台 染付 外) 水裂・菊花文 内) 四方襷・二重圏線・五弁花文 底) 銘あり	伊万里	透明釉	大橋Ⅴ期
135	磁器	皿	F3	SD02 I	(13.2)	7.6	3.4	ロクロ成形 削出高台 全面施釉 染付 外) 唐草文 高台内) 圏線・銘「？」あり 内) 二重圏線・五弁花文 (コンニャク印判)・扇面・草花	伊万里	透明釉	高台畳付砂付着 高台 裏銘あり 被熱痕あり 大橋Ⅴ期
136	磁器	皿	F3	SD02	(11.8)	-	(2.4)	ロクロ成形 染付 内) 二重格子文 二重圏線	伊万里	透明釉	大橋Ⅴ期
137	陶器	甕	F2・3	SD02	(28.8)	-	(10.8)	粘土紐積み上げ 外) 横ナデ 内) 横ナデ・指頭痕	越前	鉄泥・自然釉	内面敲打か？ Ⅶ-3期古
138	陶器	壺	F3 F3	SD02 I	11.4	-	(9.1)	粘土紐積み上げ 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ・指頭痕	越前	外面～内面頸部まで 鉄泥	ヘラ記号 Ⅵ期以降
139	陶器	播鉢	F3	SD02 1	(19.2)	11.6	6.7	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ 底) 未調整	越前	無釉	片口あり 播目は密 Ⅶ-3～Ⅶ期
140	土師質 土器	皿	F3	SD03 9	10.1	-	1.7	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 体) 指頭痕 底) 板目痕	口) かすかに煤痕	10YR8/4浅黄橙	J1類
141	土師質 土器	皿	F3	SD03 5	(9.4)	-	(1.6)	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	7.5YR7/4にぶい橙	J1類
142	土師質 土器	皿	F3	SD03 13	10.0	-	1.8	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	J2a類
143	土師質 土器	皿	F3	SD03 15	10.2	-	1.8	型成形 口) 回しナデ 見込) 不明 底) 不明	口) かすかに煤痕	7.5YR8/6浅黄橙	J2a類
144	土師質 土器	皿	F3	SD03 9	10.3	-	1.9	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/4浅黄橙	J3a類
145	土師質 土器	皿	F3	SD03 16	10.2	-	1.9	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕ナデ消し	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	J3a類 147の皿
146	土師質 土器	皿	F3	SD03 12	10.8	-	1.7	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	J3a類
147	土師質 土器	受皿	F3	SD03 16	11.0	把手含む 14.6	2.3	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕ナデ消し 把手) 貼付け後ナデ	口) 煤痕	7.5YR8/3浅黄橙	J3b類 145の受皿
148	土師質 土器	受皿	F・G3	SD03	(10.4)	-	(2.6)	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕ナデ消し	底) 油痕	10YR8/3浅黄橙	J3b類 把手部貼付け
149	磁器	碗	F3 F2・3	SD03 II	(11.2)	4.4	5.3	ロクロ成形 削出高台 見込) 蛇ノ目軸刺ぎ 染付 外) 草文?	伊万里	染付・透明釉	大橋Ⅳ期
150	陶器	半球碗	F3 G2	SD03 I	(8.8)	3.6	5.3	ロクロ成形 削出高台 高台無軸 色絵 外) 松・笹文	京・信楽	灰釉	被熱により色絵退色
151	壁土?		F3	SD03 7・8	長さ8.1 幅8.7 3.8	厚さ		ナデ	-	5YR6/6橙	
152	土師質 土器	皿	F2	SD04	10.0	-	1.5	型成形 口・見込) 回しナデ 体) 指頭痕 底) 板目痕ナデ消し	口) かすかに煤痕	10YR8/3浅黄橙	J2a類
153	陶器	鉢	F2	SD04	-	-	(9.2)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	鉄泥	Ⅶ-2期新
154	陶器	碗	F6	SD05	-	5.2	(1.9)	ロクロ成形 貼付高台 底) 輪トチ痕	瀬戸・美濃	灰釉	大窯期
155	土師質 土器	皿	F2・3	SD06	10.3	-	1.8	型成形 口) 回しナデ 見込) 短い一方向のナデ 底) 板目痕消し	口) 煤痕	10YR8/2灰白	J2a類
156	陶器	甕	F2・3	SD06	-	-	(10.7)	粘土紐積み上げ 外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	鉄泥・自然釉	Ⅶ-3期
157	陶器	壺	G2	SD08上	(18.6)	-	(6.0)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	鉄泥・自然釉	内面被熱により煤付着 Ⅶ-2期
158	陶器	播鉢	G2	SD08上	-	18.8	(5.3)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ 底) 高台貼付け後回転ナデ	越前	無釉	播目は密 被熱により煤付着 Ⅶ-1期

第3節 遺物

No	種別		出土地点		法量 (cm)			成形・調整・その他	陶磁器：産地 土師質：灯芯油痕	陶磁器：釉薬・装飾 土師質：色調	備考
			区	包含層遺構	口径	底径	器高				
159	磁器	瓶	G2	SD08上	-	-	(6.6)	ロクロ成形 染付 外) 竹・花文?	伊万里	透明釉	大橋V期
160	土製品	土鈴	G3	SD08上	高(4.0)	幅(3.5)	厚(3.3)	手づくね 切込みあり	-	10YR8/3浅黄橙	
161	陶器	蓋	G3	SD10砂利	(10.6)	摘み径 2.2	3.0	ロクロ成形 摘み上面削り 外) ケズリ+釉剥ぎ 口) 回転ナデ	不明	外：鉄釉 内：黄緑釉	在地産の雑器か?
162	土師質 土器	皿	G3	SD10砂利	9.6	-	1.6	型成形 口) 回しナデ 見込) 短い一方向のナデ 底) 板目痕	口) かすかに煤痕	10YR8/3浅黄橙	J2a類
163	陶器	皿	D6	SD15	12.3	8.2	2.5	ロクロ成形 削出高台 見込) 目痕あり 底) 目痕あり 鉄絵 内) 蕨文	瀬戸・美濃	鉄絵・灰釉	登窯第1~2前半
			D6	SD16							
164	陶器	碗	D6	SD15 I・II	(10.2)	4.2	6.8	ロクロ成形 削出高台 畳付無釉	瀬戸・美濃	灰釉	登窯第2段階
165	磁器	碗	D6	SD15	(9.0)	-	(4.9)	ロクロ成形 染付 外) 圈線	伊万里	透明釉・鉄絵	くらわんか碗 大橋V期
166	土師質 土器	皿	D6	SD15	7.8	-	1.8	手づくね 口) 回しナデ 見込) ナデ 外・底) 指頭痕	-	10YR8/2灰白	G類
167	土師質 土器	皿	D6	SD15	(10.6)	-	1.5	型成形 口) 回しナデ 見込) 不明 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/2灰白	H1a類
168	土師質 土器	皿	D6	SD15	(10.6)	-	1.7	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/4浅黄橙	H2類
169	土師質 土器	皿	D6	SD15	(8.6)	-	1.6	型成形 口) 回しナデをナデ抜く 見込) ナデ 底) 板目痕ナデ消し	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	I類
170	土師質 土器	皿	D6	SD15	10.0	-	1.6	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕	-	2.5YR8/2灰白	J1類
171	土師質 土器	皿	D6	SD15	(11.6)	-	1.5	型成形 口) 回しナデ 見込) ナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	J1類
172	土師質 土器	皿	D6	SD15	10.1	-	1.6	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕ナデ消し	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	J2a類
173	土師質 土器	皿	D6	SD15	9.5	-	1.6	型成形 口・見込) 回しナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕	口) かすかに煤痕	2.5YR8/4淡黄	J2a類
174	土師質 土器	皿	D6	SD15	10.0	-	1.4	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕	口) 煤痕	7.5YR8/6浅黄橙	J2a類
175	土師質 土器	皿	D6	SD15	10.2	-	1.7	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕ナデ消し?	見込) 油痕	10YR8/3浅黄橙	J2a類
176	土師質 土器	皿	D6	SD15	10.5	-	1.9	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) かすかに煤痕	10YR8/3浅黄橙	J2a類
177	土師質 土器	皿	D6	SD15上	10.1	(6.3)	1.6	型成形 口) 回しナデ 見込) 短い一方向のナデ 底) 板目痕	油痕	7.5YR8/6浅黄橙	J2a類
178	土師質 土器	皿	D6	SD15	9.8	-	1.9	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) かすかに煤痕	10YR8/3浅黄橙	J2a類
179	土師質 土器	皿	D6	SD15	12.0	-	2.1	型成形 口) 回しナデ 見込) 不明 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	J3a類
180	土師質 土器	皿	D6	SD15	10.4	-	1.8	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕ナデ消し	口・見込) 煤・油痕	10YR8/3浅黄橙	J3a類
181	土師質 土器	皿	D6	SD15	10.4	-	1.8	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/2灰白	J3a類
182	土師質 土器	皿	D6	SD15	11.0	-	2.0	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕ナデ消し	口・見込) 煤・油痕	7.5YR8/4浅黄橙	J3a類
183	土師質 土器	皿	D6	SD15	11.8	-	2.1	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	-	10YR8/2灰白	J3a類
184	土師質 土器	皿	D6	SD15	9.3	-	1.8	型成形 口) 回しナデをナデ抜く 見込) ナデ 底) 板目痕ナデ消し	口) 煤痕	10YR8/4浅黄橙	J3a類 焼成後穿孔径4mm
185	土師質 土器	受皿	D6	SD15	9.0 把手含む (11.6)	-	1.8	型成形 口) 回しナデ 見込) 不明 底) 板目痕ナデ消し 把手) 貼付け後ナデ	内・外) 煤・油痕	10YR8/3浅黄橙	J2b類 支点剥落
186	土師質 土器	受皿	D6	SD15	(10.6) 把手含む (13.9)	-	2.2	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 外) ナデ 底) 板目痕ナデ消し 把手) 貼付け後ナデ	口) 煤痕	7.5YR8/4浅黄橙	J3b類
187	土師質 土器	受皿	D6	SD15	10.4 把手含む (12.7)	(2.3)		型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕 把手) 貼付け後ナデ	見込) 油痕	7.5YR8/3浅黄橙	J3b類
188	土師質 土器	皿	H14	SD40	8.7	-	2.2	手づくね 口) 回しナデをナデ抜く 外) 指頭痕	口・見込) 煤・油痕	10YR7/2 にぶい黄橙	F1類
189	土師質 土器	皿	H14	SD40	8.8	-	1.9	手づくね 口) 回しナデをナデ抜く 外) 指頭痕	-	10YR7/3 にぶい黄橙	F1類
190	土師質 土器	皿	H14	SD40	8.6	-	2.1	手づくね 口・見込) 回しナデをナデ抜く 外・底) 指頭痕と工具によるナデ	口) 煤痕	10YR7/3 にぶい黄橙	F1類
191	土師質 土器	皿	H13	SD40	(9.5)	-	2.0	手づくね 口・見込) 回しナデをナデ抜く 外・底) 指頭痕	口) 煤痕	7.5YR8/4浅黄橙	F1類
192	土師質 土器	皿	H14	SD40	9.8	-	2.2	手づくね 口・見込) 回しナデをナデ抜く 外) 指頭痕 底) ナデ	口) 煤痕	7.5YR8/4浅黄橙	F1類
193	土師質 土器	皿	I13	SD40	(10.2)	-	2.0	手づくね 口) 回しナデ 見込) ナデ 外) 指頭痕 底) ナデ	口) 煤痕	2.5YR8/3淡黄	F1類
194	土師質 土器	皿	H14	SD40	(8.2)	-	1.6	手づくね 口) 回しナデ 見込) 不明 外) 指頭痕 底) ナデ	口) 煤痕	7.5YR7/4にぶい橙	F1類
195	土師質 土器	皿	H14	SD40	(9.6)	-	2.1	手づくね 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ? 外) 指頭痕 底) ナデ	口) かすかに煤痕	10YR7/2 にぶい黄橙	F1類
196	土師質 土器	皿	I13	SD40	10.1	-	2.4	手づくね 口) 回しナデをナデ抜く 外・底) 指頭痕	口・見込) 煤・油痕	5YR7/6橙	F1類
197	土師質 土器	皿	H14	SD40	8.8	-	2.1	手づくね 口) 回しナデ 見込) ナデ 底) 指頭痕	口) かすかに煤痕	7.5YR7/6橙	F2類
198	土師質 土器	皿	H14	SD40	(8.6)	-	1.7	手づくね 口・見込) 回しナデ 外) 指頭痕	-	7.5YR6/4にぶい橙	F2類

第3章 小野遺跡の調査

No	種別		出土地点		法量 (cm)			成形・調整・その他	陶磁器：産地 土師質：灯芯油痕	陶磁器：釉薬・装飾 土師質：色調	備考
			区	包含層 遺構	口径	底径	器高				
199	土師質 土器	皿	I13	SD40上	9.6	-	1.9	型成形 不明	口) 煤痕	10YR8/2灰白	H1a類
200	土師質 土器	受皿	H14	SD40	10.4 把手含む (12.0)		(2.7)	型成形 口) 回しナデ 見込) ナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕ナデ消し 把手) 貼付け後ナデ	口) 煤痕	7.5YR7/3にぶい橙	H1b類
201	陶器	皿	I13 H13	SD40 I	(11.8)	(8.2)	2.8	ロクロ成形 底) 回転ヘラ削り 底部外面無釉 鉄絵 見込) 圏線・草花文	瀬戸・美濃	長石釉	登窯第1～2前半 見込) トナン痕あり
202	陶器	皿	H14	SD40	(10.8)	(6.6)	2.2	ロクロ成形 削出高台 畳付無釉	瀬戸・美濃	灰釉	登窯第1～2前半 被熱により釉はぜる
203	陶器	皿	H14	SD40	(11.8)	(7.8)	2.3	ロクロ成形 削出高台 畳付高台内無釉	瀬戸・美濃	灰釉・見込みに銅緑 釉あり	登窯第1～2前半 被熱により釉はぜる
204	陶器	皿	H14	SD40	(8.6)	(5.6)	1.3	ロクロ成形 高台内無釉	瀬戸・美濃	灰釉	登窯第1～2前半 高台：胎土目痕付着
205	磁器	皿	H14 I13	SD40 II	(12.8)		4.2	ロクロ成形 削出高台 高台無釉 見込) 蛇ノ目釉剥ぎ 染付 見込) 圏線	伊万里	透明釉	大橋IV期 片薄高台
206	磁器	皿	H14	SD40	-		4.3	(2.7) ロクロ成形 削出高台 高台無釉 見込) 釉剥ぎ 染付 文様不明	伊万里	透明釉	大橋IV期 被熱により釉が変色
207	陶器	皿	H14	SD40	-	(4.2)	(2.1)	ロクロ成形 削出高台 高台無釉 見込) 砂目痕3ヶ所残存	唐津	灰釉	大橋II期
208	磁器	皿	H14	SD40	-	(6.2)	(1.6)	底部に青花銘 高台畳付露胎	中国	白磁	端反皿 景德鎮
209	磁器	鉢	H14	SD40	(13.4)	5.4	4.9	ロクロ成形 削出高台 畳付無釉 染付 見込) 草花文・圏線	中国	透明釉	漳州窯 輪花口縁 畳付砂付着
210	陶器	瓶	H14	SD40	-	4.5	(3.0)	ロクロ成形 削出高台 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ 裾部～底面無釉	瀬戸・美濃	鉄釉	仏飯器か？ 登窯期
211	陶器	天目碗	H14	SD40	(12.0)	-	(5.9)	ロクロ成形 削出高台 露胎部無釉	瀬戸・美濃	鉄釉	大窯第3段階後半 ～4段階
212	陶器	丸碗	H14	SD40	10.0	4.4	6.4	ロクロ成形 削出高台 外) 刷毛目 (波状文) 内) 刷毛目 (打刷毛)	唐津	白化粧土・透明釉	大橋III期
213	磁器	碗	H14 I13 I13	SD40 SD40上層 トレンチ	8.2	(3.6)	4.8	ロクロ成形 削出高台 畳付無釉 染付 外) 一重網目文・圏線	伊万里	透明釉	大橋IV期
214	陶器	鉢	I13 H14	SD40 I	(33.0)	-	(15.6)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	内面のみ鉄泥	平面やや歪む VI-3期か？
215	陶器	鉢	H13	SD40	-	-	(8.5)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	IV-1期
216	陶器	播鉢	H14	SD40	-	-	(4.8)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	自然釉	播目：2.5cm幅11条 VI-2期
217	陶器	播鉢	H14 H14	SD40 I	35.8	15.8	16.0	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ 底) 未調整	越前	自然釉	播目：2.6cm幅8条 VII-1期古
218	陶器	甕	H14	SD40	-	-	(15.6)	粘土紐積み上げ 外) ナデ 内) ナデ+指ナデ	越前	内外：鉄泥 (粗い)	肩部：記号文 VI-1期
219	陶器	鉢	F11	SD41	(23.9)	-	(6.7)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	鉄泥	VII-2期
220	陶器	鉢	F11	SD41	(13.4)	-	(4.5)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	唐津か？	灰釉・薬灰釉	片口か？
221	土師質 土器	皿	D6	SD16	(10.2)	-	1.4	手づくね 口) 回しナデ 見込) 不明 体) 指頭痕 底) 不明	口) 煤痕	5YR7/6橙	E類
222	土師質 土器	皿	D6	SD16	9.0	-	2.1	型成形 口) 回しナデをナデ抜く 外) 指頭痕 底) 板目痕	-	7.5YR7/4にぶい橙	H1a類
223	土師質 土器	皿	D6	SD16	10.0	-	1.6	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方方向のナデ 底) 板目痕ナデ消し	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	J2a類
224	土師質 土器	皿	D6	SD16	10.2	-	1.8	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方方向のナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/2灰白	J2a類
225	土師質 土器	皿	D6	SD16	9.9	-	1.5	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方方向のナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	J2a類
226	土師質 土器	皿	D6	SD16	(10.5)	-	1.6	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方方向のナデ 体) 指頭痕 底) 板目痕	口) かすかに煤痕	10YR8/3浅黄橙	J2a類
227	陶器	碗	D6	SD16	(10.0)	(5.0)	6.7	ロクロ成形 削出高台 高台無釉	瀬戸・美濃	鉄釉	被熱痕あり 登窯第2段階
228	磁器	碗	E5	SD20	-	-	(2.8)	外) 雷文	中国	青磁釉	
229	土師質 土器	皿	M6	SD23	(9.6)	-	-	型成形 口) 回しナデ 見込) 不明 外) 指頭痕	見込) 油痕	7.5YR7/6橙	J1類
230	土師質 土器	皿	F8	SD21	10.1	-	1.8	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方方向のナデ 外) 指頭痕 底) ナデ	口) 煤痕	7.5YR8/4浅黄橙	J2a類 底部被熱痕
231	土師質 土器	皿	F8	SD21	(11.5)	-	1.5	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方方向のナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕ナデ消し	見込) 油痕	10YR8/3浅黄橙	J2a類
232	陶器	播鉢	M5	SD25	-	-	(6.0)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	播目：2.9cm幅13条 VII-1期
233	土師質 土器	皿	H13	SD38	(10.0)	-	-	型成形 口) 回しナデ 外) 指頭痕	見込) 外) 油痕	10YR8/2灰白	J2a類
234	土師質 土器	皿	H13	SD38	10.9	-	1.9	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方方向のナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕ナデ消し	見込) 油痕	10YR8/3浅黄橙	J3a類
235	土師質 土器	皿	H13	SD38	10.1	-	1.5	型成形 口) 見込) 回しナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/2灰白	J2a類
236	土師質 土器	皿	F13	SD43	(9.4)	-	-	手づくね 口) 回しナデ 外) 指頭痕	口) 煤痕	5YR7/6橙	E類
237	土師質 土器	皿	F13	SD43	(10.4)	-	1.6	手づくね 口) 回しナデ 外) 指頭痕 底) 不明	-	7.5YR8/3浅黄橙	E類

第3節 遺物

No	種別		出土地点		法量 (cm)			成形・調整・その他	陶磁器：産地 土師質：灯芯油痕	陶磁器：釉薬・装飾 土師質：色調	備考
			区	包含層 遺構	口径	底径	器高				
238	土師質 土器	皿	F13	SD43	(9.7)	-	-	型成形？ 口) 回しナデをナデ抜く 外) 指頭痕	-	10YR8/3浅黄橙	K類
239	土師質 土器	皿	F13	SD43	(10.0)	-	1.3	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 外) ナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	J1類
240	土師質 土器	皿	F13	SD43	(11.8)	-	1.4	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕	-	10YR8/3浅黄橙	J1類
241	土師質 土器	皿	F13	SD43	(10.0)	-	1.6	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 外) ナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/2灰白	J1類
242	土師質 土器	皿	F13	SD42	(10.8)	-	-	手づくね 口) 回しナデ 体) 指頭痕	口) 煤痕	10YR8/2灰白	E類
243	土師質 土器	皿	F13	SD42	(8.8)	-	-	手づくね 口・見込) 回しナデ 体) 指頭痕	口) 煤痕	10YR8/2灰白	F2類
244	土師質 土器	皿	F13	SD42	10.0	-	1.5	型成形 口) 回しナデをナデ抜く 外) 指頭痕 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/2灰白	H1a類
245	土師質 土器	皿	F13	SD42	10.2	-	1.7	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/2灰白	J1類
246	土師質 土器	皿	F13	SD42	9.9	-	1.8	型成形 口) 回しナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕	口) 煤痕	7.5YR8/6浅黄橙	J1類
247	土師質 土器	皿	F13	SD42	10.2	-	1.7	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	J1類
248	土師質 土器	皿	F13	SD42	10.0	-	1.5	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	-	10YR8/2灰白	J1類
249	土師質 土器	皿	F13	SD42	9.9	-	1.7	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕	口) 煤痕	7.5YR8/6浅黄橙	J1類
250	土師質 土器	皿	F13	SD42	10.2	-	1.4	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) かすかに煤痕	10YR8/2灰白	J1類
251	土師質 土器	皿	F13	SD42	(10.1)	-	1.5	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	7.5YR7/4にぶい橙	J1類
252	土師質 土器	皿	F13	SD42	10.0	-	1.6	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 外) ナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	7.5YR8/4浅黄橙	J1類
253	土師質 土器	皿	F13	SD42	10.1	-	1.9	型成形 口) 回しナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	J2a類 見込み剥離多い
254	土師質 土器	皿	F13	SD42	10.0	-	1.6	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) 煤 底) 油痕	7.5YR8/4浅黄橙	J2a類
255	土師質 土器	皿	F13	SD42	10.1	-	1.8	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	7.5YR7/4にぶい橙	J2a類
256	土師質 土器	皿	F13	SD42	10.6	-	2.0	型成形 口・見込) 回しナデ 外) ナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	J2a類
257	土師質 土器	皿	F13	SD42	10.2	-	2.0	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	J3a類
258	土師質 土器	皿	F13	SD42	10.4	-	1.7	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	J3a類
259	土師質 土器	皿	F13	SD42	10.2	-	1.7	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/2灰白	J3a類
260	土師質 土器	受皿	F13	SD42	(10.2)	-	(2.0)	型成形 口) 不明 見込) 不明 底) 板目痕ナデ消し？ 把手) 貼付け	口・見込) 煤・油痕	5YR7/6橙	J2b類
261	土師質 土器	受皿	F13	SD42	^{11.0} (13.5)	-	(2.3)	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕 把手) 貼付け	口・見込・外) 油痕	7.5YR8/4浅黄橙	J3b類
262	土師質 土器	皿	F13	SD44	(9.1)	-	-	手づくね 口) 回しナデ 外) 指頭痕	口) 煤痕	10YR8/2灰白	E類
263	土師質 土器	皿	F13	SD44	(9.0)	-	-	手づくね 口) 回しナデをナデ抜く 外) 指頭痕 底) 不明	見込) 煤・油痕	10YR6/3 にぶい黄橙	F2類
264	磁器	瓶	F13	SD44	-	-	(4.9)	ロクロ成形 染付 外) 柳	伊万里	透明釉	内面は無釉
265	土師質 土器	皿	F・G11	SD45	-	-	(2.3)	手づくね 口) 回しナデ 見込) ナデ 底) 指頭痕・ナデ	-	10YR7/3 にぶい黄橙	B類
266	土師質 土器	皿	G10	SD45	(6.2)	-	1.3	手づくね 口・見込) 回しナデ 外) 底) 指頭痕	-	10YR7/4 にぶい黄橙	E類
267	土師質 土器	皿	F・G11	SD45	(8.3)	-	-	手づくね 口) 回しナデ 外) 指頭痕	-	10YR7/3 にぶい黄橙	E類
268	土師質 土器	皿	G10	SD45	(8.2)	-	-	手づくね 口) 回しナデ 外) 指頭痕	口) 煤痕	7.5YR8/4浅黄橙	E類
269	土師質 土器	皿	F10	SD45	(8.6)	-	-	手づくね 口) 回しナデ 外) 指頭痕	-	7.5YR8/4浅黄橙	E類
270	土師質 土器	皿	F・G11	SD45	(9.0)	-	-	手づくね 口) 回しナデ 外) 不明	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	E類
271	陶器	播鉢	F10	SD45	-	-	(7.0)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	播目：1単位4条以上 IV-2期
272	土師質 土器	皿	H4	SE02	(13.0)	-	2.6	手づくね 口) 回しナデ 見込) ナデ 底) 指頭痕	-	10YR8/2灰白	C2類
273	陶器	天目碗	F12	SE04掘方	(11.8)	-	(4.7)	ロクロ成形 露胎部錆軸	瀬戸・美濃	鉄釉	大窯第3段階
274	陶器	壺	F12	SE04掘方	-	(7.4)	(8.4)	粘土継ぎみ上げ 外) ナデ 下半) ヘラ掻き 内) ナデ 底) 未調整	越前	自然釉	お歯黒壺 記号文あり
275	陶器	鉢	F12	SE04掘方	-	-	(4.2)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	III-2期
276	陶器	播鉢	F12	SE04掘方	(22.7)	(12.8)	9.3	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ 底) 未調整	越前	無釉	播目：幅2.9cm10条 VI-1期
277	陶器	不明	F12	SE04	-	-	-	ナデ	越前	無釉	押印
278	土師質 土器	皿	F12	SE04掘方	(8.2)	-	-	手づくね 口) 回しナデ 見込) 不明 外) 指ナデ	口) 煤痕	10YR8/2灰白	A2類
279	土師質 土器	皿	F12	SE04	9.9	-	1.8	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方向のナデ 底) 板目痕	口) 煤痕	7.5YR8/3浅黄橙	J1類

第3章 小野遺跡の調査

No	種別		出土地点		法量 (cm)			成形・調整・その他	陶磁器：産地 土師質：灯芯油痕	陶磁器：釉薬・装飾 土師質：色調	備考
			区	包含層 遺構	口径	底径	器高				
280	土師質 土器	皿	F12	SE04	(10.4)	-	-	型成形 口) 回しナデをナデ抜く? 外) ナデ	内・外) 煤・油痕	10YR5/3 におい黄褐	J3a類
281	陶器	播鉢	F12	SE04掘方	-	-	(4.2)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	播目：1単位6条以上 VI-1期
282	陶器	播鉢	F12	SE04	-	-	(3.7)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	自然釉	播目：1単位8条以上 VI-3期
283	陶器	播鉢	F12	SE04	-	-	(4.1)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	播目：1単位10条以上 VII-1～2期
284	磁器	小坏	G16	SE05掘方	(6.6)	(3.2)	2.5	ロクロ成形 削出高台 畳付無釉 外) 沈線 見込) 印花?	瀬戸・美濃	灰釉	高台：砂目痕付着 大窯第3段階後半
285	陶器	播鉢	G16	SE05掘方	(27.0)	-	(4.0)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	播目：幅21cm9条 VII-1期
286	磁器	小坏	G16	SE05	(9.0)	-	(3.2)	ロクロ成形 染付 外) 葛の葉文・菱文 (コンニャク印判)	伊万里	透明釉	大橋IV期
287	陶器	鉢	G16	SE05下層	(9.2)	4.0	5.8	ロクロ成形 削出高台 高台無釉	京・信楽	透明釉	見込：ピン痕3ヶ所あり
288	土師質 土器	皿	H13	SX01	-	-	(1.8)	手づくね 口) 回しナデ 外) 指頭痕	被熱痕あり	10YR5/1褐灰	A2類
289	土師質 土器	皿	H13	SX01	(10.6)	-	(2.1)	手づくね 口) 回しナデ 見込) ナデ 底) 指頭痕・ナデ	-	10YR7/3 におい黄橙	B類
290	土師質 土器	皿	H13	SX01	-	-	(2.1)	手づくね 口) 回しナデ 見込) ナデ 底) 指頭痕・ナデ	-	10YR8/4浅黄橙	B類
291	土師質 土器	皿	H13	SX01	(11.8)	-	(2.8)	手づくね 口) 回しナデ 見込) ナデ 底) ナデ	-	10YR8/4浅黄橙	D類
292	陶器	陶鉢	H13	SX01	残長 (4.1)	最大厚 1.0	孔径0.4	手づくね ナデ	越前	無釉	木目状圧痕あり
293	陶器	鉢	H13	SX01	(22.8)	(9.2)	9.5	ロクロ成形 外) 回転ナデ 下半ケズリ 高台回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	貼付高台 II-2期
294	陶器	片口鉢	H13	SX01	-	-	(4.1)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	III-2期
295	磁器	皿	E5	SP130	-	-	(2.1)	ロクロ成形 高台内施釉 染付 外) 唐草文? 見込) 花文・圏線	中国	透明釉	端反皿
296	磁器	皿	E5	SP130	-	(4.6)	(1.6)	ロクロ成形 削出高台 高台畳付無釉 染付 外) 唐草文 見込) 十字花文・圏線	中国	透明釉	景德鎮系 端反小皿
297	磁器	碗	E4	SP123	-	-	(1.5)	ロクロ成形 染付 外) 圏線 内) ねじ花文?・圏線	中国	透明釉	
298	陶器	内壳皿	D4	SP109	(10.8)	(6.2)	2.3	ロクロ成形 貼付高台 底) 輪トチ痕	瀬戸・美濃	灰釉	大窯第3段階
299	陶器	折縁皿	D・E5	SP145	(11.2)	-	(2.4)	ロクロ成形	瀬戸・美濃	灰釉	大窯第3段階 被熱に より釉がはげる
300	陶器	皿	D6	SP286	12.0	6.2	2.7	ロクロ成形 外) ナデ・削り 内) ナデ ピン痕3点	瀬戸・美濃	長石釉	登窯第1段階
301	陶器	輪花皿	E・F11	SP528	(13.8)	-	(2.6)	ロクロ成形後型打ち 内・外) ヘラ彫り	瀬戸・美濃	灰釉に 緑釉流し掛け	登窯第1段階後半～2段 階前半
302	陶器	天目碗	F12	SP495	(12.0)	-	(5.2)	ロクロ成形 露胎部無釉	瀬戸・美濃	鉄釉	大窯第4段階
303	陶器	天目碗	F12	SP493	-	4.0	(2.5)	ロクロ成形 削出高台 露胎部錆釉	瀬戸・美濃	鉄釉	大窯期
304	陶器	皿	F12	SP496	(11.6)	(6.8)	2.0	ロクロ成形 削出高台 全面施釉	瀬戸・美濃	灰釉	登窯第1段階
305	陶器	小坏	F12	SP493	(6.0)	(2.6)	4.5	ロクロ成形 削出高台 見込) ケズリ 全面施釉	唐津	灰釉	大橋II～III期
306	磁器	碗	G11	SP586	-	6.0	(3.3)	ロクロ成形 削出高台 高台畳付以内露胎 見込) 印花文・圏線	中国	青磁	
307	陶器	甕	F12	SP494	-	-	(2.8)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	無釉	III-3期
308	陶器	甕	F12	SP532	-	-	(5.3)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	無釉	III-3期
309	陶器	甕	F10	SP557	-	-	(7.7)	粘土継積み上げ 外) ナデ 内) ナデ・指ナデ	越前	無釉	VI-2期
310	陶器	壺	F12	SP576	-	-	-	外) ナデ 内) ナデ	越前	自然釉	銘文「～や(?)まか□」
311	陶器	壺	E12	SP570	-	-	-	粘土継積み上げ 外) ナデ ヘラ掻き 内) ナデ	越前	無釉	
312	陶器	壺	G11	SP444	-	-	(4.2)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 指ナデ	越前	自然釉	
313	陶器	鉢	F13	SP545	-	-	(8.3)	ロクロ成形 外) 回転ナデ ケズリ 内) 回転ナデ	越前	無釉	III期?
314	陶器	播鉢	F6	SP163	-	-	(7.5)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	わずかに播目残存 IV-3期
315	陶器	播鉢	B13	SP386	-	-	(5.3)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	播目：1単位10条以上 IV-3期
316	陶器	播鉢	D3	SP104	(23.0)	(10.4)	8.2	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ 底) 未調整	越前	無釉	播目：幅20cm7条 V-3期
317	陶器	播鉢	F11	SP574	-	(16.4)	(4.8)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 紐起こし痕 内) 回転ナデ	越前	無釉	播目：幅29cm11条
318	陶器	播鉢	G11	SP445 SP446	-	(15.0)	(10.4)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 紐起こし痕 ケズリ 内) 回転ナデ	越前	無釉	播目：幅21cm7条
319	瓦質 土器	鍋	L10	SP400	-	-	(7.8)	外) 口・頸) ハケ後ナデ・指頭痕 体) ハケ 内) 口) ハケ 体) ハケ	-	2.5YR/2灰白	外面煤付着
320	土師質 土器	皿	F13	SP546	(17.4)	-	2.4	手づくね 口) 回しナデ 見込) ナデ 底) 指頭痕	-	10YR8/2灰白	C1類
321	土師質 土器	皿	F12	SP521	(8.6)	-	(1.4)	手づくね 口) 回しナデ 見込) ナデ 底) 指頭痕・ナデ	-	2.5YR/3淡黄	B類

第3節 遺物

No	種別		出土地点		法量 (cm)			成形・調整・その他	陶磁器：産地 土師質：灯芯油痕	陶磁器：釉薬・装飾 土師質：色調	備考
			区	包含層 遺構	口径	底径	器高				
322	土師質 土器	皿	F12	SP592	8.7	-	1.7	手づくね 口) 回しナデをナデ抜く 外・底) 指頭痕・工具痕	口) 煤痕	2.5Y8/3淡黄	F1類
323	土師質 土器	皿	G12	SP588	-	-	(1.8)	手づくね 口) 回しナデ 底) 指頭痕・ナデ	内・外) 煤・油痕	不明	F1類
324	土師質 土器	受皿	F10	SP568	(9.4) 把 手含む (12.9)		2.4	型成形 口) 回しナデ 見込) ナデ 底) 指頭痕 把手) 貼付け後ナデ・指頭痕	見込) 煤・油痕	10YR8/2灰白	H1b類
325	磁器	碗	G12	I	(14.6)	(5.4)	6.0	ロクロ成形 削出高台 高台内無釉 見込) 圈線	中国	青磁釉	
326	磁器	碗	E13	I	-	-	(4.4)	見込) 線描き	中国	青磁釉	
327	磁器	碗	H14	III	(12.4)	-	(3.7)	ロクロ成形	中国	青磁釉	
328	磁器	碗	G12	I	-	-	(2.5)	外) 蓮弁文	中国	青磁釉	
329	磁器	碗	G12	II	(13.6)	-	(4.6)	外) 線描蓮弁文 見込) 線描き	中国	青磁釉	
330	磁器	碗	B13	I	-	(4.8)	(2.1)	ロクロ成形 削出高台 高台畳付以内露胎 見込) 印花文?	中国	青磁釉	
331	磁器	皿	I12	I	-	(6.6)	(1.8)	ロクロ成形 削出高台 高台内輪状に軸拭取り	中国	青磁釉	
332	磁器	稜花皿	G12	II	(11.8)	-	(1.9)	内) 線描き	中国	青磁釉	龍泉窯系
333	磁器	小皿	I14	I	-	(4.8)	(2.5)	削出高台 見込) 線描き 高台内軸拭取り	中国	青磁釉	
334	磁器	碗	F11	I	-	(4.6)	(3.0)	削出高台 高台内輪状に軸拭取り	中国	青磁釉	
335	陶器	碗	D6		(10.6)	4.6	6.6	ロクロ成形 削出高台 畳付無釉 外) 染付 (唐草)	伊万里	透明釉	陶胎染付 大橋IV期
336	陶器	天目碗	F11	II	(12.0)	-	(4.8)	ロクロ成形 露胎部錆釉	瀬戸・美濃	鉄釉	大窯第3段階
337	陶器	天目碗	H13	II	(12.0)	-	(5.6)	ロクロ成形 露胎部無釉	瀬戸・美濃	鉄釉	大窯第3段階
338	陶器	天目碗	I14	I	(11.0)	-	(3.4)	ロクロ成形	瀬戸・美濃	鉄釉	登窯第1段階
339	磁器	皿	F10	I	-	2.8	(1.8)	削出高台 見込) 軸を輪状に拭取り 外面腰部以下露胎 漆継ぎ痕	中国	白磁釉	
340	陶器	平碗	G11	I	-	(5.2)	(1.1)	ロクロ成形 削出高台	瀬戸・美濃	灰釉	大窯期前半
341	磁器	皿	G10	II	(9.8)	-	(2.5)	ロクロ成形 外) 染付 (波頭文・芭蕉葉文) 見込) 染付 (圈線・草花文?)	中国	透明釉	
342	陶器	皿	G12	II	-	4.8	(2.4)	ロクロ成形 削出高台 高台無釉	唐津	灰釉	胎土目痕あり 大橋I期
343	陶器	丸皿	D5	II	(10.8)	(6.4)	2.6	ロクロ成形 貼付高台	瀬戸・美濃	灰釉	大窯第3段階後半
344	陶器	内禿皿	D5	I	(10.0)	(5.6)	2.2	ロクロ成形 碁笥底 底) 輪トチ痕	瀬戸・美濃	灰釉	大窯第2段階後半～ 3段階
345	陶器	皿	G10	I	-	6.6	(1.2)	ロクロ成形 貼付高台 見込) 印花文	瀬戸・美濃	灰釉	大窯1段階
346	陶器	卸皿	J13	トレンチ	-	(5.0)	(1.3)	ロクロ整形 底) 糸切り	瀬戸・美濃	灰釉?	古瀬戸
347	陶器	内禿皿	G11	I	-	4.8	(0.9)	ロクロ成形 見込) 釉剥ぎ 碁笥底 底) 輪トチ痕	瀬戸・美濃	灰釉	大窯期
348	陶器	輪花皿	D6		13.4	7.8	2.1	型成形 底) 回転ヘラ削り 高台貼付け後ナデ 高台無釉	瀬戸・美濃	灰釉・緑釉	登窯第2段階
349	磁器	皿	E・F14	I	12.4	4.6	3.5	ロクロ成形 削出高台 畳付無釉、砂微量熔着 見込) 疵ノ目輪剥ぎ 染付 見込) 二重斜格子文 二重圈線	伊万里	透明釉	見込に重ね焼きの痕あり 大橋IV期
350	陶器	溝緑皿	E5	II	(13.4)	(5.6)	3.1	ロクロ成形 碁笥底 高台無釉	唐津	灰釉	見込と底部外面に砂目 痕あり 大橋II期
351	磁器	碗蓋	M4・5	I	(10.6)	摘み4.4	3.5	ロクロ成形 摘み削り出し 染付 外) 花? 内) 葉・蓮	伊万里	透明釉	大橋V期
352	陶器	灯明皿	D6	II	(11.2)	-	1.7	ロクロ成形 内面のみ施釉し外面は無釉 外～底面) 回転ヘラ削り	信楽	灰釉	口縁部に煤が微量付着 見込にピン痕あり
353	陶器	灯明 受皿	L5	II	8.6	3.4	1.6	ロクロ成形 外下半～底) 削り 口縁～見込) 施釉	信楽	灰釉	堤部径5.4cm 切り欠きあり
354	磁器	小杯	E13	I	6.4	2.5	2.5	ロクロ成形 削出高台 畳付無釉 染付 外) 文様不明	伊万里	透明釉	紅猪口 大橋IV期
355	磁器	灰吹き	D6	II	(6.2)	-	(7.6)	ロクロ成形 腰部削り 外) 腰部以下無釉 内) 口縁以外無釉 染付 外) 松・竹	伊万里	透明釉	V期?
356	陶器	香炉	G11	I	(11.4)	5.2	6.2	ロクロ成形 削出高台 体部下半削り 外) 腰部以下無釉 内) 口縁以外無釉	唐津	灰釉	見込にトチン痕あり 大橋IV～V期
357	陶器	香炉	D6	II	(7.4)	(4.0)	5.3	ロクロ成形 削出高台 高台無釉	唐津	鉄釉	見込に自然釉 大橋III～IV期
358	磁器	瓶	F15	I	(3.6)	-	(3.4)	ロクロ成形	伊万里	透明釉	
359	磁器	瓶	D5	II	-	(3.8)	(6.2)	ロクロ成形 削出高台 畳付無釉 染付 外) 文様不明 内面は無釉	伊万里	透明釉	仏花瓶?
360	磁器	瓶	表土剥ぎ		-	-	(9.2)	ロクロ成形 染付 外) 竹・松 内面は無釉	伊万里	透明釉	
361	陶器	鬚盥	H13	II	残長 (7.0)	残高 (3.2)	幅 -	タタラ成形 底) ナデ? 無釉 鉄絵 外) 鋸歯文・梅	瀬戸・美濃	灰釉・鉄絵	登窯第2段階後半以降
362	陶器	仏花瓶	G3	II	(9.2)	-	(8.8)	ロクロ成形 把手) 粘土紐貼付け	瀬戸・美濃	鉄釉・長石釉	登窯第2段階後半以降

第3章 小野遺跡の調査

No	種別		出土地点		法量 (cm)			成形・調整・その他	陶磁器：産地 土師質：灯芯油痕	陶磁器：釉薬・装飾 土師質：色調	備考
			区	包含層 遺構	口径	底径	器高				
363	磁器	水滴	G11	I	長辺 10.3	短辺 (5.2)	3.3	型打ち成形 内) ナデ・布目痕 底) 布目痕 染付 外) 掛け流し 底) 布目痕	伊万里	透明釉	一側面のみ無釉 大橋V期
364	陶器	土鍋	D5	II	(15.8)	(5.2)	7.7	ロクロ成形 底) 回転ヘラ削り 体部下半から底部無釉 把手貼付け	信楽	灰釉	
365	土師質 土器	皿	F12	I	7.4	-	1.5	手づくね 口) 回しナデ 見込) ナデ 底) 指頭痕・ナデ	-	2.5Y8/2灰白	D類
366	土師質 土器	皿	H13	II	-	-	(2.6)	手づくね 口) 回しナデ 見込) ナデ 底) ナデ	-	7.5Y6/4にぶい橙	D類
367	土師質 土器	皿	F10	I	8.4	-	2.2	手づくね 口) 回しナデ 見込) 一方方向のナデ 外) 指頭痕 底) ナデ	口・見込) 油痕	7.5YR8/6浅黄橙	E類
368	土師質 土器	皿	G12	I	8.4	-	1.8	手づくね 口) 回しナデ 見込) ナデ 外・底) 指頭痕	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	E類
369	土師質 土器	皿	H14	I	10.4	-	2.4	手づくね 口) 回しナデ 見込) ナデ 外) 指頭痕 底) 工具によるナデ	口) 煤痕	10YR8/2灰白	F1類
370	土師質 土器	皿	F13	II	(8.8)	-	1.4	型成形 口) 回しナデ 見込) 不明 外) 指頭痕 底) 板目痕	口・底) 油痕	7.5YR7/6橙	I類
371	土師質 土器	皿	G10	I	(8.2)	-	1.5	型成形 口) 回しナデ 見込) 一方方向のナデ 外) 指頭痕 底) 板目痕	口) 煤痕	10YR8/3浅黄橙	I類
372	土師質 土器	皿	G11	I	(11.0)	(4.9)	2.2	ロクロ 内) 回転ナデ 外) 回転ナデ 底) 回転糸切り	口・見込) 煤・油痕	10YR7/2 にぶい黄橙	L類
373	土師質 土器	皿	I12	I	9.8	5.5	1.7	ロクロ 内) 回転ナデ 外) 回転ナデ 底) 回転糸切り	内・外) 煤・油痕	10YR7/4 にぶい黄橙	L類
374	瓦質 土器	鍋	H13	II下	-	-	-	外) ナデ・指頭痕 内) ナデ	-	2.5Y8/1灰白	外面煤付着
375	土製品	土人形	N8	I	残高 (48)			型成形 内) 指頭痕	-	10YR8/3浅黄橙	男性像
376	土製品	土人形	F2	II	高7.6	幅7.5	厚3.6	型成形 心棒痕あり 彩色?	-	7.5YR6/4にぶい橙	女性座像 被熱により煤付着
377	陶器	甕	F13	I	-	-	(1.9)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	無釉	II-2期
378	陶器	甕	H14	III	-	-	(6.5)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	無釉	II-2期
379	陶器	甕	F11	I	-	-	(5.5)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	無釉	IV-1期
380	陶器	甕	F12	I	-	-	(5.3)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	無釉	III-3期
381	陶器	甕	H5	II	-	-	(6.3)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	無釉	IV-1期
382	陶器	甕	E12	I	-	-	(4.0)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	無釉	IV-2期
383	陶器	甕	G11	I	-	-	(4.2)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	自然釉	IV-2期
384	陶器	甕	H12	I	-	-	(4.9)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	自然釉	IV-2期
385	陶器	甕	E16	I	-	-	(5.1)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	無釉	V-2期
386	陶器	甕	E13	I	-	-	(5.4)	外) 横ナデ 内) 横ナデ	越前	無釉	V-3期
387	陶器	甕	F12	I II	-	-	(32.2)	粘土継積み上げ 外) ナデ ヘラによる掻き上げ 内) ナデ・指頭痕	越前	自然釉	ヘラ記号 V-3期
388	陶器	甕	F2	II	(16.4)	-	(9.6)	粘土継積み上げ 外) ナデ 内) 指ナデ	越前	自然釉	V-2~3期
389	陶器	壺	H14	I	(15.0)	-	(5.0)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	鉄泥・自然釉	V-2~3期
390	陶器	甕	D6	II	(27.0)	-	(17.5)	粘土継積み上げ 外) ナデ 内) ナデ・指頭痕	越前	鉄泥	VII-2期
391	陶器	壺	D6	II	(9.0)	(12.2)	20.5	粘土継積み上げ 外) ナデ 内) ナデ・指頭痕 底) 未調整	越前	内外・鉄泥・自然釉	ヘラ記号
392	陶器	壺	E3	I	(5.6)	-	(4.9)	外) ナデ 内) ナデ	越前	自然釉	内面付着物あり お歯黒壺
393	陶器	壺	I13	I	-	(8.6)	(8.8)	粘土継積み上げ 外) ナデ 内) ナデ・指頭痕 底) 未調整	越前	外面と内面下半に 鉄泥	お歯黒壺
394	陶器	壺	F5	I II	(13.8)	-	(7.6)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 把手) 粘土継貼付け 内) 回転ナデ・指頭痕	越前	鉄泥	VII-2期
395	陶器	鉢	E14	I	(13.4)	-	(6.0)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	鉄泥	火鉢または火入れ
396	陶器	壺	H13	II	-	-	-	外) ナデ 内) ナデ	越前	無釉	ヘラ記号
397	陶器	甕	G10	II	-	-	-	外) ナデ 内) ナデ	越前	無釉	窯印 凹字「本」
398	陶器	甕	H14	I	-	-	-	外) ナデ 内) ナデ	越前	無釉	窯印
399	陶器	甕	I12	I	-	-	-	外) ナデ 内) ナデ	越前	無釉	窯印
400	陶器	鉢	H13	II下	-	-	(5.8)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	II-2期
401	陶器	鉢	H13	II下	-	-	(7.6)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	III-1~2期
402	陶器	播鉢	G12	I	-	-	(6.5)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	格子状の播目あり IV-1期
403	陶器	鉢	G12	I	-	-	(7.7)	ロクロ整形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	IV-1期
404	陶器	鉢	G12	I	-	-	(4.7)	ロクロ整形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	IV-1期

第3節 遺物

No	種別		出土地点		法量 (cm)			成形・調整・その他	陶磁器：産地 土師質：灯芯油痕	陶磁器：釉薬・装飾 土師質：色調	備考
			区	包含層 遺構	口径	底径	器高				
405	陶器	播鉢	F12	I	-	-	(7.2)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	播目：1単位10条以上 IV-2期
406	陶器	鉢	H13	II	-	-	(9.5)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	鉄泥	VI-3期
407	陶器	播鉢	I11	I	(28.8)	-	(7.7)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	播目：幅3.1cm9条 IV-3期
408	陶器	鉢	表土剥ぎ		-	(12.6)	(5.7)	ロクロ成形 外) ケズリ 高台) 回転ナデ 底) 貼付高台 未調整 内) 回転ナデ	越前	無釉	II-2期
409	陶器	播鉢	G10	II	-	-	(7.4)	ロクロ成形 外) ヘラ掻き上げ 底) 未調整 脚貼付け 内) 回転ナデ	越前	無釉	播目あり 脚1箇所残存
410	陶器	鉢	I14	II上	(22.2)	(13.8)	10.5	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ 底) 未調整	越前	鉄泥	VI-2期?
411	陶器	播鉢	I14	トレンチ	(32.0)	(16.0)	12.2	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ 底) 未調整	越前	無釉	播目：幅2.6cm11条 VII-3期
412	陶器	播鉢	D6	II	(9.0)	(12.2)	20.5	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ 底) 貼付高台 高台部回転ナデ	越前	無釉	播目：幅2.6cm10条 IX期
413	陶器	播鉢	G13	I	(38.0)	-	(10.0)	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	越前	無釉	播目：幅2.6cm10条 IX期
414	陶器	片口鉢	H13	I	(19.8)	(11.4)	-	ロクロ成形 外) 回転ナデ 底部無釉 底面) 板状圧痕 注口部貼付け 内) 回転ナデ	越前	木灰釉	破片を復元実測
415	陶器	匣鉢	D5	I	(12.8)	(11.0)	6.4	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ 底) 板状圧痕	越前?	鉄泥	底部被熱する
416	陶器	匣鉢	E6	I	(16.8)	(14.6)	6.7	ロクロ成形 外) 回転ナデ 内) 回転ナデ 底) 未調整	越前?	鉄泥・自然釉	
417	陶器	円錐 ビン	G10	I	長径3.7	短径3.3	器高3.8	上面扁平部) 板状圧痕 側面) ナデ 先端部貼付け 手捻り後粗い面取り	不明	釉付着	
418	陶器	円錐 ビン	F10	I	長径3.5	短径3.2	器高3.0	上面扁平部) 板状圧痕 側面) ナデ 先端部貼付け 手捻り後粗い面取り	不明	釉付着	先端部曲がる
419	陶器	広口壺	H13	II下	-	-	-	粘土紐積み上げ 外) ナデ 内) 指ナデ・指頭痕	常滑	自然釉	

第3表 行火観察表 (第44図)

() は残存値

No	種別		出土地点		法量 (cm)			石材	調整・備考
			区	包含層 遺構	幅	奥行	高さ		
1	蓋	F11	I	(17.8)	(20.7)	(6.0)	凝灰岩	平面形は楕円形を呈す	
2	蓋	G2	SD08上層	(15.2)	(17.2)	(4.4)	凝灰岩	平面形は楕円形を呈す	
3	蓋	E11	I	(14.3)	(12.1)	(5.1)	凝灰岩	平面形は隅丸方形を呈す	
4	蓋	G10	II	(15.9)	(11.0)	(5.4)	凝灰岩	平面形は隅丸方形を呈す	
5	蓋	B12	SP389	(15.0)	(16.1)	(3.7)	凝灰岩	平面形はD形を呈す	
6	蓋	D12	I	(15.6)	(9.4)	(4.0)	凝灰岩	平面形は不明確	
7	蓋	F11	SK84	(12.3)	(11.0)	(3.7)	凝灰岩	平面形は不明確	
8	身	D3	I	(14.9)	(3.3)	(6.6)	凝灰岩	平面形は楕円形を呈す	
9	身	F12	I	(14.0)	(16.8)	(5.5)	凝灰岩	平面形は楕円形を呈す	
10	身	G2	SD08	(16.2)	(21.8)	(5.4)	凝灰岩	平面形は楕円形を呈す	
11	身	D4	SK13	(13.2)	(18.3)	16.2	凝灰岩	平面形はD形を呈す	
12	身	F11	SP502	-	(10.0)	(9.9)	凝灰岩	平面形はD形を呈す	
13	身	G10	SK106	18.9	12.9	(13.5)	凝灰岩	平面形は台形を呈す 手捻り形	

第4表 石臼観察表 (第45・46図)

() は残存値

No	種別		出土地点		法量 (cm)			石材	調整・備考
			区	包含層 遺構	径	厚	縁高		
1	上白	F11	SP565	37.8	8.9	1.6	凝灰岩	播面分画数不明 副溝8条以上 挽き手溝あり	
2	上白	F10	SK87	(30.0)	(8.5)	2.6	花崗岩	播面分画数不明 副溝8~10条 被熱する	
3	上白	H13	II上	-	(10.6)	2.5	凝灰岩	播面分画数不明 被熱する	
4	上白	E5	SP147	(38.0)	(7.3)	2.5	緑色凝灰岩	播面摩耗のため分画数不明 被熱する	
5	上白	D12	SK99	(34.2)	(8.6)	1.8	花崗岩	播面分画数不明 副溝6条	
6	上白	F11	I	(28.2)	(9.3)	1.5	花崗岩	播面分画数不明 副溝8条以下 被熱する	
7	上白	F12	SE04	-	(9.1)	2.7	凝灰岩	播面摩耗のため分画数不明	
8	下白	B13	I	(31.0)	(9.9)	-	凝灰岩	播面分画数不明 副溝7条 被熱する	
9	下白	E4	SP118	31.8	(9.3)	-	緑色凝灰岩	播面分画数不明 底面中央に煤付着	
10	下白	F10	SK87	(31.0)	(9.0)	-	緑色凝灰岩	播面分画数不明 被熱する	

第3章 小野遺跡の調査

第5表 砥石・硯観察表 (第47図)

()は残存値

No.	種別	出土地点		法量 (cm)			石材	調整・備考
		区	包含層遺構	長さ	幅	厚さ		
1	砥石	D5	I	21.4	6.9	5.1	凝灰岩	中砥石 使用面3面 上下端面にはV字状の切込み 裏面は粗い整形痕 I類
2	砥石	K6	I	(12.4)	6.1	3.0	砂岩	荒砥石 使用面3面 1側面と上端面は粗い整形 I類
3	砥石	F11	SK83 最下層	(12.8)	4.2	1.8	粘板岩	仕上げ砥石 使用面1面 裏面・側面・端面は研磨により平滑に整形される IIa類
4	砥石	G11	I	13.9	3.8	1.4	粘板岩	仕上げ砥石 使用面表裏2面 側面・端面は研磨により平滑に整形される IIa類
5	砥石	H3	II	10.3	4.7	2.3	凝灰岩	中砥石 使用面3面 径8.5mmの穿孔あり 線条痕あり IIb類
6	砥石	E2	トレンチ	9.6	4.7	4.1	砂岩	荒砥石 使用面3面 裏面・下端面は粗い整形 上端面は平滑に整形 IIb類
7	砥石	E16	I	(4.7)	3.9	0.9	泥岩	仕上げ砥石 使用面表裏2面 側面は擦り切り痕と研磨痕 線条痕あり IIc類
8	砥石	E5	SK27	5.8	4.1	1.9	砂岩	荒砥石 使用面3面 両端面と1側面は粗い整形 IIc類
9	砥石	I6	I	5.8	3.7	0.7	粘板岩	仕上げ砥石 使用面表裏2面 欠損後端部を研磨し平滑にする 線条痕あり IIc類
10	砥石	H13	II下	(11.1)	2.9	2.3	粘板岩	仕上げ砥石 使用面1面 裏面擦り切り痕 側面・端面は研磨により平滑に整形される IIIa類
11	砥石	H12	I	(8.0)	3.1	0.9	泥岩	仕上げ砥石 使用面1面 裏面は整形のみ 側面は擦り切り痕あり IIIb類
12	砥石	H13	I	(7.5)	2.5	1.6	粘板岩	仕上げ砥石 使用面1面 硯を転用 左側面に切断中の溝あり 右側面擦り切り痕 IIIb類
13	砥石	F11	I	(8.2)	(2.6)	1.2	泥岩	仕上げ砥石 使用面表裏2面 長軸方向に欠損 線条痕あり
14	砥石	F4	I	(3.5)	(2.4)	0.8	泥岩	仕上げ砥石 使用面表裏2面 側面・端面は擦り切り痕と研磨痕 線条痕あり
15	硯	H14	I	(9.6)	(3.7)	1.5	泥岩	大きく欠損する 底面は浅く抉れる
16	硯	M4-5	I	15.4	7.3	2.2	粘板岩	平面形は長方形を呈す 底面は浅く抉れる
17	硯	G10	I	(13.7)	6.6	(1.6)	粘板岩	平面形は長方形を呈す 底面は平坦となる
18	硯	F15	I	(11.8)	7.7	(1.9)	泥岩	平面形は長方形を呈す 幅1.3cmの低平な脚を有す

第6表 その他の石製品観察表 (第46図)

()は残存値

No.	種別	出土地点		法量 (cm)			石材	調整・備考
		区	包含層遺構	幅/径	奥行/径	高さ/厚		
11	盤	F11	I	—	—	12.1	凝灰岩	平面形は方形を呈す 内面被熱する
12	盤	D3	I	(12.1)	(5.4)	7.7	緑色凝灰岩	平面形は方形を呈す 内部に仕切りあり 香炉として使用か
13	盤	I13	I	(9.0)	(6.3)	5.6	緑色凝灰岩	平面形は方形を呈す 香炉として使用か 脚部低平
14	容器	E12	I	(10.3)	(8.0)	(5.4)	凝灰岩	平面形は不明 内部は仕切られる 脚1カ所残存 縁部に並行沈線あり
15	搗き臼	F10	SK87	—	—	(16.2)	凝灰岩	内面は丁寧に、外面は粗い意匠に整形する
16	不明石製品	H13	II下	長径 5.4	短径 4.7	厚 1.2	凝灰岩	中央部分に径4mmの穿孔 表裏・側面は平滑 重量38.0g
17	不明石製品	F4	SK03	長径 5.0	短径 4.4	厚 1.4	凝灰岩	中央部分に径6mmの穿孔 表裏・側面は平滑 擦り切り痕あり 重量31.0g
18	支脚状製品	G2	SD08	幅 4.1	奥行 6.7	高 8.6	不明	全面に煤が付着する 断面形は蒲鉾形を呈す
19	支脚状製品	F10	SK84	幅 3.9	奥行 (5.8)	高 (8.9)	凝灰岩	基部に煤が付着する 断面形は不整形を呈す

第7表 漆器観察表 (第48図)

()は復元・残存値

No.	器種	出土地点		法量 (cm)				上絵		漆絵			備考
		区	包含層遺構	口径	底径	器高	高台高	内面	外面	位置	文様	色	
1	椀	H13	SK78	—	(6.8)	(4.8)	0.7	赤	黒	外面	不明	赤	汁椀に相当
2	椀	H13	II上	(10.4)	—	(3.1)	—	赤	黒	外面	植物?	赤	高台を欠く 口縁摩耗
3	椀	E15	I	(12.2)	(6.6)	4.4	0.4	赤	黒	外面	不明	赤	皿付摩耗
4	椀	H12	I	(11.0)	—	(3.8)	—	赤	黒	外面	—	—	高台を欠く
5	椀	G11	SK79	(11.8)	6.0	7.8	1.6	黒	黒	高台裏	丸?	赤	
6	椀	G10	II	—	(5.8)	(5.1)	1.5	黒	黒	高台裏	不明	赤	
7	椀蓋	G11	SK79	11.2	5.0	2.5	0.8	黒	黒	高台裏	丸?	赤	

第3節 遺物

第8表 木製品観察表 (第48図)

() は復元・残存値

No.	器種	出土地点		法量 (cm)			備考
		区	包含層遺構				
8	箸	H13	SK78	長さ (21.8)	幅 0.8	厚 0.7	片口箸
9	箸	H13	SK78	長さ (19.2)	幅 0.7	厚 0.6	両口箸に相当
10	箸	H13	SK78	長さ (18.6)	幅 0.9	厚 0.6	両口箸に相当
11	箸	H13	SK78	長さ (17.5)	幅 0.6	厚 0.5	両口箸
12	箸	H13	SK78	長さ (16.0)	幅 0.6	厚 0.6	
13	箸	H13	SK78	長さ (12.9)	幅 0.7	厚 0.5	
14	加工板材	不明		長さ (35.7)	幅 4.5	厚 0.9	長径2.5cmのほぞ穴あり
15	加工板材	F11	SK82	長さ (22.3)	幅 7.7	厚 1.7	図下方は幅狭となる 側面面取りされる
16	加工板材	F11	SK82	長さ (16.8)	幅 (4.4)	厚 0.8	片面と一側面に漆塗布 貫通孔2ヶ所、未貫通1ヶ所、欠損1ヶ所
17	曲物	G10	SK106	径 (16.6)	器高 (17.0)		被熱により部分的に炭化 内面に漆状のものを塗布し底板と接着させる 歪み大
18	底板	H13	II下	径 (15.0)	厚 1.0		木釘1ヶ所確認
19	底板	M7	SK52	径 32.5	厚 1.6		側面は丁寧な面取り
20	加工棒材	H13	SK78	長さ 32.9	径 1.1~1.2		端部から約2cmの位置に長径5mmの貫通孔を2点穿つ
21	加工板材	G8	SE01	長さ 17.9	幅 5.8	厚 1.1	台形状 両端面に径3.0~3.5mmの木釘穴が2ヶ所ずつある 釣瓶の側板
22	加工板材	G8	SE01	残存最大幅 15.9	高 (11.8)	厚 1.1	木釘穴4ヶ所残存 内1ヶ所は穿孔失敗か? 釣瓶の側板
23	加工板材	G8	SE01	幅 16.2	奥行 (11.1)	厚 1.2	一辺2mmの方形の木釘穴が3ヶ所残存 幅約1cmの板との接合痕あり 釣瓶の底板
24	下駄	F11	SK107	長さ (21.9)	幅 8.5	厚 2.0	雪下駄 台裏に加工痕

第9表 金属製品観察表 (第49図)

No.	器種	出土地点		法量 (cm)					備考	
		区	包含層遺構							
1	庖丁	F12	SE04底面	長 30.4	刃渡り 19.9	刃幅 5.5	刃部厚 0.15	柄幅 2.8	柄厚 2.1	鉄 刃部外湾 刃こぼれあり
2	刃鎌	F10	SK81	高 13.5	刃部長 15.6	刃部厚 0.4				鉄 刃こぼれあり
3	和鉄	F10	SK81	残長 10.4	刃部長 5.4	刃部厚 0.35				鉄 欠損
4	煙管・吸口	E5	SP63	長 5.7	胴部径 1.0	吸口径 0.5				銅
5	煙管・吸口	I13	SD40	残長 3.8	胴部径 1.2					銅 羅字片残存
6	毛抜	H13	SD38	長 8.15	刃幅 0.7	基部幅 0.4	厚 0.1			銅
7	簪	J13	I	長 15.5	耳掻長 2.7	脚長 11.9	厚 0.1			銅

第10表 銭貨・貨幣観察表 (第50図)

() は残存値

No.	銭文	出土地点		法量 (cm・g)					国:初 鑄年	備考	素材
		区	包含層遺構	径	内区径	方孔径	厚さ	重さ			
—	開元通寶	H12	I	2.49	2.00	0.70	0.12	2.83	唐 621	摩耗する	銅
1	開元通寶	H13	SX01	2.43	1.96	0.67	0.09	2.23	唐 621		銅
2	開元通寶	H13	SD40上層	2.40	1.95	0.69	0.10	2.81	唐 621		銅
3	開元通寶	H13	SD40上層	2.46	2.03	0.66	0.13	3.61	唐 621		銅
4	唐國通寶	G11	SX02	2.39	1.96	0.59	0.10	2.43	南唐 959	篆書	銅
5	淳化元寶	G11	SX02	2.46	1.81	0.59	0.13	3.16	北宋 990	行書	銅
6	天聖元寶	H13	SD40上層	2.53	2.07	0.68	0.10	3.36	北宋 1023	真書	銅
7	明道元寶	H13	SD40上層	2.48	2.06	0.70	0.11	3.74	北宋 1032	篆書	銅
8	景祐元寶	H13	SD40上層	2.48	2.10	0.65	0.11	3.49	北宋 1034	真書	銅
9	皇宋通寶	H13	SD40上層	2.50	2.00	0.64	0.11	3.72	北宋 1038	篆書	銅
10	皇宋通寶	H13	SD40上層	2.48	1.97	0.66	0.13	3.62	北宋 1038	篆書	銅
11	皇宋通寶	H13	SD40上層	2.48	2.00	0.73	0.11	3.02	北宋 1038	篆書	銅

第3章 小野遺跡の調査

No	銭文	出土地点		法 量 (cm・g)					国：初 鋳 年	備 考	素 材
		区	包含層遺構	径	内区径	方孔径	厚さ	重さ			
12	皇宋通寶	H13	SD40上層	2.50	2.00	0.77	0.10	3.28	北 宋 1038	真 書	銅
13	熙寧元寶	H13	SD40上層	2.44	2.00	0.69	0.11	2.91	北 宋 1068	真 書	銅
14	熙寧元寶	K 7	I	2.25	1.86	0.66	0.10	1.88	北 宋 1068	篆 書	銅
15	元豊通寶	H13	II下	2.49	1.95	0.70	0.12	3.33	北 宋 1078	篆 書	銅
16	元豊通寶	H13	SD40上層	2.45	2.01	0.69	0.10	2.62	北 宋 1078	行 書	銅
17	元祐通寶	G11	SX02	2.47	2.05	0.65	0.14	3.46	北 宋 1086	篆 書	銅
18	元祐通寶	H13	SD40上層	2.43	1.98	0.70	0.13	4.18	北 宋 1086	篆 書	銅
19	元祐通寶	H13	SD40上層	2.48	1.84	0.59	0.11	3.68	北 宋 1086	行 書	銅
20	紹聖元寶	H13	SD40上層	2.45	1.98	0.68	0.12	3.73	北 宋 1094	行 書	銅
21	政和通寶	H13	SD40上層	2.46	2.11	0.66	0.10	2.40	北 宋 1111	分 楷	銅
22	永樂通寶	排 土		2.52	2.14	0.56	0.14	(2.23)	明 1408	欠 損	銅
23	寛永通寶	F 3	II	2.42	1.98	0.59	0.09	2.02	日 本 1636	古寛永	銅
24	寛永通寶	F 8	I	2.44	1.94	0.59	0.14	3.39	日 本 1636	古寛永	銅
—	寛永通寶	F16	I	(2.40)	(1.97)	(0.63)	0.12	3.51	日 本 1636	古寛永 折れあり	銅
25	寛永通寶	H11	I	2.40	2.02	0.60	0.11	2.44	日 本 1636	古寛永	銅
26	寛永通寶	J 7	I	2.45	2.04	0.58	0.10	2.63	日 本 1636	古寛永	銅
27	寛永通寶	J 8	I	2.46	2.00	0.57	0.11	3.44	日 本 1636	古寛永	銅
28	寛永通寶	M 5	I	2.43	1.98	0.68	0.09	1.90	日 本 1636	古寛永	銅
—	寛永通寶	—		2.47	1.99	0.62	0.12	2.50	日 本 1636	古寛永	銅
—	寛永通寶	D 4	I	—	—	0.59	0.13	(2.08)	日 本 1668	新寛永 背文字「文」	銅
29	寛永通寶	D13	I	2.51	2.01	0.60	0.11	3.16	日 本 1668	新寛永 背文字「文」	銅
—	寛永通寶	F 7	I	2.53	2.06	0.62	0.13	3.58	日 本 1668	新寛永 背文字「文」	銅
30	寛永通寶	G12	I	2.51	2.06	0.65	0.10	2.44	日 本 1668	新寛永 背文字「文」	銅
—	寛永通寶	D 4	I	2.32	1.99	0.65	0.12	2.09	日 本 1697・1767	新寛永	銅
31	寛永通寶	D 4	I	2.24	1.83	0.71	0.10	2.11	日 本 1697・1767	新寛永	銅
—	寛永通寶	D 5	I	2.36	1.90	0.63	0.11	2.11	日 本 1697・1767	新寛永	銅
—	寛永通寶	D13	I	2.40	1.91	0.61	0.10	2.75	日 本 1697・1767	新寛永	銅
32	寛永通寶	E 5	SP63	2.36	1.89	0.62	0.10	2.04	日 本 1697・1767	新寛永	銅
33	寛永通寶	E 6	I	2.24	1.82	0.76	0.10	1.74	日 本 1697・1767	新寛永	銅
—	寛永通寶	E12	I	2.29	1.90	0.69	0.11	2.41	日 本 1697・1767	新寛永	銅
34	寛永通寶	F 3	II	2.29	1.88	0.67	0.12	2.95	日 本 1697・1767	新寛永	銅
—	寛永通寶	F 4	SK04	—	—	0.63	0.11	—	日 本 1697・1767	新寛永 欠損	銅
—	寛永通寶	F10	I	2.33	1.93	0.64	0.10	2.01	日 本 1697・1767	新寛永	銅
35	寛永通寶	F11	I	2.43	1.97	0.63	0.10	2.68	日 本 1697・1767	新寛永	銅
36	寛永通口	F11	II	2.41	2.06	0.73	0.11	(1.94)	日 本 1697・1767	寛永通寶 新寛永	銅
37	寛永通寶	F17	I	2.33	1.88	0.68	0.10	2.18	日 本 1697・1767	新寛永	銅
38	寛永通寶	G 9	I	2.27	1.92	0.70	0.10	2.52	日 本 1697・1767	新寛永	銅
—	寛永通口	G 9	I	2.32	1.94	0.63	0.10	2.31	日 本 1697・1767	寛永通寶 新寛永	銅
39	寛永通寶	G10	I	2.17	1.79	0.68	0.08	1.92	日 本 1697・1767	新寛永	銅
—	寛永口寶	I12	I	2.45	1.99	0.59	0.13	(2.09)	日 本 1697・1767	寛永通寶 新寛永	銅
—	寛永通寶	I13	I	2.29	1.84	0.61	0.10	2.37	日 本 1697・1767	新寛永	銅
—	寛永通寶	K 7	I	2.34	1.92	0.65	0.10	2.50	日 本 1697・1767	新寛永	銅
—	寛永通寶	K 8	I	2.45	1.96	0.59	0.12	3.49	日 本 1697・1767	新寛永	銅
40	寛永通寶	E 4	I	2.27	1.77	0.63	0.10	2.11	日 本 1739	新寛永 背文字「元」	鉄

第3節 遺物

No	銭文	出土地点		法量 (cm・g)					国：初 鋳 年	備 考	素 材
		区	包含層遺構	径	内区径	方孔径	厚さ	重さ			
—	寛永□□	G2	I	2.25	—	0.66	0.10	1.97	日 本 1739	寛永通寶 新寛永 背文字「元」	鉄
41	寛永通寶	H13	II	2.28	1.73	0.65	0.12	2.95	日 本 1697・1767	新寛永 背文字「元」	銅
42	寛永通寶	G9	I	2.37	1.98	0.64	0.10	1.89	日 本 1739	新寛永	鉄
—	寛永通寶	D13	I	2.33	—	0.65	0.10	2.77	日 本 —	不 明	銅
—	寛永通□	M6	I	2.46	1.96	0.60	0.09	(1.96)	日 本 —	寛永通寶 新古不明	銅
43	文久永宝	G10	I	2.52	2.06	0.66	0.10	(1.95)	日 本 1863	玉 宝 四文銭 11波	銅
44	文久永寶	G10	I	2.56	1.96	0.70	0.08	2.01	日 本 1863	真 文 四文銭 11波	銅
45	文久永宝	K7	I	2.57	2.10	0.69	0.09	2.79	日 本 1863	玉 宝 四文銭 11波	銅
46	一分判金	F13	SK103	長1.69 幅1.00		厚0.18		4.42	日 本 1714	正徳一分判金か？	金
—	判読不能	D4	SK15	2.32	—	0.66	0.14	(2.09)	—	—	銅
—	判読不能	D5	I	—	—	—	—	—	—	破 片	銅
—	判読不能	F3	II	2.51	—	0.59	—	3.04	—	鋳のため不明	鉄
—	□□元寶	G11	SX02	—	—	—	0.12	(1.23)	—	破 片 行 書	銅

第11表 古代の遺物観察表（第51図）

() は復元・残存値

No	種 別	出土地点		法 量 (cm)			調 整	焼 成	胎 土	色 調	備 考
		区	包含層遺構	口径	底径	器高					
1	須恵器 坏蓋	K3	I	(14.4)	—	2.0	外) 回転ヘラ削り・回転ナデ 内) 回転ナデ	良	②	N7/0灰白	
2	須恵器 坏蓋	K4	III	—	—	(1.4)	外) 回転ヘラ削り・回転ナデ 内) 回転ナデ	良	③	25Y6/2灰黄	
3	須恵器 坏蓋	E6	SP251	—	—	(1.1)	外) 不明 内) 回転ナデ	良	⑤	N7/0灰白	
4	須恵器 坏蓋	F11	I	—	—	(2.4)	外) 回転ヘラ削り・回転ナデ 内) 回転ナデ	良	①	N6/0灰	
5	須恵器 坏蓋	H13	II	—	—	(2.4)	外) 回転ヘラ削り・回転ナデ 内) 回転ナデ	良	①	N6/0灰	
6	須恵器 坏蓋	K3	I	(14.0)	—	(1.9)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	良	⑤	N7/0灰白	
7	須恵器 坏蓋	K3	I	(13.0)	—	(1.8)	外) 回転ヘラ削り・回転ナデ 内) 回転ナデ	良	①	5Y7/1灰白	
8	須恵器 坏蓋	G11	SP461	—	—	(1.7)	外) 回転ヘラ削り後ナデ 内) 回転ナデ	良	①	N6/0灰	
9	須恵器 無台坏	E6	I	(14.0)	(10.4)	3.4	外) 回転ナデ 底) 回転ヘラ切り後ナデ 内) 回転ナデ	不良	①	2.5Y8/2灰白	
10	須恵器 無台坏	E6	II	—	(10.4)	(2.2)	外) 回転ナデ 底) 回転ヘラ切り後ナデ 内) 回転ナデ	良	①	7.5Y6/1灰	
11	須恵器 無台坏	E6	SP250	—	(7.4)	(1.4)	外) 回転ナデ 底) 不明 内) 回転ナデ	良	①	N6/0灰	
12	須恵器 鉢	K4	III	—	(10.0)	(3.6)	外) 回転ナデ 底) 回転ヘラ切り後ナデ 内) 回転ナデ	良	②	10Y7/1灰白	
13	須恵器 無台坏	H13	SX01	—	(9.0)	(2.9)	外) 回転ナデ 底) 回転ヘラ切り後ナデ 内) 回転ナデ	やや不良	①	5Y7/1灰白	
14	須恵器 無台坏	E6	SK21	—	(8.2)	(2.0)	外) 回転ナデ 底) 回転ヘラ切り後ナデ 内) 回転ナデ	やや不良	①	5Y7/1灰白	
15	須恵器 無台坏	G10	I	—	(9.6)	(2.0)	外) 回転ナデ 底) 回転ヘラ切り後ナデ 内) 回転ナデ	良	①	7.5Y6/1灰	
16	須恵器 口縁部	L10	SP411	—	—	(2.5)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	良	①	7.5Y6/1灰	
17	須恵器 有台坏	J3	III	—	—	(3.9)	外) 回転ナデ 底) 回転ヘラ切り後ナデ 内) 回転ナデ	良	②	5Y5/1灰	
18	須恵器 有台坏	L4	III	—	(9.0)	(3.7)	外) 回転ナデ 底) 回転ヘラ切り後ナデ 内) 回転ナデ	良	②	N7/0灰白	
19	須恵器 有台坏	F10	II	—	(9.0)	(2.6)	外) 回転ナデ 底) 回転ヘラ切り後ナデ 内) 回転ナデ	良	③	N4/0灰	
20	須恵器 有台坏	K3 L4	I III	—	(11.0)	(2.4)	外) 回転ナデ 底) 回転ヘラ切り後ナデ 内) 回転ナデ	良	①	N6/0灰	
21	須恵器 有台坏	K4	III	—	(8.0)	(1.8)	外) 回転ナデ 底) 回転ヘラ切り後ナデ 内) 回転ナデ	良	⑤	N6/0灰	
22	須恵器 有台坏	G10	II	—	—	(1.8)	外) 回転ナデ 底) 不明 内) 回転ナデ	不良	①	5Y6/1灰	
23	須恵器 有台坏	H3	III	—	(8.0)	(0.9)	外) 回転ナデ 底) 回転ヘラ切り後ナデ 内) 回転ナデ	良	①	N6/0灰	
24	須恵器 有台坏	H13	SD38-39	—	(8.2)	(2.2)	外) 回転ナデ 底) 回転ヘラ切り後ナデ 内) 回転ナデ	良	①	N6/0灰	
25	須恵器 有台坏	H4	III	—	(7.8)	(1.4)	外) 回転ナデ 底) 回転ヘラ切り後ナデ 内) 不明	良	①	5Y7/1灰白	
26	須恵器 皿	F10	II	—	—	(2.4)	外) 回転ナデ 底) 回転ヘラ切り後ナデ 内) 回転ナデ	良	①	7.5Y6/1灰	
27	須恵器 皿	L3	I	(16.0)	(12.2)	1.8	外) 回転ナデ 底) 回転ヘラ切り未調整 内) 回転ナデ	良	②	N6/0灰	
28	須恵器 皿	F5	SP285	—	—	(2.6)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	良	①	2.5GY6/1 オリープ灰	

第3章 小野遺跡の調査

No	種別		出土地点		法量 (cm)			調整	焼成	胎土	色調	備考
			区	包含層遺構	口径	底径	器高					
29	須恵器	皿	L10	SP400	-	-	2.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	良	①	N7/0灰白	
30	須恵器	皿	G10	SP567	-	-	2.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	良	①	5Y6/1灰	
31	須恵器	皿	G10	SD45	-	-	(4.4)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	良	③	5Y5/1灰	
32	須恵器	皿	G10	SP566	-	-	(2.2)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	良	⑤	5B6/1青灰	
33	須恵器	皿	I12	I	-	(12.8)	(0.9)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	良	①	N6/0灰	
34	須恵器	皿	K9	トレンチ	-	-	(1.7)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	不良	①	5Y8/2灰白	
35	須恵器	壺	L9	II	-	9.6	(2.9)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	良	⑤	N7/0灰白	
36	須恵器	壺	K9	トレンチ	-	(8.0)	(2.0)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	良	①	N7/0灰白	
37	須恵器	短頸蓋	H14	III	-	(15.8)	(3.2)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	良	①	7.5Y6/1灰	
38	須恵器	瓶	L4	III	-	-	(2.3)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	良	①	7.5Y7/1灰白	自然釉付着
39	須恵器	瓶	G10	I	-	-	(1.7)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	良	①	N6/0灰	
40	須恵器	瓶	L10	I	(11.0)	-	(2.2)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	良	②	7.5Y5/1灰	
41	須恵器	瓶	L4 M4	III	(11.8)	-	(9.0)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ・指頭痕	良	②	N6/0灰	
42	須恵器	瓶	J4	II	-	(10.0)	(4.1)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	良	②	N4/0灰	
43	須恵器	瓶	L4	III	-	-	(3.4)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	良	⑤	5B6/1青灰	
44	須恵器	瓶	D6	II	-	-	(3.0)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	やや不良	①	7.5Y5/0灰	
45	須恵器	鉢	表土剥ぎ		-	(11.0)	(0.9)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	良	①	10Y5/1灰	
46	須恵器	鉢	F11	SK82	-	(10.0)	(4.3)	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	やや不良	①	5Y7/1灰白	
47	須恵器	甕	F11	I	-	-	-	外) タタキ後ナデ 内) 回転ナデ	良	②	N6/0灰	カキ目 当て具痕
48	須恵器	壺体部	L4	III	-	-	-	外) カキ目 内) 回転ナデ	良	①	N7/0灰白	
49	須恵器	甕	J3	III	-	-	-	外) タタキ 内) 当て具痕	やや不良	①	2.5Y7/1灰白	
50	須恵器	甕	K4	II	-	-	-	外) タタキ 内) 当て具痕	良	⑤	7.5Y4/1灰	
51	須恵器	甕	J3	I	-	-	-	外) タタキ後カキ目 内) 当て具痕	良	①	N6/0灰	
52	土師器	甕	K9	SK76	-	-	(2.2)	外) 不明 内) 不明	良	③・④	10YR8/2灰白	
53	土師器	甕	F5	SP285	-	-	(2.7)	外) 不明 内) 回転ナデ	良	②	10YR8/3浅黄橙	
54	土師器	甕	E6	SK24	-	-	(3.5)	外) 回転ナデ・カキ目 内) 回転ナデ・カキ目	良	③	10YR8/2灰白	
55	土師器	甕	F10	SD45	-	-	(2.6)	外) 不明 内) 回転ナデ	良	③	10YR8/2灰白	
56	土師器	鍋	H13	II下	-	-	(2.7)	外) 不明 内) 不明	良	①	10YR6/3 にぶい黄橙	
57	土師器	鍋	F4	III	-	-	(4.1)	外) 不明 内) 不明	やや不良	③	10YR8/2灰白	

古代の遺物観察表中の胎土表記

須恵器

- ① 微砂粒 (径1mm以下) を少量含む
- ② 微砂粒 (径1mm以下) と砂粒 (径1~2mm) を少量含む
- ③ 砂粒 (径1~2mm) を少量含む
- ④ 砂粒 (径1~2mm) を多量含む
- ⑤ 砂粒 (径1~2mm) と小石 (径2mm以上) を含む

土師器

- ① 微砂粒 (径1mm以下) を少量含む
- ② 微砂粒 (径1mm以下) を多量含む
- ③ 砂粒 (径1~2mm) を含む
- ④ 小石 (径2mm以上) を含む

第12表 縄文土器観察表 (第52図)

No	器種	出土地点		調整	焼成	胎土	色調	備考
		区	包含層遺構					
1	深鉢	G12	II	有文 半裁竹管	良	5mm以下の小石を含む	10YR6/4にぶい黄橙	中期
2	深鉢	H3	II	有文 沈線	良	1~2mmの砂粒を含む	10YR7/3にぶい黄橙	後期
3	深鉢	G2	SD08	無文	良	3mm以下の小石を含む	10YR7/3にぶい黄橙	後期
4	深鉢	K3	IV上面	無文 条痕	良	3mm以下の小石を含む	2.5YR7/3浅黄	後期 被熱

第4章 小野平等遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

1 調査の経緯

今回の調査地は地元では通称「大竹藪」と呼ばれ、調査前はその名の通り竹が密生していた状態であった。第1章で述べたように平成19年度の分布調査において、石積みの塚を2基確認した。これは『白山村史』の記述にある石塚のことであると推察されたが、1基の頂部には五輪塔の水輪が人為的に積上げられ、周囲には空風輪、火輪が各1点、宝篋印塔片2点が散在していた。この塚の性格、構造や築造時期の問題、他の遺物の有無などを確認するため、そして五輪塔など石塔類の露出から中世墓の存否を確認することを合わせて、平成22年度に試掘調査を行い、新たに北側の山際斜面にて、礫の集積と五輪塔の一部が露出しているのを確認し、次年度に発掘調査を行った。調査面積は750㎡である。

2 調査区の地形と層序

調査区は鬼ヶ岳南麓、吉野瀬川によって舌状に形成された小規模な段丘上に位置する(第2図)。その立地から、吉野瀬川が増水する度に水につかたであろうことが窺われる。標高は約91～95mを測る。この小段丘は吉野瀬川を境に、小野遺跡が位置する小段丘と一続きである。小段丘と鬼ヶ岳南麓との傾斜の変換は、北から北東方側は急傾斜をなしており、山肌には岩盤が露出している箇所もあるが、僅かに狭小な段が確認できる箇所で石塔の露出を確認した。対して北西から西方へは比較的緩やかに傾斜する。西側には約50年前に植林された杉林が広がっており、植林以前は河岸段丘の地形を利用した水田跡が確認でき、不整形な平坦面が段状をなしていた。西北方は標高100mを過ぎた辺りから旧集落の畑地や墓地などに利用された平坦地があり、その平坦地に接するさらに北側の山際には近代以降と考えられる炭窯跡が数基残存する。

小野平等遺跡の層位は大きく三層に分けられる。第Ⅰ層は表土で、黒色土である。第Ⅱ層はにぶい黄褐色～暗褐色を呈し、小礫を含む砂質土である。第Ⅲ層は地山層であるが、山際ではⅡ層の下層に崩落と考える10cm前後の角礫を主体とする層が存在し、Ⅲ1層とした。Ⅲ2層は黄色土層で砂質を呈する。

3 遺構と遺物の分布

人為的に礫を積み上げた塚状遺構が2基(SX1・2)、および北側山裾の狭小な平坦面の礫群(SX)を遺構として扱う。SX1・2は近接して存在している。ともに南東方向に面した段上の縁辺に位置している。なお、土坑や溝などの掘り込みは確認していない。

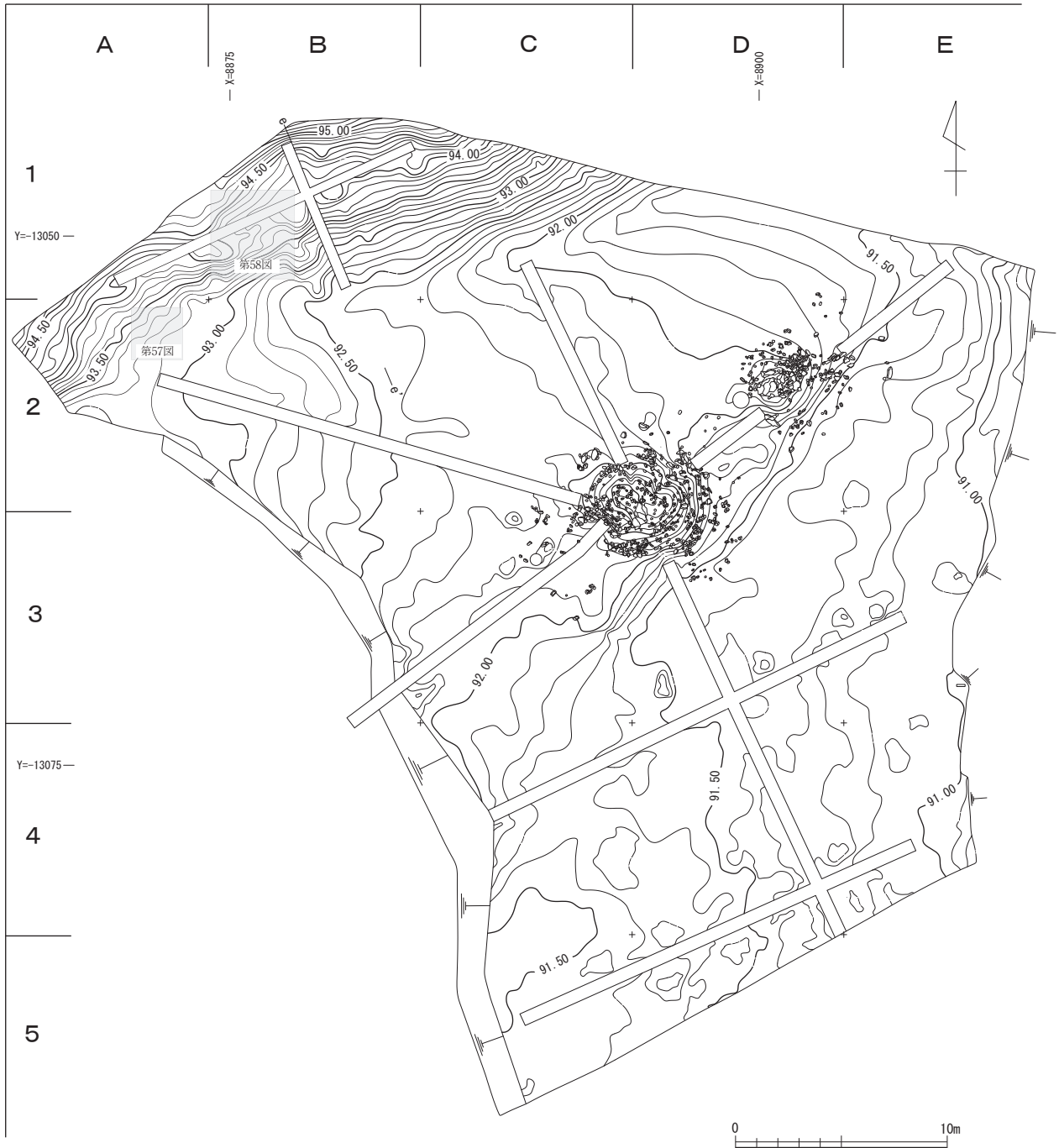
遺物には、石塔として五輪塔の空風輪3点、火輪3点、水輪5点があり、宝篋印塔の笠と基礎の破片各1点がある。その内、平成19・22年度の分布調査と試掘調査で確認したものは計8点である。発掘調査で新たに出土した石塔は5点であり、それらは狭小な平坦面上や礫群(SX)から出土した。その他には越前焼、土師質皿、須恵器などの土器、陶磁器や銭貨がある。中世の越前焼は、各層および礫群中から小破片が出土したが、出土状況としては散漫な印象を受ける。また、少量の須恵器が調査区東側を中心に出土した。

参考文献

白山村史刊行会 1978 『白山村史』

第2節 遺構

SX1(第54図) D2区に位置する。標高91.5~91.8mを測る辺りには北東~南西方向に延びる段状部が存在し、その上段縁辺部にあたり、約7m南西側にはSX2が位置している。中央には巨大な岩が露出しており、この中央の岩の周囲に拳大から人頭大の角礫を人為的に積み上げたものである。積み方に規則性は見られない。SX2と比べると小規模で、少なからず礫が散逸している印象を受ける。礫の集中範囲は長軸約6.0m、短軸は約5.0mに広がり、頂部から段丘上段および下段までの高さは0.8~1.4mを計り、平面形は不整形円形を呈す。周囲の角礫を取り外していき、地上に露出している岩、礫を検出していたが、その過程で角礫および覆土中から遺物は出土していない。この遺構の性格は不明である。

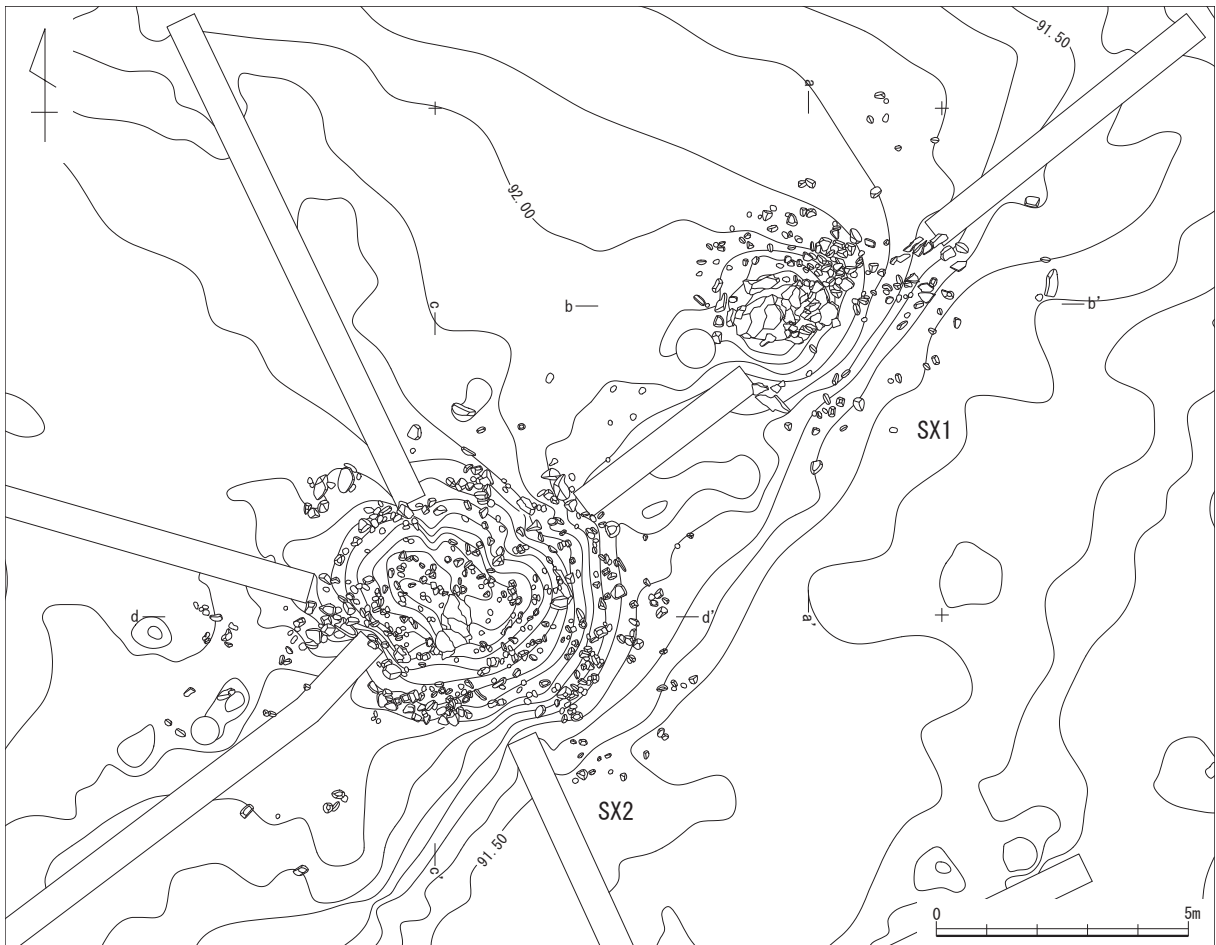


第53図 小野平等遺跡全体図 (縮尺1/300)

SX2(第54図) C・D 2・3区に位置する。SX1と同じく標高91.5~91.8mを測る北東~南西方向に延びる段状部の上段縁辺部にあたり、拳大~人頭大の角礫を人為的に積み上げた遺構である。掘削前は中央付近には巨大な岩が露出しているものの、多数の礫に覆われており、その一部が垣間見えるのみであった。積み方に規則性は見られない。SX2には角礫の他、少量の川原石が使用されており、五輪塔、宝篋印塔などの石塔片が表面に露出していた。礫の集中範囲は長軸約8.0m、短軸約6.0mに広がり、頂部から段丘上段および下段までの高さは1.1~1.6mを計り、平面形は不整形円形を呈す。掘削に伴い、地山中から突き出す巨大な岩が中央から現れ、本来は自然に露出していた岩を覆うように角礫が積み上げられたことが判明した。角礫および覆土中から石塔片、土師質皿片、磁器片の他、寛永通寶などが出土した。この遺構の性格は不明である。

SX3(第57図) A 2区に位置する。北側は急傾斜をなして尾根の斜面となる。長さ0.2~0.4m程度の礫を配し、長軸1.4m、短軸1.0mを測る集石である。平面形は不整形方形を呈す。周囲には0.1m大の礫が散漫に存在する。ほとんどの礫がI~II層中におさまる。礫の配置に規則性は認められず、礫を取り上げた後には、掘り込みなどの遺構は確認できなかった。性格は不明である。礫の近辺からは近世に属す越前焼の播鉢片が出土した。

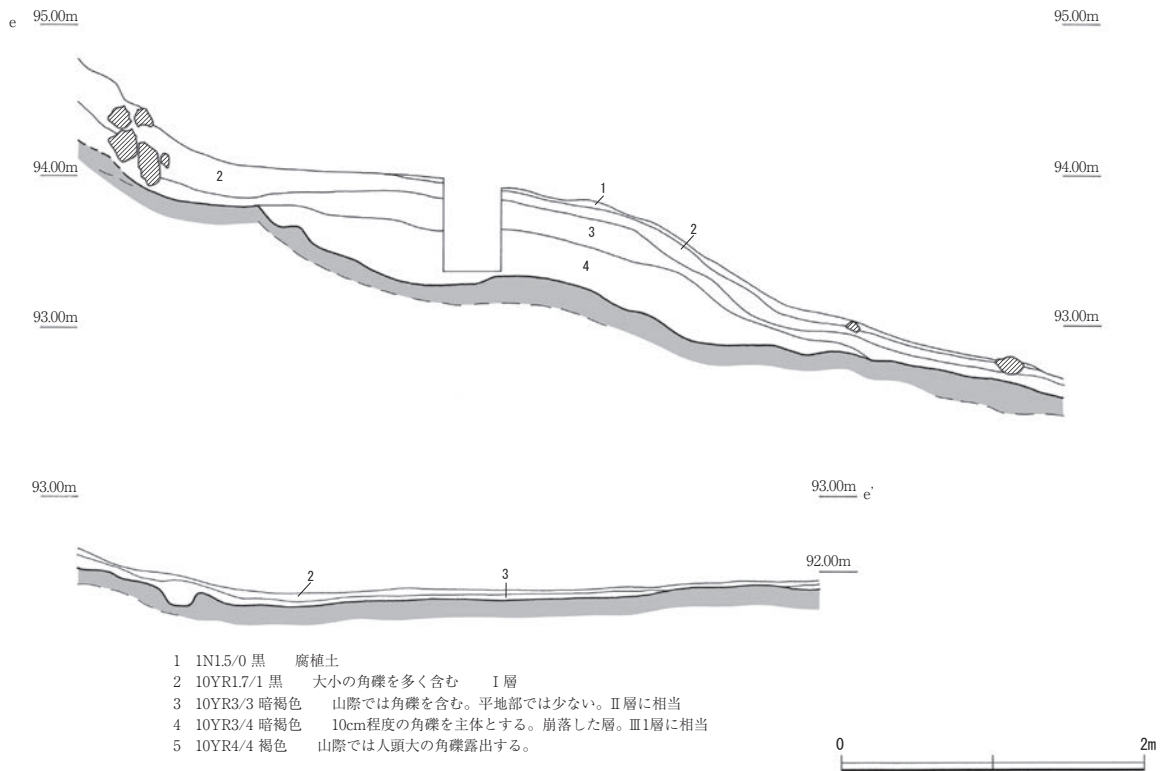
SX4(第58図) B 1区に位置する集石である。試掘時に確認した石塔の周囲を掘削していく過程で、礫の集中する部分を確認した。黒色土中からは五輪塔の火輪(第60図4)と水輪(第60図11)が重なった状態で出土し、近接して空風輪(第60図2)が出土した。水輪の下には地輪が存在しないこと、水輪の上下



第54図 SX1・2平面図(縮尺1/150)



第55図 SX1・2土層図 (縮尺1/50)



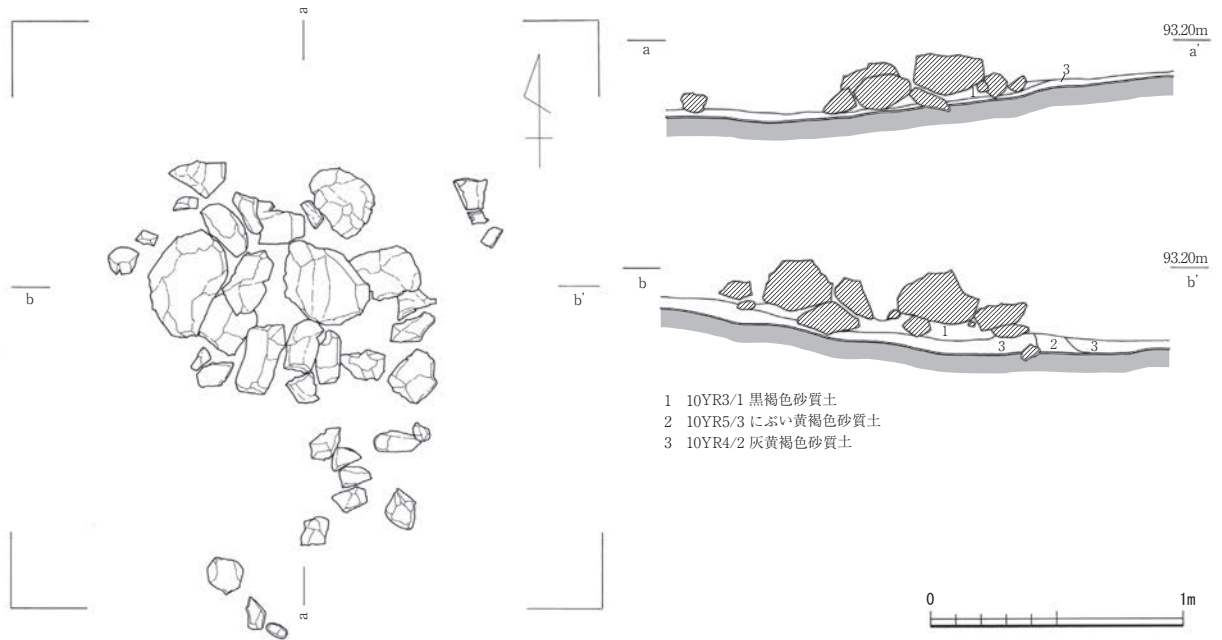
第56図 北側斜面土層図 (縮尺1/50)

が逆であったことなどから、この石塔は本来の位置にあるものではない。また、これらの礫も規則性は認められず、崩落や人為的な移動を受けていると考えられる。礫中から五輪塔の火輪(第60図5)が、礫の下からは欠損した空風輪(第60図3)が出土した。礫を取り上げた後には、掘り込みなどの遺構は確認できなかった。その他、礫および覆土中から越前焼片が出土した。

第3節 遺物

1 五輪塔(第60図1～11、第61図、図版第16、第13表)

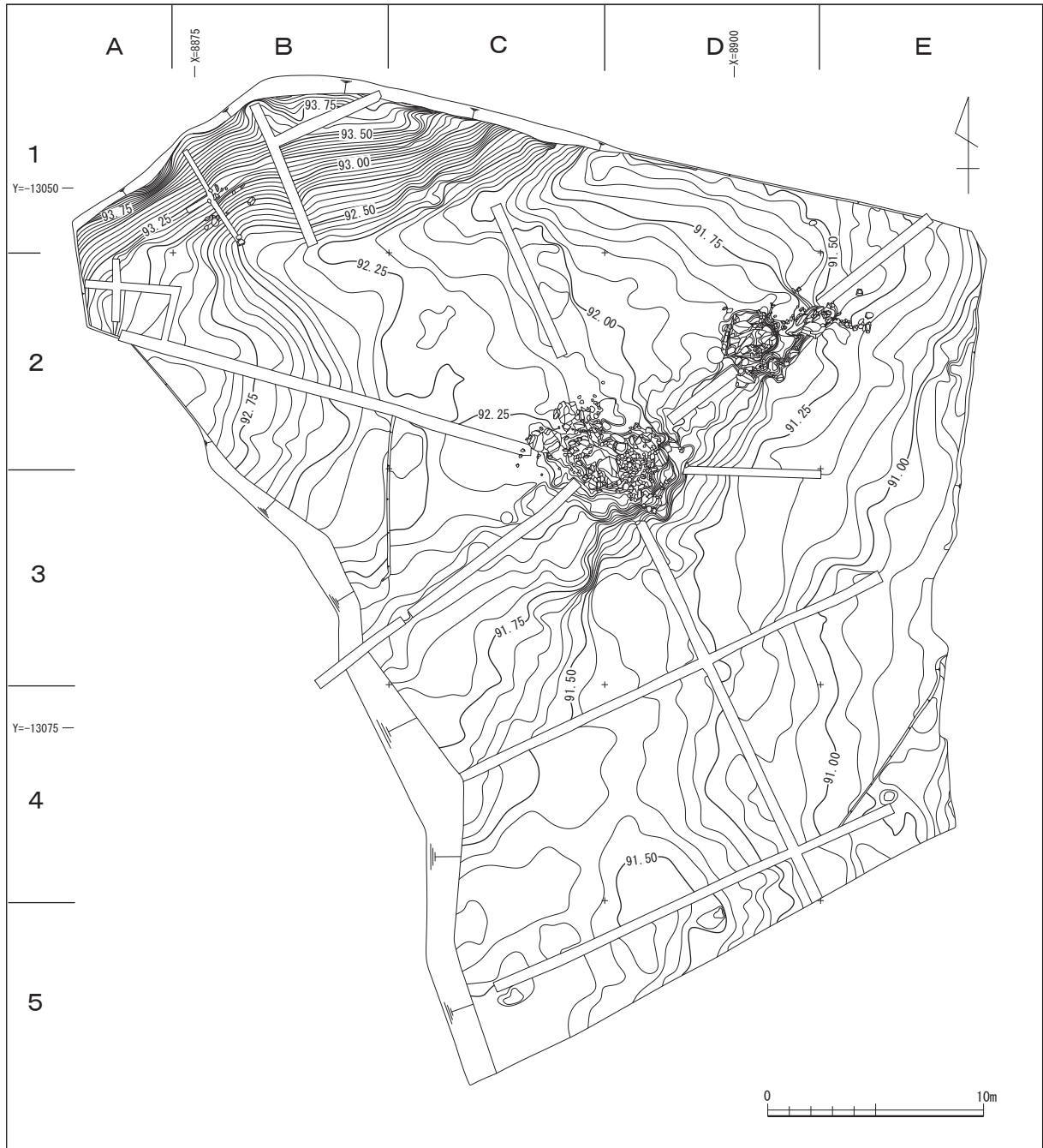
五輪塔は、組み合わせ五輪塔の空風輪が3点、火輪が3点、水輪が5点ある。これら各部位は全て凝灰岩製である。1～3は空風輪で、いずれも空輪と風輪の境は明瞭である。1は大型となるもので、柄部を欠損する。風輪は紡錘状を呈し、稜が下方に下がる。また、空輪と風輪の最大径は近似する。2・3の風輪は扁平な半球状を呈する。3は大部分が欠損しているが風輪の最大径はやや上位に位置する。4～6は火輪である。4と5の器高は低く扁平である。軒をほぼ直線的に作り軒先はやや反る。屋根の傾斜は緩やかである。軒の下面は、4はやや膨らみ、5は平坦となる。5には、後世に分割しようとしたためか擦り切り痕がある。6は器高が高く、屋根の傾斜は急である。軒の幅は広く軒先が曲線を描いて端部が反り上がり、4・5より後出のものと考えられる。7～11は水輪である。7・8・10は最大径が中位に位置する。上面と下面の幅が近似し、正面形は扁平な樽状を呈す。9は最大径が中位よりやや上位に位置し、上面の窪みは深く下面は平坦となる。11は最大径が中位より上位に位置し、正面形は下面に向かってすぼまり、他よりも後出の形状を呈する。上下面の窪みは浅皿状を呈し、他の水輪よりも丁寧な加工が施されている。これら五輪塔の各部位の内、水輪には葉研彫りで梵字が刻まれる。欠損が激しく



第57図 SX3平面図・土層図 (縮尺1/30)



第58図 SX4石塔出土状況図 (縮尺1/30)



第59図 小野平等遺跡掘削後平面図（縮尺1/300）

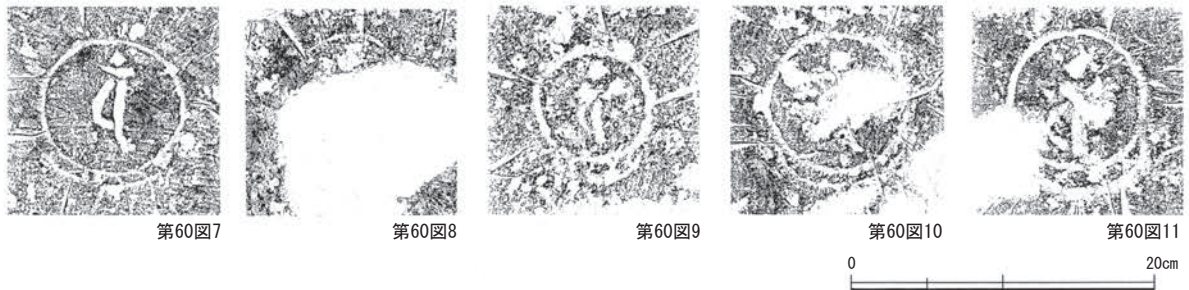
不明瞭なものもあるが、判読可能なものの月輪内には梵字の「バン」を、月輪の下部には簡略化された蓮華座を配する。これらの五輪塔の部材は、程度の差はあるがどれも欠損しており、特に3・5・8の残存状況から判断すると、意図的な破壊を受けた可能性がある。

2 宝篋印塔(第60図12・13、図版第16、第13表)

笠と基礎が各1点出土している。12は笠で、隅飾突起を欠く。13は基礎で、下面に丁寧な加工による窪みを設けている。2点とも破片を接合して形状がようやく把握出来る状態であることから、五輪塔と同じく意図的な破壊を受けたと考える。また、宝篋印塔の石材には五輪塔と違い、いわゆる笏谷石と呼ばれる緑色凝灰岩が使用されており、見た目にも色調の違いが明らかである。この2点は組み合わせられていた可能性がある。



第60図 石塔実測図（縮尺1/8）



第61図 水輪拓影（縮尺1/5）

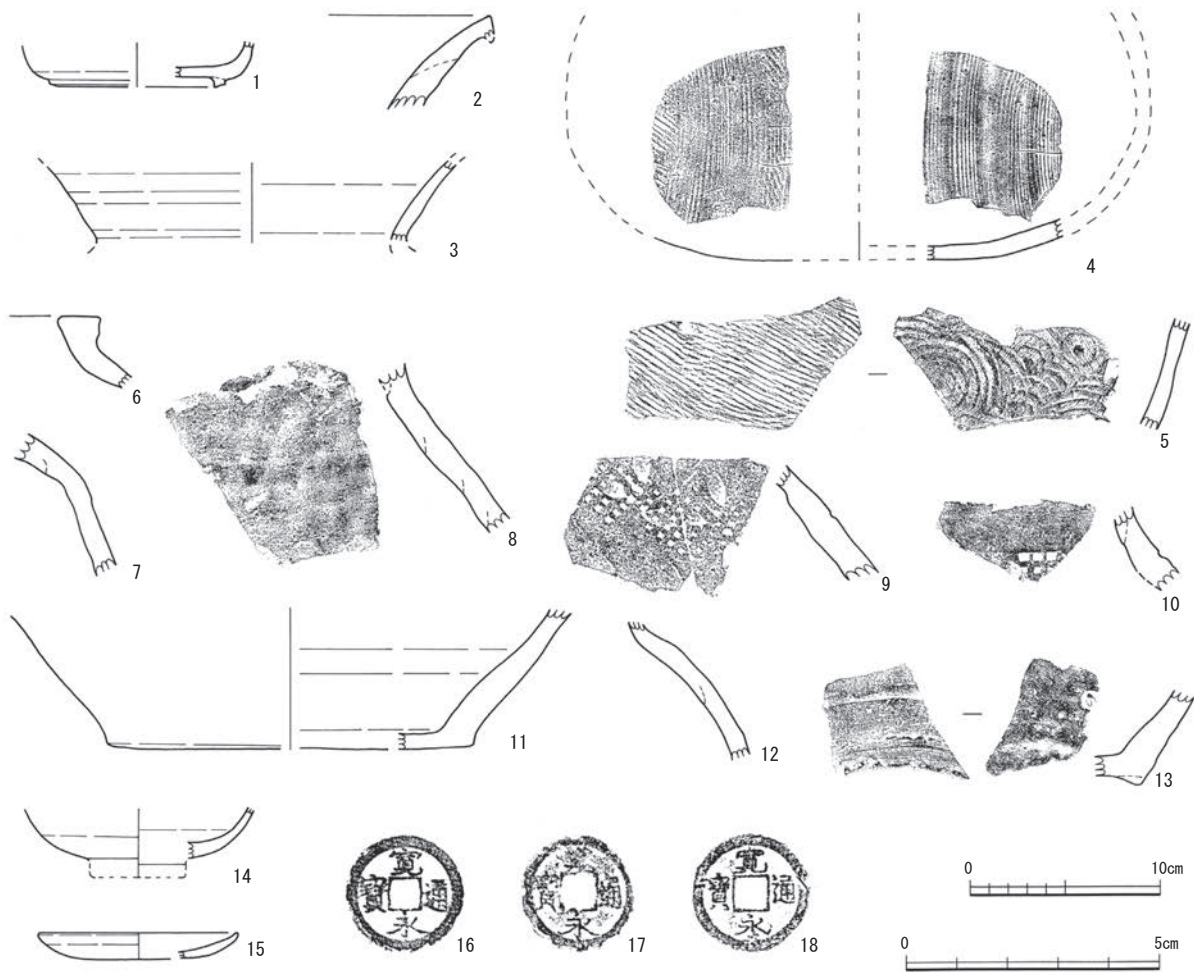
3 土器、陶磁器(第62図1~15、図版第16、第14表)

土器、陶磁器には須恵器、越前焼、青磁、肥前産陶磁器、土師質皿などがあるが、いずれも細片が多く、器形の復元は困難なものが多い。

1~5は須恵器である。1は有台坏で、高台の接地面が外方に開く形態となる。口縁は欠損するが、体部は直線的に立ち上がるものとなる。2・3・5は甕である。5には外面にタタキ痕が、内面には同心円状の当て具痕が残る。4は横瓶の底部と判断した。外面にはカキ目とタタキ痕があり、内面には自然釉が掛かる。6~13は越前焼である。6は甕の口縁部であるが、断面形状や器表面に鉄泥が塗布されていることから、近世初頭に位置づけられるものである。7~10は甕の肩部である。9・10は、正方形を基本とする格子目で構成された押印を施す。9にはさらに扇形状の押印を確認できる。11は甕の底部である。内面には自然釉が掛かる。12は壺の肩部である。13は鉢の底部である。外面にはケズリ調整が施され、断面形が三角形の低い高台が付く。6の甕口縁部以外の越前焼は、器表面の観察から中世に位置づけられると考える。14は青磁碗で、腰部のみの残存である。15は土師質皿で、型成形によるものであることから、近世に位置づけられる。

4 銭貨(第62図16~18、第15表)

銭貨は寛永通寶が3点出土している。銭面に鋳出された文字から判断すると、16は古寛永に、17・18は新寛永に相当する。



第62図 土器・陶磁器実測図、銭貨拓影(縮尺1~15:1/4、16~18:2/3)

第4章 小野平等遺跡の調査

第13表 石塔観察表 (第60図)

() は残存値または復元値

No	種別		出土地点		法量 (cm)			備考	残存	石材
			区	包含層遺構	幅	高さ	奥行			
1	五輪塔	空風輪	試掘		空輪径 162 風輪径 164	(25.3)	—		ほぞを欠損する	凝灰岩
2	五輪塔	空風輪	B1	SX4	空輪径 126 風輪径 (135)	(22.0)	—	空輪の上端部は摩耗している	一部欠損する	凝灰岩
3	五輪塔	空風輪	B1	SX4	(12.6)	(16.6)	—	破片	大きく欠損する	凝灰岩
4	五輪塔	火輪	B1	SX4	22.9	11.6	23.2	上面ほぞ穴の深さは5.2cm	風化、部分的に欠損する	凝灰岩
5	五輪塔	火輪	B1	SX4	(23.1)	(11.5)	(23.5)	擦り切り痕あり	風化、上部を欠損する	凝灰岩
6	五輪塔	火輪	試掘		(25.4)	17.0	(23.9)	上面ほぞ穴の深さは5.4cm	大きく欠損する	凝灰岩
7	五輪塔	水輪	SX2上部に集積		27.8	16.4	26.9	梵字「バン」蓮華座あり	一部欠損する	凝灰岩
8	五輪塔	水輪	SX2上部に集積		26.4	16.7	(25.7)	梵字 不明	一部欠損する	凝灰岩
9	五輪塔	水輪	SX2上部に集積		22.2	15.2	21.9	梵字「バン」蓮華座あり	一部欠損する	凝灰岩
10	五輪塔	水輪	SX2上部に集積		22.5	14.4	22.0	梵字「バン」か？ 蓮華座あり	一部欠損する	凝灰岩
11	五輪塔	水輪	B1	SX4	21.5	14.0	22.0	梵字「バン」蓮華座あり	風化、一部欠損する	凝灰岩
12	宝篋印塔	笠	D3	SX2上面 試掘	(25.5)	(15.4)	(20.1)	隅飾突起を欠損する	風化・摩耗し、大きく欠損する	緑色凝灰岩
13	宝篋印塔	基礎	D3	SX2上面 試掘	(36.0)	19.1	(24.2)	下面に窪みを有す	大きく欠損する	緑色凝灰岩

第14表 土器・陶磁器観察表 (第62図)

() は残存値

No	種別		出土地点		法量 (cm)			焼成	胎土	色調	調整・備考
			区	包含層遺構	口径	底径	器高				
1	須恵器	有台杯	C1	Ⅲ	—	(9.4)	(2.4)	良	微砂粒含む	25Y6/1黄灰	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ
2	須恵器	甕	C4	Ⅱ上	—	—	—	良	1mm大の砂粒を含む	25Y6/2灰黄	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ
3	須恵器	甕	C1	Ⅲ	—	—	—	良	微砂粒含む	外2.5Y3/1黒褐 内2.5Y4/1黄灰	外) 横ナデ 内) 横ナデ
4	須恵器	横瓶	試掘		—	—	—	良	微砂粒含む	外2.5Y5/1黄灰 内2.5Y7/1灰白	外) カキ目・タタキ 内) カキ目 内面自然釉
5	須恵器	甕	C1	Ⅲ	—	—	—	良	微砂粒含む	25Y5/1黄灰	外) タタキ 内) 当て具痕
6	越前焼	甕	D2	Ⅱ	—	—	—	良	微砂粒含む	5YR4/2灰褐	鉄釉
7	越前焼	甕	B1	Ⅰ	—	—	—	良	1mm大の砂粒を含む	25YR4/3 にぶい赤褐	
8	越前焼	甕	試掘		—	—	—	良	砂粒を多く含む	10YR6/3 にぶい黄橙	
9	越前焼	甕	B2	Ⅰ	—	—	—	良	微砂粒含む	75YR5/3にぶい褐	押印文
10	越前焼	甕	C1	Ⅱ	—	—	—	良	微砂粒含む	75YR5/4にぶい褐	押印文
11	越前焼	甕	B1	Ⅰ	—	(19.4)	(7.4)	良	密	75YR4/3褐	内面自然釉
12	越前焼	壺	B1	Ⅰ	—	—	—	良	1mm大の砂粒を含む	10YR5/2灰黄褐	
13	越前焼	鉢	B1	Ⅰ	—	—	—	良	1mm大の砂粒を含む	10YR4/1褐灰	外) ケズリ 内) ナデ 底) ナデ
14	青磁	碗	A1	Ⅲ1上面	—	—	(2.9)	良	密	25GY7/1 明オリープ灰	中国産
15	土師質土器	皿	C2	Ⅰ	(10.4)	—	(1.4)	良	密	10YR8/3浅黄橙	口~内面) まわしナデ 底) ナデ

第15表 銭貨観察表 (第62図)

No	銭文	出土地点		法量 (cm・g)					初鑄年	備考	素材
		区	包含層遺構	径	内径	方孔径	厚さ	重さ			
16	寛永通寶	C2	SX2上表面	2.37	1.86	0.55	0.12	3.00	日本1636	古寛永	銅
17	寛永通寶	C2	SX2表土	2.34	1.91	0.60	0.10	2.10	日本1697・1767	新寛永	銅
18	寛永通寶	D4	Ⅰ	2.30	1.88	0.66	0.09	1.81	日本1697・1767	新寛永	銅

第5章 まとめ

第1節 小野遺跡について

1 古代について

今回の調査の契機となったのは、古代の遺物である。調査でも遺物は出土したが、確実な遺構を把握し難く、遺跡の性格を明確にすることはできなかった。小野遺跡における遺物の出土については、府中(旧武生市)南部が古代以降に開発が進んだとの指摘⁽¹⁾を踏まえ、寺院的な要素が確認された越前市大塩向山遺跡をはじめとする府中南部の開発の波及と、当地から直線距離で5km以内に位置する大虫廃寺、山岳寺院であるマンダラ寺跡、須恵器が出土した鬼ヶ岳山頂などとの関連を考えたい。

2 中世・近世の遺構・遺物について

中世・近世の遺構についてであるが、中世の遺構に関しては、その後の開発による切り合いなどで個々の遺構の特定は困難なため、残念ながら具体像は不明である。建物は復元した以上に存在したはずであるが明確にはし得ず、出土遺物が限定的なため、全ての建物について時期を特定するまでには至らなかった。その内容であるが、小規模な側柱建物が多く、総柱建物は確認していない。1間×1間の建物は7棟、2間×1間は7棟、2×2間は1棟、3間×1間は3棟確認し、他に柱穴列として確認したものがあつた。主な建物構成を見てみると、1間×1間の建物では、床面積は3.3~8.9㎡に収まり、平均5.9㎡となる。南北棟・東西棟の両者が同程度あり、時期は判断できないものが多い。2間×1間の建物では、桁行の中間の柱穴が無いものもある。床面積は7.7~27.0㎡とやや幅があり、平均12.9㎡となる。長軸方向を南北とするものが多い。この中には近世に位置づけられる建物がある。3間×1間の建物では、床面積が9.9~40.8㎡とやや幅があり、平均22.2㎡となる。長軸方向を南北とするものが多い。時期は中世の可能性のあるもの、近世の可能性のあるものがある。また床面積について計測可能なものを見ると、40.8㎡のSB23が最大であり、井戸(SE02)を伴っている。当地での中規模と言えなのが15.9~27.0㎡の範囲に4棟(SB18・19・25・26)あり、その他は9.9㎡以下にまとまる。このような小規模の建物は、存在したであろう礎石建物をはじめ他の建物に付属するなど、使用目的の違いである可能性を考える。掘立柱建物以外の建物では、約1m間隔で柱穴が並び、礎石の根固め石である礫が残存する。礎石の形態・規模は不明だが、同様な構造の建物は福井城跡では16世紀末にはすでに表れている。平面積では100㎡超となり、掘立柱建物とは一線を画す。時期については、付属すると考えられる溝などの他の遺構と関連させると、18世紀後半~19世紀代の建物と言えよう。微量ながら18世紀代の赤瓦片が出土しており、このような建物に利用されたかもしれない。その他の遺構では、福井城跡で多く存在する廃棄土坑と言えるものは少なく、これは都市部と山間部の違い、言うなれば人口密度や物量の差異と言えそうである。

中世の遺物について見ると、越前焼、瓦質土器に13世紀代のものがあり、古代以降の空白期間において集落が形成される。遺物には12世紀後半の常滑焼の壺(419)も出土している。越前市安丸官人遺跡においても12世紀後半から13世紀に位置づけられる常滑焼の甕が散見される。両遺跡が位置する旧武生市西部は越前焼生産地に近接する立地ではあるが、越前焼生産が13世紀後半以降増加し、広く流通していく過渡期が集落形成期にあたるのであろう。越前焼は甕・播鉢が主となり13世紀から16世紀後半まで安定して出土する。その他、中世陶磁器を見てみると、輸入磁器では、青磁は15世紀前半から16世紀前半に、染付は15世紀後半から16世紀代の時期を主体とする。これらを合わせて考えると、ほぼ朝倉氏が一乗谷を拠点に越前を支配した時期と重なる。そして16世紀後半になると、組成の中に新たに瀬戸・美濃

産陶器が加わる。大窯期の第3段階以降の製品である。古瀬戸(346)や大窯期前半の皿(345)の遺物量が少量であることを考えると、その増加は急激と言える。大窯期の第3段階の製品が、畿内や西日本の城郭、城下町遺跡で増加することは知られており⁽²⁾、その背景として、産地における匣鉢詰め⁽²⁾の改良による供給力の増大、瀬戸・美濃焼産地を掌握した織豊政権による産業、経済政策など、戦国期の動向と密接に関係すると考えられている。小野遺跡から出土した大窯第3段階の器種が、碗と皿が中心になることは通常の在り方で他地域と変わらないが、搦鉢などの調理具は在地の越前焼が占めており、少なからず瀬戸・美濃産が出土する福井城跡との需要、経済力の違いと言えよう。天目茶碗は、茶の湯に関連した器種であり、当地にも茶の湯が普及したと言える。同時期に営まれた福井市下筋生田畑田遺跡は沖積低地に位置し、北陸道に近接する。農村集落ながら、都市部でもてはやされた志野筒向付や、時期は少し下るが志野織部皿が出土しており、当地とは多少様相が異なる。しかし、茶の湯の普及は農村、山村とも変わりなく、その基礎となったのは西(馬借)街道をはじめとする朝倉氏の諸街道整備と言える。

近世の集落は、基本的に中世から途切れることなく継続する。遺物には伊万里焼、唐津焼などの肥前産陶磁器、瀬戸・美濃焼、京・信楽焼、越前焼、土師質皿などの陶磁器、土器の他、石製品、漆器、木製品、金属器、銭貨など多数ある。越前焼以外の陶磁器で中心となるのは伊万里焼、唐津焼などの肥前産陶磁器と瀬戸・美濃焼である。これらの導入時期と消長を簡単に見ていくと、肥前産陶磁器の内、唐津焼は17世紀前半の大橋Ⅰ期と考えるもの(342)が出土しており、当地における唐津焼の導入時期である。福井城跡や下筋生田畑田遺跡でも大橋Ⅰ期のものが出土しており、武家屋敷、平地の農村集落と比較しても導入時期は変わらないと言えるが量的には少ない。主要器種は碗、皿である。福井城跡では碗、皿以外に甕、壺、徳利や茶陶に関連するものなど多様であり、内容には大きな違いがある。当地での唐津焼は、18世紀前半以降になると出土量が減少する。伊万里焼は17世紀後半の大橋Ⅲ期のものが出土しており、これが当地における伊万里焼の導入時期である。主要器種は唐津焼と共通で碗、皿である。同様に福井城跡と比較すると、福井城跡では17世紀前半の大橋Ⅱ-1期に相当するものがあり、大橋Ⅲ期にかけて出土量が増大していく。唐津焼とは違い、伊万里焼の導入には時間差がある。またその内容にも大きな違いがある。出土量を見ると、当地では伊万里焼導入後の17世紀後半以降は安定して出土する。18世紀中葉以降から19世紀前半にかけては碗、皿を中心に組成の上で大きな割合を占める。この頃には遺物の中に、食膳具では筒茶碗が出現し、仏具としてお神酒徳利(132)や文具として水滴(363)、化粧道具の紅皿(79)や喫煙具(355)など食器以外の器種が現れる。出土量が増加するこの時期は、生産地において焼成技術が向上し、大量生産化が進む大橋Ⅳ期に相当し、また大橋Ⅴ期にかけて、安価な大衆向けの製品が流通する時期だが、これと軌を一にし、当地では大橋Ⅳ・Ⅴ期に相当するものが多い。

瀬戸・美濃産陶器については中世から引き続き碗、皿を中心に一定量の出土量がある。しかし、皿について見ると、18世紀以降は肥前産陶磁器、中でも伊万里焼の導入後、皿は急激に出土量が減少する。先にも述べた伊万里焼の大量生産化、大衆化の影響を強く受けている。しかし、碗について見ると、必ずしも皿と同じように出土量が減少したわけではなく、18世紀を通じて一定量の需要があり、また18世紀以降、碗、皿以外に化粧道具である鬢盥(361)や仏具(210・362)など、食膳具以外の器種が現れる。

以上、主要な産地について概観したが、当地の特色を挙げると器種はほぼ食膳具に限定される。碗では口径が10cm程度のものが主体で、大振りのものは見られない。皿も口径が11~14cm程度の中皿が主体で、大皿と言えるのは象嵌文様を施した唐津焼の大皿(86)くらいである。福井城跡では一定量出土する輸入陶磁器は、中世と比較すると激減し、漳州窯産の鉢(209)があるのみだが、これは当地での数少な

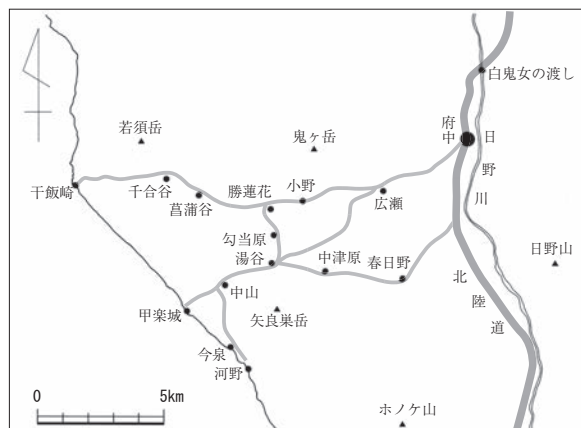
い鉢でもある。言うなれば、盛ったものを取り分けるといったハレの場に関するものが希少と言える。また、中世から継続して導入される瀬戸・美濃焼であるが、これは生産地からの距離という地理的な要素が関係すると考える。しかし、いわゆる茶陶の商圈には該当しないものの、天目碗や丸碗などが入ってきており、都市圏とは違った茶の普及が窺われる。17世紀半ば以降、都市圏の上層階級には煎茶が広まり、庶民へと普及するのは18世紀後半だとされる。当地における筒碗(11・12など)の存在はその傍証となり、安価な磁器の普及と密接に関連したものである。18世紀後半以降、量の上では限定的ながらも、京・信楽産陶磁器が加わることや、食膳具以外の器種の登場は、当地が新たな流通圏に加わり、かつ生活様式が変化した表れと言える。しかし、各器種の組成については諸要素が複雑に関連しており、一般庶民が使用した陶磁器類についてはさらなる資料が必要である。

県内、特に越前地方で発掘調査が行われた近世の農村集落には、福井市下筋生田畑田遺跡、坂井市東太郎丸遺跡、越前町小倉石町遺跡などがある。下筋生田畑田遺跡は中世から続く集落で、志野などの茶陶や朝鮮製陶器が見られる。先述したが、北陸道に近接し、福井城下より5km以内に位置することで得られる情報と経済力を有する購買層が存在したと考える。東太郎丸遺跡からは、小杯、皿を中心に大橋Ⅱ～Ⅳ期に亘る肥前産陶磁器が出土している。小倉石町遺跡は山麓部に位置する13世紀から19世紀代までの集落である。これら農村集落とされる調査例はあるが、遺物自体の報告例が少なく現時点での比較は困難である。しかし、山間地に位置する小野遺跡においても、伊万里焼の導入には多少の時間差があるが、当時の陶磁器生産地の動向を反映し、且つ流通網の中に組み込まれていたと言える。

3 小野遺跡を取り巻く状況

小野遺跡を取り巻く周辺の状況について述べると、第2章の歴史的環境の節でも触れたが、旧武生市の伝統産業には鎌、庖丁、鉈、鋏などの製造販売があり、越前打刃物として知られている。福井藩内の動向を記した歴史書である『国事叢記』の寛文八年(1668)の項目には、絹糸、生漆、浄教寺砥石や笏谷石をはじめとする越前産物三十五品目の中に馬鋏、鎌、菜刀が挙げられ、文化十二年(1815)の『越前国名蹟考』には府中の産物六品目の中に鎌が挙げられている。今回の調査ではSE05から庖丁が、SK81から鎌が出土しており(第49図1・2)、この2点が府中産であるか否かの判断はできないが、鎌について考えてみると多少なりとも示唆を含む。まず、打刃物の生産地であるが、慶長六年(1601)、本多富正は府中に入った後、街道、用水路などを組み合わせて陣屋、武家屋敷、町屋、寺町、宿場、鍛冶屋町を整備した。鍛冶屋町は火災防止上の点から集団化させて府中城の南方に設置した。この位置は、ちょうど近世北陸道と西(馬借)街道が結節する辺りに該当する(第5図)。そして産業奨励策として、鍛冶職人たちには同業者が増えないよう、自らの組織の利益を守り製品の質を保持する、という株仲間を組織する特別の権利を認めた。当時、打刃物の原料には、出雲、伯耆、石見など中国地方から産出する砂鉄が使われ、鉄・鋼の状態では安来(出雲)、境(伯耆)、浜田(石見)などから日本海を北上する舟運で越前の三国湊や河野浦へ運ばれた。三国湊からは川船で九頭竜川、日野川を経て白鬼女しらきじよの渡し(越前市家久町、鯖江市舟津町付近)で陸揚げされ、府中へ運ばれた。もう一つの経路である河野浦から府中へ運搬するのに利用されたのが、西(馬借)街道である。享保十四年(1729)の資料には、河野浦からの鉄が織田(越前町)経由で府中に入るところ、本来通るはずの中山や勾当原の馬借に差し押さえられた争論が起きたことが記される⁽³⁾。製品の出荷においても同様で、北陸道の他に河野浦からの舟運が利用され、河野村今泉の北野五右衛門家には、弘化二年(1845)の河野今泉浦から送られた打刃物の関税明細が残っている⁽⁴⁾。これらは府中と河野浦間の流通とその道筋の多様さの一例を示している。打刃物の中でも特に鎌は、越前

鎌として近世中期以降に隆盛を極め、生産量は増加する。その理由としては、平和な社会となり新田開発、品種改良、殖産興業が興ったこと、貨幣経済の発達が生産性を向上させたこと、販売路が確立したことなどが挙げられ、中には鍛冶職人から鎌問屋商人となり、北陸から伊勢や甲府までを含む地域に販路を広げる者も現れる。小野遺跡において、近世を通じて幕末に至るまでの出土遺物から、集落が継続する源となったのは上記の打刃物製造の振興と販路拡大をはじめとする、府中における産業と北前船による海運の隆盛と無縁ではないと考える。西街道を通行する馬借たちは、株仲間を組織して領主の保護を受けた者たちであるが、西(馬借)街道以外にも流通路としての街道は存在し(第63図)、府中と河野浦間の集落を結び流通を担っていたのである。当地は山間に位置するが、府中の産業の発展と共に貨幣経済の中にあることは寛永通寶の出土からも明らかである。貨幣は交通路における支払いの手段として機能し、このことは府中と河野浦を結ぶ重要な中継地であることを示す⁽⁵⁾。そう考えると、一分判金の出土は流通の中継地点としての当地の役割を反映したものと言えよう。



第63図 府中と日本海を結ぶ主な街道 (縮尺1/30万)

西(馬借)街道以外にも流通路としての街道は存在し(第63図)、府中と河野浦間の集落を結び流通を担っていたのである。当地は山間に位置するが、府中の産業の発展と共に貨幣経済の中にあることは寛永通寶の出土からも明らかである。貨幣は交通路における支払いの手段として機能し、このことは府中と河野浦を結ぶ重要な中継地であることを示す⁽⁵⁾。そう考えると、一分判金の出土は流通の中継地点としての当地の役割を反映したものと言えよう。

第2節 小野平等遺跡について

今回の調査では、五輪塔の部材11点と宝篋印塔の部材2点が出土した。原位置を保つ可能性のある地輪は出土せず、残念ながら中世墓の存在を明確にすることは出来なかった。中世に位置づけられる越前焼の破片も出土しており、蔵骨器と考えるが、僅かな破片数からは蔵骨器は散逸してしまったという他ない。出土した越前焼では時期を中世としか判断できないため、第60図の五輪塔についてこれまでの県内の成果に基づき、組み合わせと時期を考える⁽⁶⁾。

空風輪については1が他より大型で、これと組み合う火輪は無いと考えること、3は大きく欠損することから除く。水輪の7・8は、9・10と比べて幅、高さともに大きく、7・8と組み合う火輪は無いと考えるため、火輪4～6、水輪9～11で組み合わせの可能性を考える。火輪の新旧関係を考えると、軒が直線的な4からやや反る5へ、そして大きく反る6への推移が考えられ、水輪では最大径が中位に近い10、やや上位になる9、上位に上がり下方がすぼまる11へ推移すると考える。これらを各々組み合わせると、A類：4と10、B類：5と9、C類：6と11となる。各部材の特徴から、A類は14世紀前半～末葉に、B類は14世紀末葉～15世紀中葉に、C類は15世紀後半～16世紀後半に位置づけられる。出土時に重なっていた4と11は時期が違うことになり、やはりSX4自体が破壊とその後の集積の結果と言える。考慮から外した中で、水輪の7は最大径がやや上位に位置しB類に、8は最大径が中位近くになりA類に該当しよう。空風輪の1は水輪との釣り合いから組み合うものは無いと考えると、五輪塔は最低でも6基が存在した可能性がある。宝篋印塔の2点については、五輪塔の存続した時期としか判断できず、この2点が組み合わせると考えるため、石塔は計7基以上が存在した可能性がある。

SX1・2については、構成する礫の一つとして破壊された石塔片が含まれており、石塔が構築された16世紀後半以降のものと言えよう。遺構としては、露出した岩の周囲に人為的に礫を集積したものであり、その性格については不明と言わざるを得ない。

旧武生地域の石塔類について概観すると、発掘調査によって出土した石塔類は少ない。このような中で、当地から北東約7kmに位置する安丸官人遺跡では、3年度に亘る調査から石塔類が18点出土し、その内訳は五輪塔の部材が14点、多層塔の部材が4点である。石材には、福井市足羽山から産出する、いわゆる笏谷石製のものに多層塔があるものの、五輪塔には少なく、ほとんどの五輪塔の部材は産地不明の乳色～灰色に近い色調を呈する凝灰岩が使用されている。言うなれば、多層塔は笏谷石製、五輪塔は産地不明の凝灰岩製という使い分けがなされているようである。小野平等遺跡でも宝篋印塔はいわゆる笏谷石製であり、五輪塔とその他の石塔とで石材の使い分けが行われた可能性がある。安丸官人遺跡の報告では、石塔の需要が高まった中世後半に朝倉氏の統制の下で笏谷石を生産、流通する集団と、府中を中心に別の凝灰岩を生産、流通する集団の存在が指摘されている⁽⁷⁾。両遺跡の水輪を比較すると、月輪や簡略化した蓮華座の意匠が似通っており、石材の流通と製作集団に関して共通性が指摘できる。また、小野平等遺跡における笏谷石製宝篋印塔の存在は、朝倉氏統制下の集団から笏谷石を入手可能な層の存在を窺わせるが、当時の石材に対する価値観や石臼など他の石製品の素材との関連など、府中を中心とする造塔活動、石材流通については資料不足であり、今後の調査例の増加が必要である。

以上に述べたような小野平等遺跡の類例について立地に着目すると、一乗谷朝倉氏遺跡から北東約800mに位置する福井市武者野遺跡^{ふしやの}を参考に挙げることができよう⁽⁸⁾。武者野遺跡は足羽川の左岸に位置し、対岸には北ノ庄(福井)と大野を結ぶ美濃街道が通じている。この地は、朝倉氏が一乗谷を拠点とした時代には刑場や三味などであったとされ、人の死に関わる地として利用されていた。これに関し、朝倉館を中心とする城戸の内に対して、武者野遺跡が位置する武者野や、美濃街道や朝倉街道沿いの安波賀・東郷を外接地区として、河川や街道が結節する地に生じる「無縁・公界の地」と位置づける小野正敏氏の論考がある⁽⁹⁾。そして、小野集落における人の死に関わる地が吉野瀬川を挟んだ対岸の小野平等遺跡に該当しよう。中世以前から、集落の周縁および山地や河原などには、墓域など人の死に関する場が設けられたことはよく知られているが、そのような視点から小野平等遺跡の立地について見ると、川を境界に生者の世界と切り離される地、死穢の対象という「無縁」の要素を内在しており、墓域として利用される契機となったと考える。そして石塔が存在したことは、第2章第2節でも触れたが、丹生・南条山地方への仏教の布教活動と、その浸透による死者に対する供養が行われたと言えるのだが、当地では近世以降になると墓域は移転し廃れてしまう。前述した安丸官人遺跡でも、近辺に中世墓の存在を指摘しているのだが、墓域の破壊が引き起こされる戦国期の混乱⁽¹⁰⁾が府中にも波及し、小野平等遺跡でも石塔や配石遺構などの破壊、散逸、移動などが起こったと考える。

註

- 1 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 『大塩向山遺跡・山腰遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第96集
- 2 財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006 『江戸時代のやきもの』 記念講演会・シンポジウム資料集
- 3 越前市武生公会堂記念館 2010 『槌の響 越前打刃物展』 p16
- 4 前掲註3
- 5 類例として、石川県金沢市木越町^{きごしまち}に位置する木越光琳寺遺跡^{こうりんじ}を挙げる。河北潟に近接する立地や出土遺物から、主に漁労と水運に従事した中世から近世の集落であり、調査面積を考えると銭貨の出土枚数は多いと言える。報告書では銭貨の考察において、寺院との係わりや、湖上交通における流通拠点という集落の役割を反映したものと指摘している。
- 6 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『坂ノ下遺跡群』 一般国道8号敦賀バイパス関係遺跡調査報告書第1集

- 7 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013 『安丸官人遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第140集
- 8 武者野遺跡は、国道改良工事に伴い発掘調査が行われ、火葬場遺構と考えられる石積施設と、それに伴う石敷遺構や階段状遺構と考えられる石列が確認された。遺物には朝倉氏遺跡と同様の土師質皿、陶磁器、銅銭などの他、焼骨がある。
- 9 福井県 1986 『福井県史 資料編13 考古』
- 10 福井県大飯町山田に所在する山田中世墓群の考察では、墓の破壊行為を16世紀半ば以降の若狭国内の内乱の続発が背景にあると推定している。

参考文献

- 福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会共編 1961 『国事叢記 上』 福井県郷土叢書第七集
- 武生市史編纂委員会 1976 『武生市史 概説篇』
- 杉原丈夫編 1980 『新訂越前国名蹟考』 松見文庫
- 吉村亨・若原英弼 1984 『日本の茶 歴史と文化』 淡交社
- 小野正敏 1986 「一乗谷朝倉氏遺跡」『福井県史 資料編13 考古』
- 福井県立朝倉氏遺跡資料館 1986 『武者野遺跡 - 国道158号線改良工事に伴う事前調査報告 -』
- 榎の響 越前武生の打刃物刊行会 1986 『榎の響 越前武生の打刃物』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1987 『六条・和田地区遺跡群』 福井県埋蔵文化財調査報告第11集
- 小泉義博 1988 「西街道の変遷と蕪木浦」『若越郷土研究』第三十三巻 福井県郷土誌懇談会
- 水藤真 1991 『中世の葬送・墓制 - 石塔を造立すること -』 吉川弘文館
- 北陸中世土器研究会編 1997 『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1998 『木越光琳寺遺跡』 一般県道向粟崎安江町線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年 - 九州近世陶磁学会10周年記念 -』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2001 『小倉石町遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第52集
- 滋賀県立陶芸の森 2002 『研究集会「近世信楽焼をめぐって」報告書』 湖国21世紀記念事業・陶芸の森開設10周年記念
- 福井市文化財保護センター 2004 『福井城跡Ⅳ 福井駅付近連続立体交差事業および市道宝永清川線改善事業に伴う発掘調査報告書』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004 『滝見古墳群・大飯神社古墳群・山田古墳群・山田中世墓群』 福井県埋蔵文化財調査報告第75集
- 福井県教育庁埋蔵文化財研究センター 2007 『大塩向山遺跡・山腰遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第96集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『坂ノ下遺跡群』 一般国道8号敦賀バイパス関係遺跡調査報告書第1集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『諏訪間興行寺遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第20集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『東太郎丸遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第39集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『福井城跡(福井駅西口地下駐車場地点)』 福井県埋蔵文化財調査報告第102集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『福井城跡(北陸新幹線福井駅部地点)』 福井県埋蔵文化財調査報告第109集
- 越前市武生公会堂記念館 2010 『榎の響 越前打刃物展』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2012 『安丸官人遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第132集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013 『安丸官人遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第140集
- 森謙二 2014 『墓と葬送の社会史』 吉川弘文館

写 真 图 版



(1) 遺跡全景 (東上空から)



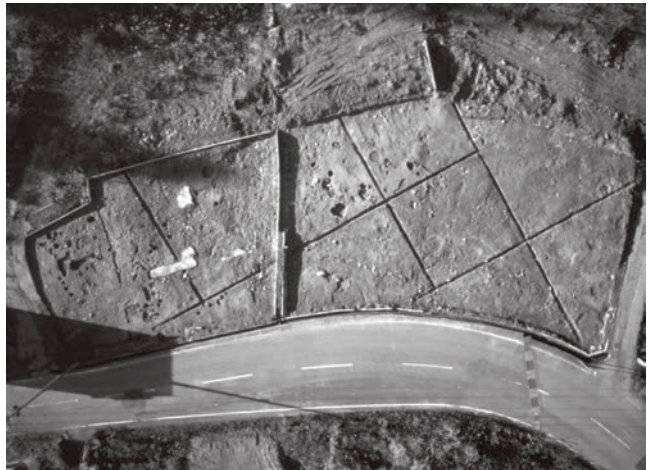
(2) 平成22年度調査区中央部 (北から)



(3) 平成22年度調査区中央部 (西から)



(4) 平成22年度調査区東側 (北から)



(5) 平成22年度調査区西側 (南東上空から)

図版第二 小野遺跡
遺跡・遺構



(1) 平成23年度調査区東側（西から）



(2) 平成23年度調査区西側（北から）



(3) K・L 9・10区遺構（北東から）



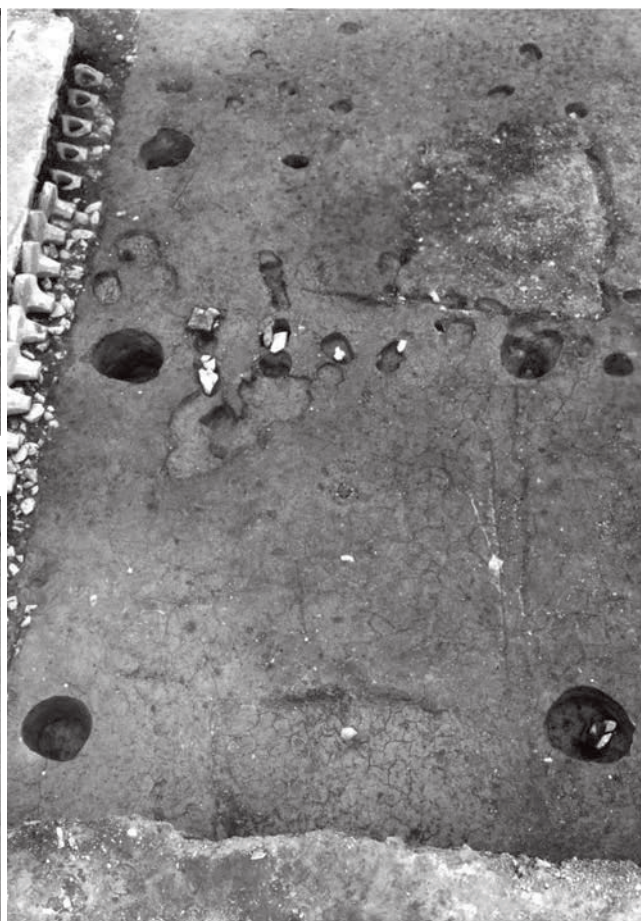
(4) E・F 13・14区遺構（北西から）



(5) SB18（北から）



(6) SB09・10（南から）



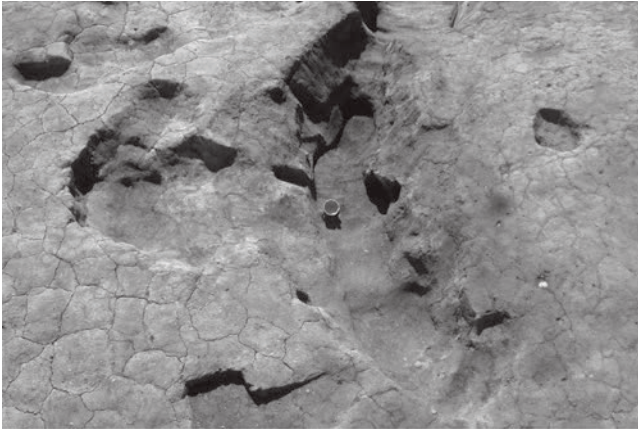
(7) SB23（北から）



(1) SK02 (東から)



(2) SK03 (東から)



(3) SK05 (東から)



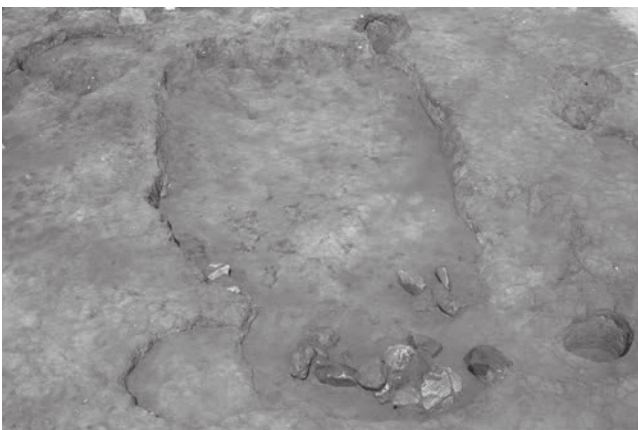
(4) SK05遺物出土状況 (西から)



(5) SK21 (西から)



(6) SK23 (南から)

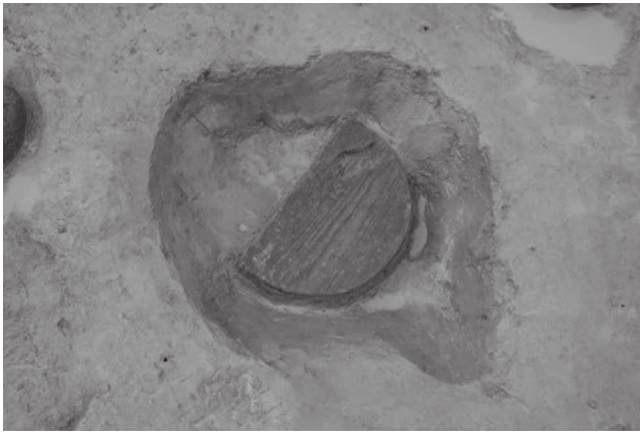


(7) SK25 (南から)



(8) SK40・42 (東から)

図版第四
小野遺跡
遺構



(1) SK52 (西から)



(2) SK60 (西から)



(3) SK78 (東から)



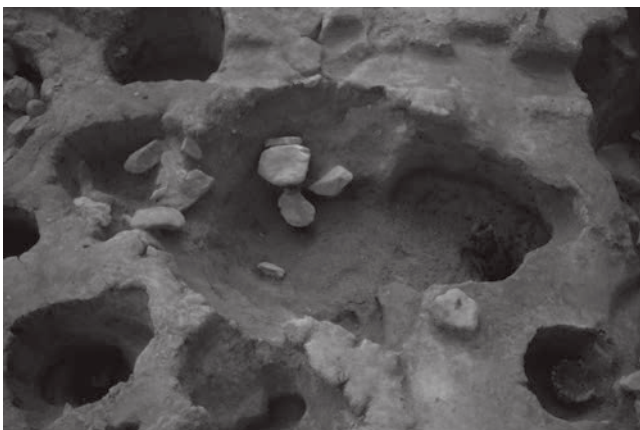
(4) SK80・87 (北から)



(5) SK81 (北から)



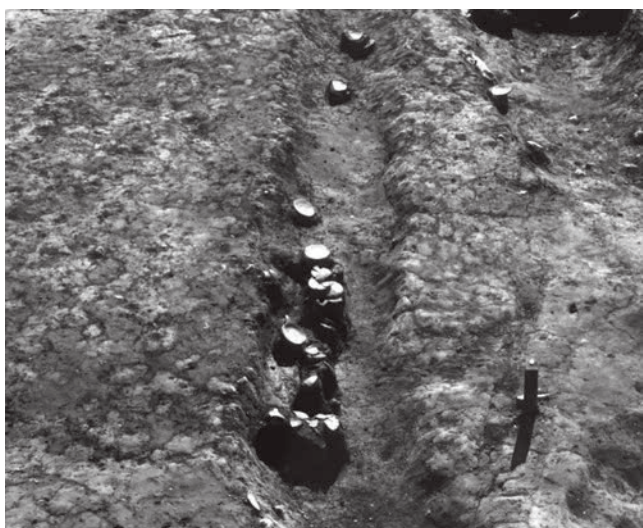
(6) SK82・83・84 (東から)



(7) SK107・SP582 (東から)



(8) SK105 (西から)



(1) SD03 (東から)



(3) SD45 (北から)



(2) SD03遺物出土状況 (東から)



(4) SD42遺物出土状況 (北から)



(6) SE03 (東から)

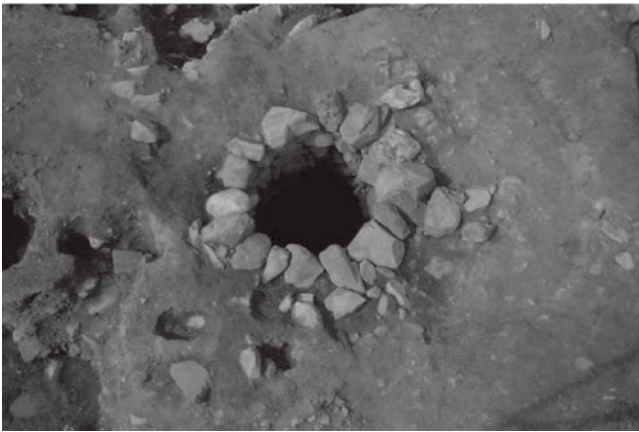


(5) SE01 (東から)



(7) SE03断面 (東から)

図版第六 小野遺跡 遺構



(1) SE04 (東から)



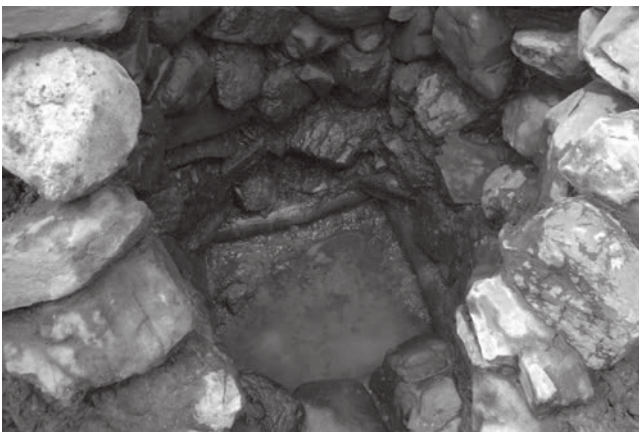
(4) SE05 (南から)



(2) SE04断面 (東から)



(5) SE05断面 (西から)



(3) SE04底面 (東から)



(6) SP332 (北から)

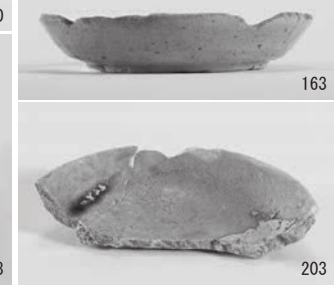
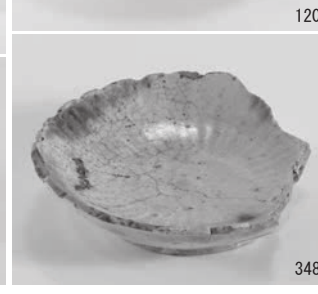
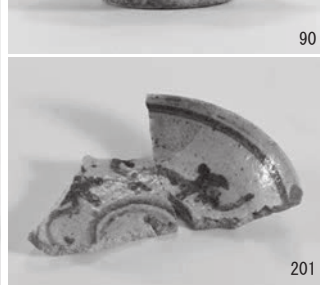
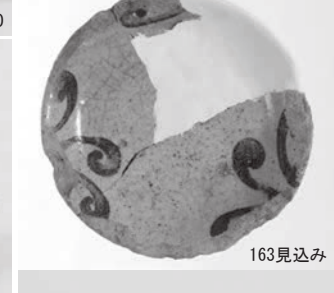
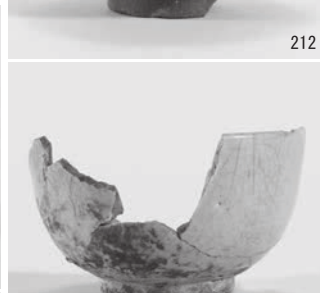
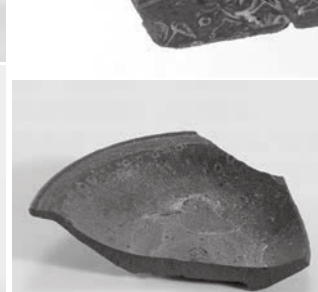
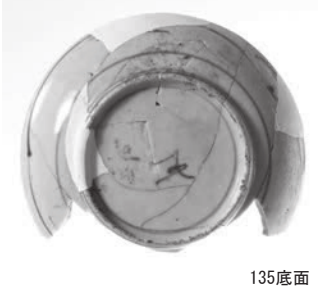
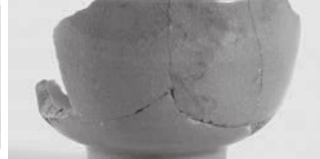
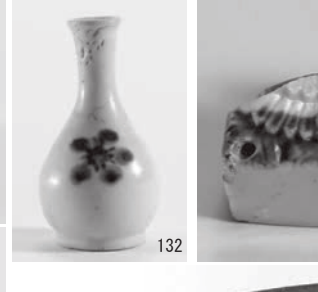
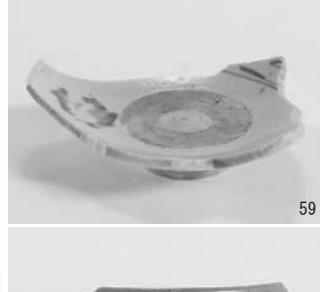
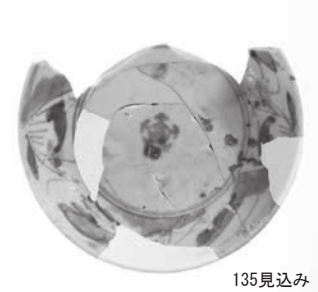
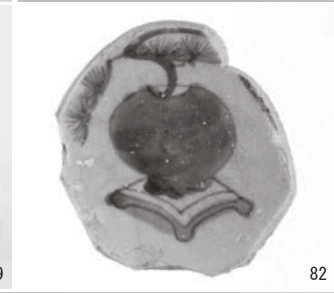
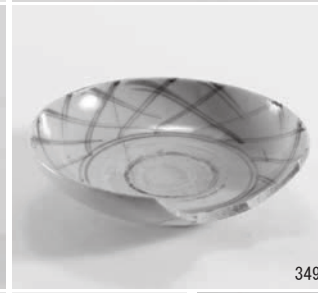
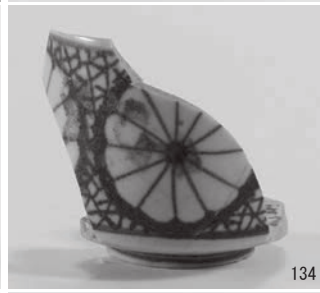
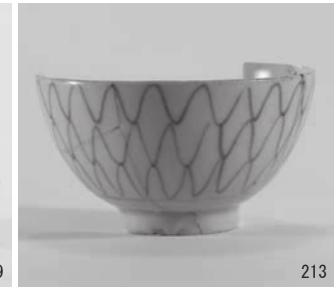
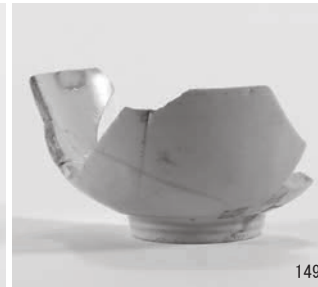


(7) SP343 (西から)



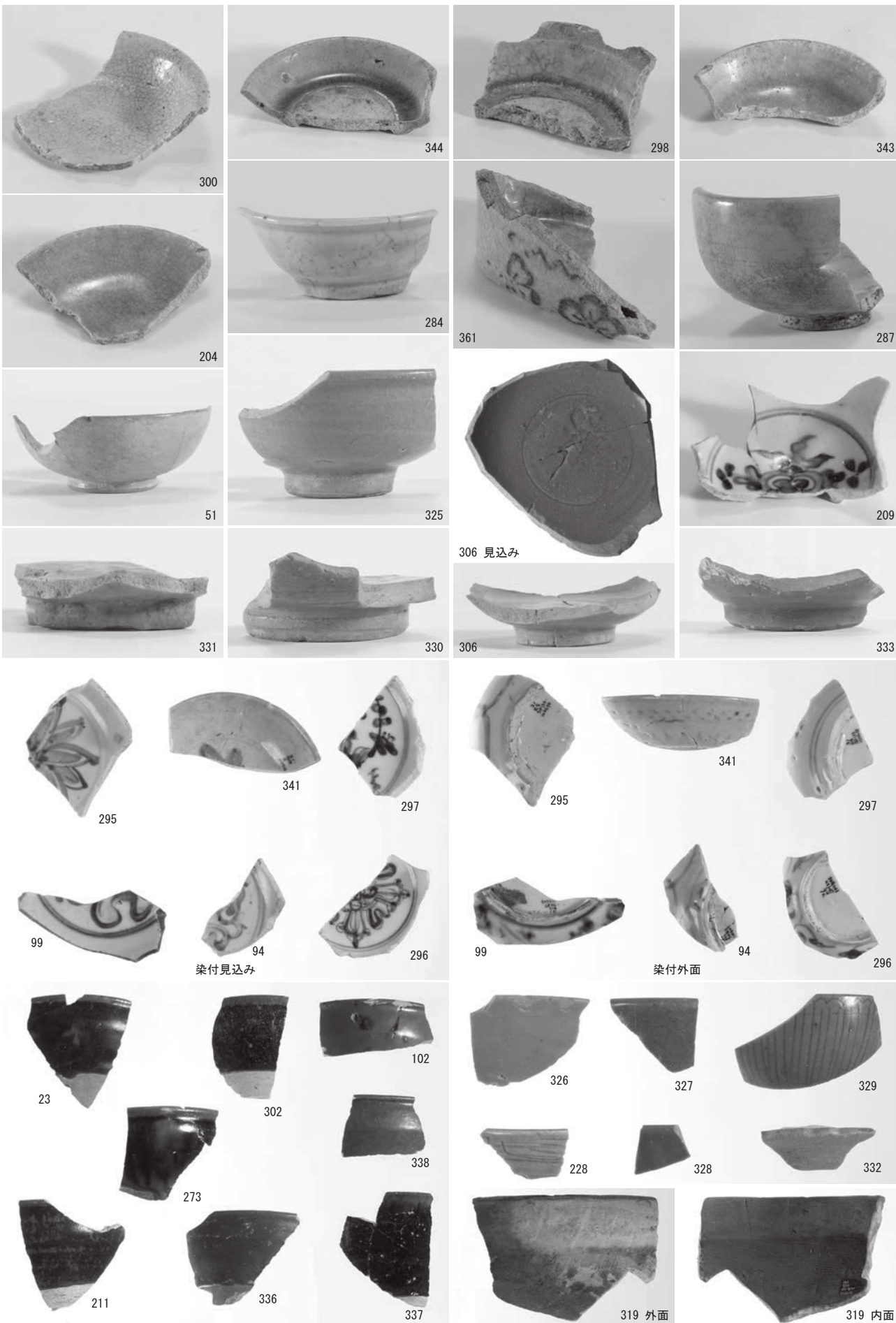
(8) SP565 (東から)

図版第七 小野遺跡 遺物



陶磁器

図版第八
小野遺跡
遺物



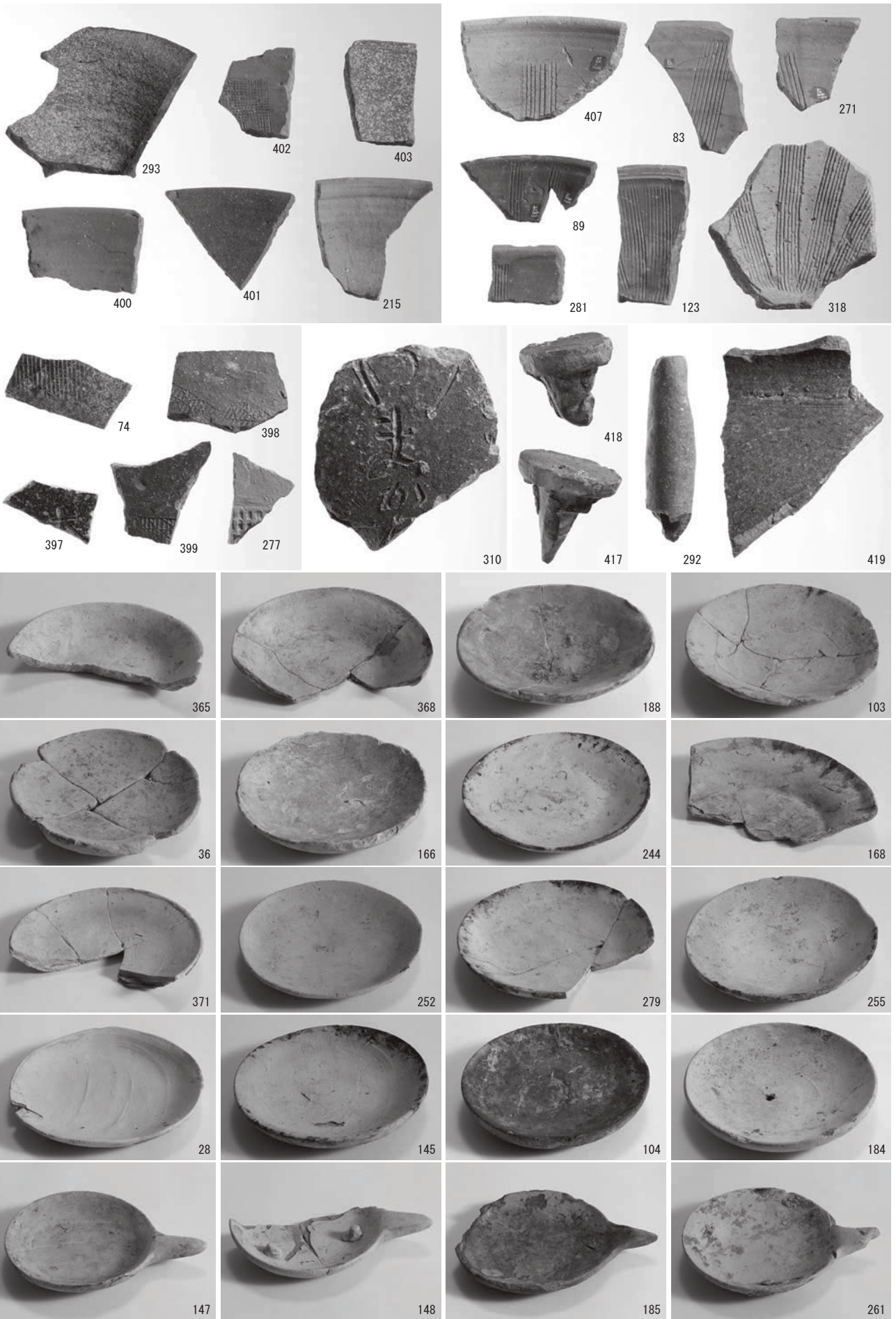
陶磁器・瓦質土器

図版第九 小野遺跡 遺物



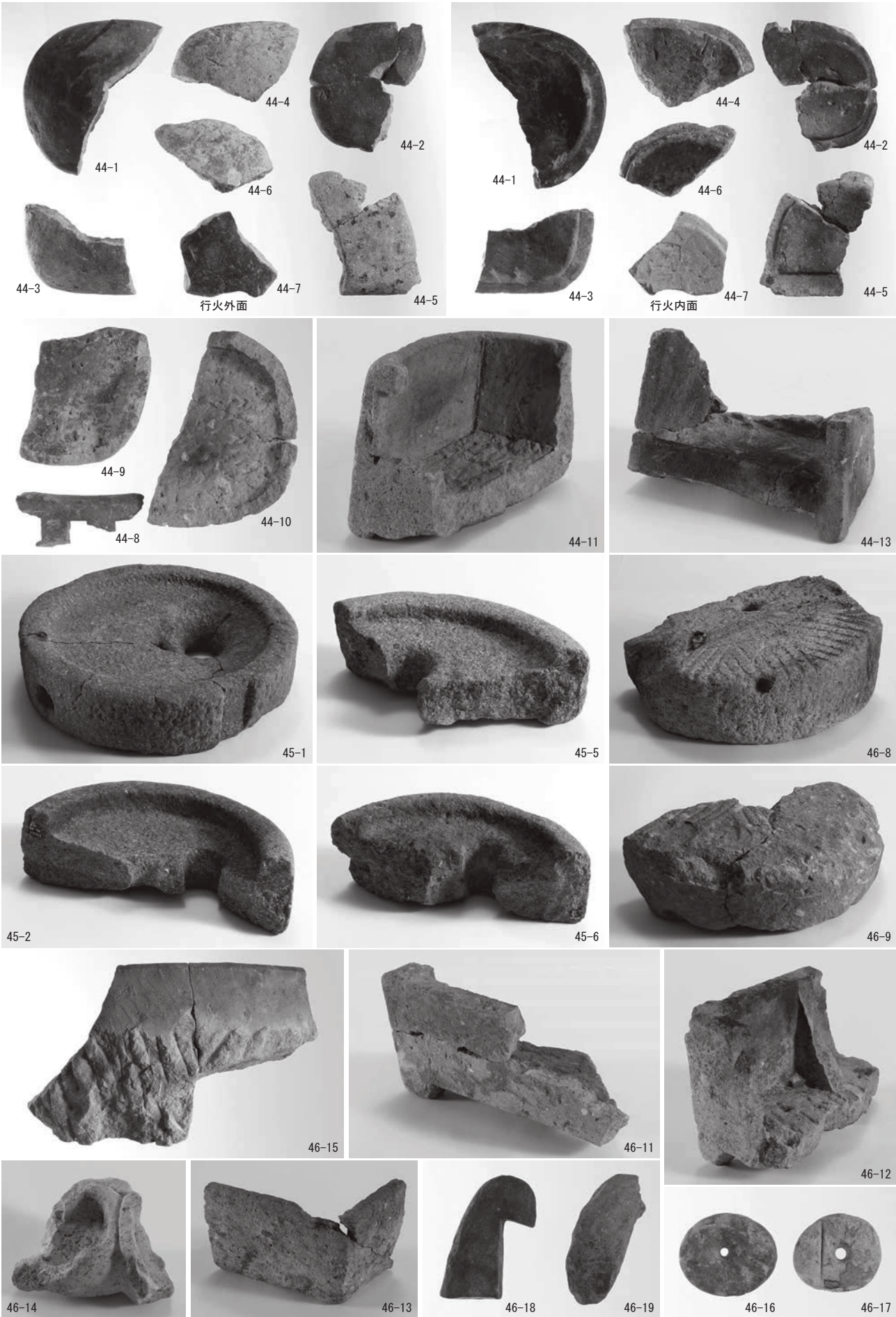
越前焼

図版第一〇
小野遺跡
遺物



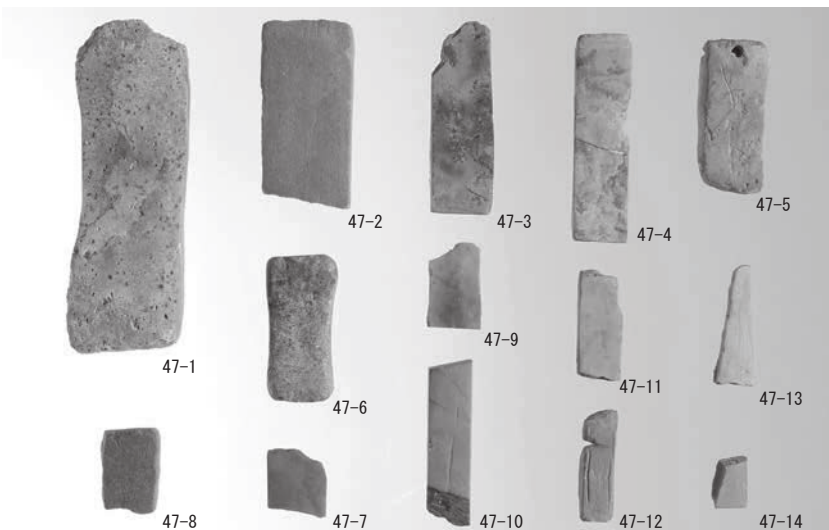
越前焼・常滑焼・土師質皿

図版第一一 小野遺跡 遺物

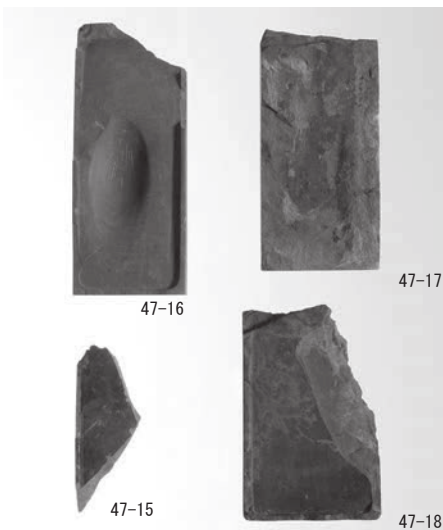


石製品

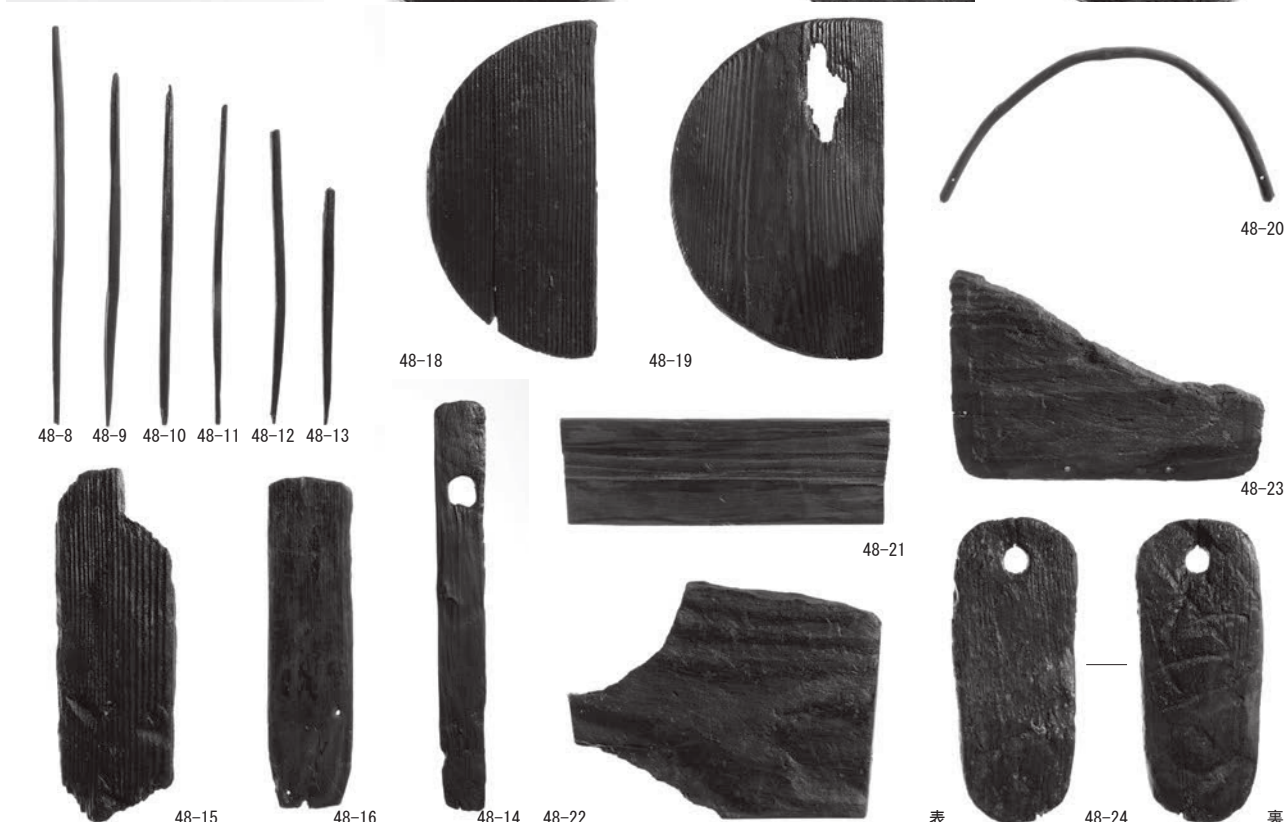
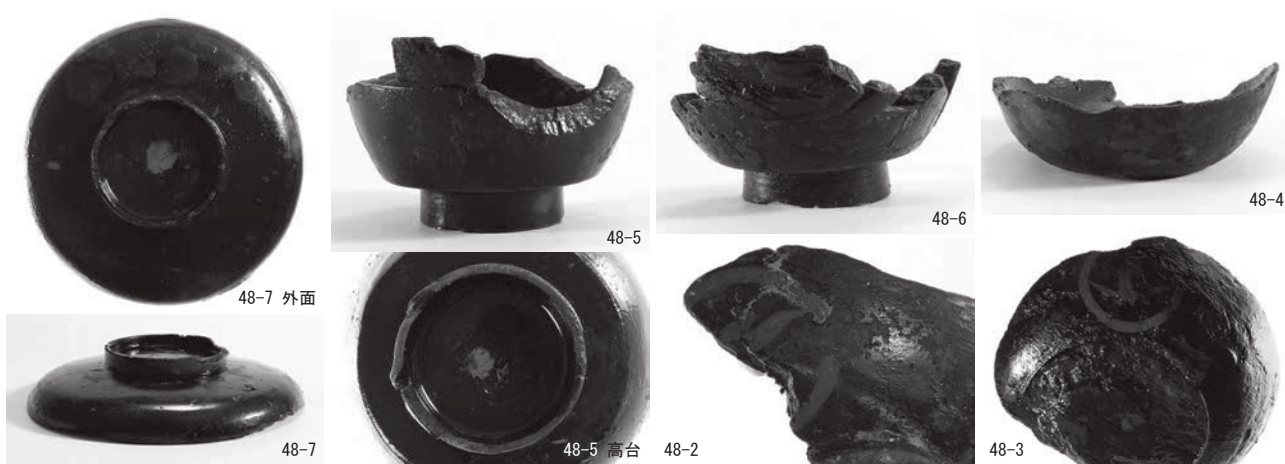
図版第一二
小野遺跡
遺物



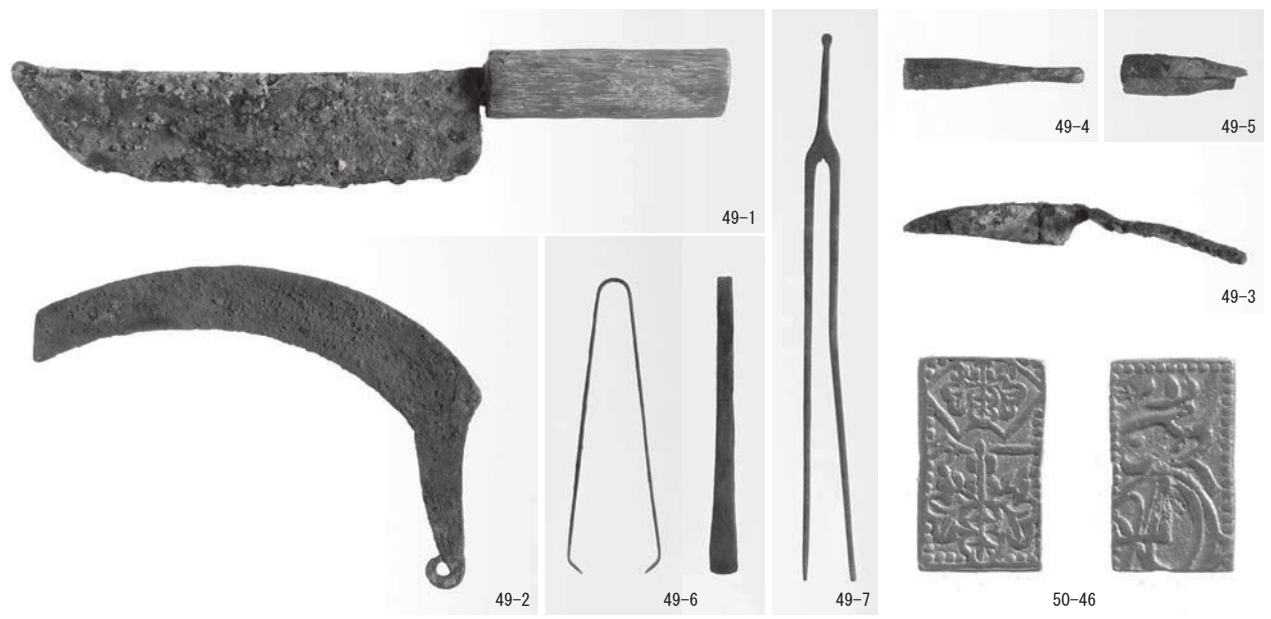
(1) 砥石



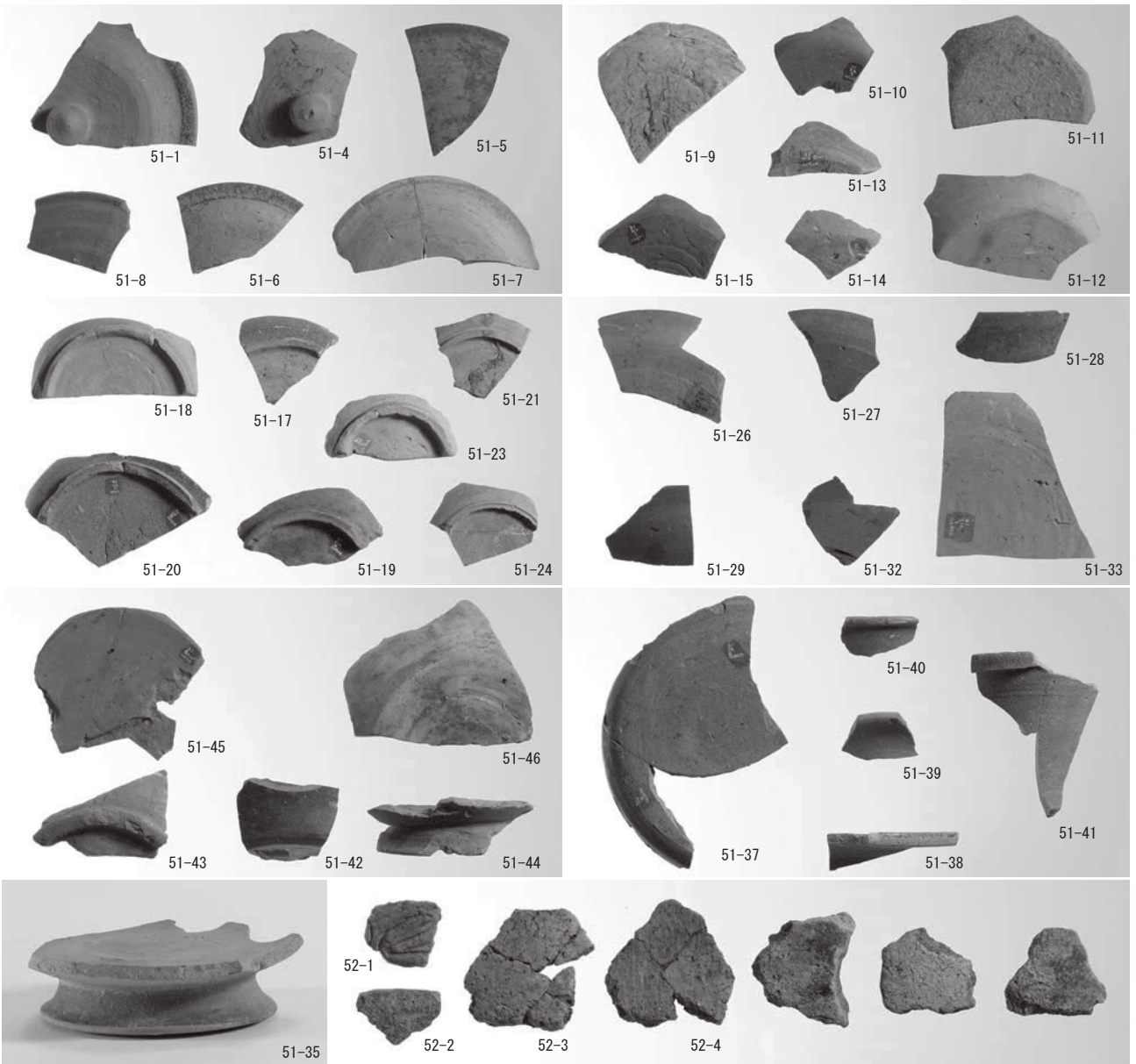
(2) 鏡



(3) 漆器・木製品



(1) 金属製品・貨幣



(2) 須恵器・縄文土器

図版第一四 小野平等遺跡 遺跡・遺構



(1) 調査前全景 (南から)



(2) 平坦面調査前 (西から)



(3) SX1・2調査前 (南から)



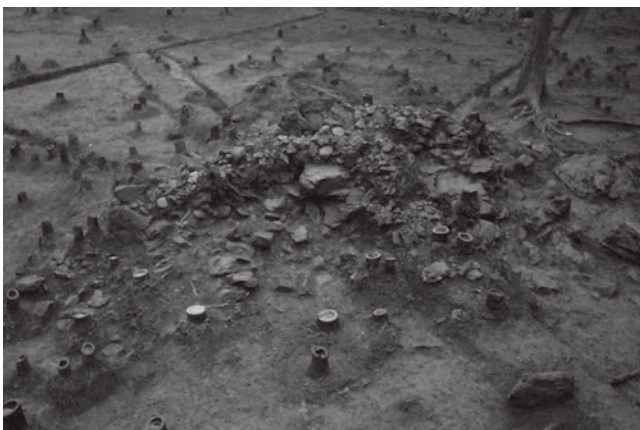
(4) SX1調査前近景 (南東から)



(5) SX2調査前近景 (南東から)



(6) SX1畦断面 (北東から)



(7) SX2畦断面 (北東から)



(8) SX1掘削後 (南東から)



(1) SX2掘削後 (北西から)



(2) 石塔露出状況 (南東から)



(3) SX4 (南から)



(4) 石塔出土状況 (東から)



(5) SX4火輪出土状況 (東から)



(6) 空風輪出土状況 (東から)

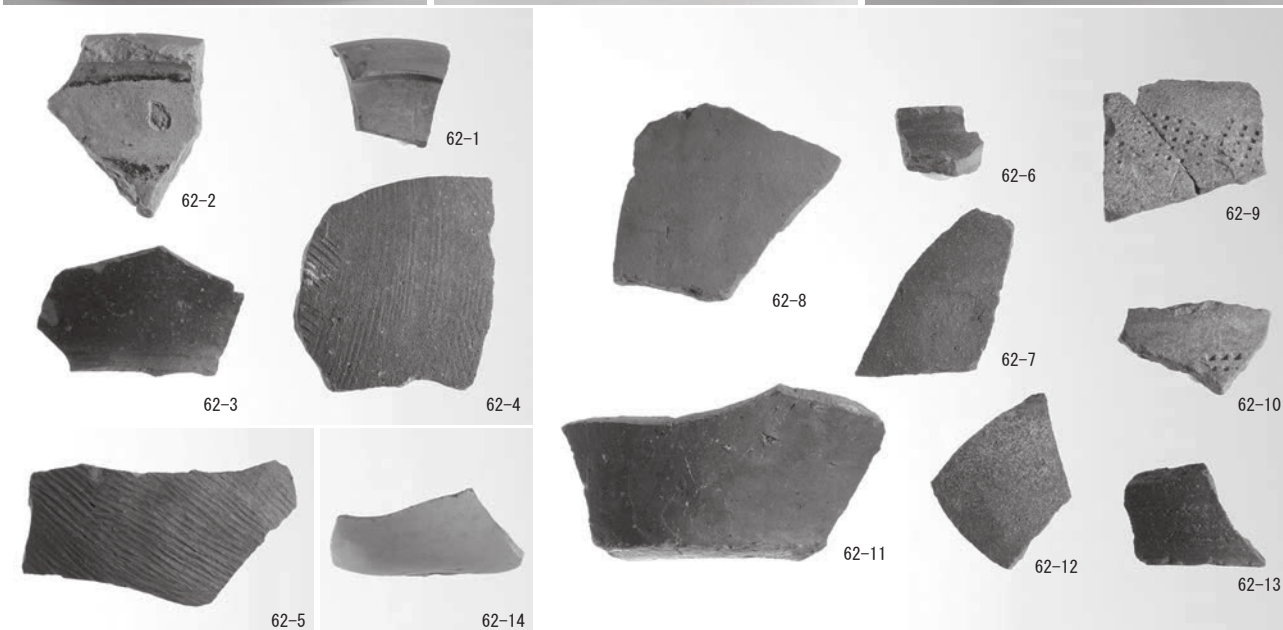
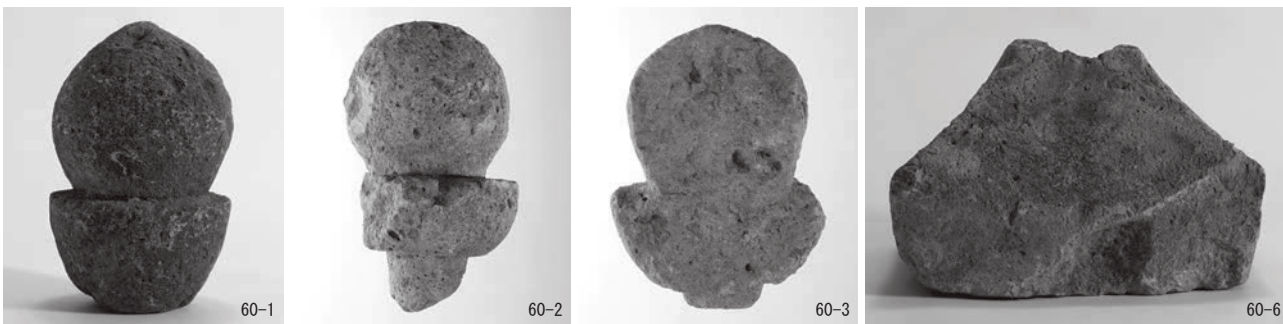


(7) SX3 (南から)



(8) 平坦面掘削後 (南から)

図版第一六 小野平等遺跡 遺物



石塔・須恵器・陶磁器

報告書抄録

ふりがな	このいせき・このだいらいせき							
書名	小野遺跡・小野平等遺跡							
副書名	日野川総合開発事業吉野瀬川ダムに伴う調査							
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第156集							
編著者名	野路昌嗣 中島啓太							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL 0776-41-3644							
発行年月日	西暦2015年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
このいせき 小野遺跡	ふくいけん 福井県 えちぜんし 越前市	182095	03183	35° 52' 53"	136° 05' 47"	20100506 ～ 20111130	12,600	記録保存 調査
			03184	35° 52' 55"	136° 05' 55"		750	
このだいらいせき 小野平等遺跡	このちよう 小野町							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小野遺跡	集落	古代 中世 近世	建物・土坑・ 溝・柱穴・井戸	須恵器・土師質皿・ 陶磁器・石製品・ 漆器・木製品・ 金属器・銭貨など		中世から近世まで 継続した集落である。		
小野平等遺跡	その他の墓	中世	石積み遺構	石塔・陶磁器など		中世の小野集落の 墓域であった。		
要約	<p>小野遺跡は、ダム建設のために移転した旧小野集落の跡地であり、古代および中世から近世の集落である。古代については明確にし得ないが、中世以降は、府中と河野浦間の街道整備に伴って発展し、近世には交易の中継地という性格を持つと考える。</p> <p>小野平等遺跡は、吉野瀬川を挟み小野遺跡の対岸に位置する。中世には、小野集落の墓域として中世墓が存在したことが、石塔の出土から考えられる。近世以降は自然地形を利用した石積みが作られるが、その性格は明確にし得なかった。</p>							

福井県埋蔵文化財調査報告 第156集

小野遺跡
小野平等遺跡

— 日野川総合開発事業吉野瀬川ダムに伴う調査 —

平成27年3月13日 印刷

平成27年3月20日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 株式会社エクシート

〒919-0482 坂井市春江町中庄61-32
